

---

# ネギの兄を始めよう！

表裏一体

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギの兄を始めよう！

### 【Nコード】

N2793U

### 【作者名】

表裏一体

### 【あらすじ】

一人の似非オカルト好きの青年は車に引かれて死亡。元々転生する予定だった青年は、他のチート能力に優るも劣らない能力を携えて転生。しかし転生先はネギの兄だった！この小説は不定期更新、見切り発進の更新の問題の他、チート、アンチ要素、魔改造、キャラ崩壊、原作崩壊等の問題も数多くあります。それでもよろしければ是非読んで下さい。\$¥？題名を変えました。旧題は「ネギの兄だけど何か？」です。

## プロローグだけ何か？（前書き）

初めまして、多くの素晴らしいSSに感化されこの小説を書くことにした表裏一体です。

この小説は不定期更新、見切り発進の更新の問題の他、チート、アンチ要素、魔改造、キャラ崩壊、原作崩壊等の問題も数多くあります。

……それでもok？

okならばどうぞ！

## プロローグだけ何か？

皆さんは輪廻転生というものを知っているだろうか。

最近では一次、二次創作問わずによく使われるネタだが、知らない人に説明しよう。

輪廻転生。仏教で使われる用語で、生物が死んで別なものに生まれ変わる過程を永久に繰り返すことをいう。この際、記憶や才能と言ったものは一旦リセットされてしまう。更に言えば上記にあるように別なものに生まれ変わるのであって、転生する時に人間であったものは人間に転生するとは限らない。

まあ、書かれる一次、二次創作のほとんどが人間に転生されるものだ。加えて書けばネタに使われるもののパターンは「神様が「間違って殺しちゃった、てへ」パターン、「いつの間にか転生してるー!？」パターンの二種類が多く、亜流の「暇つぶしに逝ってこい」パターン等があるが、これらについてはいつか別の場所で語るう。

さて、これをここまで長ったらしく話したのにはちゃんと訳がある。

つい先ほど俺は死んだ。車に引かれてグチャグチャだ。内臓が飛び出てるし、腸ってあんなに長いんだなー。

そして幼女だ、目の前に金髪幼女がいる。

よくあるパターンで真っ白い空間に幼女と半透明の俺がいる。

分かってくれただろうか、諸君。これは転生前のテンプレだ。略して転プレ。転生後は「俺TUEEE！」が出来るであろうと予測できる。俺はしたくないが。所詮傍観者気取りをしたいんです。傍観者ですが何か（キリツ。言ってみただけです、サーセン。

「あー、大丈夫ですか？」

大丈夫なわけ無かるう。今もまだ車に引かれた痛みが残っているんだからビクンビクン（注：痛みに悶えています。別に気持ちいいわけではありません）。

「初めまして、天使です」

……はあ？

「魂番号897369013729470271で合ってますね。よかった、死神さんまた間違えて殺すところでした」

……状況を教えてほしい。

「……おい、幼女」

「幼女じゃありません、天使です！ 貴方なんかよりずっと年上なんですよ！ 一体何なんですかこの世界。私を見たらみんな幼女幼女って……グスン」

じゃあ、まず見た目を大人にしろ。

「泣くのは後にしてこの状況を説明しろよ。よく分かんないんだけ

ど」

「そうでしたね。まず貴方は死にました。ここまではいいですね？」

「ああ」

「うわ、随分アツサリしてますね。えっと本題なんですが、貴方には転生してもらいます。神命令なんで拒否権はありません」

「どういづことだおい。」

「と言うことで説明してもらった。幼女の「幼女じゃないです！」説明がよく分からないところがほとんどだったので俺が代わりに説明する。」

「まず俺は生まれる前から転生することは確定事項だったらしい。このあたりはよく分からない理論がごちゃ混ぜで、極端に要約すると世界のバランスを保つためらしい。音で表現すると不思議。パウワ―がどーんではごーんですごーんになるから俺というずごごごを入れてしーん、らしい。」

「そーいや俺がいく世界ってどんな所なの？」

「ご重要。希望としては魔法がある世界。」

「えーとですね、魔法があります」

おお、これは素直に嬉しい。こういうのって夢がある。厨二できるし。

「亜人とかいます」

よくあるな、そういうの。

「貴方の住んでいた世界に類似しています」

へー、それも嬉しい。常識とかそういうのを一から学ばなくてもいいからな。

「ああ、こちらの世界では物語として書かれていますね。名前はー」

おお、どんな世界だろうか。それもちょっと嬉しいぞ。原作知識を使って無双とかできるし。する気はないけど。

「『魔法先生ネギま!』、ですね」

……えー。

正直俺はあのマンガが嫌いだ。まず主人公のネギがウザい。あの非常識度にはマジ腹が立つ。人がいないのに家に入るなよ。次にあの自称・正義の魔法使い(笑)共。二次創作とかでもアンチされているけど、正直仕方がないと思うくらいだ。あの屑共め、ああいう奴らのせいでネギが歪んだと思う。というか2-Aの生徒が本気で可愛そうっす。更にスプリングフィールド夫妻。子供を置いていく

なよマジ。どうしても置いて行かなきゃいけない事情とかあったとしてもネカネに頼むなよ。爺に頼め爺に。という理由であの世界に行くのはマジ勘弁。

「他の所はー？」

「あー、無理です。もう決定されているんですけどどうしても嫌だっというのなら次の会議までここにいてください」

「げ、まじかよ。その会議っていつ？」

「人間の体感時間で約5万年後ですかね」

無理つす、そんなに待てません。

「なら我慢してください」

「もーヤダだわ、まじ」

「もー、駄々こねないで下さいよ。他の人は結構喜んでましたよ、ネギをアンチできるとか、ハーレム作れるとか、エヴァたんハアハアとか」

そう、それがネギまの二次の醍醐味だろう。正直それ以外無いと思います、はい。しかし煩惱丸出したな、その転生者。

「ん、待て。と言うことは俺以外にも転生者っているのか？」

「そうですね、パラレルワールド毎に送るんですがたまに重なっていたり、過去に送った転生者の世界の延長上に送られたりするんで、



もしかしたらいるかもしれないし、いないかもしれないって辺りですかね。後々送られたりするかもしれないですね」

……これは厄介だ。もし送られても他の転生者に殺される可能性もある。こういうのは二次創作上でもよくあることだ。そういうのはやだだな。

「時間も押してますし、能力を3つあげますからどんな能力が欲しいか言って下さい」

おお、これこそ転生ものの醍醐味。この能力次第では転生後の生活が決まると言っても過言ではない。

さてさて、どんな能力がいいかな。

「不老不死、魔力無限、魂創造、死者甦生、時間操作は禁止されています。神様レベルですからね、これ」

まあ、予測はしていた。しかしマジどうしよう。無論ネタに走る気は更々ないが。

「じゃあ、まず『ソロモンの指輪』が欲しい」

「……まー随分マニアックで凄いものを要求してきましたね。他の人たちはアニメとかの能力を要求する人が多いんですけどね。ソロモンの再来にでもなるつもりですか？」

『ソロモンの指輪』。古代イスラエルの王、ソロモンが所有していたとされる鉄と真鍮の指輪である。

伝承では、かの天使ミカエルから授かった指輪で、72柱の悪魔を召喚し操る能力を持ち、さらには鳥や動物とも言葉を交えることができるという。

「ま、伝承と実物はちよつと違います。『ソロモンの指輪』の真の能力は、『魔を支配する能力』です。ソロモンさんは魔術王とも呼ばれていましたが、その所以がこの指輪なんですよ」

……ちよつとチートじみてきたぞ。

「悪魔のみではなく、魔獣、世界上の神や天使　私たちがみたいな根元の神や天使ではなく、決められた世界のみで行動できる神や天使のことです　、魔力、気を操ることができません。魔力は全生命にありますから動物を操れますね。さすがに人間は操れませんが」

ちよつとどころか、かなりチートじゃないカ。

「そうですね、こんなもの要求してきたのは貴方が初めてですよ。ああ、それと形状も大分違って。あれ魂に組み込まれるものなんですよ」

……どゆこと？

「盗まれませんし、殺されない限り壊れません。さらに『ソロモンの指輪』を組み込まれたことによって魂に惹かれて体が頑丈になります。人間じゃないですよ、すでに」

うわー、まじかよ。

「寿命も長くなりますね。アダムとかイヴレベルになるから、大体

800年位？」

指輪を要求しただけでこれかよ、おい。

「それともう組み込んだので、もう変えられませんよ？」

「いつの間にだし!？」

「はい、次は何ですか？」

大分チートじみてきたけど、俺は更に上を目指す！

「『賢者の石』が欲しい」

「……次は第五元素を要求してきましたか。神になるつもりですか  
貴方は」

『賢者の石』。俺が求めたのは『鋼の錬金術師』の『賢者の石』  
ではなく、伝承上のものだ。

中世ヨーロッパの錬金術師たちが追い求め、その製造を夢見た万  
能の石。鉛を黄金（正確には貴金属）へ変える、人間を不老不死に  
する、空を飛べる、姿を消せると言ったあらゆる力を持つこの石。

その形態は様々で、固形、粉末、液体等があげられており、通説  
では赤色の石と言われている。

この正体、実は四大元素を包容する第五元素と言われており、そ  
の材料は硫黄と水銀と言われている。

またこの第五元素の考えは古代ギリシャでもあった。エーテルである。哲学者アリストテレスが提唱したこの第五元素は、人間を世界の中心と考え、土、水、空気、火の順に領域がバウムクーヘン状に重なり、その外にエーテルがあり、それで構成された界が天界と言われている。

この考えに類似したものが古代インドの思想にもあり、これをアカシヤと言う。ここでの考えは虚空、空間を表しているという。

魔法なんて曖昧なものだ。見解を加えてやれば様々な力を得るのだから、『賢者の石』を使えば天界に存在する物質で武器を作れるし、空間をねじ曲げることも可能。頑張れば新たな世界を作ることできるかもしれない。

「まあ、いいでしょう。これも貴方の考え通り世界を作れますが、もし作る時は私に教えて下さいね。運良く『賢者の石』は天使と交信することも出来ますから。報告なく作ったらその世界を壊さないといけなくなるかもしれませんし。あ、これも魂に組み込んでおきますね」

しかしずいぶんチートになったものだな。

「貴方ほどチートな人はいませんよ。では最後お願いしますね、もういらないかもかもしれませんが」

実際もういらないけど、貰えるんだつたら貰っておこう。

「そーだなー、『ラジエルの書』が欲しい」

「もーヤダですこの人！ 根元神に至るつもりですか！ ていうか

あげられませんよ、私だつて読んだことないのに！」

『ラジエルの書』。天使ラジエルが著したとされる宇宙の神秘を解き明かした本。つまり全てが書かれた本である。アンサートーカより使い勝手がいい、戦闘には向いていないけど。

アダムに渡されたこの本、実は天使が人間に嫉妬してしまうほどのものなのである。かの『ノアの箱船』で有名なノアやソロモンも持っていたとされる本で、彼らの奇蹟や偉業はこの本を参照したとされている。

またこの本、天使文字といった天使で使われる文字で書かれている。人の言語で書かれた写本はあるが、所々抜けていたり、間違っていたりする。

「ちょっと待つて下さいね。神様に言つてみますから」

え、そこまで重要なものなの……？

「はい、わたしです。例の魂番号897369013729470271が『ラジエルの書』を要求してきたんですが、……はい、……はい、そうです。……え、そこまでするんですか！ というかいいんですか！ ちょ、笑わないで下さいよ！ ……はい、分かりました。それでは」

……中々愉快そうな会話だな。聞いている限り神様フランクだな。

「……天使文字と言葉の意味、それと原書はさすがに無理だけど写本をあげるとのことです。魂に組み込んでおくので使いたいときは念じて下さい。他のものも一緒ですから。はあ、でも絶対面白がっ

てるってあの神様。……ああ、そうでした。屈んで下さい。知識を  
与えるので」

「ん、分かった」

そういつて屈むと、幼女の手が頭に触れる。

「ちょっと痛いですけど我慢して下さいね」

「え、それ聞いてなぎゃあああああああつー!!」

頭に激痛が走り、視界が暗転していく。最後に見たのはにっこり  
笑って手を振っている幼女だった。

……いつか泣かせるところで言っておこう。

やあ、久しぶりだな。俺だ、俺。

……いや、別にオレオレ詐欺な訳ではない。名前が無いんだ、ま  
だ。

名前って言うのはオカルト上、とても重要だ。名前さえ分かれば  
呪い殺すことも出来るし、操ることも出来る。さらには自分の名前  
によって力に相乗効果が出たりするのである（ラジエルの書参照）。

ということ、前世の名前が分からなくなった。まあ、仕方がないっちゃ仕方がない。まず、輪廻転生の時点で通常とは違うのだし、生みの親もまた変わる。そうなれば遺伝子や血統特有の能力、魔力量も変わる。勿論顔も体型も髪の毛の色も声も肌も、体のほとんどの部分が変わる。故に名前は変わる、というより変わらなくてはならない。

さて、というわけで現在赤ん坊なわドゴオン！「だから何でそんな名前がでて来るのだー！」けでバリバリバリ！「いいじゃねえかよ、ハギで」ねむズザザザッ！「だから一文字変わればハゲになって絶対虐められるであろうが！」って「じゃあ、なんか他の案あんのかよ。ネギはもう決定だぞ」

……分かっていただけだろうか。年中このようにうるさくて眠れない。え、問題点が違う？ 現実逃避するなって？

……そうだったな、危うく親のことを否定しようとしていたよ。

そうです。ネギの双子の兄に転生しました。くっそー盛大にアンチしてやんよ。

え、お前自分の立場理解してんのかって？ 当たり前だろ。

ネギの兄だけど何か？

プログラグだけと何か？（後書き）

感想をお待ちしております。



**悪魔来襲だけど何か？（前書き）**

3、000PV越え……だと……！？

どうも興奮気味の表裏一体です。

他の人にはそうでもなくても自分はとても嬉しいです。

……しかしこの駄文がここまで行くとは思わなかった。

## 悪魔来襲だけど何か？

皆さんは悪魔についてご存じだろうか。

まあ、まず知らない人間はいないだろうと思うが、詳しく知らない人もいるだろうと思うので説明しよう。

悪魔。極端に言えば善と対立する者、悪の体現者である。ここで重要なのは妖怪や魔獣、怪物と言ったもの等とは全く違う別のものであるということである。これらのものは生きるために人を殺したりするからである。

実は悪魔というものは多神宗教ではあまり見られない。自然現象を擬人化した多神宗教の神は、善悪では動かず、気まぐれだったり利害で行動するものがほとんどだからだ。それ故に悪の体現者は必要ないのである。

しかし、一神宗教はどうだろうか。例を挙げるとすれば、そうキリスト教とか。悪魔のオンパレードではないだろうか。これで分かるように一神宗教には悪魔が多い。なぜなら一神宗教の神は唯一絶対で創造主、世界は神という秩序によって構成されているのである。それ故に神〓正義を成り立たせるために、神〓絶対の善が成り立たなくてはならない。

では、病気や災害、貧困といったあらゆる負の出来事はどう説明するのか。絶対の善の体現者である神の意図なのだろうか。しかし、それでは負の源は神が善であることと矛盾する。

故に必要なだったのだ。絶対の善の神を肯定するために、神に

抗うものが。そう、それが悪魔。

さて、これをここまで長ったらしく話をしたのにも勿論訳がある。

悪魔襲来だ。

『ソロモンの指輪』をもつ（というか組み込まれている）俺は魔  
については人一倍敏感になった。

当初の俺なら空間を歪めて遠くに逃げるだろうが、今は違う。昔  
の俺を殴りとばしたい気分だ。

……ネギは女の子だった。つまり、まいしすたー（これで正しい  
んです）。可愛い、可愛すぎる、貴様は俺を萌え死にさせるつもり  
なのかと疑いたくなるくらい可愛い。そして何より村の人はいい人  
ばかりなのだ。正直原作にあった、あの石像の老若の比率はおかし  
い。爺さん婆さんばかりなのだ、この村。

年齢的に俺たちは爺さん婆さんから見れば孫位だ。そしてこの村  
の爺さん婆さん方は子供や孫を先の大戦で亡くした人が多い。だか  
ら重ねてしまうのだ、自分の子供や孫に、英雄の子供とか関係なく  
勝手に家に入っても、逆に喜んでもてなされる。魔法関係者ばかり  
だから魔法を人の目の前で使っても怒られない。それどころか応援  
される。ネカネ姉ちゃんが夜遅くって一緒に寝られないときは、爺  
さん婆さんが一緒に寝てくれる。

こんな生活を幼年期に送り、英雄の子供として見る、それこそ腐  
った正義の魔法使い（笑）共の温床である学校に行ったら歪んでし  
まうだろう。まあ、俺がいる限りそんなことはさせないが。

と分かっていたただけだろうが、どうしてもこの村を守りたいのだ。確かにここに住み続けられれば、我が儘になるかもしれない、魔法を練習しなくなり原作より弱くなるかもしれない。

でも守りたいのだ、この村を。確かに自分の子供や孫と重ねて見てしまいかもしれないけれど、それでも暖かく育ててくれたのだ。

恩返しとして、この悲劇の結末として終わる原作部分を壊してもいいだろう。故に初めてこの力をもって召喚する、この村を破壊する悪魔を殺す悪魔を。

「にーたん、どーたのー？」

舌足らずな発音で心配そうに俺を見る、俺の可愛い妹が目の前にいる。しかし、かわえー。原作ではちゃんと喋っていたけど、しようがない。英語を和訳して音声になっているから。

だがしかし、英国人（偽）として育った俺はこのかわえー発音すら理解できるのだ！ どうだ、いいだろう！（今後主人公はさらに重度のシスコンへと昇華していく：ラジエルの書参照）

「ポンポンいたいのー？」

「んー、大丈夫だよ、ネギ」

「よかったー」

「ネギ、今日は天気がいいからお花摘みにいったら？」

「うんー！」

ニパーと笑ってトテトテと扉に走っていくネギを見て、俺の心に18590の萌えダメージ！

いや、かわえーわー。だってあれだけ、原作より親父に依存してないし。描く絵も女の子が描く絵だし。魔法の練習もするけどおままごの方が好きだし。釣りじゃなくてお花摘みのほうが好きだし。もー可愛すぎ！

はっ、さっきまでのシリアスはどこへ！ まーいつか、もう召喚して倒させに行かせたし。というか倒すって言うより従わせに行くの方が正しいのか？

「王よ、ただ今戻りました」

シユタツ、と背後から音がする。振り向けばそこには燕尾服を着たないすばでー（これでただしいんです）な姉ちゃんがいた。

「うんお疲れ、ベル。どうだった、あの悪魔達は」

「はっ、申し訳ありません。配下のものが何人か混じっております。いかなる処罰でもこのベルセブブ、甘んじて受けましょう」

ベルゼブブ。「蠅の王」と呼ばれるこの悪魔は、多くの悪魔達を支配する地獄の君主の一人とされており、悪魔の皇帝とも言われている。他にもルシファーに次ぐ第一階級の悪魔、かつて熾天使の軍団を指揮した智天使とも言われており、階級や実績はかなり高い。

本当のところ、ルシファーの警護兼秘書をやっていた。やっていたというのは現在俺達の警護兼俺の秘書をしているからだ。そんな

にアツサリ辞められるのかというと、『ソロモンの指輪』って本当に便利ダネ！ である。

まあ、警護をやっていたからそれなりの強さであることは確かだ。本人曰く『現界して間もないのでせいぜい三割程度の実力しか出せない』らしい。

……しかし三割であの量の悪魔を倒すって化け物だな。

さて、悪魔を倒したのはいいがいかんせん、召喚者はあの正義の魔法使い（笑）の大頭であるMM老議院だ。何にもなかったらなかつたで別の方法で攻めてきそうて恐いので一応襲わせた。数は元の1/3にして、人に攻撃しない、建物を壊すだけ、壊し方は派手にとか色々注文付けてやれ、って命令したらその通りにしてくれた。さらに夜だから恐さ倍。ネギは恐くって泣いちゃっている。

まあ、絶対安全なんだけどね（笑）。

ここで登場するのは我らが父上、ナギ・スプリングフィールドである。

しかし派手にやっちゃって。おかげでネギがビビっちゃってるじゃないカ。

それで、現在あのシーンである。

ネギはプルプル震えて俺の服にしがみつき、涙目で親父を見ている。俺はと言うと親父って分かっているからビビってないよ？

でも、ネギカワエー、不謹慎だけどカワエー。

「しっかし今までどこほつつき歩いてたんだよ、親父よ」

「わりいな、色々と野暮用があつてよ」

「くつくつく、俺たちよりそっちの野暮用の方が大事なのか？」

「……いじわりいこと言うなよ」

「ごめんなさい、と。んで用事は？」

「ああ、そつだ。ネギには、ってまだ怖がつてんのかよ」

「そつふくれんな、親父よ。普通あんなの見たら大の大人でもビビるぞ」

「くつくつく、じゃあお前は普通じゃないのか？」

「……仕返しかよ、大人気ねえ」

「悪い悪い、でこの杖をネギ、お前にやる。俺の形見だ」

「……おとーさん？」

ネギは怖ず怖ずと、片手でその渡された杖を持つ。

「んでクギ、お前にはお前の母さんの剣をやるよ」

ん、やっと俺の名前が出たな。今回でないと思っていたわ（作者もです）。しかし名前が木工道具とは……。

「？ どうした？」

「ちょっと電波が。つかこの剣随分立派だな、おい」

「お前の母さんは金持ちだったんだよ」

「この剣はまるでおお「クギ」ん？ まだ秘密ってか？ まあ、大  
体予測はつくし、親父は答えを言っているようなもんだし」

原作知識です、サーセン。

「もうそろそろ時間だ……悪いな、お前らに何にもできなくて」

親父が夜天へゆつくりと浮き始める。

「……おとーさん？」

ネギの手はゆつくりと俺の服から離れる。

「いいよ、代わりに爺に色々してもらっから」

俺は笑みを浮かべて嫌みを言う。

「こんなこと言えた義理じゃねえが……元気に育て、幸せにな！」

浮かんでいくスピードが速くなっていく。

「おとーさん！」



ネギは親父を追い、走る。

「騒いでやるよ、盛大にな」

目を細め、その目で親父を追いかける。

ずざざざざつ、と音がする。目を向ければ、ネギが転んでいた。

「ネギ！」

俺はネギの元に走る。

「おどーざーん」！

ネギの目からは涙が溢れだし、お父さんお父さん、とそう叫び続けていた。

さてそれからというもの、村があった場所はもう人が住める状態ではなくそのため村人たちは親戚の家か、ウエールズの山奥の街へと引っ越しをしていた。無論俺らはウエールズへ。

……しかしあれだな、MM元老院マジムカつく。爺さん婆さん方とネギと一緒に平和にほのぼのと暮らしていたっていうのに。その邪魔をしゃがって。

「そつだ、復讐をしよう」

そつと決まれば行動に移そう。くくく、こつこつ悪事や汚職にまみれた屑共の証拠集めに適した悪魔がいるんだよ。

ズブズブ、という音と共に床から片手に蛇を持ったローブ姿の男が現れる。

「このアンドロマリウス、我らが王の命より現界いたしました」

アンドロマリウス。『ソロモンの小さな鍵』では第72位を勤める悪魔である。この悪魔、実に悪魔らしからぬ悪魔で、あらゆる悪事を発見し、盗まれた品を取り戻し、その泥棒や悪人を罰するという悪の体言者とは思えない悪魔だ。その所以が片手に持っている蛇から伺える。

「一毒（悪魔）をもって、一毒（悪）を制す」、まさにその通りである。この考えは蛇は毒をもっているため嫌われるが、古代ギリシヤでは蛇は医学の象徴とされている。まさに悪にとっての悪の体言者が、このアンドロマリウスなのである。

「現MM元老院の悪事と汚職を調べあげてこい。一週間以内にだ」

「はっ、この命にかけて！」

そつこつってアンドロマリウスは床に沈んでいく。

くくくMM元老院の屑共め、今のうちにせいぜい笑っておくがい。  
い。



**悪魔来襲だけど何か？（後書き）**

感想をお待ちしております。

『汚物は消毒だぁ！』 だけど何か？（前書き）

日刊ランキング8位、これって本当ですか？

自分の目とパソコンが信じられなくなった今日この頃……。

『汚物は消毒だあ！』 だけど何か？

あれから三日たち、マリウス（アンドロマリウスの愛称）から汚職の証拠を大量に得た。この中には既に悪魔襲来事件の計画提案者の名前も出ている。さて、ここからが問題だ。

生かすか、殺すか。

普通なら殺すのだが、提案者に問題があった。

ターモル・レ・ミントン。先の大戦の英雄の一人で、軍人上がりの政治家だ。政治家としても有能だった彼は、若干30歳でMM元老院へ。今の今まで汚職や悪事の類はしておらず、その性格は厳格で愛国心が強い。

故にこの計画を提案した。彼もまた大戦の真実を知らない人間の一人なのである。

『千の呪文の男』 ナギと『災厄の女王』 アリカの子。これが彼が知る情報である。『災厄の女王』は実は無実。これが彼が知らない情報。

戦争の発端となり世界を陥れた罪人の子。それだけでも殺す理由は十分なのである。

真実を知らなかったのにその計画に踏み込んだから殺す、なんてことはない。そこまで非情でないし、つい前まで一般市民だったのだ。出来る限りハッピーエンドで終わらせたい。

「とうとう」とで、はるー」

「何者だ!?!」

来ちゃいました、ミントン宅。しかし和風っていうのには元日本人からすればなかなか嬉しい。

「つーか、三歳の少年少女を殺す計画提案するって結構酷くない、ワン・フィンニッシャー『一撃の鉄甲士』ターモル・レ・ミントン元老院議員?」

「っ!?! なぜその計画を……!?!」

「いやだつてねえ、俺襲われた張本人だし。あ、名前言うの忘れていたわ。初めまして、クギ・スプリングフィールドです」

「……なぜ私だと分かった? そして何をしにここにきた?」

あ、冷静になってきたか。

「まず一つ目の質問はちょい面白い情報源を持ってんだ、俺」

悪魔です、はい。

「そんでもって二つ目は、」

ぐい、と顔を前に押し出し前かがみになる。

「真実を教えに」

私が殺そうとした黄金の髪を持つ少年が、目の前にいる。僅か三歳だというのに機密レベルの情報すら知りうる情報源を持ち、自宅にいる警備の者すら出し抜き（もう一度鍛え直す必要があるな）、大人でも持つことがなろう強い意志を瞳に燃え上がらせる。

そしてその小さな口からは私が知らない情報が出てきた。

『災厄の女王』アリカはMM元老院に民衆の不満や憎しみを押しつけるために作られた生け贄だと。

事実は彼女の父王が『完全なる世界』と関与していたのだと。

さらにはMM元老院の汚職の証拠の数々。

開いた口が閉じない、閉じれない。メガロメセンブリアの最高機関、MM元老院の一議員である私ですら知らない事実の多さに呆れて。

いや、MM元老院議員であるが故に知ることが出来なかった情報であるだろう。当時の元老院議員達すら一部を除いて知り得なかった情報でもある。そうでなかったら情報は流出していてもおかしくない。

しかし、悔しい。国のために、と提案した計画は無駄どころか罪



なき人間すら殺そうとし、そして何より今まで心の支えであった柱が間違えであったのだ。

私はオスティアで生まれ育った。父は有名な拳闘士で、その父の教えの元、私は鍛えていた。

父が病で床に伏した頃、ヘラス帝国のアギユレー・シルチス亜大陸侵攻が始まった。

メガロの軍上層部と伝がある私は、父にメガロへの移住を申し出た。しかし父は亡き母と過ごした家を手放すつもりはなく、私の申し出を断った。しつこく言ったが、父は首を縦に振るうとはしなかった。

その後、メガロから徴兵された私は前線へと出た。何回か出た頃には『一撃の鉄甲士』なんて言う二つ名で呼ばれ始めた。英雄、とも。

しばらくたち、戦争は終わった。兵役が終わり、ひと段落ついて家に帰ろうとした頃のことだった。

オスティア崩落、そして父の死の知らせ。

私は泣いた、父の死を悲しみ。

私は考えた、父の死の原因を。

私は憎んだ、父を殺した姫を。

私は喜んだ、姫が死んだことを。

私はメガロメセンブリアが『災厄の女王』と同じ過ちを歩まないために政治家となり、よりよい政治を目指した。

そしてMM元老議院となった。そして知ったのだ、『災厄の女王』は生き残り、子を作ったことを。

その子供に罪はない。しかし憎んでしまうのだ。家族をちちをころした奪った奴が、なぜ家族をこどもをなしてこる作っているのかと。

奪われた、だったら奪い返せばいい。

心の底ではそう考えていたのだろう。だからこの計画を作り、悪魔を村に襲わせた。

しかし、真実はどうだ。

父を殺したのは前王だった。本当に悪いのは前王だった。

……勘違いも腹立たしい。

故に悔しかった。間違っていたのは自分だったから。国のためといったながら復讐に走った自分が醜かったから。勘違いで殺そうとした自分が罪深かったから。

もうでないだろうと思っていた涙が畳を濡らす。嗚咽が漏れる。

「……なあ、あんた」

目の前の少年が、口を開く。

「償いたいか？」

コクリ、と首が縦に振る。

「なら手伝ってくれないか、あんたにしか頼めないんだ」

それはまるで救いの手であった。

#### S I D E : クギ・スプリングフィールド

んで、またあれから三日たった。現在魔法世界、特にメガロは荒れに荒れている。MM元老院議員23名の不正に横領、さらには密輸等の汚職が一元老院議員、ターモル・レ・ミントンに摘発されたのだ。

ターモルは元々英雄と讃えられていたため人気がぶり返し、雑誌の取材にテレビのオフアール、元軍人として軍での講義さえも頼まれると、今もつとも注目を浴びている。

「いやー、しかしこんなに引っぱりだこだと疲れんだろ？ 大変だなー、おい」

「はあ、勘弁して下さいよ。あなたのせいでしょう、こうなったのはあれからまともに眠れていないんですよ」

「CMにも出てるよな、確かスーツの。ギャラってどれくらいなんだ？」

「確認していませんよ。そういうのはあなたから送っていただいた秘書を使っていますから」

あ、悪魔って言うことを彼知っていますよ。

「しつかり有効活用しちゃってんじゃねえか。美人なの送ったんだが、どうだ？ …… そう睨むなよ。しつかり警察も凄いな、今まで元老員から圧力が掛かっていて動けなかったのに、お前のお陰で捜査に踏み切ったんだから」

「そのせいでこちらは手が足りません。そちらの言い方では猫の手も借りたい、でしたっけ？」

そう、警察は元老院から  とは言っても一部だが  圧力が掛けられており、自由に動けなかった。例え目の前で違法行為をしていても逮捕できない状態だという。

しかしその元老院の一員である彼が摘発したことにより、「もしかしたらまだ不正がある可能性がある」という名目で、メガロメセンブリア中の国家機関を捜査した。そしたら出るわ出るわとやっていない犯罪を探す方が大変なほど多くの汚職を発見、そして全体（警察も含む）の約1/4が逮捕される始末で、新たに収監所を作らなければならぬほどになった。

そのため現在のメガロはギリギリ国として働いている状態であり、とてもではないが週末の休みが得られる状態ではないのだ。 …… そのため過労と貧血で倒れる者も少なくなき、さらに追いやられて

いる状態だという。火の車、ここに見たり。ただ言ってみたかっただけです、サーセン。

「じゃあ、もう何人か悪魔を送るか、事務処理が得意な奴。俺は俺で忙しいしな」

「一体何やっているんですか、あなたは？ 大体何か碌でもないよ  
うなことをしでかしそうに怖いんですが」

失礼な奴だ。三日前は自分から部下にして下さい、って言ってきたのに。

「メガロのフィクサーに、俺はなる！」

「……やっぱり碌でもないことだった」

本当に失礼な奴だな、おい。

『汚物は消毒だあ！』 だけど何か？ (後書き)

感想をお待ちしております。

急展開だけど何か？ 前編（前書き）

夏風邪が一日で治るっていう……

今回の話は読む人を選ぶかもです。

急展開だけど何か？ 前編

「にーたん、朝だおー」

ネギがユサユサと体全体を使って体を揺らし、舌足らずな発音で目が覚めるのを促す。

「にーったん、あーさーだーおー！」

……何この小動物、めっちゃ可愛いんだけど。

「うにゅー、おっきしないとネカネおねーたん怒るおー？」

うにゅー、って！ うにゅー、って！！ ハアハア、鼻から愛が止まりません！

「にーたん、血ー！ ネカネおねーたん！」

ただだっ、とネギが部屋を飛び出す。お兄ちゃん、転ばないかが心配です。

そんな心配をしながらフラフラと立ち上がって枕元に置いていたティッシュを一枚半分にちぎる。半分になったティッシュを巻いて血が出ている鼻に突っ込む。

……両方から出ていました。ネギの萌えぱうわー、恐ろしや。

「もう、また鼻血が出たの、クギ？ もう大丈夫？」



そんなことを言いながら部屋に入ってくるネカネ姉ちゃん。いや、いつもすんません。でも仕方がないんです。ネギが可愛すぎるんです、ネギが可愛すぎるんです。重要なことなので2度言いました。

「それは仕方がないわね！」

目をキラキラさせながらブンブンと首を縦に振る。だよー、可愛すぎるよー。

……ネカネ姉ちゃんってこんなキャラだったっけ？

「にーたん、もう大丈夫ー？」

ネギが心配そうにそう言う、目をうるうるさせながら、しかも上目遣いで。

もう逝っちゃっていいよね？ 構わないよね？ でもその前に一言、

「「何この小動物、食べちゃいたい」」

ネカネ姉ちゃんと共に逝きました、ブバーツ、と。思わず仰け反る位の勢いで。

「にーたん、ネカネおねーたん!？」

あれからひと段落落ち着き、やっとのことで朝ご飯　というより既にお昼であったが　ありついた俺たちは、食事をとった後、メルディアナ魔法学校へと向かっている。

何せ今日はメルディアナ魔法学校入学試験だ。

元々入学するのは決定されているが、クラス分けの事情で試験をしなくてはならない、ということだ。

「しっかしネカネ姉ちゃん、試験ってどんなことすんの？　全く予備知識がない状態で試験するのはまずいと思うんだけど」

「よびちちきって何ー？」

かみかみネギ萌えー。

「予備知識よ、ネギ。そうねえ、前もって知っていなければならぬ知識よ、ネギ」

「わかったー！」

本当に分かってんのかよ、って大体の人は思うだろう。だがしかし！　双子というのは遺伝子のみならず、魂レベルで類似点が多い（ラジエルの書参照）ため、チートは無いものの、準チートな脳味噌を得ているのだ！　デデーン。

元々頭が良かったのに、さらにプッシュ、倍プッシュですね、分かります。

おお、恐ろしや。

「んで、試験つてどんななの？」

「そうねえ、魔力測定でしょ、ペーパーテストでしょ、後アールデスカ火よ灯レれット、これくらいかしらね」

「ふーん、そんなもんか」

「そんなものかー」

「ふふつ、そんなものよ」

そんな会話をしている内にメルディアナ魔法学校の校門が見えてきた。

「では、自分の番号を呼ばれたら個室に入ってください」

ローブを纏った職員の男性の声が会堂に響く。

その会堂の中には幼稚園児から中学生位までの、約3、000人。この中から500人が入学できる。

まあ、何となく気づいていたけどこっつて結構倍率高いんだよね。何せ我が親父、ナギ・スプリングフィールドが通っていた学校だ。逆に倍率が低いわけがない。

……しかし緊張度の個人差ありすぎでしょ。寝てる奴がいれば、緊張しすぎて顔が白を通り越して青になっている奴もいるし。ネギはというと、にこにこしながら鼻歌を歌っている。かわえー！

ネギを見て癒されていると、ネギの番号が呼ばれた。

「ほらネギ、呼ばれたぞ」

「うん、行ってくりゅー」

ああ、もう鼻から愛が……！！可愛すぎる！

身悶えていると今度は俺の番号が呼ばれた。

「よし、行きますか」

受験が終わりました。

へ、受験の時は何していたんだって？ いや、つまらないっすよ。

温度計型の魔力測定気握って（勿論手加減しています）、杖振って呪文唱えて、ペーパーテスト中は寝てたんだよ？ 他に書くこともなかったし。

さてと、トイレに行ったネギを待つた「お前ら、動くんじゃねえ！ 動いたらこいつを殺すぞ！」……もの凄く嫌な予感しかしないんですけど。

ゆつくりと後ろを向けば、覆面を被った一人の男が杖を当てている、ネギの喉元に。

……原作にこんなことがあったことは一切書いていなかったぞ。何故だ、何故こんなことが起こった。

……ああ、分かった。『ラジエルの書』を使えば、一瞬で何事も分かることが出来る。無論、目の前のことが何故、起こっているのかも。

奴はこの前の一掃でクビになった一人だ。やった犯罪は恐喝。

また同じことをするのかよ……。

そう呆れながら、自分を責めた。

あんなことをしたから、ネギが危険な目にあつた。ネギだけではない。今も世界中でこんなことは起こっているだろう。

全てとは言わないが、その一端を担っているのが、俺だ。

まあ、いい。そんな悩み事は後回しだ。そんなことより今、考え

ることは一つだけ。

ブ・チ・コ・ロ・ス。

「フラウロス、殺せ」

そう口にした瞬間、覆面を被った男の首は落ちた。首と別れた男の身体は前に倒れ、その奥からは豹が見える。

フラウロス。『ソロモンの小さな鍵』では第64位を勤める豹の半獣の悪魔だ。悪魔は猛獣の姿をしているもののほとんどは、知識を与えるなどといった仕事をする。しかし、このフラウロスは違う。暗殺や護衛と言った、バリバリ戦闘系の悪魔なのである。

とりあえずフラウロスを魔界へ帰す。倒れている男の身体を退かし、ネギを見る。なんというであろうか、もしかしたら泣きつくかもしれない、そう思っていた。

恐怖。

ネギが俺を見るその瞳には、恐怖の色が浮かんでいた。

「いや、こないで」

「うわああああ！」

ボタン、と大きな音を立てて椅子が倒れる。

……ちよつと待て。さっきまで俺は立っていなかったか？

「その受験生、今試験中ですよ。座ってください」

ああ、そう言えば思い出した。眠る前に夢予知したんだっけ。

夢予知とは、俺が作ったというかただ単なる予知である。それを夢で映像化、といっただけのものだ。

つまり、さっきのことは未来で起こること、そういうことだ。

夢落ちかよ、おい。

しかし、夢とは言っても本当に起こることなのだから対策を練らなければまずい。

椅子に座り、フラウロスを召還する。皆さんお忘れだろうが、俺の魂には『賢者の石』も埋め込まれている。その中の一つの能力、『不可視化』を使い、フラウロスを消す。

そして念話の応用でさっきの夢を送り、小さな声で、フラウロスにしか聞こえないほどの声でこう言

った。

「覆面の男を殺せ」

間接的にとは言えど、初めて殺人を犯した。

別に何か感慨深いものを感じるわけでもないし、人を殺したこと  
に罪の意識を感じるわけでもない。

はっきり言ってしまうえば、何も感じないのだ。

転生前はごく普通の、どこにでもいる一般人で、転生後だってそ  
れなりに波瀾万丈ながらもそこまで一般人との感性がズレるような  
生活を送ってきたわけではない。

なのに、人を殺すことを厭わない、人を殺しても何も感じない。  
感性がイカれている。

(どうしたものかねえ……)

そう心で呟き、ため息をついた。

『あ、あー。聞こえていますか？』



頭の中に響く、いつぞやの幼女の声。

『……おい、結構今シリアスな展開なのに、なんでお前はそう空気を壊せるのかね』

『え、いやいや！ あなたがシリアス感じてても私には分かりませんから！』

……なんだろう、一気に今まで建てていた何かが崩れさった感じがする。

『それで幼女、何の用事だ？ まさか空気壊して何も無いってわけじゃないだろうな』

『よ、幼女じゃな』ええい、黙れ！ 空気を読めない幼女天使には幼女のみで十分だ！』……ぐす、酷

いです。というか、それを言ったらあなたはシヨタじゃないですか！ なんでそこまで強気に！？』

『いや、この先成長の余地がないお前には言われたくない』

『今のグサツ、てきました……』

いや、そんなことより用事はなんすか？

『うう、しかもなんか冷たいし……用件はですね、あなた、神になれますが、どうします？』

え？

『え？』

何それ怖い。

急展開だけど何か？ 前編（後書き）

感想をお待ちしております。

**急展開だけど何か？ 後編（前書き）**

今回の話で、今後の、とは言っても原作までですが、方針が決まります。

ではどうぞ。

ps・金（とりあえず作者の一人称）は感想を頂けるとテンションが上がります。……なんか寄こせって言ってる感じですかみません。

## 急展開だけど何か？ 後編

というわけで、転生前のあの白い空間です。わーぱちぱち。

……ええ、そうですね、急展開すぎて困っておりますですよ。

「ええっと、もの凄い勢いで頭を抱え込んでるところ悪いですけど、もうすぐ神様が来ますよ？」

そうですね、神様と会つとです。そういう重要なことは最初から言つて欲しかった。つい先ほど突然「あ、うちの担当の神様と話しますから」と言われたとき、第五元素収束砲（某全力全壊星光破壊砲の威力の約30倍）を思わず撃ってしまったのは、悪くない、悪くなんか無い。

……まあ、幾ら現実逃避したつてあの幼女天使は帰つてこない「死んでませんよ！ 勝手に死んだことにしないでくださいよ！」。全員、合掌、礼拝をお願（ry）。

「あ、来ましたよ」

頭を上げて、前方を見れば、2つのプリンが浮かんでいた。

……プリン？ では何故、バインバインと効果音が聞こえる？

おや、鼻から血が出てきたぞ。どうということだ？

……前かがみになった俺は悪くない！

前かがみだと？ まだ俺、三歳児だぞ？ なんて前かがみに

なる必要がある？

よく自分の身体を見れば、転生以前のそれ。そして何故か裸（ver）er。誰得？　　というか何故転生前の状態？

「私は得よ。それとね、何故転生前の状態かというとね、あなたの魂の本質って転生前のものだからよ」

そう答えたのは目の前にいるプリン。あの名称はプリンだ。以後変更及び異議は認めな（ry）。

「プリンじゃないわよ。あなたが今生きている、と言うよりは住んでいる所の管理神なのだから、一応でいいから敬意は払って欲しいわね」

やはり神と言ったところか、読心術はお手のものらしい。……しかし、この顔はどこかで見たことがあるような。

久しぶりに見た、日本人の顔だ。しかし、その顔はおっとりとしたもので、それに吊られてか、雰囲気も同じものだ。特徴的なものに、左目には泣き黒子がある。赤茶色の髪は長く、腰までである。

どこかで見たことがあるような顔だ。しかし、転生後の記憶にはそんな顔の人物の、というか日本人すら会ったことはない。

ということは、転生前か？　でも、世辞でも友達が多いとは言えなかったし、その中の女友達でもこんな顔の持ち主はいなかった。

「うーむ、謎だ。こう言うときは、一何でも解決機（ラジエルの書）  
ありー？ 回答拒否って。こんなことは初めてだぞ。」

「残念だけと思いつつまで悩んでもらうわよ」

「うふふふふ、と口を手で隠しながら笑うプリン。……いや、女神  
さま。ねえ、これでいいでしょ？ だから空中に浮いている5つの  
俺作第五元素収束砲×5をどうにかして。」

「だーめ」

「まじかよ『ズゴーン！』」

「ああ、成る程。これはトラウマになるな。」

「スーパースペック化した俺の身体ですら一瞬、気を失うほどの威  
力でした。どれくらいの威力かというと、ご想像にお任せします。」

「いや、しかし神は全治全能とはよく言ったものだ。何せ俺の第五  
元素収束砲の収束時間の効率化を高めて、威力は少々下がったもの  
の俺のものより展開の高速化、及び燃費を良くしているのだ。軽く  
大陸1つ落とせるぞ、おい。」

「いやー、でも流石ねえ。今のなら普通神なら軽く逝っちゃったた

のに。流石、僅か3年で根元神に至った人間、いやもう神ね」

え、もう神決定事項？　というか普通神つてもち世界神だよね？  
そうだよね？

「いえ、根元神よ」

既に神すら逸脱していたようです。

「普通ね、根元神っていうのにはステップが2つあって、死後に信仰されて世界神へ、さらにその後信仰され続けたら根元神になるんだけど、あなたって『ソロモンの指輪』を魂に組み込んでるでしょ？」

そうっすねえ。

「信仰って『魔』に属するものなの。それでね、その信仰を無意識に吸収してるのよ、しかも全世界」

うん？　どう、ドゥーユーコト？

「つまりね、普通神を飛び級して根元神に、しかも上位神になっちゃったのです、わーぱちぱち」

ぱちぱちじゃねえー！　え、え？　つまりもう神になってんの？  
なれるとか、そう言うの抜きにして？

「そうね。それでね、この件であなたの対偶について緊急会議が開かれたのよ。それであなた、まだあの世界で生きたいでしょ？」



もちです。餅のロンです。

「というわけでちょっとだけ封印を施すわね」

え、なんで？

「だってあなた、気まぐれで世界の1つや2つ、軽く塵も残さず消し去ることなんてお手のものなのよ？ そんなレベルの神に封印を施さないほうがどうかしてるわよ」

ほほう、俺ももうそんなレベルのチートまで来ましたか、自分が怖いっす。

「というわけで、一応封印は掛けるけど以前とはあまり変わらないわね。大きく変わるところは、そうね、第五元素収束砲、とか言っていたわね。あれの威力が半分になるくらいね」

かなり変わるぞ、おい。

「いや、変わんないわよ。たしか『クラテイスデー・アイギス最強防護』、かしら？ 今のあなたの世界の最高峰の防御力を持つ魔法。あれが軽く吹き飛ばせるんだもの、半分の威力でも」

ハッハッハ、ナンノジョークダイ？ ソレ？

「こーら、現実逃避しないの。まあ、2倍の時間をかければ元の威力になるし、世界を壊そうとしても時間が2倍なら根元天使も2倍出せるわ」

まあ、別に困ることはないから、別にいいか。

「りょーかいつと。んで、最終的に俺は人間？ それとも神？」

「強いて言うなら、神を越えたチート神よ」

おふ、そうでか。

SIDE：根元神

しかし、今私の目の前にいる青年がとて、とても愛おしくて堪らない。

信仰もされずに既に神格化された彼は、感性までもが人のそれをも逸脱している。

彼はそれをイカれている、と考えているがそんなわけがない。感性が<ruby><rb>イカれている

</rb>><rp></rp>></rp>><rt>.....</rt>>.....</rt>><rp></rp>></rp>></ruby>—ことに恐れを抱いている).....(のだ。もしイカれているとすれば、それに恐れを抱かない。つまり、彼は中途半端に神の感性を受け継いでしまった、しかも魂関係の方向を。

ああ、たまらなく愛おしい。その矛盾した心のあり方に思い悩む彼が、しかしそのジレンマの中で普通に生活できる彼が。

ふふふ、今後の彼がどの様に育つのか、そのジレンマの中どの様に歪むか、とても、とても楽しみだわ。

そうして、世界にいる私の分体を少々、イジらせてもらった。

S I D E : 幼女天使

あわわ、神様が果てしなく怖い笑い方をしています。

どんな具合かというと、「うふふ、うふふフ負負負腐腐腐腐腐……」て感じをエンドレスってます。思わず彼もドン引き、と言うよりは怖がっています。

しかし、なんで私の周りにはおかしな人ばかり集まるのでしょうか。神様から始まり、同僚の多く、さらには私の系の転生者の皆さん。

あはは、もう私の関係者皆さんじゃないですか。

……もうどこにでもなれ……（この7年後、この天使には心、いや魂からの友が出来る……ラジエルの書参照）。

S I D E : クギ・スプリングフィールド

「あらいけない、時間だわ」

先ほどまでとてつもなく怪しげな笑いをしていた神が突然そんなことを言い出した。

「時間？ 何のだよ？」

「いや、もうそろそろ会議の時間なの。最近転生者に関するイレギユラーというか、なんか好き勝手しちゃって。世界の軸がズレにズレちゃって、もう大変なのよ。パツ、と消しちゃってもいいんだけど、それでも軸がズレちゃうから根元天使を送るんだけど、それでも最近の転生者って根元天使より強かったりしちゃって。下手に送ることも出来ないのよ」

……つまり転生者のせいで色々苦労しているっていうことか？

「はっきり言っちゃえばそうね。それでももう大変で大変で」

「じゃあ、そいつ等を殺してもヨロシ、とそう言うわけ？」

「……あなた、なに考えているの？」

「いや何、ちょっとしたボランティア活動でもしようかなって。…  
…俺が殺<sup>ち</sup>っちゃってもいいけど、どうなん？」

結果だけ言おう。俺が好き勝手やる転生者を殺すことになりました。

んまあ、殺すことに忌避感はないし。……やっぱり狂ってるのかねえ。

今後の予定というか、戦闘訓練の目処が立ったことだから、別にいいか。

急展開だけど何か？ 後編（後書き）

完璧あの根元神さんはあの人ですね、はい。

というわけで今日はこのまです。

感想をお待ちしております。

リンチだけと何か？（前書き）

六話目更新です。

あとがきにアンケートがあるので、答えていただければ幸いです。

ではどうぞ。

リンチだけど何か？

どうも、クギです。今、魔法世界です。殺りましたよ、2名ほど。

いや、『ふはははは、弱い弱い弱い！』な状況に……いや、彼らもチート能力貰ってるはずだよな？ 瞬殺だったよ、第五元素収束砲で。

「こんなの訓練じゃない！」って訳で、次の相手は手加減します。手加減を覚えないと毎度毎度スプラッタな状況に いや、これ以上考えるのはやめよう。

空を飛んで移動していると、ようやく次の敵が見えた。まあ、あれだな。パッキンのイケメン、って感じだな。某赤い外套を身に纏ってるってことは大方型月、しかもFateの弓兵さんだろうな。

お、ようやくくつつちに気づいたな。

それじゃあ、狩りを始めようか。

S I D E : 名も無き転生者

俺はその少年を見た。



その背には太陽、6対の純白の翼からは5つの光。赤、青、黄、緑の4色の小さな粒、そしてその隙間から射しこむは陽光。

自分のものとは比べられない黄金の、荒々しくも綺麗に解かれた髪は、正に百獣の王の鬣。

その顔には不敵な笑み、右手に持つ黄白の剣を掲げる、高く、高く、高く。

そして、こつこつ言ったのだ。

「十秒、時間をやる。この攻撃をよけてみな」

S I D E : クギ・スプリングフィールド

ん、惚けた顔しちゃって。あ、キレた。

「フザケるな……!!」

そつ言っつて投げってくるのは、弓兵お馴染み、干将・莫耶。

「はあ、型月ワールドならまだしも、この世界じゃそんなの雑魚中の雑魚、違う宝具を使えよ」

そつ言っつて、左手を振るつ。

左手には、キリスト教内では拒絶、死を表す。それを振るえば、即興の盾が出来るというわけだ。

「ほれ、十秒経つちまったぞ」

お次に右手を下に振るう。勿論ただ、振るったわけではない。魔力と気、つまり感卦法だ。

これの考え方は激しく長つたらしいので、略すると二乗ぱうわーなわけですよ。

でも、ここに現代科学の　しかも小学生ですら知っていることなのだが　磁石の考え方をに入れてみる。

どちらでもいいんだが同極を近づけた時、離れようとする力が生まれるわけで、その力を放出すれば凄いんじゃない？　というわけで実戦で実験です。

バゴオオオオン！

……一瞬で緑豊かな大地が焦土と化しました。そこ、自然破壊と叫ぶわんない！　戦いには犠牲が付き物なんだ！　あ、でも転生者は生きてるな、凄い凄い。

「へえ、今ので吹っ飛んだと思ったんだが、以外と強い、というか戦闘経験が結構ある転生者だな」

「くつ、なめるな……待て、今転生者と言ったな？」

「ああ、そうだな。あんた転生者だろ？　結構好き勝手にしてたから

神様から殺せ、って言われてな」

「フザケるなよ！ 人を勝手に転生させておいて、殺すとはどういうことなんだ！」

「だーかーら、お前、調子乗り過ぎなの。そう調子乗れんのもお前、神様から力貰ったからだからだろ？ だからあーだこーだ言わずに俺の実験材料になってくれ」

「誰があああ！」

そう言っつて男は紡ぎ始める。

体は剣で出来ている。

Steel is my body, and fire is  
my blood.

血潮は鉄で 心は硝子。

I have created over a thousand  
d blades.

幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death.

ただの一度も敗走はなく、

N o r k n o w n t o L i f e .

ただの一度も理解されない。

H a v e w i t h s t o o d p a i n t o c r  
e a t e m a n y w e a p o n s .

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

Y e t , t h o s e h a n d s w i l l n e v e r h o  
l d a n y t h i n g .

故に、生涯に意味はなく。

S o a s I p r a y , u n l i m i t e d b l  
a d e w o r k s .

その体は、きつと剣で出来ていた。

「 無 限 の 剣 製 ( U n l i m i t e d B l a d e  
W o r k s ) …… ! 」

瞬間、周辺の空間が赤く染まる。

周辺には大量の剣の数々。さらにその一つ一つに大量の魔力が詰まっている。

固有結界。それこそこの男の奥の手なのだろう。

そしてその手には金と青が強調された、一振りの剣。

「<sup>エクス</sup>約束された」

「いきなり切り札かよ、おい」

「<sup>カリバー</sup>勝利の剣！」

男は振るう、がむしゃらに。剣からは光が溢れ、確かな方向性を  
持って、俺に迫ってくる。

「バーカ、こんなんでも逆に死ねるか」

フングルイ ムグルウナフ クトウグア ファーマルハウト

ウグアッグアア ナフル ダグン イア クトウグア！

SIDE：三人称

「旧支配者 永久の狂気 悪しき炎隗 (the Great Old Ones Cthugha) …」

燃えている、エクスカリバーから出た無数の光が。

燃えている、そこら中に突き刺さっていた宝具と称された剣の数  
々が。

燃えている、彼の奥の手である固有結界が。

クギ・スプリングフィールドは声高々にそう叫んだ瞬間の出来事だ。日の光は先ほどまでの物とは違う。

黒い。

寒い。

痛い。

「ぐっ……！？」

男は突然、口から赤黒い液体を出す。血だ。

その手に持つ剣で体を支えないと、立つことすらままならない。

「一体何が？ ……！？」

太陽が、赤く、紅く、朱く、アカイ。

「型月シリーズを批判する訳じゃないが、型月ってけっこうメジャーな神話ばっかなんだよなー」

中にいるクギがそう口を開く。

「ルーキーな神話も是非入れてほしいところっすねえ。と、いうわけですアンリ・マユとか勘違いされそうだから、言っておこうか。こいつは悪の体言者なんかじゃない。ただの火の神だ」

クトウグア。

45億年も前のこと、この地球に巨大な炎の塊が落ちた。それこそ、この火の神格及び旧支配者クトウグアである。

しかしこのクトウグア、わざわざ地球に飛来してきたというのに何もせず地底の奥深くに潜り続けたのだ。

そして3億年前、旧支配者を駆逐するために訪れた旧き神により、この神は狂気に陥らされ、地球から追放された。

追放後かというと、南魚座の一等星フォーマルハウト、あるいはその近くにある小さな恒星コルヴァスに住んでいるという。

……まあ、彼に強制的に召喚されたわけだが。

「本来、クトウグアの召喚はフォーマルハルトが地平線上に存在し、呪文を三回詠唱しなくちゃいけないんだが、第五元素を使って地平線上にフォーマルハルトを生成、反響<sup>エコー</sup>を使って三回同時詠唱をしたわけだが、こいつはすげえな。俺が手綱を引いていないと空間から次元、果てには世界すら燃やすつもりだぞ、おい」

この神には子供がおり、その神の石柱、アームザーは何でも凍らせることが出来たという。

ならばその親であるクトウグアがこの世の全てを燃やせないわけがない。

「さてと、じゃあ再戦と行きますか」

にい、と歪められた彼の顔を見た男は、遂に膝が地に着いた。

S I D E：クギ・スプリングフィールド

しかしクトウグア、って凄いな。クトウグアが燃やすのは存在そのものだ。だから声も燃やすことが出来る。

ん？　なんで声も燃やせるのか分かったかつて？　いや、転生者を焼いたときに叫び声もつ、うるさくてうるさくて。

そんなことを思っていたら、声が聞こえないじゃありませんか。いや、火は見えなかったけど凄いな、口がパクパクと動いているのに声は聞こえない。それで俺は何もしていない。

クトウグア、お前。

って感じで可愛くなっちゃったので、即興ながら柴犬を第五元素で作って、狂気を取り除いたクトウグアをイン。

するとどうでしょう。ワンワン、とすり寄ってくるクトウグアにもう、感激！　かわえー、ネギの次ぐらいにかわえー（あくまでネギが一番）。

とりあえず、連れていくとして、この焦土をどうしようか。さすがに一日で焦土と化しちゃう駄目でしょう、さすがに魔法世界でも。



ハッ、手加減するのを忘れていた！ 思いつ切りリンチしちゃっ  
ていたし。

……次だ、次。次こそ手加減して殺ろう……。

リンチだけど何か？（後書き）

まず一言、戦闘描写え……（泣）

難しいっす、上手く書ける作者様方の脳内はどうなっているんだ……！？

はい、アンケートです。

二つほどあるんですが、

1・どんな転生者と戦ってほしいか

2・番外編を書くべきか、それとも本編進めるか

です。

注意して頂きたいのが、今回の話で分かった通り金の戦闘描写は酷すぎます。今後はクギ君も手加減するので長くはなると思いますが、まだマシになるかもですが、皆様のご期待に添えるかどうか……怪しい限りです。

ということ、何があっても石投げるなよ！ 絶対投げるなよ！  
？（振りじゃないです、本当です）

ということ、もし宜しければお願いします。

勿論感想もお待ちしております。

『教えて、ターモル先生！』 だけど何か？（前書き）

たくさんのアンケートの回答、ありがとうございます！  
まだや  
っているので、どうぞ！

今回は説明パートです。

『教えて、ターモル先生！』 だけど何か？

どうもクギです。ただ今家に帰りました。

「たっだいまー」

「おかえりー、にーたん……にーたん、犬」

「んー？ クーのことか？」

勿論クーはクトウグアです。いや、クーってクトウグアのクからも取っただけど、クーってケルト語で犬って意味なんだよ。

……きたんじゃね？

って訳でクーに決定、飼い主権限だ、異議は認めん。

「クー、って名前ー？」

「おう、そうだぞ。ほれ、クーも挨拶」

「わふっ」

うわっ、ものっそい勢いでネギの目がキラキラと……！？

「だっこしたいー」

「い、いいぞ。ほれ」

そういつて渡すと、あ、その抱き方は危ないよ、こう、左手をお尻に添える感じで。

「ああ、お人形じゃないからその抱き方は「おしゃんぽ、おしゃんぽー!」「」

……ま、可愛いからいいか。皆、クーに敬礼!(ビシッ)。

「お帰りなさい。それで、クギ? どこであの犬どこで拾ったの?」

「山で」

「ごめんなさい、嘘です、作ったんです、犬でもないんです。

「や……ま、で?」

「おう、別にいいだろ、そんなくらい」

「だ、駄目よ! 今度から一人で山に行ったら駄目よ! いいわね!?! 絶対よ!?!」

「ま、ママ、イエスマム!?!」

あ、あれー凄い形相で怒られたー。この前までは、

「今日はどこで遊んだの?」

「山で」

「あらそう、どんな遊びをしたの?」

みたいな会話だったのにー？

今思えば、あの大静粛から三ヶ月たった。ウェールズの方での生活は大分落ち着いてきたが、学校の教員達　　というか村の役員もなんだが　　大分慌ただしくなっている。何でも色々大変なことがあつたらしい。受験の時、久しぶりに見た爺ちゃんは只でさえ痩せていたのにさらに痩せて、顔の骨が浮き彫りに出ている。

『MM大粛清事件』、つまり俺が起こした『そうだ、復讐しよう』ですね、分かります。

……まさかこんな末端の機関にまで及ぼすとは思わなかった。というか何でこつちまで被害が出てんの？　俺は、というかMM警察もだけど魔法世界ではあれだけ派手にやったが、現実世界では一切やっていない、というか―こちら側（現実世界）はそんな汚職とかする余裕がないほど忙しい。まずメガロへの書類提出はいちいちゲートを通らなきゃいけないし、元いた魔術結社の対応や交渉、場合によっては緘滅したりするし、魔法犯罪者の逮捕、なにより『正義の魔法使い』思想が強すぎてもし汚職がバレたりしたら、それこそリンチされてしまうだろう。恐ろしや。

「ていうわけで、なんで？」

困ったときはタモえもん。あ、ラジエルの書があった、うっかりです。

「はあ、こんなになつたのはあなたのせいなんですからちゃんと把握しておいて下さいよ」

はい。

「連鎖的にあつて数え切れないほどありますが、主な要因は二つ。まず一つ目、MM警察が旧世界に派遣する人員が割けなくなり、地元組織で対処しなくてはいけなくなったこと」

なるほど。確かにこれは痛い。捜査のプロである警察がいなくなつたことで自分たちが動かなくなつてはいけなくなつた。犯罪者を放つておくのは流石に不味いから最終的に自分たちで動かなくなつてはいけなくなつてしまふ。その中には犯罪組織や、犯罪者で集まつた即席のグループなどもあるだろう。即席はまだしも、元から組織として動いていた犯罪者達は逮捕に手こずるだろう。

犯罪者の一番いい例がこの前の男だ（急展開だけど何か？ 前編参照）。普通、悪意を持った人間は警備の人に事情徴集されるんだが。

「二つ目に今回の件での大量の書類や人員の行き来のためのゲートを多用使用したために大量に出来た過剰魔力による旧世界の動物の突然変異」

「は？ なんだそれ、ゲートって月や星の配置、精霊の活動とかそういう自然で出来た魔力をゆっくり吸収して、それが溜まって放出するときの一部の魔力で出来るのがゲートだろ？ 多用も糞もない

じゃ……おいおい、そりゃねえよ？ 俺の考えが正しかったらお前から、自然の理を崩したんだぞ。さすがにそこまで馬鹿じゃ「私は、反対したんですけどね。この緊急事態ですからいち早く行動しなくてはならない、とのことでMM連合諸国、ヘラス帝国、条件付きでアリアドネーも了承しました」……おいおい、まじかよ」

ゲートに魔力を大量にそそぎ込み強制的にゲートを作ることは現在魔法世界では禁止されている。これは1742年、人工生命ホームクルスを作ったとされ、旧世界、魔法世界問わず有名な魔術名医パラケルススに教えをこいた一人と言われるトレ・Y・プロウムが出した論文、『大量の魔力による生命体への影響』で書かれた内容が関わっていく。

成る程、これでネカネ姉ちゃんが何故ヒステリックな状態になったのかが分かった。

「大量の魔力を長期間浴びた、魔力値0.5以下の生命体の魂は変異し、それに伴い体も変化していく……こういう明確な理由があるのに提案して許可を出したのが、魔法世界の馬鹿は……やっぱり旧世界を軽く見る傾向があるよなー、魔法世界は」

「まあそうでしょう。やはり魔法が使えるという絶対的なアドバンテージがあるからでしょう、最大の要因は。しかも魔力が多いと身体能力も自然とあがりますし」

「んー、それが今後の課題か……」

「運良くまだ一般人には被害が及んでいませんし、この短期間ですからそこまで強いものも現れませんでしょう……失礼、会議の時間なので席を外させていただきます」



その一言でこの秘密の授業は締めくくられた。

(しかし旧世界を軽く見るのをどうにかしないと)

あの授業からしばらく椅子に座り、そのことについてずっと考えていた。紅茶は既に冷えており、時計の短針はもう半回転している。

……こんなことになったのも俺がMM元老院を粛清したことが発端だ。勿論そのことに後悔はしていない。

でも、反省点は多い。こういふ風になることを予測しておけばよかった、そう思わずにはいられない。

まあ、すでに過ぎてしまったことだ。今回の点を次に生かすか。

「王よ、怠惰な旧支配者を信仰するものが来ました」

斜め後ろにいたベルがそう言った。しかしその言い方だと結構同じ様な種族がいるから悩むぞ。

「皆、同じ様なものです」

えいび。

「これは手厳しいですな、ベルゼブブ殿。おひさしゆうございます、我らを創り我らを導きし我らの父よ」

「確かに久しいな、スマイルズ」

頭を垂れるその男は、背はベルより少し高く、金色に輝く一房に纏められた髪、耳は長く垂れ下がっており、その顔は整えられた美丈夫。

ハイパーボリア人、ロバート・T・スマイルズ。

神になってから1ヶ月立ったわけで、そのときに思いつきで世界を3つほど創った（勿論許可は貰いました）。というか俺、もう根元神だから幼女天使に許可貰うとき「あれ？ あなたもう根元神だから許可なくても勝手に世界を創ってもいいですよ。というか創って下さい」とのこと。なぜ創らなければいけないかというところ言うルールらしい。しかし、時間軸がズレていてイカンな。こっちは2週間しか経ってないのに、向こうはもうウン億年は軽く経ってるし。ゲートに異常は無いんだよなあ（ほぼ一方的なんだが）。

閑話休題。

というわけで彼、その創った3つの世界のうちの『神話世界』、とりあえず俺の知っている世界中の神様を全部入れちゃえっつて感じで創ったかなりカオスな世界の神話クトゥルフ・階級中級・種族ハイパーボリア人なので、ででーん。

しかしハイパーボリア人は凄いな。超 鈴音すら越えてるね、現時点で既に。魔術と科学のハイブリット化の成功は勿論のこと、魂

(偽)の生成、異次元移動、長命化、下級神の隷属化すら出来るようになってる。伝承以上だよ、これ。伝承通り蛇人間やヴァミ族の支配しており、現在の人類を遙かに凌駕する科学技術を持つ半植物態生命体、古のものと現在銀河を賭けた戦争中だと言うこと。いやはや、人間じゃなくても戦争はするんだね。

「それで、スマイルズ。主戦力の卿がここに来ていいのかね？」

しかし威厳を保つためとはいえ、この喋り方は面倒だ。それ以前に俺はまだ三歳児なんだぜ？ 既に神様なんておかしくね？ つーか、この姿で威厳も糞もねえ。

「いえ、あの戦争は終わりましたよ。流石古の者、なかなか手こずられましたよ。しかし既に奴らは我々の奴隷ですよ」

「用件を言え。俺とて暇ではないのだ」

主に旧世界と魔法世界の情勢改善について、あとネギの可愛さについて。

「ええ、そうでしたね。では単刀直入に 氷河期の到来を止めていただきたいのですよ、我が父よ」

やはりそうきたか。伝承ではハイパーボリア人は氷河期の到来とともに滅んだとされている。無論、俺もそうするつもりだ。ハイパーボリア人の技術力を持つても不可避な多くの銀河、次元を巻き込む氷河期を。しかもこのときに被害が合うのはクトゥルフ神話内の種族のみ。

これがないければ人間は生まれてこない。人間が生まれなければ神

々の戦いに支障をきたすであろうから。

「無理だ。これは決定事項であり、その世界全ての為だ。しかもこの氷河期はハイパーボリア人を滅ぼし、新たな人類の誕生のために起こること。これがなければ新たな人類は誕生しなくなってしまふ」

ただそれだけ。しかしほんの少し角度がズレた線は延びていくと本来の線とかけ離れてしまふ。そうならない為にも、この氷河期は起こらなければならぬ。

「それでもです、我が父よ。新たな人類が生まれ、関わる銀河と次元には不干涉になりましょう。ですからどうか、我々に未来を、我が父よ」

膝と額を地面に付け、ひれ伏している。その体は僅かに震えている。彼らが信仰する神、ツアトウグアからも回避は不可と言われたのだ。ならば残るはただ1柱、俺である。

俺だつて滅ぼしたくない。気のいい奴らも多い。友となつた者もいる。このスマイルズもその一人だ。

しかし、滅ぼさなくてはならない。ハイパーボリア人という人類がいたという跡だけを残し、その存在をその世界から消さなくてはならないのだ。

……待てよ。世界から消さなくてはいけない。つまり『神話世界』から。

そして今俺が思い悩んでいる問題。魔法世界の持つアドバンテージとの差を無くすこと。

ということは……。

「スマイルズよ、喜べ。名案が思い浮かんだ」

「!? ほ、本当ですか、我が父よ!!」

「ああ。だが、まだ確定事項でもないし、断言は出来ない。だが一応、委員会にこの案を提出しろ」

異世界への移住を。

『教えて、ターモル先生!』 だけど何か? (後書き)

ハイパーボリアア)。

クトウルフ多いです、この小説。

それとトレ・Y・プロウムに関してはオリジナル設定です。

前書きにもありましたが、アンケートはまだやっているのです  
ドシお願いします。

感想お待ちしております。

オホホとの邂逅だけど何か？（前書き）

さて、原作乖離がここから始まる……！！

どうも、金です。

後書きに結構重要なことが書いてあるので読んで下さい。

オホホとの邂逅だけど何か？

「しかし、よろしかったのでしょうか」

右後ろにいるベルが口を開いた。

「ん、何が？」

「いえ、現在地球の地表の殆どに人は住んでいます。例え地下に住処を作ろうとも、地表には音が響いてしまいますし、海底に作るうともエネルギーを血眼になって探している人間には近い内にバレてしまいます。しかし、王はこの世界に連れてこようとしておりますでは、どこに」

そう、ベルの言う通りだ。俺はあいつらをこの世界に連れてこようと考えている。それはアドバンテージの差を無くすことにある。

魔法世界は魔法が発達しているが、魔術や科学は発展していない。

型月ではないが、魔法と魔術ははっきりと違う。

一部魔術とは元は同じだが、その大半は違う。既に失われし口伝のみで伝えられていたケルト魔術、五行を用いて符を使い式神を使役する陰陽道、言葉ではなく物に魔術的意味を持たせ科学の元ともなった錬金術、幽霊になった者しか使えない特殊な体系であるボ騒ルターガイスト霊現象、忍が指で気に意味付けして行使する忍術。これ以外にも多くあり、その種類、その多様性、その方向性は魔法のそれとは正にダンチだ。



閑話休題。

よって、旧世界の魔術結社の能力の増大化、科学の促進化を行うためにハイパーポリア人をこの世界へと呼ぼうとした訳である。

「ある程度だけこつちの世界に送って、他は異界でも作ってそこに住んでもらえばいいし。まあ、アメリカに五年いれば戸籍貰えるし、北朝鮮とかの独裁政権のそこはお偉いさんの1人にちよちよっと金を見せれば戸籍ぐらい幾らでも作ってくれるだろうしな。もし邪魔になれば第五元素収束砲の恐ろしさを見せてやんよ。あとは中東辺りにでも会社を作れば、はい終わり。まあバランスも大事だからな、弱い国にでも作れば、っと。はい、完璧。あとは神様に頼めばいいか」

「そうですか。では、アポメントを取っておきます」

「よろしくなー」

はい、許可いただきましたー。即答だったね、うん。

「つくつてい」面白そうだからいいわよー「……全部言っていない」  
って感じだったし。

しかし、面白そうだからってだけで許可出しているのかな？ こんな軽くて世界秩序守れているのかな？

「ということだ、今回の案は許可された。委員会にも正式に許可した旨を報告しろ。それと、既に脱出計画は進んでいるな？」

「勿論でございます、我らが父よ！ 今すぐにも行動できます！」

「ならば、始める」

「ハッ！」

……。

……。

っと、もう行ったな。

「ベルー、茶くれ、茶。麦茶な」

「分かりました、王よ」

いや、麦茶つていいよな、麦茶つて。……ウェールズに何で麦茶があるのかは聞かないでくれると嬉しいな。

『こんにちわ、ご機嫌如何かしら？』

突然頭に声が響く。勿論、誰かは分かっているわけで。

『あ、こんにちわ。こっちは結構順調だぞ、神様』

『あら、あなたも神なんだから神様なんて言わなくていいのに』

『いや、一心生きている間は人間ってカテゴリーで。もしくは半神』

『ふーん、そう。まあ、いいわ。別に世間話をしにきた訳じゃないし』

『んで、ご用事は？』

『依頼よ、クギ・スプリングフィールド君』

突如、周りが白くなる。目の前には浅黒く日焼けした肌に、短く切られた黒髪、身長は約180、といった体格のいい男がいる。いや、正確には模写体があるといった方がいいか。

「今回はこの男か。罪状は何だ？」

そう俺がいうと、ぱらり、と紙がめくれる音がした。男の後ろを見れば、神様がいる。

「ええと、旧世界のキョウトにある関西呪術協会への攻撃が原因ね。本来死ぬべきではなかった人間も死んでしまっているわ。正史のキーマンである人間も4人に影響を与える結果になったわ。今回の件

で何らかの形で世界軸がズレるわね……はあ、あれ探すだけでも大変なのに」

右手を頬に当て、ため息をつく神様。

「そいつは大変だな。……んで、目的は？」

「そのキーマンの内、2人に接触を計ろうとしていたわ。……残り1人は興味なし、もう1人はイレギュラーでまだ見つかってはいないわね。で、一番最後の子はもう正史と外れているわね。魔法がバレたわ。これにより管理神委員会は処刑を決定されたわ」

しかし、関東呪術協会か。まず、接触を計ったのは近衛 木乃香、桜咲 刹那、興味なしが近衛 詠春だろう。しかし、そのイレギュラーには興味がある。

「んで、そのイレギュラーって何だ？」

「雪広 あやか、っていう名前よ」

雪広財閥。

麻帆良学園都市の成り立ちを語る上では必ずと言っていいほど外せない単語だ。

雪広財閥の始まりを辿ると、そこには妖怪などを退治する魔術結社、通称・退治屋からだと言うことが分かる。

竜穴の上に育ち、そこから溢れ出す魔力を当てられて育った『神木・蟠桃』は、やはり周りの生物や、魔素に影響を強く与えた。そうなれば必然的に魔獣や妖怪は出てくる。

そこに管理を命じられ来たのが、青山家の分家の一つ、雪広家だ。

雪広家は長年に渡り、『神木・蟠桃』を己の欲望のために使おうとする者達からの守護と、『神木・蟠桃』に影響され出てきた魔獣、妖怪の退治をしてきたのだ。

だが、明治時代にはいると魔の類のものを否定的に考える人が多くなる。そして、雪広家が持つ広大な土地を狙う国、大企業が出てきたのだ。

味方していた現地の住民も時代の流れには勝てず、最後は四方八方敵に囲まれてしまったわけだ。

雪広家は考えた。どうすればこの木を守れるのだろうか、どうすれば広大な大地を守れるのだろうか。

そうして出来たのが雪広社である。そして『神木・蟠桃』の力もあつたか、忽ち大企業、その果てには財閥となった。こうして、この土地と『神木・蟠桃』を守ることに成功したのである。その時、記念として私立・麻帆良学校を建設したのだ。

しかし戦後、雪広家にまた危機が訪れる。

魔法協会が土地を求めに来日。そして、『神木・蟠桃』並びにその周辺の土地を要求したのだ。

このことに頭を抱えた雪広家。その土地は京都御家から一任された、『神木・蟠桃』がある重要な管理地であり、自分勝手に明け渡してはならないのだ。しかも戦後と言うこともあり（勿論裏では魔法、魔術による戦いもあった）、戦える力はない。

雪広家は当時の京都御家の長、近衛 近右衛門に助けを乞いた。

その救援に答えるべく近衛 近右衛門はすぐさま麻帆良へと足を向けた。

そしてその翌月、正式に麻帆良は魔法協会のものとなった。

この時結ばれた条約が2つほど。

『これ以上日本国内の土地の無償要求はしないこと』。

『この魔法協会の初代の理事を近衛 近右衛門に任命すること』。

これにより、日本は魔に関しては支配されずにすんだ。

しかし、これに怒ったのは京都御家を始めた雪広家を除いた日本国内の魔術結社であった。

自分達は勝てる、なのに何故屈したのか、何故その代表者になったのか。そう怒ったのだ。

勘違いも甚だしい。ただでさえ数で負けているというのに、戦後、しかも敗戦国であり、弱っているというのに。

ただ、雪広家は商売で培った観察眼、並びに自分が管理している土地でのことなので正しく見れたのだ。

そして、近衛 近右衛門は日本最大の裏切り者、と称されたのだ。

この時、『神木・蟠桃』の地下にゲートが造られた。

そして大量の人間が来ても怪しまれないように、麻帆良学園都市が出来たのであった。この時のスポンサーが雪広財閥だ。

現在の当主である雪広 礼徒あやては神鳴流の師範代でありながらも、魔法使いでもあるという、究極技法の使い手だ。まほネット上でも多くのものを出品しており、裏では呪物や魔法具などといったものまでも販売を行っており、その質は一級品。魔法世界にも店を出しており、着々と財閥を大きくしている。

要は天才。

結婚相手は確か、MM元老院（常識人）の一人娘だ。

魔法世界に行ったとき、ちょっと見たけどかなりのベツピンさんでした。

……憎しみで人が殺せたら……！？（人のことは言えない：ラジエルの書ツツコミ機能）

閑話休題。

「へえ、なんでそんなところに？」

「当主同士で話し合いがあったのよ。その時一緒に遊んでいたって  
いうこと」

「ふーん（俺も混じらせて貰おうかな、勿論秘密の会合に）、現在  
その接触を計られた2名は？」

しかし、漫画内では3人の面識は麻帆良が初めて、のはず（原作  
知識が薄れてきているとです）。こういうイレギュラーがあるって  
ことは、雪広 礼徒が転生者か、もしくは書かれていないだけで実  
はあったことか。まあ、今はどうでもいいか。

「今は戦闘中 安心して、時間は止めているから だから避難  
しているわね。でも、あやかちゃんだけ  
ハグレちゃったようね。それで魔法戦を見ちゃった、ということよ。  
それと彼ら、今負けているようね」

「そうかい。それじゃあちよっくら行ってきます」

「行ってらっしゃい」

そして、空間から出た。



「ベル、用事が出来た。ネギの護衛よろしくう」

「いつてらっしやいませ、我が王よ」

さて、行きますか。そうして、京都へ空間転移した。

S I D E : 三人称

「へへっ、よええ！」

ブウン、と音を立て振り被られた拳の先からは魔力と気で練られた光が放たれる。

「くっ」

そう憎々しげに口から息がこぼれながらも光をいなしているのは、片手に野太刀を持ち浅葱を着ている近衛 詠春。

「何が目的だ、襲撃者」

冷静に男に問う男は、両手で三尺三寸もの刃渡りの野太刀を持つスーッ姿の雪広 礼徒。

「はっ、どーでもいいだろ、そんなことっ！ それより早く、くた

「ばりやがれ！」

そしてそう反論して、またも光を放つジャージ姿の男。

辺りにあつたであろう建物は既に瓦解しており、その中には血を流し倒れている者、負傷者に符を張って必死に治療している者、もう人の形をしていない物なども見受けられる。

「あの襲撃者は戦い方は荒いが、なかなかの魔力と気の量だな」

「何を冷静に判断している！ いいから早く倒せ！」

「む、冷静に判断してから倒しにかかった方が早く倒せるぞ」

「い・い・か・ら、早く戦え！」

……仲間割れモドキをしながらも、息のあつたコンビネーションで追い込んでいく2人。

「ちっ！ しっけえな、この！」

男は高く飛び上がり、魔力と気を練り合わせる。そして宙には大量の光、そしてその光はまるで流れ星のように地に叩きつけられた。

バゴオオオオン！！ と爆音をたて、それに伴い爆風が吹き荒れる。

「きゃっ！」

そう可愛らしく幼い悲鳴が聞こえ、少し離れた茂みから何かが飛

び出る。

「……なんだ、あれ？」

その方向を見れば、幼い金髪の少女が茂みから姿を現した。

「あ、あやか！」

そう叫ぶのは先ほどまで冷静にいた雪広 礼徒だ。

「お、お父様……」

それに気付くと男はニヤリと顔を歪めた。

「俺をここまで足止めた罰だ、バーカ」

「な、やめろお！」

男の意図に気がついたのか、礼徒が悲鳴に似た声を上げる

「誰が止めるかよ、死ね」

そして、その方向へと拳を振るおうとする。

「あ………！？」

声を掠らせながらも、何とか出た声。そして、気が付いたのだ、今、私はこの男に殺されるのか、と。そしてたぶん自分は死んでしまっただろう、と。

幼いながらも、頭がいい故の弊害。未来が見えすぎ理解してしま  
うのだ、良いことでも、悪いことでも。

そして、男の拳は振るわれた。

「あやかあ！」

礼徒の悲痛な叫び。しかしその叫びにここでは意味は成さない。

「た……助けて……！」

何とか捻り出た声の内容は、救済を求める声だった。

しかし、その声の返答は無い……はずだった。ここにその願いの  
意味を成した。

「よろしい、ならば卿を助けようではないか」

S I D E : 雪広 あやか

掻き消える光。その代わりに突如現れた黄金。その身長、その体  
型は正に人体の黄金率。身に纏うマントは風に揺れる。その手には  
月明かりに輝く黄金の剣。

その姿に視線が、心が、魂が惹かれた。いや、違う。自分の持つ  
総てが惹かれている。

自分は高貴な生まれだと信じていた。この世で一番、とは言わな  
いがそれに近いものだ。

ああ、私は見つけたのだ。その一番を。

ああ、私は何と傲慢なのだろうか。

この人の足下にも及ばない。

否、この人の背中すら見えない。

否、この人と立っている場所から違う。

否、否、否。比べることすらおこがましい。

彼は剣を掲げた、高く、高く、高く。

刃は月光を反射し、彼の端麗な顔を淡く照らした。

「それでは、狩りを始めようか」

オホホとの邂逅だけど何か？（後書き）

金はDIE S厨。

オホホに魔法バレand旗建て。SS内ではこのSS初なのではなからうか。

さて、重要な発表です。

金、時間がないので土曜日更新できません。

金、「隊長、<sup>ストック</sup>弾薬切れましたあ！」「なんだとう！？」なので日曜日は更新しないで書き溜めます。

感想は返信します、というか出来ます。

ではここらで幕引きとさせていただきます。

感想お待ちしております（アンケート続行中ダヨ！）。

狂人と鬼神だけど何か？（前書き）

どうも、金です。読み方はキムでもキンでもナイヨ！

九話目投稿です。

ではどうぞ。

狂人と鬼神だけど何か？

「さて、貴様の処刑は確定された。喜べ、この私が無滑稽な貴様を滑稽な死体に作り替えてやろう」

「……てめえ、誰だ？」

腹だたしいが、この男の疑問はここにいるものの共通した疑問なのだろう。

あの姿、真正銘ラインハルト・ハイドリヒではないのだろうか。しかし、では何故その手に持つものはロンギヌスではなく、剣なのだろうか。

私の持つ能力の一つ、『ステータスの可視化』を使い、彼を見ようとした。

頭痛。

彼を見た結果が、これだった。最早全てが文字化けしており、読み取することは不可能。こんなこと、神以外では初めてのことだ。

……ならば彼も又、神だということか？

とりあえず、分かったことは1つ。

我々は彼の足下にも及ばないのだろう。

そう考えを巡らせながら、彼らを見た。



「ふむ、私か。そうだな、貴様を殺すもの、それで十分だろう」

「けっ、やれるもんならやってみな！」

そういつて、彼は宙にまたも大量の、しかし先ほどの比にならないくらいの、光を作る。

「死に晒せええ！」

落ちていく大量の光。しかし、黄金の彼はそれを一瞥して、嘲笑した。さも、馬鹿を見たと言った感じに。

「ただただ弾幕を作ればいいというわけではないぞ、力に溺れている阿呆が」

高く掲げられていた剣を、軽く振るう。そしてそこから発せられるは白。ただただ、発光もしない。

まるで空間に絵の具を塗り付けたようなものだ。

「ちっ！」

多くの光が、その白の奔流に巻き込まれ、消滅する。男も何とかすれすれで回避に成功した。

「ほう、今のを避けるか。来い、揉んでやろう」

ニヤリと口の端を歪ませ、挑発した。

さすがに反応しないだろうと思いきや、男は顔を真っ赤にしてプ

ルプルと体を震えさせていた。

「上つ等だ、この野郎……！！ 咸卦法！」

右手に魔力、左手に気を集め、掌を合わせる。突如、彼の体の周りには魔力と気の練り込まれた力が纏われ、形を成していった。

それは傷だらけの黒いフルプレート。体からは黒い霧のせいですが、その姿ははつきりとは見えず、滲ませている。

「バーサーカー……か」

「勿論狂気汚染されてねえし、能力もそのままだぜ」

「ふん、来ないのか？」

「今すぐそっちに行つてやるよ！」

その両手にはいつの間にか握られている、淡く発光している2振りの剣。

その剣は上段からその身を食わんと襲いかかる。しかし、右手に持つ剣でその攻撃を弾く。

「はっ、軽いぞ、犬畜生が」

「これでもそんなことが言えるのかよ!？」

黄金の男の真上には巨大な剣、いや剣といって良いのであろうか。

その大きさは手に持つている剣をそのまま何十倍と大きくした様で、そのまま垂直に落ちていく。

「な、あれはラカンの……!?!」

隣で詠春が驚いているが、仕方がないだろう。あれは彼の戦友の魔法具、『千の顔を持つ英雄』の能力によって作られた巨大な剣、『斬鑑剣』なのだから。

その剣に目を捕られている内にも、男の猛攻は止められておらず、その剣戟に一片の隙もない。

「……成る程、先程まで私達は手加減されていたのか」

二人の戦いを見て、そう思わず呟いてしまった。先程までの戦い方と今の彼らの戦いを見てそう思ってしまう。

そのことにすんなりと理解できた事に少々驚きながらも、納得できる自分がいる。

なぜなら私達二人とあの男を比べても、段違いなだけなのだ。

あの男は、現れてから一歩もその足を動かしていない。

余裕の笑みを浮かべながら、1振りの剣で2振りの剣をいなし、その被害を後ろにいる私の娘に与えないように。

「……私もまだまだだな」

そう呟いた瞬間、あの宙に浮いた巨大な剣はまるで桜のように散っていた。

#### SIDE：三人称

「貴様をただの馬鹿と思っていたが、少々考え直さなくてはな。成る程、『千の顔を持つ英雄』で作られた剣を『一騎士は 徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）』で宝具化、か。良好な組み合わせだな」

数多の剣戟を合わせている中、黄金の男は口を開く。

「さらには『無窮の武練』により経験を補っているのか。面白い、ここまでの者は今までいなかったな」

そう語りながら、その剣を振るう速度は着々と上げていく。フルプレートフルプレートの男はそれに必死になりながらも縋りついていく。

「だが、残念ながら貴様には欠点がある」

剣と剣がぶつかり合い、剣から剥がれた鋼が跳ぶ。

「まず一つ、やはり経験不足だな。格闘については整いすぎていて次の行動が視える」





！ さあ、恐怖しろ！ そして踏み出せ！ その恐怖を糧に行動し、進化し続ける！ されば私を殺せるやもしれんぞ！」

ばっ、と6対の羽が彼の背中から現れる。目の前の生き物は、それに相当すると判断したからである。

「グオオオオオ！」

黒い魔力が、辺りにまき散らされる。それは、本山を飲み込むほどだ。

ドクンッ、と胎動の音が聞こえる。しかし、その音は誰も聞かない、聞こえていない。

ドクンッドクンッ、次は立て続けに聞こえる。

ドクンッドクンッドクンッ。

あの黒い魔力はレジストさえすれば、防ぐことは可能だ。

しかしその魔力に当てられたのは、何もレジストすることができないだけの生き物な訳でもない。

草木は枯れ落ち、虫や逃げ遅れた動物たちは既に死に絶えている。

だが、魔力を纏っているのにレジストしないものであったならどうなのだろうか。

活性化させるのだ、その身に纏うものを。

戦場から少し離れた湖の中心には、巨大な要石が置いてある。

その要石にピシリッ、と罫が走る。そのまま罫は大きくなり、そして 割れた。

『グオオオオオン！』

目覚めの叫びが、京都に響きわたった。

S I D E : 雪広 礼徒

『グオオオオオン！』

「今のは……っ!？」

近衛 詠春がその叫び声を聞いて、さも有り得んと言った表情に変わる。

「? 知っているのか、詠春？」



確かにこの叫び声は不味い。だが、これほどの驚愕の表情は彩りはしないだろう。

「あ、ああ、こいつは……」

突如、叫び声が響いた方向に光の柱が出来る。そこには、巨大な異形。

色は発光する白、前後に顔があり、腕と足も前後に一對ずつ。

「リヨウメン、スクナノ……カミ」

そう呆然と出された声に疑問を抱きながらも、あの大鬼神を見る。

リヨウメンスクナノカミ。またの名を両面宿儺。

仁徳天皇の時代に現れたとされる異形の人。

『日本書紀』では飛驒の国で民衆を苦しめていたのを武将・武振熊命に退治されたとされている。

だが飛驒国、美濃国では信仰されており、その多くの古寺の開基とされている。

現在では結合双生児なのでは、という考えもあり、決して有り得ない存在であるわけではない。

しかし何故、飛驒国で現れたものがこの京都で封印されているのか。簡単な話、京都で封印した方がメリットが多いのだ。

1つ、もしかしたら飛騨国、美濃国を中心に出来た魔術結社（これは実際の所、別に他の魔術結社でも可能性があるが、もつとも可能性が大きいのがその辺りの魔術結社なのだ）が封印を解く可能性がある。それ故に警備がしっかりしており、仏僧や 息を潜めているが 陰陽師が多い京都に置いた方が対処しやすかった。

2つ、封印の管理がしやすい、先程言ったとおり仏僧、陰陽師が多いので封印に異常が見つかったときに封印の掛け直しや原因の追究がしやすい。

3つ、信仰している者たちから離すことが出来る。これによって両面宿讎の強化を抑えることが出来る。

他にも政治的取引や宗教内の取引があったが、これが主な要因だ。

「出現の速度が速い！？ 馬鹿な、こんな短時間で現界出来ない、出来るはずがない！」

「しかし、現に現れている。主な要因は、あの襲撃者、か。原因はあの黒い魔力だろう。それ以外にはあの黄金の男。だがその可能性は低いな。もしそうなら真っ先にあの湖へ足を向けていただろうしな」

カチャツ、と手に持つ野太刀、『備前長船長光』が音を立てる。

「……行くのか？」

「娘がいる。只でさえ危ないというのにアレがこっちに来たら更に危なくなる」

「はあ、全く私の周りには馬鹿しか寄ってこないのか？」

隣にからも鉄がぶつかる音がする。

「お前も行くのか？」

「私はこの長さ。私が率先して行かなくては どうする？」

「ふん、私が動かなかつたら行かなかつただろうに」

「私が行こうとしたらお前が突然立ち上がったんだろっが」

嫌みを言い合いながらもその視線は巨大な異形。

「行くぞ、腰抜け」

「分かっている、せっかち」

……先ほどの言い合いとは逆の立場になっているな。

狂人と鬼神だけど何か？（後書き）

微妙ですね、ええ分かっていますよ。

あ、前話の題名変えさせて頂きました。

だって、オホホの出番ないじゃん……。

というところで、ここらでお開きとさせて頂きたく思います。

感想お待ちしております。

恐怖する狂人だけど何か？（前書き）

返ってくるテストに狂って叫んで泣いて笑っている金です。

ははは、金、進学できるかなあ………？

ガチ目に悩んでいる中、10話目投稿です。

恐怖する狂人だけど何か？

「シッ！」

「ガア！」

黄金の男の背中から生えている6対の翼から羽が舞う。

黒い化け物の、先程まで無かった左腕が生えている。

2振りの剣は振るい合い、弾き合い、また振るう。

その1つ1つで衝撃が風を巻き起こし、またその1つ1つで地面が割れる。

黒い剣戟は空間を塗り潰し、金の剣戟はそれを消し取る。

横に振るわれたら、縦にして。縦に降ろされたら、横にして。

黒に手数で攻められ、防戦一方に見える黄金。

しかし、その雰囲気は対照的だった。

黒は速く倒さんと焦燥に駆られ、黄金は永く楽しもうと余裕を持つて。

「ははっ、そんなに急ぐな！ もっと楽しもうではないか！」



左腕を前に突き出し、襲いかかる剣を防ぐ。

ガガガガッ！ と音をたて、何とか防ぐ。

ようやくあの余裕が無くなった、そう言つかのように鎧が笑うように歪む。

剣が消える。自分を守っていた盾は、先ほどの攻撃で壊れかけていた。

砂煙が消える。目の前には、黒い魔力を圧縮した、球体があった。

「なっ！」

思わずあげてしまう驚愕の声、まさか本能に身を任せているというのに考えているのか、と。

「シ……ネ……ッ！」

奴が撃つは、黒く禍々しい俺を殺すための一撃。

俺が突き出すは、半壊し脆くなった護るための盾。

衝突するは、あまりにも人を殺すには強すぎるものと、あまりにも人を護るには弱すぎるもの。

黒が白を一塗り潰す（蝕む）。

黒き魔力で出来た砲撃は白い魔力で出来た円楯を飲み込む。



そこに拮抗は無く、なす術なく喰い荒らされる。

その現実を防ぎようはなく、避けようもない。

狂喜に歪んだ兜に、失態に歪んだ顔。

黒は黄金に襲いかかる。いくら彼でもこれに中つたら無傷とはいかないだろう。

しかし瞬間、黄金は笑う。

「面白い、ここまで追い込んだ卿には敬意を払わなくてはな」

美しき呪われの三姉妹は

Sch?ne Gorgons - Schwestern

彼の美しき戦女神に呪われん

Es wurde von sch?nem Athene

verflucht

末の髪がたいそう美しき処女は

Medusa Haare sind sehr sch?n

その美しき髪を醜き蛇と成さん

Ich machte das sch?ne Haar

einerh??lichen Schlange

そして 英雄に首を落とされん

Und ich wurde von Perseus a

ngez?ndet

呪いし戦女神は その首を持ちて

Athene, deres verfluchte

Mit dem Hals

持ちしその楯の中央に据えんこと

Ich reparierte es im Zentru

m vom Schild, der dauerte

「我が身を護れ！ 『一全てを石に成す戦女神の楯』<sup>アイギス</sup>！」

現れたのは、先ほどの物の一回り大きい円楯。

だが、その中央には干からびた首がはめ込まれていた。

その首の髪の毛からは蛇が喉を鳴らして化け物に向かって威嚇している。

そして楯に当たった瞬間、黒き一撃は灰色の石になった。

「アイギスの楯、その名を一度は聞いたことはあるだろう……いや、今の卿はそんなことを語ることも出来んか」

アイギスの楯。

ゴルゴン三姉妹の末の妹、見た人全てを石に変える能力を持つメドゥーサの首がはめ込まれたとされる女神アテネの所有する楯（楯以外にも胸当てと言われる説もある）の一つだ。

女神アテネは知恵・美貌の神とされているが、武器や防具と言った物とも関係深い神である。

彼の女神の父はゼウス、母は巨人の一族、ティタン族の知恵の女神メティスであった。

ある日、ゼウスは「メティスが生む子は、父より強力になる」という予言を聞き、メティスが妊娠するとすぐさま彼女を飲み込んだ。しかしそれ以来ゼウスは頭痛に悩まされ、遂には鍛冶の神へパイストに頼んでその頭をかち割った。すると、そこから鎧兜を着た美しい娘が飛び出てきたという。

そう、それがアテネの誕生であった。

ゼウスは生まれたからには殺せもせず、1つ贈り物を渡した。

その名もアイギス。

元々は神の防具であり、その時点でかなり強力なものであったのである。しかし、今に伝わる最強の楯はこれより後に出来る。

アテネに呪われたメドウーサはその後、リビアの荒れ野へと身を隠した。

しかしセリポス島の王に退治を頼まれアテネの知恵を借りたペルセウスに退治される。

その後、その首から飛び散った血から生まれたペガサスに乗り、アテネの元へと首を捧げたという。

そしてアテネはその首を自分が持つ楯、アイギスへとはめ込んだという。

その力は死後にも失われていない見た物を石にする力と、元々持ち合わせていた頑丈な防御。

正に最強の楯といえよう。

「さて、この戦いももうそろそろやめとしよう。勿論、この私の勝利でな」

黄金は楯を左手で持ち、その楯を化け物に見せつけるように前に置く。

瞬間、化け物の動きが止まった。

別にアイギスの能力で石になったわけではない。

別に敵の行動に身構えているわけでもない。

プレッシャー。

そう、途轍もないプレッシャーに押しつぶされようとしている。

本能で動いていたから、逆に分かる。

あいつはヤバい、逃げろ、と。

だが、そのプレッシャーで体が強ばり、動けないでいる。

汗が絶えず溢れる、指一本動かない、息をするのすら苦しい。

ガクガクガクと体を小刻みに震わせ、手に持っている剣を落とすた。

心が恐怖に支配され、それに考えが遮られ、行動が制限され、全てが目の前の黄金に塗り潰される。

膝が地に着く。前のめりに倒れようとするのを手を着いて防ぐ。

ポタ、ポタ、ポタ、と地面を滝のように溢れ、流れる汗で濡らす。

剣はすぐ手元にある。

掴み、対峙しなければやられる。

そんなことは分かっているのに、分かっているはずなのに、掴むことを諦める。

無理だ、こいつに勝つことは。

無理だ、こいつに傷を付けることは。

無理だ、こいつに敵対することは。

無理だ、こいつの目の前で生きることが。

そんな考えに行き着いてしまう。

正に恐怖。

彼が2度目の人生で初めて感じた感情だった。

だが、そんな彼にもチャンス機会が訪れる。

ズゴオオオオン！ とこの2人の近くの森の木々が宙に飛ぶ。

「くっ、止められない……！」

「何なんだ、奴は」

そこから現れるのは2人の剣士と1つの巨大な鬼神。

魔を討つために創られた剣術、神鳴流。

それが魔の類ならば、その総てを切ることが出来る。が、この状況を見るとそれを疑いたくなる。

体中に それこそ命に関わる物はないが 夥しい傷を作っている2人と、その体に傷1つ無い異形。

しかも宗家青山家と神鳴流の師範代の2人ともが神鳴流奥義の全てに通じているというのに、その異形からは斬られた気配がない。

「くっ、前に戦ったときよりも強くなっているぞ!」

「ふむ、なかなか興味深いことだが、ゆっくり視ることは出来ないか……!」

詠春が剣を振るう。

「斬魔剣・弐の太刀……!」

魔を調伏する剣技。だが、その剣技を高速で回避される。

「あの図体でなんていう速度だ、化け物め!」

そして、あの2人の元へと戻ってくる。

そして黒いナニカが動いた。

S I D E : 黒いナニカ

コワイノハモウイヤダ。

コワイノハモウイヤダ。

モットツヨクナリタイ。

チカラガホシイ。

チカクニツツ、チカラガキタ。

ホシイ、チカラ。

タベレバ、ツヨクナレルカナア？

S I D E : 三人称

黒が、リヨウメンスクナノカミに襲いかかる。

リヨウメンスクナノカミはというと、まるで蠅か何かを払うように手を振る。

だが、それを回避する。

そして、黒がリヨウメンスクナノカミを喰った。

「「なっ！」「」

驚きの声をあげる2人を余所に、黄金はそれを睨みつけるように見る。

「ほう、遂に妖の類に成ったか」

『グアアアアアア！』



悲鳴を響かせるリヨウメンスクナノカミ。それを構わずに喰う黒。

その一口一口が凄まじく大きく、すでに頭と右半身がない。

3秒、その3秒であの巨体を全て喰らった。

そして、黒が変化し始める。

恐怖する狂人だけと何か？（後書き）

詠唱が……orz。

今回クギ君使った武器？ 防具？ に関しては今後の更新で説明  
させていただきます。

さてと、金、死ぬほど眠いです。

と言うわけでお休み……zzz

感想お待ちしております……zzz。

滅するけど何か？（前書き）

リア充爆発しろ（挨拶）！ 金です。

先日、某大手ハンバーガーチェーン店に友人と行った時、しばらく店内で食べながら駄弁っていると、他にも空席があるというのにわざわざ隣に座ってきた男女二人。

ただの友達かと思いきやカップルで、イチャツキヤガリマシタ。

勿論店を出るときに「リア充爆発しろ！」と友人とシンクウ。

こんなんだからリア充になれないんだと反省しながら、激しい嫉妬だからしょうがないやと開き直る金。

……愚痴ってますみません。では11話目です、どうぞ。

滅するけど何か？

まず、兜から2本の角が突き出る。

その瞬間、背を突き破り、何かが現れた。

現れたのは一対の鎧の腕の部分。

だが、鎧というには生物的すぎた。

血管が鎧から浮き出ており、脈をドクン、ドクンと打っている。

それに伴い、体中の鎧から血管が浮き彫りに出ており、同じく脈を打っている。

「カハアアア……」

一息吐けば、口からは白い煙が立ち上る。

外気はそれほど寒くはない。

黒が途轍もなく熱いのだ。

遂には鎧からも白煙が立ち上り、黄金を睨んだ。

先ほどまで正面切って見れなかったのに、黒はちゃんと黄金を睨んでいるのだ。

「クククツ、言ったであろう？ 恐怖を糧に進化し続ける、と。今正に卿は進化した。恐怖を糧に行動し、進化した。喜べ、卿。私を殺せるやもしれんぞ？」

黄金は腕を広げ、そのことを喜ぶ。

もしかしたら殺されるかもしれないというのに、その顔には笑いがあった。

「もうやめよう、と言ったが撤回させて貰おう」

では、存分に楽しもうではないか。

S I D E : クギ・スプリングフィールド

あの3人には逃げて貰った、というか逃げろって命令した。

詠春だけは何だか言っていたけど、足手まといつていたら渋々ながら逃げた。

しかし、面白くなってきた。そりゃリミッター（自分で掛けたものを外したら瞬殺だけど、今の俺なら殺される可能性はある。

舌を使い、乾いた唇を濡らす。高まる鼓動を押さえつける。頭の中では本能が警報する、リミッターを外せと。

それぐらいの奴なのだ、この化け物は。

「名実共に化け物になったのだ。型にはまった戦いや、つまらん遠慮はいらない。その全ての技を持って全力で来い」

化け物に向かって、そう言い放ってやった。

S I D E : 三人称

最初に動いたのは、黒い化け物。

その4つの手には、それぞれ黒い剣が握られている。

まずは突き、横払い、袈裟切り。

その全てを黄金は左手で持つ『アイギス全てを石に成す戦女神の楯』で防ぐ。すると、その楯に触れた3本の剣は灰色の石となり、砕け散る。

その隙に黄金の剣で一突き。

だが、攻撃していなかった剣でそれを防ぐ。

黄金から生えている6対の純白の翼の先には魔力で出来た金色の球体。

「もう一度この色に塗り潰される！」

球体からは12の魔力の奔流。

それは一斉に黒の化け物へと襲いかかる。

しかしその全てが剣に防がれ、霧散される。

「成る程、マジック・ジャマー魔素障害か。何故そんな能力があるのかは謎だが、楽しめるな」

防がれてもなお余裕の笑みを浮かべている黄金を見て、さらに一撃一撃を重くしていく黒。

享楽に身を浸かり、楯を使って防ぎ剣を振るって攻める黄金。

4本の腕を自由自在、縦横無尽に操り防ぎながら攻める黒。

人の域を出ている2人は化け物と形容するのがふさわしいが、誰もそんなことを言えないであろう。

その戦いは美しく、匠による1つの芸術品とも形容できるからだ。

一瞬はその時しがなく、一剣戟は一回しかないのだ。

血肉が踊り、興奮が高まる。

歡喜の笑みを、狂喜の笑みをそれぞれ浮かべ、その手を、腕をさらに早く動かす。





「ッ!？」

「何だと? もう時間切れか」

黒の3本の腕が霧散する。まるで元から無かったかのように。

黄金の翼と楯が霧散する。まるで終わりの時が来たように。

「すまん、リミッターに限界が来たようだ。卿もまた、その体を保つのは無理なのだろう」

「……………」

無言。だが、その雰囲気は肯定を表していた。

「言おう。進化した卿に敬意を表して、我が力の一端を見せよう」

私の脇腹に槍が刺される

Ein Speer wird von meiner Seite gebissen

救いの時だ 我が兄弟たち

Es ist Zeit der Hilfe Mein Bruder

我が血はその地に流された

Mein Blut wurde in den Boden entwässert

我が肉は人の子に突き破られた

Durch mein Fleisch wurde von  
einem Kind durchgehbrochen

泣くな 嘆くな 我が兄弟たち

Weinen Sie nicht Trauern Sie  
nicht Meine Brüder

その死は悲しくなく喜ぶものだ

Ich bin nicht traurig und  
bin mit dem Tod zufriedener

三日後 私は墓の岩を割り現れる

Drei Tage später Ich breche  
den Stein vom Grab und ersch  
eine

怖がるな 恐れるな 我が兄弟たち

Haben Sie keine Angst Habe  
n Sie keine Angst Meine Brüder

私は生き返った 我らの父を信ぜよ

Ich erholte mich Glauben Sie  
unserem Vater

主の御使いを率いてこの地に立った

Ich stand auf diesem Boden  
mit Mikhail

さあ 12の使徒よ 我が復活の時を喜べ

OK, es ist 12 Apostel Seie

n Sie mit Zeit meiner Wiederbe  
lebung zufriede n

永劫の救いを 今ここに AMEN

Die Hilfe der Best? ndigkeit

Jetzt hier AMEN

「汝に救いの手を差しよべん！ 『一神の血を滴らせる白き槍ロンゴミアント！』」

持っている剣の形状が一変する。

その手には刃がまるで大剣のように大きく、白く長い柄の槍。

先端は赤く、その刃は黄金に輝いている。

同調するように彼の周りの空間が光り輝き、その輝きは全てのものを照らした。

ロンゴミアント。

別名・ロンギヌスの槍。この別名の方が広く伝わり、有名なのだらう。

この槍は、彼の救い主イエス・キリストの脇腹を刺したとされる2人の兵士の内の一人、ロンギヌスが持っていた槍だ。

このロンギヌス、実は盲目であった。しかし、槍を刺したときに滴り落ちた血が目に入り、視力を取り戻したという。そうして、彼はキリストを信じるようになり、洗礼を受け、聖ロンギヌスと呼ばれるようになったという。

このロンゴミアントはアーサー王の聖杯探求の際にも円卓の騎士達の目の前に表したという。

その伝説の白き槍を黄金が持ち直し、まるで投擲するような体制をとった。

「この一撃で卿を葬ろう。喜べ、この一撃で屠るのは卿が初めてだ」  
そしてこの一撃でその罪を洗い流そう。

そして、投げられた。

S I D E : . . . ? ? ?

(くそっ、一体何なんだよ!?)

空高くから見下ろした関西呪術協会の総本山はその美しい光景を無惨なものへと変わっていた。

沢山の鳥居が立ち並ぶ長い石階段は押し潰され、荘厳なる多くの屋敷は瓦礫と化し、困っていた多くの木々達は根本から引きちぎられていた。

「くっ、まさか敵襲か……!?!」

瓦礫の所々には戦いの痕が見える。

逆にそれくらいしかないだろう。

その途中、黄金が見える。

その姿は見たことがなく、荒々しくも美しかった。

だが、敵であろう。

雑念を棄て、腰からかけているその刀を引き抜く。

「雷光剣！」

気で出来た雷撃を、その黄金へ中てた。

滅するけど何か？（後書き）

感想お待ちしております。

**鍛えるけど何か？ 前編（前書き）**

どうも、金です。

遂に不定期更新のタグの本領発揮ですね（おい。

スランプです、スランプなのです。

まず一言、すみません。

今回は短いうえに、クオリティーがヤバいことに（ガクガクブルブル。

批判が怖い……。

というところで十二話目です、とついで。

## 鍛えるけど何か？ 前編

「すみませんでしたーっ！」

俺の目の前にはもの凄い勢いで土下座してくる齡8、9歳の綺麗な黒で髪の高い少年がいた。

いや俺って確かに今、大人の姿をしているけれど中身は3歳………  
………そういやもう転生前と合わせると20歳越えているぞ、おい。  
中身も大人だよ、子供っていうことでこの俺が如何にも悪役っぽい  
状況から抜け出そうとした完璧な策が！？（穴だらけである、とい  
うか自分にしか分からない：ラジエルの書ツツコミ機能）

ほら見るよ！ 詠春と礼徒が冷たい感じの目つきで俺を見てくる  
ううう！ やめてえ、俺全然悪くないのにつ！

「いやマジすみませんでした。でも言い訳させていたたくとですね、  
いやだつて家に帰ってきたらぐちゃぐちゃのぐちゃになっているじ  
やないですか。そんな中見たこともない人がいたらその人が犯人だ  
って思いませんか、そう思いませんか？ そんな人に、貴方がやつ  
たんですか？ なんて聞ける訳ないじゃないですか。だから先手必  
勝のどということをで雷光剣をひとまず浴びせてから話を聞こうかと「木  
乃人、言い訳苦しいぞ」………すみませんでした」

………さすがにここまで言い訳してくるとは思いも寄らなかった。  
しかし凄いな、口から一瞬でここまで言ってくるのは。

「………うちの子でもここまで言い訳苦しいのは一人もいなかったぞ」



「……いや、私もこの癖をどうにかしようとしたんだが……はあ、小さい時からこんな感じだったんだ」

あーあ、詠春が頭を抱えちゃっているよ。さすがにこんな感じだったら泣きたくなるよな。

「まあ、よい。私もあの程度では傷一つも付けられんし、気配もバレバレ。防げて当たり前だからな、私では」

「（あの程度つて、グサツと来たあ……。あれ、俺つて威力がバカみたいに強いはずだよな？ 親父に褒められたのつてそれくらいだし。というか、気配もバレバレつて、親父にもバレたことないのにな？ この人才カシい、絶対オカしい）」

「（あの程度の威力、だつて？ 木乃人の威力つて私のものよりも強いよな？ さすがに最前線からこの身を引いたとしても、この男からするとあの程度ですんでしまっただつて？ 気配もバレバレつて私、一度も気が付いたことがないんだが。この男、何者、いや何なんだ？）」

近衛父子揃って頭を抱え始めたぞ。それと二人とも、丸聞こえだから、かなり失礼だよな、おい。

「ごほん、まず初めにこの度はご助力に感謝する。私は雪広家当主雪広 礼徒あやとこと言う」

近衛父子を横目に、雪広 礼徒が挨拶をする。その状況に気が付いたのか、近衛父子が目を覚ます。

「すみません、少々混乱してしまい……今回の件については真にありがとうございます。私が関西呪術協会の長、近衛 詠春と言います。そしてこの子が、」

「はい、近衛 木乃人と申します」

そう挨拶してくる2人。しかし、どうしたものであるうか。

「ふむ、先ほどから卿らの後ろから可愛らしい気配と視線を2つほど感じるのだが？」

「（ビクウツ！）」「（ビクウツ！）」

はあ、と目の前にいる3人がシンクロしたため息をつく。

「あやか、入ってきなさい」

「刹那君、入りなさい」

ざざざつ、と控えめに開かれた先には2年端もいかぬ少女が2人。髪をサイドテールで括られた少女。そして、先程助けた金の髪を持つ少女。

2人ともおどおどと室内に入る。

「あ、う……あ、ありがとうございました！」

最初に動いたのは金髪の少女、雪広 あやかだ。

ぺこりっ、と頭を下げ、自分に対して礼をする。

……成る程、可愛いな。ロリコンでは無いけれど、無いけれど）  
大切なので2度言いました）、この可愛さは理解できる。

顔を上げる少女は上目遣いでこちらを見ており、顔は赤く上気しており、目を潤させていた。

うん、かわえー。

「別にいい。ついでに助けたただけだ、礼を言われる筋合いはないが」

「で、でも…」

「では、受け取っておこう」

このままグダグダになりそうな感じがしたんで素直に受け取りました。

「あ、あの…」

するとサイドテールの少女が口を開く。

「わ、私に戦いを教えてください！」

最終的に面倒くさいけれど、特に拒否する必要性もないので教えることになった。

話し合つと言つてもちよつとしたことだし、まずこちらの戦闘能力をじっくりと見せてから（先程も見せたが）会議をした方が、まあ威圧出来るんじゃない？ ということで今すぐすることに。

向こう側もそれから、みたいなことを押ししていたから失礼ではないだろう。

というわけで、近衛父子に雪広父子、俺と刹那の総勢6人は、瓦礫となった元・鍛錬場に現在いる。

俺の得物はいつものお袋の剣、勝手に『メント・モリ死の舞踏』なんて名前を付けさせていただきました。もちろん翼、左手の楯、『全てを石に成す戦女神の楯』、『神の血を滴らせる白き槍』その他諸々は使用禁止にしました。だって、それ使つて完璧虐た（ry。

まあ戦いを教えて欲しいってことだし、前振りはちよいと適当でいいよね。

「では、まず私の戦い似付いての考え方を教えよう。なに、簡単だ。一言で済む」

それは先の黒い化け物にも言ったことだ。

それは始源の感情。

それは進化の糧。

それは負。

「恐怖、ただ其れだけに尽きる。敵から恐怖を与え続けられ、敵に恐怖を与え続ける」

黄金の剣、『死の舞踏』を腰から引き抜く。それに合わせ、目の前の少女も野太刀を抜く。

俺は特に構えず、ただただ少女を見る。

少女は構えをとり、刃を俺に向ける。

日の光のもと、俺と少女は得物を片手に向かい合っていた。

「では、始めるとしよう。特に肩書きなど持ち合わせていないが、ふむ。敢えて言うなれば」

名乗る、ただ其れだけが目の前の少女は汗が吹き出していた。

少し威圧感を出しすぎていたか、と思ったけれど、まあ、恐怖するなら丁度良いだろう。

「『コスミック・ホラー窮極の混沌の恐怖』第一位 メフィストフェレス愛すべからざる黄金 ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒだ」

「京都神鳴流、桜咲 刹那！」

「汝は恐怖し、我を恐怖させるか？」

「推して参る！」

全く、元気があって良いことだ。

鍛えるけど何か？ 前編（後書き）

感想お待ちしております。

鍛えるけれど何か？ 後半（前書き）

スランプ中の金です。

この遅筆具合をどうにかしてほしいです……。

クオリティも低いし……（泣）。

どうしようもない話です。ぜひ。



鍛えるけれど何か？ 後半

まず動いたのは少女。

瞬動、とまでいかないものの気で強化されたその小柄な体からは想像できない速度で黄金へ接近する。

振るわれた野太刀を剣の腹で防ぎ、蹴りを少女の腹に入れる。

しかし少女は黄金の剣を踏み台に後方へと下がり、蹴りをかわす。

黄金の攻撃は止まらない。

「イエ・ロイ・イン・キング・イエロイキング！ 光の精霊 19  
9柱！ 魔法の射手！ 連弾・光の199柱！」

その背には数え切れないほどの魔法の矢。さらにはその1本1本には魔力が濃縮されている。

「力とは、ただただ自分が持っているものだ」

彼は思っていた。

自分の持つ力は確かにズルだ。努力もせず、ただただ頼んだら得た力。その力は壮絶で、人が持つには身に余るものだ。

しかし、それは運が良かっただけだ。

これは逃げ。数多くの努力する人間を見て、罪悪感に蝕まれた自分の逃げだ。

故に胸を張る。

力は力だと。

「そこに善も悪も好感も反感も無い。力がなければ、恐怖を遠ざけることは出来ない。ましてや誰かを護るとなれば全身全霊を賭さなければ護れるものも護れん。だから、」

手を前へと降ろす。それに合わせて魔法の射手が少女に襲いかかる。

「その半妖の力、存分に奮うがいい」

S I D E : 桜咲 刹那

彼の言葉が、私の頭の中で反芻していた。

『その半妖の力、存分に奮うがいい』、と。

何故分かった、何故バレたと。

忌み嫌われたその姿、その正体。

人間と、烏族のハーフであるという事実。

瞬間寒気、否、恐怖がこの身を駆け巡った。

目の前まで迫りきた魔法でもない。自分の隠していた真実を言い当てられたことでもない。

目の前の彼に、ハーフとして残った烏族の本能からの警告に、護<sup>このちゃん</sup>るものも護れないという忠告に。

もし彼がお嬢様<sup>このちゃん</sup>を狙って襲ってきたら護れないという恐怖、もし自分が殺されてお嬢様<sup>このちゃん</sup>が襲われたりしたらという恐怖、もし自分が力を隠したせいでお嬢様<sup>このちゃん</sup>を護りきれなかったらという恐怖。

いつの間にか、背から白い羽を出していた。ただただ、お嬢様<sup>このちゃん</sup>を護りたい一心で。

手に持つ野太刀を、持ち直す。自身の周囲には白い羽毛が舞っていた。

降り注ぐ魔法の矢はすでに当たるか当たらないかと言うところまで来ていた。

SIDE：クギ・スプリングフィールド

今現在敵対している少女、桜咲が背から羽を出したと思ったら、

目には見えない速度で魔法の射手を避けた。

さすが鳥族、と言ったところだろうか。すでに大半の魔法の射手を躲している。

まあ、目標達成と言ったところだろうか。自分の嫌っている半妖の力も使っているしな。

しかしスピードがさつきとは段違いだな、おい。

「―― 撃 離 脱 (ヒット・アンド・アウェイ) ってやつか? 一剣戟いれたら離れる、その繰り返しだ。」

単調だが、その1つ1つが重い。スピードもだがはっきり言ってしまうえば別人のようだ。

「……しかし、少々飽きてきたな」

そう呟いて、メント・モリ『死の舞踏』に魔力を込める。

そのことに気がついたのか、先程のように剣戟を浴びせるのではなく遠距離攻撃の剣技を中心に攻撃してきた。

「神鳴流奥義、雷鳴剣！」

刹那が野太刀を振るうと同時に白く光る雷が迫りくる。

勿論正直に喰らうわけもないので横に跳び、避ける。

瞬間、後ろから殺気を感じた。

「神鳴流決戦奥義、」

冷え冷えとした、感情を感じさせない声。

後ろに振り向けば少女と瞳が合った。その瞳には恐怖と、確信と、決意。俺はその瞳を見たとき、ようやく感じれた。

「真・雷光剣っ！」

横に野太刀を薙ぐ。その軌道からは先ほどの比にならない気と光。剣戟はない。だが、近い。刹那の間には3メートルも距離はない。

その奔流に目を竦ませながらも、剣を前へと突き出した。

「解放、感卦剣」

爆散。『死の舞踏』から気と魔力が相反して爆発が起きる。

気と光の奔流と気と魔力の爆発は拮抗し、お互いを塗り潰し、塗り潰され、削り合っていた。

「アアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

その叫びと共に奔流がより一層大きくなる。拮抗は、奔流が押すような状況になる。

爆発は既に力を衰えさせ、犯され、喰い荒らされ、蝕まれる。

「ほう、これほどとは。想像以上だ」

左手を、奔流の方へと向ける。

「特別だ。1つだけ禁を外そう」

S I D E : 桜咲 刹那

殺った。そう確信した。

彼の剣から発せられた攻撃はもう弱くなっており、力づくで攻撃を通すことはもう時間の問題だった。

しかし、その確信も彼の一言で崩れさった。

「ほう、これほどとは。想像以上だ」

彼が左手を、奔流の方へと向ける。

「特別だ。1つだけ禁を外そう」

我が左手は拒絶を示す。

その一言で、防がれる。

「さあ、惚けている暇はないぞ」

まるでかき分けるかのように真・雷光剣を割り、確実に前へ前へと彼は歩を進める。

そのことに驚愕しながらも、後ろに退く。

「ふむ、いい判断だ。だが、」

彼が持つ黄金の剣には、異常なほどに込められた魔力。

「これはどうだ？」

巨大な、魔法の矢。

「散弾・魔法の射手。先までの攻撃と同じようには避けるな」

にい、と口の端をつり上げた。黄金の双眸が私を見る。

「卿はすべて避けられるかな？」

そして魔法の矢が襲いかかってきた。

S I D E : 三人称

巨大な魔法の矢が、その図体に反してとても早い速度で前方へと突き進む。

その先には1人の少女。彼女もまた、その体に反して人の速さとは思えない速度で避ける。しかし、少女は衝撃が襲う。

原因は、あの巨大な矢。その巨体からいくつもの小さな矢が分裂し、少女に向かっていているのだ。

「かはっ！」

思わず肺から空気が出ていまう。矢の猛攻は続く。

それは雨。違う点といえば四方八方から襲うという点ぐらいであろうか。全身に浴びせられる魔法の射手は1つ1つの攻撃力はそれほどでもない。

だが、塵も積もれば山となる、まさにそのことわざを体現するよきな魔法。一撃喰らえばそこから抜け出せないその攻撃は酷く強いものだ。

「斬空閃！」

その声と共に弾幕の一部に穴が空き、少女がそこから飛び出た。

その体には無数の傷と青くなつた打撲の痕。右の翼は変な方向に折れていた。

脱出したのはいいものの力無くして体を地に打ちつけ、そして動かなくなつた。

「刹那君っ！」



そこに飛び出したのは浅葱を纏った近衛 詠春。すぐさま少女の脈と目をみた。そしてほっ、と一息つく。

「……気絶しただけのようですね」

雪広 礼徒と近衛父子が黄金、ラインハルトを見た。

黄金は顔から汗を吹き出し、口を開いた。

「……少々手加減の具合を間違えてしまった、な」

「「間違えすぎだっ！」「」」

3人の声は全く同時に口から出た。

その空間は暗かった。

ことっ、ことっ、ことっ、と足音を響かせながら長い通路を、目的を持って彼は歩いていった。

黒いローブを靡かせ顔をマスクで覆っている彼は、突然止まった。

その目の前には1つの扉。

ギギギツ、と音を立て開かれた扉の先には大量の道具がカオスな状況を生みだしていた。

「……君はもう少し部屋を片づけるようなことをしてもいいと思うのだがね」

「おや、デユナミスではないですか。あの人形たちの調子はどうですか」

彼とはまた違うローブ、と言うよりはボロ布を着、膝まで伸びた黒い髪を揺らせて振り向いた。

その瞳は緑。顔は薄く笑っている。

「ああ、随分といい。しかしあれほどのが作れるのなら先の大戦でも作って欲しかったな」

「ああ、申し訳ない。お恥ずかしい話、少々力を封印されていてね。あれでも精一杯手腕をかけて創った一品だったんだがね」

「それは本当か？」

「ええ、本当だとも」

その顔には本当とも嘘ともとれる表情。彼は1つため息をついて話を続けた。

「まあ、その話はもういいだろう。それでだな、旧世界で君が改造したというリョウメンスクナノカミの反応が先ほど消えた」

ほう、と驚いた声を出して彼は作業へと戻る。

「それをやったのは誰かな？ 興味が湧いた」

「……君は旧世界に行くつもりか？」

「いや、最近出来た魔人に行かせるよ。私はまだまだやりたいことがあるからね」

カチャカチャカチャと音を立てながら口を開いた。

「シュピーネ。ロート・シュピーネ。いるかな？」

「は、はい。閣下。ここにおります」

ぶるぶると体を震わす痩せ細った、蜘蛛を思わせる男。その声はネバリとしていてあまり聞きたくない声だ。

「今の話を聞いていただろうか？ それで、調査に行ってくれないかな？ ロート・シュピーネ」

「か、閣下のお心のままに」

瞬動。その男は消える。

「……彼に任せていいのかな？」

「捨て駒だよ、彼は」

男は手を止めて、顔を笑みで歪ませた。まるで　長年待ち望んだナニカと出会ったかのように。

「しかし、今日は気分が良い。最高の劇がある予感がする」

「そうか……」

ローブの男は扉へと歩を向けた。

「では、もうそろそろ退散させてもらうぞ。メルクリウス」

「そうかね？　では人形たちによく伝えておいてくれ」

ゲランギニョル  
恐怖劇は、開幕された。

**鍛えるけれど何か？ 後半（後書き）**

水銀さん登場！

……あ、形成さん（笑）もか。

しかしこの二人の話し方がわからん（おい）。

ということで読者の皆様方のご教授を願いたい所存です！

ここがおかしいとか、こうした方がいい、といった意見をお願いいたします。

感想お待ちしております。

**番外編 雑談だけど何か？（前書き）**

お久しぶりです、金です。

一応言い訳は本文の方にあります。

うう批判が怖い、と思いながらも男は度胸だと投稿した番外編です、どつぞ。

番外編 雑談だけど何か？

金「特別企画！」

釘「クギと！」

金「金の！」

金・釘「雑談だけど何か？ はっじまっるよー！」「

金「さあ、始まりました、祝10万PVを祝つてのこの企画」

釘「おい待て」

金「チャット形式でお送りしたいと思います！ ってえ？ 釘、どうしたんですか？」

釘「どこから突っ込んでいいんだか……。まず何で更新がこんなに遅れたか、お兄ちゃん怒らないから言ってみなさい」

釘様の 頭上に 第五元素収束砲が 確認されました。

金「夏風邪ぶり返したんだよ、バーカ！（泣）」

釘「ええ！ さすがに病弱だとは知っていたけど、ここまでとは……」

金「くくく、『お前この前なっただろ？』と思われている読者様方、あれはフラグです！ またなるフラグデスヨオ！ はははははは！

学校の単位ヤバイデス……」

釘「バカ野郎、またフラグ建てやがって……。んで落ち込んでいるところ悪いけど、何で俺のチャット名が木工道具になってんだよ？」

金「いや、釘。プロローグを見てみてくださいよ。自覚していますよ?。」

釘「……そうだった。ええい、気を取り直して、祝10万PVと銘打ったこの企画だけだ」

金「? どこか問題でも? よく他の作者様方もやられていることですよ?。」

釘「いや、すでに10万PVって結構前になっていたぞ?。」

金「はは、まさ………嘘だろ?。」

釘「顔を劇画タッチにしない。今やもう20万PVを越えたんだけど、これも今まで読み続けていただいた読者様方のお陰です。どうもありがとうございます」

金「ぶつぶつ……10万……20万PV企画が……」

釘「いつまで落ち込んでいるつもりだよ、おい」

金「はっ、そうですね。ゴホンゴホン、おやもうそろそろゲストの方がログインしますね」

釘「ゲスト? 俺、初耳なんだけど」



蠅様が ログイン しました。

蠅「どうも、初めまして。蠅ことベルでございます」

金「おお、やっときましたね。今回のゲストは先ほど挨拶されたようにベルさんです。みんなはくしゅー」

パチパチパチ。

釘「いやはや、まさかベル（以後蠅）がゲストになるとはな。思いも寄らなかったー（棒読み）」

金「釘は薄々気が付いていたようですが。ではちょっとプロフィールでも紹介しちゃいましょうかね」

ピロリロリーン

蠅様の プロフィールが 公開されます。

名前：ベル（ベルゼブブ）

性別：女（？）

年齢：UNKNOWN

身長：180cm

体重：蠅の数によって変動

好きなもの：ゴミ処理所、臭いもの、甘いもの、王

嫌いなもの：綺麗すぎる所、殺虫用品、王を貶す者

金「ま、こんなところですかね」

釘「待て待て待て、蠅も蠅で突っ込み所が有りすぎて困る！」

蠅「？ どこがでしょうか、王よ？」

釘「畜生、首を傾げるな！ 可愛いじゃねえか！」

釘「しかしすかさず突っ込む！ この際好きなもの、嫌いなものはしょうがないとして、体重の所だ！ 蠅の数による変動って、お前の体どうなってんだよ！」

金「ええ、釘は細かいなあ。そんなだとー モテませんよ （予定していたフラグを折りますよ）？」

釘「酷い！ それって完璧齧しじゃねえか、おい！」

金「ふふふ、まだいいじゃないですか。金なんて男子校だから校内の出会いなんてありませんし、ケータイも持っていないんでサイトでの出会いも無し、フフフフ」

釘「まあそれ以前に顔から問題だしな」

金「殺すコロすコロすコロコロコロコロッ！」

蠅「あの、一応私ゲストなんです……」

30分後

金「くつ、今日の所はこの辺りで引き上げさせてあげましょう！  
しかし、いづれ第二の、第三の金が現れるだろう……っ！」

釘「ふははははー！ その度に私が倒してやろうではないか。さあ  
止めだ、『神ロンドンの血を滴らせ」

蠅「一応述べさせていただけと彼が死亡したらこの小説が凍結して  
しまいますが」

釘「……今日はこの辺りで止めてやんよ」

金「くくく、今更気づきましたか……というか金、死に体なんです  
けど」

釘「司会者、早く進行させる」

金「くつ、自分のことを棚に上げて……まあいいでしょう。ところ  
で蠅、最近悩み事があるようですが？」

蠅「はい、実はそうなんです……」

釘「へえ、それは初耳だ」

蠅「はい……私、出番が少ないんです」

金様が ログアウト しました。

金様が ログイン させられました。

蠅「大丈夫です、命までは取りません。……ただ死と生の境界線上に立って貰うだけ」

金「止めて！ 金のライフはゼロよ!？」

釘「はははっ、無様だな!」

蠅「王もですよ」

釘「ひよっ?」

蠅「毎回毎回ネギちゃんの護衛を押しつけて……たまには私も暴れたいiiiiiiiiッ!」

釘「ひい、大量の蠅(虫)が襲いかかってくるうう!」

金「ははは、もう終わりだあ……」

釘「金の方は俺の比じゃねえぞ、おい!」

蠅「だから先程言ったでしょう、命までは取りません」

金・釘「(ガクガクブルブル)」

蠅「死と生の境界線上に立って貰うだけ、と」

金・釘「ぎゃあああ!」

しばらくお待ち下さい。

金「らめええ、蠅らめえ……」

釘「……………(ビクンッビクンッ)」

蠅「(やりすぎましたかね……ま、いつか)」

金様が 生き返り ました。

釘様が 生き返り ました。

金「ぶはあ！ い、今は一体……(がくがく)」

釘「はあはあはあ、な、なんでだ……？ 冷や汗で服がびしょ濡れに……(ぶるぶる)」

蠅「どうしたんですか？ 一体そんなに震えて？」

金・釘「ビクッ!? い、いえなんでもナイデスヨ?」

金「(蠅の原作入った後の出番をもうちょイ増やしましょうかね……増やさないと……)」

釘「(今度行くときは蠅を連れていこうかな、勿論戦わせよう……連れていかないと……)」

金・釘「(殺られる!)」「」

蠅「まあいいでしょう。それで、進行をしなくていいんでしょうか、金様？」

金「おお、そうでしたね。では《ジリリリッ！》……時間切れですね。ではこの辺りでお開きとさせていただきますしよ」

釘「って、オチ無しかよ。本格的に駄目だな、おい」

蠅「……（ブブブブッ）」

金「ああ無言で蠅を差し向けないで！……つとと、業務連絡ですね。丁度第一章が終わったので、「ちょっと待て」「ってなんですか？ 今回はチャット形式なんでそれをちゃんと守って欲しいんですが」

釘「今、第一章が終わったって言ったな？ いつ、どのタイミングで言ったんだよ！？」

蠅「ええ本当です。全くこれだから評価が伸びないんですよ」

金「ええ、まさかのダメだし！ いや、言われてもしょうがないですね、そうですね……。まあ気を取り直して（この時彼のメンタル面がレベルアップしたのだった：ラジエルの書参照）ごほん、第一章が終わったので勿論第二章を書いているわけですが、ご指摘があったのでそのミスの修正をしようかな、と思っています。さらにストックを増やしたいのでその間は番外編や閑話でもゆったりと書いていこうと思います」

釘「業務連絡終了？ んじゃ、ここらで幕引きとさせていただきます」

金・釘・蠅「『今後も『ネギの兄だけど何か?』をどうかよろしく  
お願いします』」

〈終〉

金「あ、そうそう。7/20〜25は部活の合宿なので感想の返信  
ができません」

釘「業務連絡の時に言えっ!」

番外編 雑談だけど何か？（後書き）

感想お待ちしております。



番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 前編（前書き）

どうも、合宿前の金です。

今回の話は題名通りです。

ではどうも。

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 前編

「はぁ？ 助けて欲しいって？」

幼女天使に呼び出され真っ白な神様の部屋に着くと突然そう言われた。

「そうですお願いです助けて下さいこれが断られたらもう私色々大変なことにいいいいっ」

そう言いながら足に縋りついてくる幼女天使。この幼女天使意外と打たれ強かった気がしたんだが……、なんて思いながら事情を聞くことにした。

「というか真っ裸の18歳男子の足に縋りついてくる幼女って。犯罪臭しか臭わないんですけど。」

「よし取り合えず落ち着こう。なんで神様がいなかは知らんがこの状況をもし見られたりしたら神様が俺を見る目が大変なことに。あら、来て……とりあえず警察に連ら「止める！」」

「どうやら間に合わなかったようです。」

ズズズッ、と精神的に空気が重い空間にお茶が啜られる音が響く。

発音源は目の前の神様。しかし今日も乳でかいなあ、なんて注意深く神様の胸を観察しているとカチャ、と神様がその手に持っていたコップをテーブルの上に置いた。

「一応、事情は把握したわ。あなたがこの子に呼び出されて、こちらに着いたら突然足を捕まれた。それであなたが落ち着かせようとして宿めているところに私が来た。それでいいのかしら？」

「……仰られるとおりでございます」

あれ、俺悪くないのになんで縮こまんないといかんのよ？ 幼女がズズズッ、と鼻啜る度に罪悪感がマツ八なんですけど。

はあ、とため息をつくると神様が話し始める。

「取り合えずどうして彼を呼んだのかしら？」

そう問われた少女はどこから取り出したのか、ティッシュで鼻をかむと、その口から衝撃的な言葉が発せられた。

「私……恋い、しちゃいました」

「は？ ……ええええええええええつ！？」

「その、先月のことです。あの日のことは決して忘れられません。私が神様の命令であったの世界の巡回をしていたとき「ストップ、何でお前が俺の世界を巡回したの？」ああ、そのことです。あなたはまだ正式な神じゃないので天使を持ってないじゃないですか」

確かにそうだ。俺は魂の格は神レベルなんだけど、死ぬまでは神の職（？）には就かないことで話は纏まったはずだ。

それに創った世界には俺が創った鳥型巡回精霊『ジュンカイ8号くん』を飛ばして異変がないかはちゃんと監視している。

「確かにちゃんと監視はされているんですが、世界なので上、つまり根元神世界管理局には報告しないといけないんですよ。それで報告するのは根元神、もしくは根元天使しか出来ないのので私がその役をしていた、というわけです」

「へえ、サンキューな」

「いえいえ、ごほん、話を戻しますと巡回していたときにですね、大量の龍に襲われまして」

「ああ、『神話世界』か」

俺が創りだした世界の一つ、『神話世界』の神や幻想生物などの魔に属する類（例外もあるが）は根元級の神や天使を見ることが出来る。

龍種はたしか下級から見れるようにはしていたけれど、根元神や根元天使には上級でも赤子レベルだ。正直困ることも苦戦することもありはしないと思うんだけど……。

「ええ、確かに苦戦はしなかったんですが、私は世界から見れば部外者なので殺生は禁じられているんです。なので気絶させていたんですけど弱いくせに量が多いかったものですから。」

その時、彼が颯爽と現れたんですよ」

おお、やっと幼女の騎士様の登場か。

「一気に私の目の前の龍を雷で吹き飛ばして。一つその手に持つ柄の短い鎚を振るうと大量の龍の頭を砕いて。それを掲げると頭上からはたくさんの雷が降ってきて私を守ってくれたんですよ。」

彼はですね、鎧を着ていて、獣の皮を叩いて、鬣みたくで雄々しく燃えるような赤い髪。その瞳は紅いルビーのようです。

それで、振り向いて『大丈夫か？』って微笑んで下さったんですよっ、きゃー！」

「それで、それからどうしたの？」

幼女はいきなりしゅん、と萎れた。いや、比喻じゃなくてリアルに。」

「それが……『もう時間だから』ってささっと帰っちゃって」

「お名前は聞けたの？」

いや、神様。そんなに目を輝かせないで。……というか、やはり神様も女（？）だところという話には興味津津なんすね……。

「だってこつこついうことぐらいしか興味ないから」

さいで。

「んで、名前は？」

いやんいやん、と一人自分の世界にトリップしている幼女に声をかけた。

「え、はい！ あの方の御名前は」

まさか、俺がここまで頭を悩ませるとはこの時、知る由もなかった。

「トール様です！」

トール。

北欧神話に出てくる神の内の一柱であり、北欧神話内では最強、とも言われている。

同神話の主神であるオーディンと大地の女神ヨルズの間生まれ  
た息子で、妻にシヴと巨人ヤルンサクサがいる。

主神であるオーディンとの間に生まれたのにも関わらず、トール  
はどちらかというと敵対していた巨人と似ている点が多く、性格も  
また良く言えば豪胆、悪く言えば乱暴である。しかしヴァイキング  
時代後期ではオーディンよりもトールの方が多く信仰されていたら  
しい。

前述にもあったようにトールは豪胆、というよりは乱暴な性格な  
のだが、決して暴力的で粗野な性格ではなかった。

例えば多くの兄弟の内の一人であるバルドルの葬儀に使う薪を聖  
別したり、食べた山羊を祈りによって復活させたり、物知りのアル  
ヴィースから知識を聞き出し、逆に出し抜いたりとしているのだ。

ただこういふ話はあるもののやはり最強の名の方が強く、トール  
に関する話のほとんどが巨人の国ヨーツンヘイムへの遠征や巨人の  
討伐である。

トールがなぜ神の中で最強と言われているかという点、トールは  
ほとんどの戦いを一撃で終わらせている、もちろん勝利でだ。

はっきり言おう。こいつは公式チートだと。

神はチートな奴が多いんだが、その中でもチートのチート、チー  
トオブチートなのである。なんせ世界樹ユグドラシルを支えていた  
大蛇、ヨルムンガンドですら一撃で倒したのだから。もしヨルムン  
ガンドから出た猛毒を浴びていなければ、最後の最後まで生き残っ

ていたかもしれない。

「へえ、あのおっさんにねえ。もしかしてオジサン趣味あんの？」

「へ？ トール様はおじさんじゃありませんでしたよ？」

え？ と重なる声。ちょっと待て、トールって、ありやどこからどう見てもおっさんだぞ？ 何いってんだこいつ？

そう思っているとパンツ、と手を叩いた音がする。

「それよりも、もう名前が分かっている、世界も特定できた。もうすることはひとつよね？」

「え？ もしかして……」

どうやら神様の道楽に俺らは付き合わされるらしい。

「その世界にあって、あなたが惚れたって言う男を見に行こうじゃない」

神様は非常に可愛らしく笑っていたことを書いておこう。

というところで俺らはスニーキングミッションばりに誰にも悟られ



ず、『神話世界』へと入り現在トールを探している。

「しかしないな。トールんちにいつても留守だし。奥さん達ひつつれてどっかピクニックでも行ってるのか？」

北欧神話はまだラグナロクは起こっていない。なのでトールはまだ生きているはずだが……。

「やっぱりおっさんじゃなかった？ ほら、こんな感じに髭を生やしていてさあ。ムツキムキな感じの」

「いいえっ、あの人は若かったし髭は生えていませんでしたしスレNDERでしたっ」

まるで断定するかのように言い切る幼女。

しかし、なんだかなあ。もしかしたら見間違えだったかもしれないし、危険なときに助けてくれたから美化されているのかもしれない。最悪、嘘をついた、美男子からおっさんになった、なんてこともあるしな。

しかし、よく考えてみると俺って北欧神話との交流はずっと昔してそれ以来つきりなんじゃないか。

「ああっ、いました！」

「なんだとう！？」

「そこの茂みに隠れて！」

さつ、と三人とも同じ茂みに隠れそこからチラツと外を見ると、  
幼女が言っていた美男子が湖の畔にいた。

「……なあ幼女、もしかしてあれ？」

「はい、あの方です！」

きゃーどうしましょう、とすぐ隣で頬に手を当てて首を振る幼女。  
……地味に邪魔だな、おい。

神様は神様は「あら、いい男じゃない」なんて言い出しているし。  
神様や、今回ここにきたのは幼女の恋の応援でせうよ？

はあ、とため息をついて目の前の男を見た。

まず体型はというと、いわゆる細マッチョ。髪は膨れている感じがする。例を挙げるとすればまさに獅子の鬣。目も紅いし、髭でおっさんだったら完璧ツールだったんだけどなあ。

「あら、ツール！ 久しぶりね！」

森の方から声がしたのでそちらの方に目を向けると、そりゃあまあたいそう美しい女性がいた。銀色の腰の辺りで括られている長髪を風に靡かせて、オパーイをポインポイン、じゃなくてバインバイン、と激しく揺らして。「おお」と歓声を上げた俺は悪くないから幼女、その親の敵を見るような目であの人の胸と俺を見ないで。

「無理です……」

しかし、プロモーションもいいよな。あれだ、ボン、キュツ、ボ

ンってやつ。しかしケツもでかいなあ。ああいうキャラは転生前の人生から一人もいなかったなあ。紹介された女子も腐女子しかいなかったし。合コンしたときはちょっと、いやめっちゃ苦痛でした。

それでトールの方はというと、その声の持ち主の方向に振り向き、にっこり笑って軽く手を挙げた。

思えば、この時からだ、俺、否、俺たちの苦難が始まったのも。

「よお、ロキ。元気してたか？」

「はあっ！？ ロキイツ！？」

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 前編（後書き）

感想お待ちしております。

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 中編（前書き）

どうも、金です。

今回の話は思わず自分でも目を背けたくなるような内容です……  
すみません。

とりあえず投稿して、余裕ができたなら直すつもりです。

ではどうも。

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 中編

ロキ。

北欧神話内最大のトリックスターと言われ、父が巨人ながらもオーディンの義兄弟となった一柱であり、そしてアース神族を滅亡へと導いた裏切り者でもある。

ロキは美しい容姿を持っているが、陰謀と悪戯と欺瞞に満ちた悪であり、気分屋であるものの、幾度も神々の間で浮かび上がった問題を解決している。その例として小人族を騙し、トールの鎚ミヨルニル、オーディンの槍グングニール、フレイの船スキズブラズニル、黄金を生み出す指輪アンドヴァリナウトなどを作らせた。

またロキはトールとの仲が最もよい。彼らは二度ほど巨人の国ヨーツンヘイムへ冒険をしていたりする。

しかしロキが悪と確定されるのはオーディンの愛息子であるバルドルを殺した時である。これによりロキは神々に捕らえられ、地下の巨大な岩に縛り付けられ、頭上から大蛇の毒が滴り落ちる罰を受ける。いつもは嫁であるシギユンが鉢で毒を受け止めているのだが、鉢が満杯になりその中身を捨てにいくときだけ毒がかかり、その苦痛による身震いが自信の原因と言われている。

そして『ラグナロク神々の黄昏』の時、ロキは戒めから解かれ、そしてヘイムダルと相打ちになる。

「でもなんであいつ女なんだ？」

ロキは男神なんだけれど……。

そういえばロキの伝承内ではロキは8年間乳搾り女となって子供をもうけた話や、雌馬となって馬であるスヴァシルフリとの間に後にオーディンの愛馬となるスレイプニルを生んだ話などがある。

……え、もしかしてロキって……。

「バイセクシャルね。興奮してきたわ」

俺が言わないようにしていたことをあっさりと言わんといて下さい。

「……ブツブツ……ブツブツ」

しかしいきなり隣の少女が静かになって黒いオーラを発しているんですが。

「……八つ裂き……絞首刑……永遠の苦しみ……」

恐っ！ 何この子、もの凄く恐いんですけど！

「神様神様、隣の少女がダークサイドに落ちようとしているんですが」

ジェイとか本当にいんのかな？ もしいたらすぐさまこいつをどうにかして欲しい。

「あら、本当。たまにこの子こっぴつ状態になっちゃうのよね。で

もほつといたらすぐに直るわよ」

嘘だつ！　なんかさつきよりオーラが黒くなってきてるYO！  
目のハイライト消えてるし、クスクス笑ってるぞ、おい！

「あの女、トール様を誑かしやがってただで済むとは思っていませんよね？　クスクス、トール様ご安心下さい。その女狐はすぐさま私が存在から消しますから」

「待て待て待て待て。幼女よ、一旦落ち着け。もしかしたらただの友達かもしれないぞ？　だからすぐさま攻げ「ねえ、トール？　最近私全然してないの。だからね、シよ？」ギャー！　あいつなんてこと言っちゃってくれてんの！？　っ！？　幼女落ち着け！　話せば分かる！　俺らは話し合うことが出来るじゃないカ！　だから第五元素収束砲を俺に向かって撃つのは止めてえええ！」

というよりなんで俺に撃つし。

「うつつ、どうせ私なんて幼女姿ですよ……。思えば私の恋ってつくづく報われないし、周りの変態か常識外れしかないし、合コンには呼ばれないし……。うわああんっ！」

その後帰っていった俺達は、神様の奢りで居酒屋に来ていた。…  
…というかここにも居酒屋あったんだ。



それはさておき、しばらく黙りながら酒をガブガブ飲んでいた幼女（どう見ても未成年飲酒ですね、分かります）が突然泣き出した。幼女、お前泣き上戸だったんだな。

「まあまあ、そう落ち込むなって。次があると思えばいいじゃないか。って、これウチの世界から売られてる酒じゃん。オツチャン、『バツカスのハートがD O K I × 2 焼酎』一升瓶で頼む！」

素晴らしくセンスが感じられない名前だ。

「へい、分かりやした」

オツチャンに酒を頼んで、コップに残っていた酒を一気に煽ると、神様に目を向けた。

「（しかし神様、話聞いてるとこの幼女って結構フられてんじゃん。知ってました？）」

「（そうね、プライベートまで突っ込めないから詳しくは知っていないわけじゃないけど、結構聞いたことがあるわ）」

「（へえ、例えば？）」

「（そうねえ、他の根元神の天使に惚れたことがあったわね。あの時は結構続いたわね）」

「（付き合いが？）」

「（ううん、恋心が。あの子恋には落ちるけどそこからなかなか前

に進めないのよ)」

「（はあ、難儀なことぞ）」

「ちよつと、ちゃんと聞いてますか!？」

「へいへい、聞いてますよ」

「そうですね……コロウジウスさんの時ですよ。あの人の時も私が声をかけようとしたら女の人が近づいてきて声がかげられなかつたんですよ、ううっ、なんでかなあ……」

……ちよつと哀れになってきたんだが。

「（私もよ……）」

「へい、お待ち」

俺はようやく来た『バツカスのハートがDO K I × 2 焼酎』を  
注ぎながら幼女の話に耳を傾けた。

しかし思い返してみると、神話が歪曲していたり神が神話通りになっ  
ていなかったりしていたのを思い返した。

今回のツールがオッサンじゃないのもそうである。时期的にはすでにオッサンでないとおかしいし、ロキもツールとああいっ関係であるとは伝承上なかった。

……やっぱり時空程度では他の神話に影響を与えてしまうか。

というのも時空をいくつも作り、その時空ごとに様々な神話を突っ込んだのが『神話世界』の実状である。

でも特に世界の軸はズレてはいないし、神話や伝承に記されているイベントは全て起こっている。

……つまりほっといても大丈夫というわけ。

「まあ、今は飲むか」

しかしネーミングセンスは皆無なのに『バツカスのハートがDO K I x 2 焼酎』が意外とうまい。

『王よ、聞こえますか』

頭の中に聞きなれた声が響く。

『ん、ベルか。何かあったか？』

『はい、オーデインが今王に用事があると言ってきましたが……帰させますか？』

『いや、今そっちに帰る』

「という訳で帰りますね？」

「そう、じゃあまた今度」

「まだ話は終わっていませんよお！」

幼女は無視して帰りますか。

「久しいな、オーディン」

自分の部屋に戻った俺は目の前の隻眼の翁に声をかけた。

「お久しぶりでございます、我らが父よ」

「それで、何のようだ？」

「はい、私のバカ息子についての話なのですが……」

「ここは児童相談所ではないぞ……まあいい。何だ、話せ」

「はい、実は……」

話すのを躊躇うように、しかしゆっくりと口を動かし始めた。

「私のバカ息子、ツールが『ラゲナロク神々の黄昏』の前に死ぬ可能性がでてきました」

「何だと！？ それは真か!?!」

これは大きく世界の軸がズレてしまいかもしれない。その前に何かしらの対処をしなければ……!

「原因は何だ？ 病か？」

もしそうだとしたら治さなくてはならないな……。しかしそんなことを起こるようにはしてはいないぞ？

「いえ、そのようなことではなく……」

「では何だ？」

そして、次の一言は俺の予測を遙かに越えた、馬鹿馬鹿しくも本当に死ぬかもしれない理由だった。

「……女絡みで死ぬかもしれないのです」

「は？」

「……私のバカ息子は、本当にバカなのですが、人を引き寄せる魅力があります」

「ああ、そうだな」

あれからしばらくの沈黙があつた。さすがにそんな理由で死ぬかよ、なんてニュアンスのことを言ったら相談に来るまでの理由があるという。

「それは勿論、女にも効きます」

「……ふむ、そうだな」

「それでいて、何かと厄介ごとに巻き込まれたりもするんです」

「……そうだったのか」

これはもはや……。

「その厄介ごとの度に、女を惚れさせるんです……」

リアルフラグメーカーキター！ マジでかよ！？ 本当にフラグメーカーはいたんだ！

「成る程な……」

「ええ……それで先日、あのバカの許嫁のシヴから手紙が来まして」

「？ それで？」

しかしなんでいきなりシヴ？

「手紙の内容が……」『トール様から離れなかったらお前をコロス。トールサマモコロス。ソシテジブンモシヌ』、といった内容の手紙が来まして……」

恐っ！？ ヤンデレじゃん、おい。

「うう、我らが父よ、お助けください!？」

俺は一つ、はぁ、とため息をついて、解決策を考えるのであった。

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 中編（後書き）

感想お待ちしております。



番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 後編（前書き）

どうも、金です。

まさかのぎっくり腰で死にかけています。

まあ、遅れた理由じゃないんですけどね。

言い訳させていただきますと、

1・塾忙しス

2・部活長ス

3・宿題多ス

って、ところですよ。

更新遅れて申し訳ございません。

でも、絶対行方不明になったりはしないんで、今後応援して頂ければと願っています。

ついでにもう一つ謝罪を。

……後半が酷すぎです。申し訳ございません。

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 後編

世界に存在するほとんどの神話では神の間では一夫多妻制である。これはやはり男尊女卑の風潮に影響されていると言える。

勿論これは北欧神話にも適応される。オーディンなんかがそうだ。史実通りであればトールも2人の嫁をもうけている。

……では何故トールは妻を一人も作ろうとしないのか。

とても疑問。とてつもなく疑問。

全員結婚させればいいじゃん、と提案するとオーディンは「無理矢理結婚させるのはちよつと……」なんて弱気な発言をしているし。まあ子煩悩なところがあるからな、オーディンは。

逆にトールが許可すればいいだろ、と思ったがよく考えてみれば許嫁であるシヴの面子が立たない。しかも筋金入りの唐変木らしい。

うーんうーんと何が楽しくて爺と一緒に頭を抱えなくちゃいけないんだ、と言うことでベルを部屋に入れることにした。

「王よ、1つ提案があるのですが、話させて貰ってもよろしいでしょうか？」

「ん？ ああ、よい。構わん」

「では、」

「ごほん、と咳をすると口を開き話し始めた。

「地獄での話なのですが、地獄でもこのような事例 勿論逆に男性が、というのもありますが が多々あります」

驚いたのは俺だけだろうか。地獄にもフラグメーカーがいるんだと。うらやまゲブンゲブンイカンな、それは。

「その度に各領主様方、または総指令官殿が頭を悩ませられました。それほど規模でしたので。やはり悪魔内でも面子があります。そのため全員はできないので殿方の独断で決められると、その、次の日には頭が無かったりすることもあって」

「恐えよ！ どんだけだよ、おい！ デモとかストの比じゃねえよ、それ！ しかも悪魔ヤンデレはリアルスクー ・デ ズツ！？」

「そこで上層部の方々が集まり、1つそのことについて会議をしました。どのようになればこのようなことは起こらないだろうか、どうすればすつぱりと諦められるのだろうか、と」

「……女絡みで会議をするまでになるとは、どうということなのか説明して欲しい。」

「それで決まったのが、戦いや競技といったもので決着をつける、というものでした」

なるほど、それは確かに効率がよいのかもしれない。よりよい種を残すといった点ではそれは優れているだろう。悪魔でも容姿がよいと人気ができるが、それよりは腕っ節の強さや優れた頭脳の持ち主の方がモテるらしい（勿論それは男であって女は容姿が優れている

方がモテる)。

「それでも諦めきれない人もいますが、大半はそれで諦めて手を引きます」

「む、ベル殿。諦めきれなかった人がいたら本末転倒ではありませんか」

オーデインの言うとおりである。諦めきれなかったら意中の人を殺す、なんてことが起こる可能性が高い。それでは危険である。

「ええ。そういう方は事前にチェックしておいて、その競技終了後にしばらく監視が付きます、その方々にバレないように。それでも不自然な行動が確認されたら、即記憶、というよりはその感情を抹消させていただいていました」

非人道的、いや人間の物差しで悪魔を計ってはいけなだろうが自分から見ると少々気が引ける。やはりどれだけ危険であろうと、さすがに思慕を寄せていた人の記憶を消す、というのは悲しい。

「ふむ、成る程……」

オーデインも顎に手を当て、思考に浸かっている。やはりこういう時に神や悪魔といった存在が人間の思考とはかけ離れているのが分かる。そのような存在が人間が想像したものと言っても、人間の感性とは少々ズレたところがある。故に、それらは信仰されているのだろう。

「では、ベル殿の案を使ってみようかと思えます。どうも、ありがとうございます」

「いえいえ、とんでもありません。ただ自分の故郷の習わしをお教えしただけなので」

「礼ぐらいは受け取っておけ、ベル」

「はあ、ではありがたく受け取っておきます……」

なんて会話が続き、唐突に思い出した。

「そつだ、オーディン。少々そのことで頼みたいことがあるのだが」

「はっ、なんでしょうか？」

「うむ、実はな」

自分の知り合いも、それに加えさせてもよいだろうか。

その返答は言つまでもない。

「幼女幼女幼女〜！」

取り合えず幼女にこの事を報告することにした。

「幼女言わないでください……そのことでショックを受けているんですから……」

いつにも増してテンションが低い幼女がため息をつきながら、書類を纏めていた。

「……一体なんですか、私だって暇じゃないんですよ。しょうもないことだったらあなたの世界の内のどれかをぶっ壊しますよ?」

暗っ！　そして恐っ！　なにこの子、こんなこという子じゃなかったのに。やつぱりツールですね、ツールなんですね。あの人類共通の敵め、幼女をイジリキャラから鬱キャラにさせるとはこれイカに。

まあ、茶番もこれくらいにして。

「幼女よ、もしかしたらお前の恋、叶うやもしれんぞ」

「本当ですかっ!?!」

ガタツ、と音を立てて椅子から幼女が立ち上がり、顔を前に出す。その瞳は「嘘だったら落とし前ツケて貰うぞ、ワレ」と物語っている。え、なんで分かったかって？　幼女が話していたからだよ、ハッハッ。……ヤベエ、まじでキャラ変わってるよ。

「本当の本当、でも一応注意しておくが『かも』であって確実じゃないからな?」

「ええええ、分かっています。それで、何でなんですか?　どうしたらいいんですか?」

「ん、何。簡単なことだ」

少し、運動会に出ればいいだけだ。

「ではでは！ ただいまより『ドキッ トールの嫁はワ・タ・シ  
はーと 運動会』を始めちゃいたいと思います！ 実況は皆様  
お馴染み北米のトリックスターと言えはこのお・れ、コヨーテと、」

「おいおい、コヨーテ！ あのネーチャン見てみるよ！ 走る度に  
あの双子山が地震で俺の瞳がゲシュタルト！」

「……実況の元祖スパイダーマンことイクトミでお送りしたいと思  
います。我が友イクトミよ、もうマイクがONになっているぞ」

「ぎゃああ！ マジかよ！？ 女房にバレたらヤバいことにいい！  
？ しかし、どんなことがあってもこの録画したビデオは手放さな  
い！」

「さて、初っぱなからテンションMAXで逝っちゃいたいと思いま  
す！ しかし、解説のイクトミさん。今回の運動会ですが正直なと  
ころ、感想が1つしかないんですよ」

「おお、やっぱりコヨーテもか。そうだよな、もう一言しかないも

んな」

「羨ましすぎるぞコンチクショウツ！……！」

「一体全体なんだよなんなんだよ！？ この女子の人数！ 今回の参加者は何々……総勢1982人！？ どんだけモテモテなんだよ、チクショー……！」

「ええい、リアルハーレムなんて初めて見たわっ！ くっそー、俺らんとも一夫多妻制設けて欲しいな！。そうすれば俺もリアルハーレムぐらいすぐに作って、一瞬にして酒池肉林にしてやる！」

「ちょwwwおまwwwwww」

「笑うなよ！ いくら親友であるお前でもそれは許さんぞ！」

「お前、あの奥さんと結婚している時点でもう人生の墓場エンド」

「……ははっ、確かにそうだな……」

「……今度酒奢ってやるよ……」

「……ありがとな……」

「さて気を取り直して、実況していくぞー！」

「おー！」



「……我が父、あれは一体……？」

「……言うな、あのことはもう言うな。……あいつらを連れてきたのが間違이었다……」

「さてと、現在『落ちたら恋の試験も落ちるぞ プールの上で綱渡り』をやっているんですが、解説のイクトミさん、これどう見ますかねえ？」

「おっほー！ ビシヨビシヨになった美女のラインが丸分かりな状況に俺今超興奮中！」

「いや、確かにそれも見所だけどさあ、競技についての解説をして欲しいんだが」

「おお、見るよコヨーテ！ 今落ちた娘、ほらあそこの！ 上から126・62・85ってヤバいだろ！」

「おっほー！ やべえよ！ あの胸のデカサに俺の愚息も覚醒中ー！ ってそうじゃねえよ！ ちゃんと解説しろよ！ なんで俺らが

わざわざ次元渡つてまでここにきたのか覚えてんのかよ!？」

「まあいいじゃん、こんな時に魔法の言葉、さんはい」

「「役得役得」」

「……我らが父……?」

「俺はもう寝る、それでこの大会中はもうゼツテエ起きねえ」

「さあて、次の『転んじゃだめよ? 又ル又ル・ローション・カイドウ』! つておい! この大会の競技発案者、面あ出せや! お前らの煩惱すごすぎて、俺は泣いた!」

「ええ、いいじゃんいいじゃん、又ル又ルローション。なんかエロいじゃん、超エロいじゃん」

「ええい、見た目が完璧ネタの俺にツッコませるとは、北欧神話…」

…恐ろしい……っ！」

「競技発案者とそれを許可した奴は出てこいっ！」

「あれ、オーディン様？ どうされたんですか？」

「いいから出てこい！ 私の顔に泥塗りやがってえ！」

「ひい！？ オーディン様がご乱心〜！」

「さあて、最後の競技もようやく終わりました！ 現在残っているのはたったの3人！ 女巨人、ヤルンサクサ！ 北欧のトリックスター、ロキ！ 幼女天使、ヨ・ウージヨ！「ちよ、私の名前が大変なことにー！」イクトミさん、遂に1982人の内からたった3人が選出されました。どう思わ「へい、奥のおふたりさん！ 俺と熱い夜を過ごさな〜い？」オメエの頭ん中はそれだけか！？「ちよつと、何で私は誘わないんですか！？」「」

「「幼女、テメエはダメだ」」

「ヒッドー!?」

「まったく、最近はポルノ法だとか、ウンチャラ法だとかで色々規制がかかってるつつうのに。合法ロリだけど図柄的に完璧アウトだつて」

「全くだ。ついでに言えば俺はロリコンじゃねえ」

「いや、そういうお前はシヨタだし。奥さんだってロリじゃねえか」

「ウツセエ！ 取り合えずアウトだアウト」

「つく、なんなんですか、幼女だとかロリだからって。それ以前に人間性を重視すべきなんですよ……」

「「いや、だから法律的にアウトだつて」」

「キイイイー!!」

「というわけで、このメンバーがツール（のクソ野郎）の嫁になります、決定！」

「はあ!? どういうわけだよ!？」

と今更現れたツール君。オーデインのカラス、フギンとムギンがカーカー鳴きながら現状が分かっていないツールに教えている。

「な、成る程。俺がこの3人と結婚すれば万事解決って訳か……?」

オドロオドロとそう答えるトール。

「もう離さないんだから！」

「ふふっ、これでコソコソしなくてもよくなったね、トール」

ガバツ、とトールに抱きつくヤルンサクサとロキ。

「ははっ、そうだな」

そう答えた。が、

「あ、うう」

真っ赤にした顔を下に向けてもじもじとする幼女。

「ん、嬢ちゃんもか？」

「は、はい。そうです……」

幼女は恥ずかしく、ボソボソと喋ってしまっている。

「んー、嬢ちゃんのこと俺はあんまり知らん。嬢ちゃんもだろっ？」

「……はい」

この答え方だとヤルンサクサとロキの二人は以前から知り合っていたのだろっ。そして幼女もトールのことを深くは知らないだろっ。

「だからさ、もっと知り合ってから結婚しようか」

そう微笑みながら、幼女に言った。確かにそうだ。そちらの方が潤滑な結婚生活を送れる。

しかし、俺はそうは思っていなかった。いや、トールの意見には賛成だけど、違う考え方でその意見に賛成なのだ。

『ラグナロク 神々の黄昏』。多くの命が散るその戦で、最強とうたわれているトールも死ぬ。あまり最初からこの恋を実らせたくなかったのは本心だ。

だが、幼女を哀れんだ。故に、一時でもいいから恋を实らせようと考えたのだ。

……まあ一方で、死んだら死んだで根元天使にして巡回でもさせようか、と考えているのも事実だ。

そんなことを考えていると、幼女が涙目になりながらも、口を開いた。

「……はい！」

……まあ、これも違う形のハッピーエンドなのだろう。

そう思ったとき、全ての元凶が、思わぬ爆弾発言をした。

「そしたら、体も大きくなっているだろうしな」

がつはっは、と豪快に笑っている。だから気づかないのだろう、目の前の小さな般若に。

「……お前もか……」

小さい声。だが、俺の耳にはちゃんとその声を聞き取れた。

「お前もか……っ!!」

地が揺れる。他の神達も異変に気づく。

「お前もかああー!!!」

爆発。

大会が行われていた建物は瞬時に倒壊し始め、多くの神を瓦礫の山の中に埋める。

「みんな幼女幼女って、バカにするなああー!!!」

幼女の怒りの声は次元を越え、世界を越え、神様の耳にも入ったらしい。

その後どうしたかって？

……思い出させんなよ、一言いうなら、世界が壊れかけたと言っ  
ておこじ。

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 後編（後書き）

感想お待ちしております。



第二章の始まりだけど何か？（前書き）

どうも、金です。

色々立て込んで更新できませんでした。すみません。

題の通りです。

ではおしまい。

## 第二章の始まりだけど何か？

皆さんは春と言われると何を思うだろうか。

春のイメージとしては一年の始まり、花の季節、別れと出会い、花より団子などがあげられるだろう。え、一番最後のは違う？ 気のせいだ。

とはいえ勿論意味もなく話すわけでもない。

春だ。スプリングだ。まさについ先月あげた例の“別れと出会い”の別れをし、今から出会いをしようとしているのだ。

ガタンツゴトンツ、という音を聞き流しながら眩しい日差しをすぐ近くにある窓から浴びていた俺は、自分の着ていたローブが掴まれたのを感じた。

隣に目を向ければ自分と同じローブを着ている赤毛の少女がいた。

大体自分よりも3、4cm背が低い。卵形の頭にクリツとした目、サラツ、と伸ばされた髪は1つに束ねられており、旋毛の近くからピョンツ、と癖毛が跳ねている。

「ん、ネギ、どうした？」

ネギ・スプリングフィールド、俺の実妹である。

ネギは少々不安そうにこちらを見てきた。

「兄さん、修行大丈夫かな？」

ああそのことか、と納得しながらコクリと頷く。

「大丈夫だ、ネギならきつと上手くやれるぞ」  
そうかなあ、と俯きがちにそう呟く。

仕方がないかと思い、つい8ヶ月のことを思い出した。

その日は陽気な天気模様だった。

俺たちの母校、メルディアナ魔法学校ではかなり早い卒業式が行われていた。そこには勿論理由がある。

卒業した学生は世界各地であらゆる職業をして修行に行く。そのため2月の離校日（文字通り学校から離れ、修行の地へ旅立つ日）まで修行の地の母語を学び、その常識や職業の基礎を固める。

中には小学生の年齢で卒業（俺たちのことだが）の生徒もいるのだが、ほとんどというか絶対イギリス国内で修行が行われる。別な法で決まっているということではなく、常識的に考えて小学生を外国に一人で送り出すなんて狂気の沙汰だ　いや、というよりは未成年を送り出す時点かどうかと思うが。

でもそんな狂気の沙汰が行われるとは思っても寄らなかつただろう、原作知識を持っていなければならぬ。

だって小学4年生の少年を外国、しかもイギリスからとても離れた日本に1人でつて。いくら知り合いが経営している学園都市に送るにしても、爺完璧鬼畜じゃねえかよ、おい。

しかしクソ暑いな。こんな真夏日にローブ着て長袖長ズボンで卒業式に出席つて。いつか誰かが熱中症で倒れるぞ。せめて礼拝堂にクーラー、もしくは温度調節魔法で部屋を冷やしていて貰いたいものだ。

「兄さん、もう準備できた？」

ぴよこつ、と扉から顔だけ出しているのはネギだ。

髪はネカネ姉ちゃんみたいに伸ばしている。普段は邪魔だからという理由でポニーテールなんかにしていたりするが、今日は卒業式だ。日頃手入れを怠らない自慢の髪は束ねず解いたままで出席するつもりなのだろう。

「ん？ 一応準備は出来たぞ」

「……兄さん……今、背中に隠したものを出しなさい」

「今日のネギは可愛いな、いつもだけど」

「ありがとう。でもお世辞はいいから出しなさい」

「チツ」

そうやって背中から出したのはハサミ。

実は俺も髪がロングだったりする。前世では角刈りだった俺は、どうもロングが性に合わなかった（勿論女性のロングは全然オツケー、むしろオツケー）。

というわけでネカネ姉ちゃんに頼んだところ、クギはそのままの方が似合っているからそのままでもいいんじゃない？ というかそのままでいなさい、とのお言葉。そんなわけねえよ、と反論したところネギが丁度来て、ネカネ姉ちゃんに賛成。

その後、爺さんや婆さん、オツチャンオバチャンやら色々な人に頼むと、どこからともなく現れたネカネ姉ちゃんやネギに拉致られるという始末。今みたいに自分で髪を切ろうとしても丁度その2人が現れて髪が切れないことが続き早9年とちょっと。今日こそは、と覚悟を決めたらこの始末だよ！

まあ、長い髪を利用した魔術が使えるからいいんだけどね。

「髪は切っちゃダメだって約束したでしょ？」

へーいへい、と生返事をしたところ、もうっ、と頬を膨らまして俺を睨む。……ネギさんや、そうやってても可愛いだけぞ。

「それともうすぐ行くからね、トイレとかちゃんと行っておいてよ」

「へーい」

「ぐおお、まさか礼拝堂がバンバンに冷えているとは思わなかったぞ。おのれ、謀ったな爺。そのせいで俺がトイレに籠もっている途中に名前が呼ばれてしまったではないか」

「いや、一切そんなこと考えていなかったんじゃが……」

騙されん、決して騙されんぞお。あのぬらりひょんと友人関係であり、本国のMM元老院と渡り合える奴に心を開いてしまったら最後。この身が喰い漁られてしま「おお、そういえばドネットにこの前の出張の時の本国のお土産にシュークリームがあるんじゃが、喰うか?」「わーい、食べるー!」……甘味の魔力に負けました、決して爺には負けてません。

「しかし、お前はお菓子のことになると年頃の反応をするのう、それ以外は規格外なのに」

「いや、親父よか規格外じゃねえというより、俺規格内じゃん。12の時に学校抜け出して自分の魔力によって強制的にゲートを開いて魔法世界へ。カンペ読みながら古代呪文を発動させるなんてシユールすぎて笑えねえし。色々有名になった後、MMからは裏切り者にされて両国から攻撃されながらも反撃して都市やら組織やらを潰す。そんでもって最終的に世界を救った英雄ヒーローになるなんて、正直あいつは絵本の中から出てきた王子か騎士か何かだと思っただぞ、初めて聞いたときは」

「……いや、9歳になったばかりの子供が話すような内容じゃない

じやる、今の。しかもお前、ナギには及ばないものの一般の魔法使いの魔力の7倍位以上あるし、MMに提出した卒業論文ではアリアドナーで高評価、と言うよりは全魔法学校の論文コンテストの金賞銀賞最優秀賞通り越して、アリアドナー魔法工程賞を受賞するし。そんな奴が規格内じゃったら、他の人間は一体何？」

そう、俺ってアリアドナーで賞を受賞したりしている。第五元素と魔法属性の影って案外似てるなー、と思ったのが最初。影の魔法の共通部分である基礎を読みとつていくと、第五元素と似てる点が幾つかあった（ここで重要なのは第五元素に属する魔法が無いと言うこと。つまり第五元素を召還してそれと基本部分を照らし合わせたとということ。めっちゃ疲れました）。

実は魔法世界では第五元素という概念がなかったりする。まあ、あそこが出来たのは古代ギリシャで第五元素といったものを発見される前に創られたからなあ、しゃあないっちゃ、しゃあない。

でも、『魔術』社会では結構有名だ。有名なところで言うのと、ある魔術のインナント力が出る『天使の力』<sup>テレスマ</sup>なんかだったりする。そこでは天使の召還はAIM拡散力場やら何やらと大規模なものを利用しないと天使の召還は行えない。でもこちらの世界では、大規模ながらとあるワールドよりは大規模じゃないし、危険もないので問答無用で召還しちゃったり出来るんでこのあたりのことを書いてもok。

ということとそんなことを書き連ねて最終的には、影属性の発展属性ってあるんじゃない？ なんてニュアンスのことを書いて提出。

ちなみにネギは雷属性と光属性の関係性について書いていたりする。このことは既に確約されていたりするんだが、その再実証と

自分の見解を書いたりした。まあ、数学的に言えば確認だな。これでもかなりの高評価を貰ったりする。

### 閑話休題。

自分的にはMMの奴らは「ハツ、何こいつ。魔術なんか使って書いてんの？ バカじゃね？」なんて反応が来てボツ、と思っていたらどこで読んだのか、アリアドネーの教授が「ヤッベー！ この論文ヤッベーよ！ 世界的発見だよ！」なんてのたまわっていたら何故か賞を受賞しました、チャンチャン。というわけだ。

「いや、俺って魔術も少しカジってんじゃない？ だから偶然見つかったんだって。別に凄くはねえよ」

「はあ、だからといって天使を1人で召還するなって」

まあ、俺には一チートツール（ソロモンの指輪）があったしな。というか、なくても召還できたけどな、たぶん。

「ん、そういえばクギ。お前は卒業証書にはなんて書いてあったかの？」

「ああ、日本で先生だと。あそこって確か労働うんちゃら法だとか色々あるんだろ？ そんなんで出来んの？」

「まあ、この半年で教育職員免許状を取れるくらいの知識は教えるし、運良くここ学校じゃしな、誰からでも教えられるし。実習代わりに下級生の授業を教えることも出来るしのう。ま、お前がちゃんと教えればモーマンタイじゃね？」



「ふうーん」

そんなことを話していると、ばたばたと外から走る音がする。

間もなくバタンツ、と大きな音をたてて扉が開くと、ネカネ姉ちゃん、アーニヤ、ネギ、そしてウィル　ウィリアム・パーシヴァルがいた。

「こ、校長！　先生」ってどうということですか！

「そして何で私は生徒なのよ！　……というか魔法生徒ってなんだと思う、ウィル？」

「いや、それを聞きに来たんですよ、アーニヤ」

「ふむ、先生に魔法生徒か……」

「何かの間違いでは？　十歳に先生以前に日本に一人暮らしなんて無理です、というか私が無理！　なんでネギとそんなに離れなくちゃいけないんですか!？」

「もう一回学生をするなんて耐えきれないわよ！　そこらの青二才よりは頭はいいし!」

「あなたも十分青二才ですよ。まあ頭がいいのは事実ですけど」

「とういかなんでクギが何気ない顔で校長室にいるの?」

「ん？　ちょっと文句言いに来た」

「そんなことしてないでちょっとは私たちの校長への文句に付き合いなさい」

「最終的に文句を言うんかい……」

「ま、それが修行内容じゃからのう。というかネカネ、それ私情すぎで笑えない」

なーんてカオスな状況が1時間ほど続き何とかネカネ姉ちゃんを陥落。アーニヤとウィルには魔法生徒について説明をしたところ、アーニヤが、「取りあえず血が騒ぐから行く」とのことでウィルを連れて出ていった。……というか、なんであいつあんなに偉そうなの？ というか修行行かなかつたら『立派な魔法使いマキステル・マキ』になれんよ？

まあ、あんなカオス空間を体験したらそりゃビビるよね。あ、アーニヤとウィルはここから離れた席にいます。どうせあいつらイチヤイチヤするんだし、邪魔しちやいかんしな。

「それと兄さん」

「うん？」

まだ不安なのかな、と思っただけの方を見ると、何故か目からハイライトが消えている。……え？

「変に女の子を惚れさせたりしたらだめだよ？ ……兄さんは私の  
なんだから」

その後クスクスクスクス笑うネギに恐怖しました、まる。

**第二章の始まりだけど何か？（後書き）**

感想お待ちしております、というよりお願いします。

麻帆良に到着！ でも早々に戦闘だけど何か？（前書き）

すみませんでした ！！

2週間近く放ってしまいました……。

勿論訳があつて、「テストだからPC禁止」と父の所為でなんです！

しかしその分長めに作れました。

ではごうござ。

麻帆良に到着！ でも早々に戦闘だけど何か？

「うう、さみい。日本だからどうせイギリスより暑いに決まってる、と思っただらこれだよ」

「だから薄着はやめといた方がいいよってあれほ言っただのに……」

日本の寒さを忘れてしまっていたクギです。しかし、2月の日本ってこんなに寒かったか？ ……そういえば今2004年だっけ？  
まだ温暖化とかあんま言われてなかった時期か。

「あ、そう言えば待ち合わせ場所ってこの辺りか？ 時間より随分前に着いちゃったけど」

ということだ。麻帆良の女子校エリアに到着。待ち合わせ時間よりちょっと前くらいを目指していたわけだが、運一良く（悪く）ポンポンと乗り換えがスムーズにいき、待ち合わせの30分ほど前に着いてしまった訳だ。

「うん、そうだね。……でもちょっとおかしくない？ アーニヤとウィル君の乗っていたバスと一緒に、一緒の集合場所なのに2人と会わない。それにこの時間帯は出勤時間だから人がいない方がおかしいし」

その通り。辺りを見渡しても人っ子一人もおらず、それどころか小鳥のさえずりも聞こえない。まあ、勿論その訳がちゃんとあるんだけどね。

「ででん、ネギ君にクイズです。現在この辺り一帯で大規模魔法結界が張られています、一体なんでしょうか？」

「え？ ……うーん、まず人がいないから人払いつてのは分かるんだけど、他に2つあるね。1つは忘却術に似てるな……これって記憶改竄？ ……もう一つは魔法防壁に似てる。……だけど魔力とか気、物理的なものから守るようなものじゃなくて……もっと限定的……なんだろ、兄さんに前見せてもらった滅霊術を思わせるような……感情から守る防壁？ なんだろ、分かんないよ」

ふっふっふー。ネギにも勿論魔法をちよつとかませています。しかし残念なことにネギの才能は魔法だけで魔法には一片も存在しなかったり。まあ、別にいいんだけどね。ちよつと知識だけでも教えていた方が後々のためになるだろうな、もし才能があれば行幸行幸、なんて考えていただけなんです。

「そこまで出来たんだつたらレポートでAくらいは余裕で貰えるな。実際ネギの知らないものも幾つかあったし。まず人払いは正解。次に記憶改竄のところだけど、記憶じゃなくて魔力や気っていったオカルトへの認識を改竄するもんだな。例を挙げるとすれば、箒で空飛んでもワイヤーかCGと思うし、目の前で魔法使ってもマジックだと思う。ただ、直接危害を加えられると魔法つてやっつと認識するという代物だな」

はつきり言えば原作の認識阻害よりたちが悪い。目の前で魔法や魔法術を使っても、なんの違和感も疑問も感じないものだ、これが。つか、原作よりここの結界凄くねーか？ 認識改竄の結界もそうだが、魔法動物への能力の制限の結界もあるし、結界内の監視用結界やら進入感知結界やらなんかもある。

「さすが麻帆良、ていつたところだね。魔法バレの可能性を低くしている」

んま、俺らオカルト関係者からすれば嬉しいんだけどね。ほら、魔法バレなんて一切起こらないし……いや、何人かはこの結界も効かねえんじゃねえか？ もしかして。ま、解説を続けるか。

「んで最後のだが、惜しかった。感情から守る防壁つてのは中々良いところを突いていたな。確かに感情に関するオカルト的な力なんだ。……瘴気つて知っているか？」

瘴気。

古代ギリシャのヒポクラテスが提唱した病気を引き起こす気体状の物質で、19世紀頃まで考えられていた。

ミアスマ、とも呼ばれており、ギリシャ語では汚染や穢れを意味している。

また前者によると悪い土地、悪い水、悪い空気より発生し、一悪い空気（瘴気）は一悪い水（沼地や湿地）から発生し、人を病に冒す。そして冒された人間もまた、瘴気を発し周りの人間をも感染させる、なんてものだ。

「さてと。瘴気はどこに出てくるんだがな。その中でも最もと言っているほど密度の濃い所はな、地獄なんだよ」

そう、地獄だ。まあ、ここで説明をする瘴気はこの元来の考えとはまた別物なのだが。





「勿論魔獣か妖怪のどつちかが出ているからなんだよなあ」

目の前に現れたのは体長200cmほどの、真っ黒い液体状のゴムを無理矢理カマキリのような姿に形どったモノが2つ。刃と刃をぶつけても全く金属的な音は鳴らず、グチャグチャと汚い音と共に黒い物体Xを辺りに散らす。こちらに来たであろう道筋にも黒い物体がある。

その黒い物体からは煙が立ち上り、周りにある草々を枯らしている。

「うわ、かなり有毒性の高い瘴気なことだ。精神汚染よりはまだましだけどな」

右肩の辺りの宙からは黄金の柄が出ている。『メント・モリ死の舞踏』だ。

ネギはというとシュツ、と布の中から1本の杖を取り出す。

「兄さんは右の方をお願い。私が左の方を殺る」

「おうおう、頼もしいことだ」

柄を引き抜けば、刀身が陽の日を浴びてきらびやかに光り、黄金の剣が現れる。

「「さあてと、」」

俺は切っ先を、ネギは杖先をそれぞれカマキリに向ける。

「それじゃあ、狩りを始めようか」

「いくか」

と、かつこよくキめたものの少々頭を悩ませてしまう。敵さんはドロドロしているからある程度タイプは予測できる。1つ目はスライムのような特定の形を持たない不定型、2つ目は霊がナニかに取り憑く憑依型、本体が他にあり遠くから操作する、または一つの大きなものから分裂して出る分身型。

どれもこれも対処が難しくてたまらないものばかりだ。

不定型は切っても斬っても死なない。よくそういうものには核がある、だとかお決まりの攻略方法があるのだがそんなものは勿論無く、方法としては1カ所に集めて腐蝕に強い金属類の入れ物に入れて蓋をする、一気に全部蒸発させる、穢れを取り払って普通の泥水にする、なんて方法があるが、どれも難しい。

1つ目の方法はまず液体状のものを集めるのも大変なのだが、入れ物に入れる際、もし不定型に触れてしまったらそのまま溶かされるか、口や鼻を覆って窒息死させられる。2つ目の方法は一気に蒸発させるには魔法、魔術にはそれなりの威力を求められるし蒸発には火か雷、もしくは温度操作に関するものが必要になる。しかも蒸発させた後に空気状にまき散らされる毒素（個体によっては一呼吸だけで致死量に至るものもある）を吸ってしまい、倒したのに死ぬ、なんてことも多い。

憑依型は実体を倒すには問題ない。だが、倒した後が問題なのだ。その名の通り憑依するこのタイプは制約が少なく、色々なものに取り憑くことが出来てしまう。そのため、実体を倒したらまたは自分が憑依される、もしくは仲間が、あるいは関係のない一般人が、なんてこともありえるある種恐ろしいタイプの一つである。やはりこれの倒し方もあるが、かなり難しい。1つが神鳴流の奥義の一つ、残魔剣・弐の太刀なんかの霊のみに効果を発揮する技を持って倒す、もしくは憑霊を抜って浄化する、なんて方法がある。

霊のみに効果を発揮する技の多くが奥義であり、才能が無い者は決して得られず、才能があっても習得が途轍もなく難しい。さらに憑霊を浄化させる方法なのだが、まず穢れを取り払うにはそれなりの準備や詠唱が必要だし（故に即席での行使は非常に高レベルでそれなりの実力を必要とされる。ただし、穢れから防ぐのは簡単で、見習い程度の実力でもそれなりの穢れから守れる結界や加護が出来る。これは殺すと守るの大きな違いといえる。）専門の道具はそれなりにコストがかかる。聖水だって1回で出来る量はそこまで作れないし、神父の1年以上の祈りが必要で、効果が効く期間が非常に短いのだ。神道での玉串だって植物から切り取ったものだから、枯れるまでの時間が短い。

分身型はこの中にはある程度マシなものだろう。説明でもあったように大きく分けて本体が別で遠隔操作によって分身を操るものや、一物体から分裂していったその数を多くしていくものの2つがある。しかし、最終的には全滅させればよいだけなのでものすごく簡単。ただ倒していけばいいんだから　まあ、数がもの凄いいことになっただけの話は別なんだけど。しかもタイプによっては憑依型と複合している個もある。その場合は……メンドいというか、バイオハザードが起こるぞ。

とまあここまで長ったらしく解説していたものの、どのタイプなのかは一切分からないし、さらにはその他のタイプの可能性がある。

「取り合えず瘴気を纏っているのは確か。結界はあるが、さっさと被っちまった方がいいな」

剣を持っている右手の逆には玉串を握る左手。

「みんぎはのろ襦 被 をしちまうか」

左手の玉串を振るうと共にチリンチリン、と総勢15の神楽鈴の音が鳴り響く。

「はらいたまい、清めたまう」

K I I A  
A A A ! ! ! ! ! !

「楔ぎ、ね。たいしたもんだよ、身削ぎや身殺ぎなんて物騒な言葉と同じ読み方をするし。ある意味これからこの言葉の読み方きてんじゃね？」

目の前のカマキリは予想以上に瘴気で体を形成するのに頼っていらしく、すでにカマキリと教えなくては分からない形状になっている、というか本当に身削いであり、もう体の半分以上が液体となって崩れている。

すでに勝敗は目に見えている。

「ほーれ、もう一丁だ。はらいたまい、清めたまう」

K I I A A A A A ……

ズチャツ、と崩れ落ちるカマキリの形をしていたモノ。

完全にドロドロの真っ黒な泥水と化したモノからは有毒性の高い真っ白な煙を発している、が周りの物には被害がない。勿論、俺が対処しているからだ。

毒を持って、毒を制す。

空気に、俺も毒を散布したのだ。その毒の名はカンタレア。

中世イタリアのボルジア家が政敵の暗殺に使用していたとされる白い粉末状であり、量によって死期を自在に操作できる毒薬である。

勿論俺は作り方など知らないの（ラジエルの書を使えば分かるのだが、現在は使用縛り中。そっちの方がおもしろいし）現在のボルジア家、アヴォガドロ家に行つて交渉した結果、日本円に換算すると100万円ほどで交渉に成功。

実はアヴォガドロ家、というかボルジア家は魔術との繋がりがあり、魔術でも特に古今東西の毒について色々研究しており、魔術界でも結構有名だったりする。

見た目普通のおっさんであるアヴォガドロ家家長のオスカル・アヴォガドロさんは結構好印象だったので定期的に毒を買いこむことにより格安で購入。

現在では技術も昔の物よりもバリエーションがある。

粉末状の物は勿論の事、液体に気体、ブロック状のお菓子の形をしたものもあり、死期を操るものから死体から検出されないもの、現在の状況のように毒を殺す毒なんてものもある。そのほかにもあるが、中々エグい代物が多い。実はオスカルさんは以外と腹黒だったりする。

やる事がなかったのでネギの観察でもしようかと思い、視線を横に向けるとすでに終わっていた。

杖の先からはバチバチ、と放電している。

ネギの得意とする魔法は原作通りの雷、光、風の他に雷の能力を上げるために習得し向上した水、俺の隣に何時もいたので自然と身に付き、さらには己の光を強める為に訓練した闇の2属性もあり、計5つとなっている。

多様な属性を得意とする魔法使いはどれも手つかずで、全て中途半端、もしくははいずれかを捨てて1つを集中的に特化させる場合が多い。原作のネギも最終的には他も満遍なく修行していたが雷に特化していた。つまり、3つからはもう多い、と言っている位なのだ。

しかし、ここまで使いこなせるようになったか、と心の中で驚嘆している。

空気中の毒を風で集め、光で瘴気を浄化、雷で毒素を分解し無害なものとしている。それでも残る毒は闇によって侵食され、ほとんど、いやすでに毒は残っていない。

しかもそれらを全て同時に行い、相反する光と闇を上手く協和させているところはアリアドネー教員一同も目を見張るであろう。ここまで出来るのも相当の熟練者した魔術師位でなくてはやれないのだから。

親父ナギとは違う種類の天才。

織滅魔法をバカス力撃てる火力馬鹿ではなく、その膨大な魔力をいかに効率よく運用し状況に見合ったことをできるタイプ、つまりどんな種類でも一流になれる万能タイプだ（とはいうものの、やはり殲滅魔法をバカス力撃つのは厳しい）。

原作のネギはここまでの域には達することは出来ず、『マギア闇の魔法エレベア』というドーピングに頼るしかなかった。

まあ、可愛い妹のためだ。一肌でも二肌でも脱ぐくらいたやすいこれくらいなら、アーウェルンクスシリーズに纏めて襲われても勝つことは出来ないが、撃退、もしくは撤退することは出来るレベルだ。

つまるところ、ネギ魔改造計画のワンステップ目の終了、といったところか。

「君たち、大丈夫か!? この辺りにカマキリの形をした妖怪を見なかったか!？」

声の方向を見ると、スーツ姿の黒人を見る。人払いの中に入れると言っことは関係者なのだろう。

「え? ああ、あれですか。もう浄化を完了しましたよ」



「は？」

黒人は素っ頓狂な声を出す。しかし流暢な日本語だな、よく使いこなせる。

「すまない、もう一度言ってくれないか？」

「だから、すでに浄化を完了しました。楔抜もしたんで瘴気汚染の心配もないし、あとは壊れた設備の補修位じゃないですか？ ところで、理事長室はどこですか？ 早めに挨拶をすませたいんですが」

「はあああつー！？」

全く、うるさい人だ。

**麻帆良に到着！ でも早々に戦闘だけど何か？（後書き）**

感想と評価は力の源です。

もしよければ一言でもいいんで感想、評価をお願いします。

キれるんだけど何か？（前書き）

どうも金です。

今回は評価ポイントが上がっているのを見てテンションがバリサ  
ン上がっていつもより早く投稿できたはずだったんですが……まさ  
かデータが消えるとは。

ということでちょっと当初より文章が少なかったりします。まあ  
いつもよりは多いんですが。

矛盾点などがあるかもしれませんがそこを教えていただけたら  
嬉しいです。

それと題名を変えました。

ではさよう。

キレルんだけど何か？

「お会いできて光栄です、クギ・スプリングフィールドさん。論文を読まさせていただきましたが、とても素晴らしかったです。魔術を使用して論証をしている部分が私は好きでした。今度私の影魔法を見ていただけませんか？ まだ未熟なもので、『黒衣の夜想曲（ノクトウルナ・ニグレイディニス）』は発動できるものに至らない点が多くなって」

マズいマズいマズい、こちらに向けられている冷たい5つの視線は確実に殺気を込められている。いや、正確には4つか。1つは目の前の彼女、残りの3つは俺へだ。今すぐにも、という意気込みが大変分かっていて先生、とつても一感激（寿命がマツハ）です。

なんでこんな事になってしまったのだろうか、俺は少し前の記憶を思い返してみる。

「ほっほっほ、成る程成る程、君がクギ君にネギ君かの？ 噂も話もよく聞いておる」

学園長室には60名を超える魔法関係者、というより『裏』の関係者が集まっていた。20余名はスーツ姿だったり学生服と言った制服なのだが、中にはローブをすっぽり被り肌が一切見れない者にシスター服の女性、和服を着る優男にツナギを着るいかにも堅気と

言った容貌の男等々、異彩な服装の人も大勢いる。

「あの、すみません。アーニヤとウイル君はどうしたんですか？」

そう、ともに日本にやってきたあのバカップルがこの場にはいなかった。ウイルは兎も角、アーニヤは生真面目な性格なので寄り道（以前に早朝だからどこも開いていないのだが）などしない。となると何故遅れたのか、疑問が思い浮かぶだけで。

「ほっほっほ、安心なさい。どうやら彼らは間違えて1つ前の駅で降りたらしくての、すでにこちらの先生達と合流してこちらに向かっていているそうじゃ」

「ありがとうございます」

ほっ、とネギが安堵して1つ大きく息を吐き出す。学園長は自分の髭をさすりながらほっほっほ、と笑う。

「さてと、少々問題があったが無事解決できた事じゃしの、これで解散、と言いたいところじゃが折角こう集まっているから自己紹介でもするか」

「では俺から。……ごほん、本日から麻帆良学園女子中学部、数学担当になりましたクギ・スプリングフィールドと申します。まだ年端もいかず、至らない点も多いと思うのでサポートをよろしく願います」

「じゃあ僕も。初めまして、この度この学校で英語の教師をやることになりました、ネギ・スプリングフィールドと申します。よろしく願います」

パチパチパチと盛大な拍手を浴びながら、『裏』の関係者を一瞥する。

ふむ、やっぱりほぼ半数が転生者か。

転生者の魂ってというのはその世界の魂を逸脱している場合が多い。チートを貰う人が多いからな、一部品（能力）を付け加えたり一構造（肉体）を変えなくちゃいけないし。もしチート能力を貰わず普遍的だったりした場合でもやっぱり基盤が所々違う。

しかし予想していたとはいえ、これほど多いとは。いや、転生者もだけれども、その転生者の中でも取り分けアンチな方が多い、あくまで予想だけだ。

視線に悪意を込められていたり、拍手をせず睨みつけてきたり。中には武器に手をかけようとしている奴すらいる。

……おいおい、そんなにネギを殺したいのか、こいつら？

まあ、やられたら殺り返すだけだけだね。こうドバーツ、ていう感じに。

いや、死ぬよりもっと酷いことを、なんて考えていると近衛 近右衛門が口を開いた。

「では後は帰るもよし、彼らに挨拶をするもよしとする。では解散」  
ガヤガヤと辺りはうるさくなり、『裏』の関係者が近づいてくる。

「初めまして、高音・D・グットマンと申します」

こうして始まりへと戻る。

うん、特に分かん。いやだってそうじゃん。特に悪いこともしてないし、まあ視線3つの訳は何となく分かります。え？ ほとんどわかってんじゃないって？ その通りだったり。

「は、ははは。そんなに褒められたもんじゃないんですけどね。と  
うかが論証しているところが好きって、魔術に興味でもあるんです  
か？」

「ええ、少々あります。ですが修行の間は無理なんですけれど」

彼女の制服を見て理解する。

聖ウルスラ女子高等学校。

キリスト教、その中でも カトリック 旧派 を採用している、というよりは採用を強要カトリックされている。

これにはMMとキリスト教の関係から話さなくてはいけないだろう。

ヨーロッパは多くの神話に恵まれ、また数多く多様な魔術に溢れていた。北欧神話にケルト神話、ギリシャ神話などがその最たる例

だろう。そしてその中には勿論キリスト教もある。

だが、おかしくないようでおかしい。

北欧神話、ケルト神話の魔術は神の力や神話上存在する魔術を理  
解、もしくは使用する。

それは数多くの神に宿っている数多くの力を個別に、最大限に使  
用するからこそ発揮することが出来る。

だが、キリスト教はどうだろうか。

一神制であり完璧無欠であり強力あるが故に、人の手に余るもの  
だ。1つの現象を起こすのに多くの魔力を使用するであることが予  
測できる、といよりはまず魔術を使用する前提で会話をしているこ  
とからおかしいのだが。

キリスト教では魔術の行使は禁止されている（あくまで行使禁止  
であり、知識として持っているのは全く問題ない）。これは聖書に  
書かれていることであり、その書かれているのは宗祖であり、その  
宗教の絶対的存在であるイエス・キリストが言ったことなのだ。

故にキリスト教は魔術方面では途轍もなく弱かった。ユダヤ教と  
独立するなど夢のまた夢であった。なぜなら独立したら最後、周り  
にいる数多くの一 敵（異教徒）に滅ぼされるのは目に見えて分  
かることなのだ。そんな弱い宗教に竜殺しの伝説が出来るなどあり  
得ない。

ではなぜ、キリスト教は独立でき、こつも広められたのであろう  
か。



答えは魔法である。

あくまで魔術は禁止であるのだが、魔法禁止されていないのだ。

メガロメセンブリーナの元となった大国、メルギナメセントブリタニアから来た使者とキリスト教の初代教皇との出会いが全ての始まりだ。

ここから少し脱線。持論だがイエス・キリストの治療や悪魔退治といった伝説は誇張されている所もあるが、魔法を使用したのではないのだろうかと考えている。つまり、聖母マリアはメルギナメセントブリタニアから来た一族の一人ではないのか、なんて考えている。

閑話休題。

そのことにより、力を魔術を使わず、急激につけたキリスト教はユダヤ教と独立。そして魔法の力に目を付けたローマ帝王はキリスト教の教えをローマ帝国内に広げ、その真の黒幕であるメガロメセントブリタニアに頭を垂れることで魔法の使用を許可。そうしてヨーロッパはメガロメセントブリタニアの支配下となり、キリスト教は世界で強大な権力を握ることが出来るようになったのだ。

と、ここでまた脱線だが、キリスト教がメガロから与えられた権利をいくつか紹介。まず、旧世界での魔法犯罪者の取り締まり。これはかなり大きな権力で、このことにより数多くのメガロへの反乱を考えていた国王がキリスト教から破門と言う形で逮捕、及び処刑になった。

2つ目に魔法生物の駆除。ただ面倒事を押しつけただけ。

そして3つ目に魔法世界でキリスト教の教えを説くことの許可。

4つ目は魔術を使用するもの、中世では通称魔女と呼ばれたものの処刑。反乱する人を少なくしたかったただけだろう。

なんてことぐらいだろうか。

閑話休題。

その後、13課やら宗教革命やらなんやかんやといろいろあるが世界のほとんどをキリスト教で染めることに成功。

そして麻帆良の占領へと繋がる。

そうすれば必然的にキリスト教の教えを広めるために教会及びクリスチャン学校の設置を強要したのである。このことから分かる通り、MMⅡキリスト教（正確には旧派）という図式が分かる。

そして設置された聖ウルスラ女子高等学校は入学し卒業するまではキリスト教徒であることが求められる（卒業するまでなので卒業後は仏教徒でもブードゥー教徒でもなれる）。

なので彼女は卒業するまでは習ってもいいが、使用することはできないのである。

「ま、卒業したらいくらでも教えますから。楽しみにでもしいてください」

「ええ、そうさせていただきます」

彼女がそう微笑むとさらに視線の殺気が……。

「兄さん」

ソクウツ、と背筋が冷えるのを感じた。

錆びたブリキのロボット人形のようにギギギギギ、とまるで音が  
出ているかのように後ろを振り向く。

途轍もなく笑顔なネギがいた。

「兄さん、この人は？」

その一言一言にはまるで言霊が込められているかのように俺に巨  
大なプレッシャーをかける。ここで1つでも受け答えのミスをした  
ら殺される……！

「あ、ああ。この人は高音・D・グットマンさんだ。聖ウルスラ女  
子高等学校の生徒さんだ」

「初めまして、ネギさん。高音・D・グットマンです。あなたのお  
兄さんのファンなんです」

ギヤアアアアア……！！！？！？？？？？ なんてことを！？ ヤバい、殺  
される！ 俺とグットマンさん、殺される！ 正確には千の雷とか、  
えいえんのひょうがとか、あの辺りの千滅ならぬ織滅魔法で殺され  
る！

「あ、そうですね。フアンの方なんですネ」

……て、あれ？ ネギから殺気が消えた……？ どういうことだ？  
いつもなら「この泥棒猫め！ 兄さんから離れる！」とかいって緘滅魔法ぶつ放すのに。

「ええ、そうなんです。あ、よろしかったらネギさんも魔法を教えてくださいませんか？ どうも影魔法以外はあまり上手くできないものですから」

「ええ、いいですよ。でも兄さんの方が上手だからあんまり教えられないかも」

え？ え？ どういうこと？ なんかいきなり仲良くなっているんですけど。あれえ？ なんかネギがいつもと違う……？

なんて頭を抱えて疑問を浮かばせている俺であった。

挨拶も終わりが校長室から出ていくのを途中から来たアーニヤとウィルと一緒に見ていた。

「ほっほっほ、では今日から生活するところを君たちに教えなければの」

お、遂に来たか、原作一番最初と言っていいフラグ、住居フラグ。

「うむ、今少々空き部屋が少なくての。どうしたらいいものかと考えたんじゃが、生徒と一緒にのへ「学園長！ 私は反対です！」「俺も反対に一票」む」

僕も、我も、なんて反対の声が所々であがる。

仕事のある先生方だけであり、そうでない先生や魔法生徒は未だ残っていたのである。

……所詮エゴの集まりにすぎない転生者どもめ、ギャーギャーとうるさい。

人はそれを同族嫌悪、ともいう。だがまあ、うるさいのに変わりはない。とはいうものの『こんなの絶対オカシイYO！』なことでもあるので別に反対の意見を出してもおかしくはない。

「むう、じゃが空いている部屋はほとんどないし、正直12歳にも満たない少年少女を1人2人で住ませるのも気が引けるし」

じゃあ日本へ修行に行かせるな！ というツツコミは話を根本から崩させるからだめですか？

「じゃあ面識のあるタカミチの部屋は駄目ですか？」

今はここにいないタカミチだが、結構いい仲だと思う。

「うーむ、別にいいんじゃないが」

ん？ なんでここで悩む？

「タバコ臭いぞ、あの部屋」

……なるほど、そういう落とし穴は見抜けなかった。たしかアイツはかなりのヘビースモーカーだったと覚えている。

「しかも一人部屋じゃから狭いし、彼はかなりのヘビースモーカーじゃからの、副流煙が怖い。前に部屋に行ったときはかなり散らかっていたのう。カップラーメンの容器が洗台から溢れていたのを見たときはつい怒鳴ってしまった」

アイツ、家事スキルの前に生活スキルがゼロ？ ダメダメじゃん。

「というわけで当初彼に頼もうと思っていたのじゃがその抜き打ちテストの結果、除外させて貰ったわい」

なんか原作読んでいた時は「このクソ爺め！」なんて思っていたけど、タカミチよりよっぽどマシな常識人の苦勞人なのでは……？

「そうなるかと彼らと面識があるものはいなくなるのう」「あの、俺は一応家事全般出来るんで、一人暮らしは出来ますよ」……クギ君よ。家事が出来る出来ない以前の問題なのじゃよ」

そう諭すように学園長が口を開いた。

「まず成人どころかまだ小学生の君たちを大人の保護下のもとで暮らさせないところから、大人として失格してしまうのじゃよ。もしもの時、魔法など使っても解決できないようなことが起これば大人がいた方がいいことの方が多い。じゃからどうにか一緒に暮らさせなくてはいけないのじゃよ。ここで暮らす生徒たちの寮にも寮母という保護者があるの」

ヤベエ、爺が途轍もなくいい人に見えるのは俺だけだろうか。

「学園長！ それ以前になぜ小学生ほどのスプリングフィールド達を教師として修行に來させたのですか！？ そこからおかしいんです！」

そこにいたのはスーパーテンプレな転生者だ。……魂なんか見なくてもわかります。銀髪にオッドアイの美形男子なぞ転生者以外誰がいる。

「いままで我慢してきましたが、もう限界です！ 全部言わせて貰いますよ！ まずこの認識障害の結果。人の心や記憶をイジるなど人としてどうかしている！ それに女子中学部の2-Aの件！ 魔法の素質がある者ばかり集めて、その双子に担当させようとしているのはもう発表されていることだから分かっていきます！ どう考えても未来の英雄を育てるために集めた、いわばもう魔法に関わることを前提にしたようなクラスには我々も疑問に感じています！ 学園長、どうということなのです！？」

そーだそーだ、とがやがやとうるさくなる学園長室。そのことに教師になるべくして來たネギはプルプルと下を向いて震えている。

……カチーン、オラハオコッタゾー。

「答えてください、学園ちょっギャーギャーギャーうるせえな、おい！ さつきから黙って聞いてりゃピーチクパーチク喚きやがってよお、おい！ テメエらのアタマンナカ沸いてんじゃねえのか、ああ？」「っ！？」

というわけでメンチ切りました。別にいいでしょ？ うるさいし、ネギ泣かせたし、明らかにアンチしようとしていんの分かるし。

「……確か君はクギ・スプリングフィールド。それで、君のその暴言の意味はちゃんと分かっているのかい？」

「Of course。分かってねえで言っているとも思ったか？ このバカな厨2の単細胞？」

「なっ！」

くすくすくす、と小さな嘲笑が起こる。そのことに顔を真っ赤にする厨2の転生者。

「あの、クギ君……？」

「恐る恐るといった感じで聞いてくる学園長。」

「ああ、大丈夫ですよ、学園長。この単細胞共くらい簡単に論破してやりますんで」

後ろを見ればアーニヤが腰に手を当てこう言い放った。

「ネギを泣かせたあのFool共を論破してその分泣かせてやりなさい、『教授殿！』」

ネギも目を腫れさせながら小さく呟く、だが、十分聞き取れる音量で。

「やっっちゃえ」



「それこそOf course!」

全く、ここに来て一番最初に授業する相手が教師とは聞いてない。

「では、授業を始めようか!」

キレルんだけど何か？（後書き）

感想とか評価を貰うとテンションゲージが三つくらい埋まります。  
感想、評価をお願いします。

論破するんだけど何か？（前書き）

どうも、金です。

夏休み中、調子乗って本買いまくっていたら財布にはアルミの塊が4つ。

ホライゾンを買うのか……！？

なんてことより、

感想やら評価をしてくださってありがとうございます！ めっちやテンションアゲアゲ！（死語かこれ？

とごじごじとぞ、ではとごじごぞ。

論破するんだけど何か？

「んじゃあ、一番最初の質問から答えようか。なんでここで教師をすることになったか、か。単純明快、幼稚園児でも分かる。精霊に決められたから、以上だ」

『え？』

思った以上に短く言われたからだろう。驚きの声を上げているのが分かる。

「補足としては各魔法学校と契約を交わしている運命と未来を司る精霊に生徒達の生活態度や成績などからその生徒にあった国やら地域と職業を決めて、卒業式の時に渡される卒業証書に修行の場所と職業を記す、という役割だな」

運命と未来を司るなんて大層なものだが、実はそれほどものでもない。未来予知出来る精霊もいるが、それを使役するには多くの魔力が必要だし、大半が気まぐれ屋なので使役どころか契約も無理なのでそれに準ずる、分析によって未来を歩むのに最も良いとされる道を教えるようなタイプの精霊だったりする。

「学園長に質問だ。単刀直入にいうが、その精霊を操ってこの教師にさせたのか？ 最近いろいろな噂もあり、あまりにも話が出来すぎている。メルディアナ魔法学校と学園長は友人関係と聞く。故にこの魔法の素質を持つ生徒の多い学校の教師という選択肢が出る。それにここは英雄を育てるにはいい環境だ。そうだろう？」

大柄なスキンヘッドのサングラス男がそういつてきた。……こいつは転生者じゃないな、しかもアンチというよりは純粹に疑問に感じている、といった辺りか。

「おいおい、今は俺がお前らに教えているんだ、俺に質問しろよ。んでその質問だが、答えはN oだ」

「では何故だ？」

「理由は簡単。つーかバチカン発行の魔法条例文をちゃんと見ろよ。書いてあるぞ、『運命と未来を司る精霊を操り、卒業証書に書かれる修行の場、及び職業の変更を禁ずる』ってそんな感じに。しかも精霊を操るとその卒業証書に書かれる時の魔法術式が人工的な物になる。そうなるとその卒業証書と魔法学校を監視するバチカンの人工精霊、じゃなくて人工天使が管理係に通達して拷問道具と逮捕証持って13課が来るぞ。しかも人工天使を操ろうとすると管理係に通達されるし、ばれないようには出来ないからな、あれ、管理係の担当者は全員厳格な人が選ばれるし、今の教皇、めっちゃ真面目な人で確かMMからの理不尽な要請を何度も断るくらいの人だから圧力をかけて不正を行うとは到底思えない。なんならここの『裏』を知るシスターにでも聞いたらどうだ？」

13課とは旧派の、いわば魔法犯罪者の逮捕及び魔法生物の駆除を担当する課であり、エリート中のエリートが集められた先鋭集団。旧世界出身の魔法使いが最も恐れている存在といってもいい。

ただ、そういう先鋭のみ集めるため万年人員が少なく、捜査のほとんどをMM警察に任せているのはご愛嬌、といったところか。

「だから否定できる」

「ふむ、理解した。ありがとう」

そういうと壁へと下がる。

「んでどうせ労働基準法がー、とか職員免許を持つてんのかー、とかその辺りのことは勿論法律を守っているぞ。13歳未満でも政府に届け出を出せば別に仕事をやってても問題ないし、職員免許はMMとアリアドネーの連名で発行しているやつ持つてるし」

まあ、政府に通すのも結構暗いところでのやり取りなんだけどな。話すところさくなりそうだし黙っててもいいか。

「あと住居の問題だが……、どうしたらいいんですか、学園長？ 大半の方が反対なんですけど」「当たり前じゃないか！ 教師と生徒と一緒に暮らすなんて言語道断！ それに男子と女子が一緒に部屋になるなんて駄目に決まっている！」「……らしいですよ？」

「うむ、その事に関してじゃがな、しずな君入ってきなさい」

「失礼します」

そこに入ってきたのは20代の眼鏡をかけた巨乳教師系美人、だ。

「初めまして、クギ・スプリングフィールド君、ネギ・スプリングフィールドちゃん。しずなよ、よろしくね」

「彼女と一緒に暮らしてくれ。彼女は魔法のことも知っているから大丈夫じゃよ。それに、のう」

「へえ、驚いた。彼女、ホームクルス 人造人間 ですか。しかも彼女の動力源は『神木・蟠桃』の魔力、溜まっている瘴気の解釈を変えて『負の感情があるのは正の感情があるから故に』って具合にして、受け答えがひどく機械的な人造人間に感情を持たせるなんて……これ、アリアドネーでも実験されているらしいですけど一回も成功したことがないんだとか」

「うむ、流石」プロフェッサー 教授 「と呼ばれるだけのことはあるのう。まあ、しずな君が出来たのは偶然じゃよ。ほっほっほ」

人間に最も近い人造人間、て辺りか。しかし凄いな。俺、さすがにこんな解釈の仕方は思いつかないぞ。

……まさか爺、天然チート？ ありうる。

「それでの、ちょうど一ヶ月後に結構大きめなマンションができるからそこにしずな君と一緒に暮らす、というのはどうじゃ？ それまでは結構狭いがのう。数週間の辛抱じゃし、いいかの？」

「ありがとうございます、それでいいよな……じゃあお願いします。んじゃ次の質問だな。認識障害結界についてだな。まず認識障害結界と言っている辺りから間違っている。あれはもっと凶悪なものだぞ？」

目を見開いて驚いている奴らがめっちゃいるんだけど。こんなに馬鹿だったのか？ 原作丸飲みにし過ぎなんだよなあ。自分が住む所なんだから、ちょっとは結界ぐらい解析しろよ。安心して眠れないだろ、普通に考えて。

「あれは認識改竄結界。魔法無関係者目の前で魔法を使ってもマジ

ツクやらなんやらに無理矢理阻害じゃなくて、上書き、つまり改竄させる結界だ。何故か、魔法バレへの予防だな。ただでさえ『神木・蟠桃』っていうデカくて日本では絶対生えないような木があるし、瘴気による魔獣や妖怪の出現で魔法バレの機会が多いし、さらには西からの攻撃、MMへのテロ目的とした攻撃、日本に存在する多くの魔術結社からの攻撃、と。こんなに多かつたら認識阻害の結界の1つや2つ、張らない方がおかしい」

「ではなぜ認識改竄などというさらに強力な物を張ったんだ!？」

さっきの厨2が突然怒鳴った。うぜー。

「そりやお前、ドンパチ大魔法やら超目立つ攻撃ばっかするからだろうが。普通に考えて」

顔色が変わるのがよく分かる。一気に赤から青に変わっているぞ、こいつ。他のやつもちらほら見当たる。

「ここに来る前に資料を見せて貰ったけど、すげえな。才能のある奴らが大量にいるのが分かった。でもな、馬鹿なんだよ、お前ら。そりゃ千の雷だとか、そんなもんばっか撃ってたらいくら認識阻害の結界があつたとしてもほとんどの確率でバレる。だから認識改竄なんてさらに強力なもんに切り変えなくちゃいけなくなつたんだよ」

全く、自分の責任だとは全く思っていない辺りがエゴの集まりを分らせるところだな。同族嫌悪だな、イヤだイヤだ。

「んで最後の質問だが、なんで女子中学部、しかも2ーAだけのことを言っているんだ？」



こいつらがなぜか2ーAだけを指摘したとき、ここまで馬鹿なのか、と思わず頭痛がした。

「各学校、各学年にそういうクラスはあるぞ？ いわば魔法の才能がある奴を、というよりは『裏』の力を持つている人を」といったほうがいいのか 集めたクラスが。何故このような処置を施したのか、さっきも言ったとおり魔法バレの予防だな。いくつか例があるんだが、代表的なものは二つ。

一つはもしその力が暴走したときに被害を受けるのを魔法の才能がある奴だけにする。当たり前だろう？ 才能がないのにこちらの世界に踏み込んだら、それこそ生死の比率は確実死の方に傾くまあ、魔術は魔力とか才能とか無くても使えたりするけどな。さらには魔法生徒も入っていたりするから、そいつからその力の制御方法を教えられたりする。

もう一つは前のと似てるんだが、もしその力が狙われても才能がある奴だけにして魔法バレへの予防。魔法生徒に守ってもらえるし、担任が魔法先生だ。ここの魔法先生はエリートを選出されるからなよっぽどのがない限り守りきれんだろうし」

「そんな……！ それじゃあ、まるで平穩に生きたい人すら巻き込むようなものじゃないか!？」

熱いなあ、というか熱いを越えて暑いんだが。むさ苦しい。どうせ、えーと誰だっけ？ 原作で認識阻害結界の効かない奴。あいつのことを考えてホザいてんだらうと予測できる。

「馬鹿だなあ、おい。人間は集団で生きてんだ。集団の秩序を守るために、集団を救うために個を殺される人間だって一人や二人はい

ない方がおかしいんだぞ？　こんなこと、小学生くらいのガキに言わせるな、大の大人が」

蔑みの念を込め、視線をその厨2に向ける。いや、どちらかと言えば哀れみの念に近いものだろう。

なんせ、こんなこと転生前の俺はこんなことを一切思っただけでなかったのだから。ネギや学園長の爺を悪と一方的に決めつけていたのだから。しかし、こちらの世界に来ると何もかもが違った。

原作のネギがあのようになってしまったのはそれなりの理由があり、それはある意味避けられなかったことだろう。

爺、否学園長が狸になったのはこの国、日本を守るためになった、ならなくてはいけなくなった。

こいつは俺に似ている。ただ、俺は現実へ出て、こいつは未だ幻想のなかにいるだけの違いか。

それはヒドクミニクかった。

厨2は齒軋りをし、恨みと憎しみの視線をこちらへ向けてくる。

……全く、その視線にはもう馴れているんだよ。

「くっ」

「んで、他に質問、意見、反論なんかある人　いないな。では授業終了」

そうして、負の視線を一身に受けながらも授業が終了した。

ネギたちを先にしずな先生の家へ行かせ、俺は少し、学園長と『お話』をすることにした。

「それで、クギ君。2人だけで話したいこととはなにかの？」

「いやあ、ちょっと、な。アンタも知られたら困るような内容だからさ、こつ内緒で話をしよう、ってわけ。」

先に言っておくが、さっきまでの俺は教師としてのクギ・スプリングフィールドであり、今の俺は一個人としてのクギ・スプリングフィールドだから」

「ほっほっほ、成る程のう。うまくご両親の血がが混ざっている、といったところかの、クギ君」

「まあそうなんじゃないか？ んで、その話なんだけどさ」

パンツ、と掌同士で叩く。その音は部屋中に響きわたる。それと同時に魔法や魔術が壊れる独自の音と、機械が壊れる音もある。

「あんだ、ぬらりひょんと人間の半妖なんだろ？」

論破するんだけど何か？（後書き）

色々やっちゃったZE！

……ええと矛盾とかここおかしくね？ ていつところがあったら報告お願いします。

評価とか感想が来るとやる気スイッチ連打状態になります。どうかよろしくお願いします。

題名思い浮かばないんだけど何か？（前書き）

どうも、金です。

題名の通り、なんて題名付ければよいのやら……。

。評価メッセいただいてテンションも上がっている今日この頃（笑）

ということ、偽装と妄想の詰まった一話（爆弾）を今日も  
投下。

では、どうぞ。

題名思い浮かばないんだけど何か？

一刹那の間、爺の目、というよりは雰囲気が揺らいだ。まあ今の今までその大スキヤンダルを隠し通せていたのだ、無理もないし、また必然だともいえるだろう。

ぬらりひよん。

特徴的な禿げた頭をしており、ぬらりくらりとしたつかみ所のない妖怪である。岡山県では海坊主の一種であるとして伝承されていたりする。

最近ではやれ妖怪の総大将だ、だのやれ人んち勝手に入って茶を飲むだのといったものがあるが、これは実は後付け設定であったりする。

とまあ、そんな感じにぬらりくらりする能力を持つ爺ですら驚きを顔に出すほど、というよりは中途半端故に顔に出してしまった、という辺りか。

そんでもってすぐに持ち返した爺はというと、髭をさすりながら口を開く。

「ほっほっほ、クギ君、中々面白い冗談じゃのう。それよりも「隠したって無駄だ。なんなら半妖にも十分効く位強い襦袢して特級の聖水ぶちまけたりしてみるか？」……」

沈黙する爺。

静寂する学園長室。

無音の中に響く秒針の音。

「……なぜ、分かったかの？」

「これでも英雄の息子なんでね、結構命を狙われていたりする。それによく用いるのが人外なんだよ 悪魔とか、鬼とかだな。だからそういうものが近づくと反応するような結界を俺を中心に半径10kmで展開している。それに極僅かながら反応したんだよ、あんた」

まあ、その他にも結構反応しているんだけどね。

「……成る程のう、流石天才、といったところかのう」

「俺は褒められるような奴じゃねえよ」

「ここまで強気でいられるもつともな要因であるこの力、この才能は貰いものだし、そしてなにより、

「あんたを俺の目的のために利用しようとしているんだしな……」

「しかしのう、なんでぬらりひよんだと分かったんじゃ？」



「いや、その後頭部をみれば誰だって分かるだろ……というかぬらりひょん以外何ぞ……？」

シリアスは一瞬で砕けました、まる。

持ち直して、爺を正面から見る。

「でも興味深いな。近衛家には妖怪の血は混じってないし、別にあんたが妖怪の妾の子って言うわけでもない　まずその可能性からねえしな。ではどうやってなったのか、他にどのような可能性があるのか」

そんなの、たった1つしかねえだろ。

「自らを妖怪に、魔に一昇華しよう（堕ちよう）とした、って辺りか」

「そうじゃ、当たり前じゃよ」

ほっほっほ、と顎髭を撫で、笑う。

「少々爺の昔話に付き合ってくれんかの？」

あれはまだ儂が若い、学生の時じゃった。

丁度親父が突然意識のない、植物状態になつての、色々後継者争いという奴に巻き込まれちゃったりして結構擦れていたときに、麻帆良へ妖怪狩りの修行で来て、刀片手にヒヤッハーしているのう。符をポンポン投げてたら、一回校舎を半壊させたときもあつて、その時は流石に冷や汗ダラダラじゃったわい。

そんな中々波瀾万丈な青春を過ごしていたのじゃが、なんじゃ、一回恋に落ちてのう。いやまてここ重要じゃから帰ろうとしないで。

……色々恋文出したり告白したり頑張ったんじゃが、うむ、全部失敗じゃった。その娘はなんか抜けておつてのう。そんなところも可愛いんじゃが、恋文は隣の人と入れ間違いと勘違いしてそいつに入れたり（出席番号2番 阿部 いさじ）、告白はなぜか脈絡なく『私も好きですよ、さんま』とか返答したり、正直言つて散々じゃった。

じゃが、暖かくてのう。彼女の近くにいると後継者争い何ぞ忘れられるほど、心地よいものじゃった。擦れていた頃の儂にとっては唯一心を許せたとも思う。

それこそ付き合うことは出来なかったが、楽しい日々を送れたものじゃ。

じゃがのう、そんな日々ほど弱々しくて、脆い。

どこから聞いたか、権力の亡者ども、他の弱いくせにプライドだけは人一倍ある後継者どもが結託して儂を貶めようと企てての。

その計画にの、彼女を巻き込んだんじゃ。

内容は簡単に言ってしまったえば、儂が後継権を捨てる旨を本家へ送れば、彼女を解放する、といったものじゃった。

すぐさま捨てようとしたんじゃ。

じゃが儂を持ち上げていた馬鹿共がそ奴らを一気に壊滅させられるとか言つての、強襲部隊を送りおつた。

確かにそ奴らは死んだ。

じゃが、彼女も死んだ。

死因は体の機能を止める、いわば麻痺させて殺す種類の呪いで、あまり苦しまずに死ねたようじゃ。

はは、あの豚共、儂になんて報告してきたと思つ？

すごい笑顔で「近右衛門様、やりました！ 一網打尽です！ これでもうあなた様が長になるのもほぼ確定です！ ……女？ ああ、あの娘ですか。どうやら流れ弾が当たったようです」なんてほざきおるから、数日後、犬やら蟲やら鼠やらに集られている状態で見つかったそうじゃ、……勿論、原型がすでない状態の死体での。

それから数年発ち、一時期意識を取り戻した親父が儂に長の座を譲って他界。長となって有権者の嫁を無理矢理嫁がされて、ほぼ赤の他人と言つていいほどの結婚生活を送り、娘の木乃実を生んだら他の男と駆け落ちしての 数日後に、橋から転落して死んだらし

いぞい。いや儂一切無関係じゃからその疑いに満ちた目で見ないで、シングルファザーとして、呪術協会の長として、それなりに密度のある生活を送っていったわけじゃが、ま、1960年には麻帆良の要求があつての、2歳になつてばかりの娘を京都に置いて麻帆良の学園長に。

そんな中、一人の男が現れたんじゃ。勿論侵入者として排除しようと思つた矢先にの、ありえんことを言いおつたわい。

「あなたの初恋の人は幽霊になつて、いまもまだ存在している」

呆然としてしまつてその男を逃がしてしまつたがの、少々期待とつか希望を持つちやつての、霊に関して調べ始めたわい。

いろいろ調べた結果、見鬼になつてみたり、霊を見やすくする眼鏡を発明したりしたが、悉く失敗じゃつたわい。

そんな中しずな君を作つたり、瘴気を抑える結界を作つたりとまあ思わぬ副産物があつたんじゃが、結果としては失敗。

そんな中、あやつがやつてきての。

古い友人が連れてきての　まあそ奴ももとから友人だつたがの。本人は頑なに否定してくるが、警備員として雇つたんじゃが、なんじゃ、アイディアが思い浮かんだんじゃ。

—彼女（霊）に近い存在になればいい。だが、死ぬわけにもいかない。ではどうすればいいのか。

「そつだ、魔に一昇華すれ（堕ちれ）ばいいんだ」

「上質な瘴気もちょうど大量にあったからそれを身に一宿し  
(汚染させ)て完成、と思ったんじゃがのう」

「瘴気が足らずにとても中途半端に一昇華した(堕ちた)、って訳  
か」

「そうじゃの」

こくり、と爺が頷くとすっかり温くなってしまったお茶を煽った。

「中途半端故に、動きずらくなってしまったのう。瘴気を払う術じ  
やと儂もダメージ負うし、魔法動物の能力抑制結界で体が動かんし  
のう。失敗ばかりじゃよ。もしかしたら、と思っただとこの校舎  
にいたんじゃが」

爺は首を横に振り、無かったことを露わにした。

「もう60年とちよいが発つんじゃ、さすがにもう消えてしまっ  
たんじゃなかるうかの」

「……この校舎にいんのか？」

「うむ、あの男は自縛霊化している、とか言っておったの」

「……彼女が見れるようにする、っていったらなんでもするか」

「ほっほっほ、見れたら、の。実際、ここの学園長になったのもほとんど彼女が理由じゃよ。」

日本とか、呪術協会とか、本当にどうでもよかった。でも、彼女と過ごした、ほんの少しじゃけれどもあの日々を過ごせたこの場所は絶対守りたかったからの」

「爺……」

後継者争いに巻き込まれ、最愛の人を亡くし、娘と離れ、裏切り者だと後ろ指を指されてきた人生は、どれほど辛いものだったのだろうか。

酷い人生を送った人を、幸福にさせるために原作を壊すのは許されないことなのだろうか。

同情するなんて最低だな。

だが、そんなことを思いながら口を開いた。

「俺が、そいつを見えるようにしてやる。だから、俺の願いを一つ叶えろ」

そして何より、俺の、否俺たちの願いのために。

まず、一つ。

題名思い浮かばないんだけど何か？（後書き）

ヒヤハハ、ヤッチマッタYO！

……SKT中（スーパー賢者タイム）。

ま、いつか と開き直ったり。

評価とか感想貰うと金の指が無限ヒットを呼び起こします。よろしくお願いします。

幽霊？探しただけど何か？（前書き）

どうも、金です。

今回もやっちゃった感たっぷりで「はあ？」っていう人もいますか  
も……。

では、さようなら。



幽霊？探しただけど何か？

と格好つけたはいいものの、どうやってその幽霊を見えるようにすればいいんだろうか。

もうこの爺を完璧に魔に一昇華（堕ち）させれば話が簡単なんだが、周りが許さない状況なのだ。今ギリギリバれていないからセーフなわけなのだが、これ以上やったら妖怪つてことがバれて、MMから学園長クビにされて13課が来ちゃう……！

というわけで他の方法を考えなくてはいけない。

しかし見鬼化も失敗つて、どういうことだよ、おい。あれつて確率的にはほぼ100%成功するじゃん。

……あー、そういえばあれつてどちらかという呪いに近いもんだからレジストしちゃった、てわけか？ そりゃそうだよな、あれつてレジスト低い奴、と言うか一般人用に作られた術だし。

うーん、どうしたものか。基本的に幽霊とかってこっち側の人間は見えるはずなんだけどな、もし見れなかったとしても感じれる。

……地縛霊つてことは行動範囲が決められているし、絶対シスターにバれるだろ。旧派カトリック だったら速攻消しにかかってくるよ？ あいつら、幽霊とか地縛霊は基本悪霊として見なすし。居て良いのは精霊だけだし。

え、ということはどうだだけ影が薄い、その地縛霊。あいや、影

っていうよりは存在感？ そっちのほうがあってんのか？

……いやマジどうしよう、うん。結構俺って万能な力持ってるな、とか調子乗っていたからか？ たぶんそれだ、きつとそれだ、それに違いない。おおう、ネガティブスパイラルはマジ勘弁。感情を感じない ホムンクルス 人造人間 になりたい。それはそれでつままないか。

…… 人造人間？

それだ！ 第五元素で義体作っちゃって中に突っ込めばいいんだよ！ 幽霊って以外とフワフワしてて、こう、ポロツと抜けちゃうときもあるけど、自爆、間違えた地縛霊だから義体を縛られている土地ってちよいと騙させれば、万事解決！ ハッピーエンド（主に爺、というか爺のみ）！

ふふふ、そうと決まれば早速そいつを連れてこなくては！

「爺、とりあえずその地縛霊探してくるからそこで待ってる！」

「う、うむ」

待ってるよ、地縛霊！ いますぐ新しい体作ってやるから！

と、学園長室から出た俺の体からは止めどなく冷や汗が溢れ出てくるのを感じた。

何故か、率直に言おう。

こ、恐かったあ。

いや、だってあの人数相手にメンチ切るってドンだけ勇気必要だ  
と思ってるの？

精神は肉体に引き寄せられる、ってよく言われるけど、あれマジ。  
つまり、俺リアル9歳とこの魂で過ごしたの年齢の間、って感じだ  
し（決して平均年齢とかではない）。

お分かり？ さあ、あなたは約60人のさつき知り合っただ  
っかりの年上相手にメンチ切れますか？ その後80位の爺相手に  
詰問して良心痛みまくって罪悪感がビックバンになりますか？ お  
答えください！ ってクイズ番組のノリで聞いちゃうよ？ いやマ  
ジで。もう聞いているか、アツハツハ。

……ちよつと、気持ち落ち着かせることにした。

まあ、取りあえず歳に合わないようなことはしないようにしよう、  
ってこと。うん。

……いや、そんなことばっかりしちゃうんだけどね、今後。

あー、こんなことならMMの裏の支配者とかそういうゴシップ記  
事になりそうなことすんじゃないかなあ、とか後悔してみたり。  
基本俺って、転成前もそうだったけどチキンなんだよ？ とか言い  
訳言ってみたり。教員の仕事習うのに「教師ってのは舐められたり  
するからちよつと威圧的だといいぞ」とかいうのを真に受けなきゃ  
よかった、とかさっきの60人メンチ切りを思い出してみたり。タ

「モルに交渉術を習うとき「交渉術ですか？ 取り合えずあなたの場合は自分が『テメエより上位なんじゃボケエツ！』っていう態度を全開全面に出して交渉を進めるといいですよ。え、もしこちらの方が低位低いときはだつて？ いやあなたはそんなこと絶対ありえませんが」っていうのを真に受けなきゃよかった、とかさっきの爺詰問を思い出してみたり。

あれ、最後の2つがなんか似てる……？

なんか俺そんな不幸ライフ送ってない？ いや自業自得だけど、とかネガティブMAXになりつつ地縛霊を探す。

この辺りかなー、とか教室のクラス板を見ると、

「あれ、ここって21A……？」

目を擦って、もう一度見る。変わりなし。もう一度擦って、見る。変化なし。もういち（ry）。

あー、あれっすか。そういえばもうほとんど掠れて思い出せなくなってきた原作（序盤は覚えてるよ！）を思い返してみる。

うん、やっぱりあいつか。

決心して、迷いなく、扉を開こうとした。

「……あれ、開かない」

そうだよねえ、今日日曜日だもん。学校無いから扉開いてるわけもないよねえ、開いていたとしてもどうやって地縛霊呼ぶんだよ。なんにも見えないところに声かけるって、絶対可哀想な奴だろ、おい。

……あれ、超危なかったんじゃない？ とかまさかの隠れていた危ないIFルートに結論がたどり着く。

教員室に行く途中、俺は結界内の地縛霊が移動しているのを感じた。

……ええ、校外に出ちゃうの？ ここまで来た意味なくね？ つか縛られているのって、校舎じゃないの？ と不満を爆発させながらも、行っている方向へ足を向けた。

ああ、やっと見つけたぜ、おい……。

結界では感じられるのに、どこ見てもいねえ！ と思いつつ、目に力を入れまくって見ていたら、やっとのことで見ることができた。

……俺がこんなに頑張つてやっと見える位なんだから、あの厨チート共は見えるわけがないわけで。いや、もしかしたら見えるんだけどあえて泳がせておいた、という可能性もあるかも。いやしかし、成る程ねえ。

取りあえずは見つけられたことだし、体作って憑いれて爺おやん所に連れていけば万事解決。

……しかしなんでコンビ二前で体育座り？ まあいつか。周りに人もいないようだし、さっさと教室に連れていくか。

「なあ、そのこの体育座りの姉ちゃん」

「えっ」

「チヨイと着いてきてくれない？」

「があああ！？ 失敗した！ こんな怪しい勧誘的なもんで着いてくるわけが「は、はい」あつた！？」

落ち着けクギ・スプリングフィールドクールになれそうじゃないと上位っていう示しがつかないぞ落ち着いて教室へ連れていくんだそしたら体にポイツ、て感じで憑いれて終了なんだ。よし！

「んじゃ、来て」

さてさて、教室へ何事もなく無事たどり着くことができた俺たちは椅子に座って向かい合っていた。……結構、恥ずかしい。

「さてと、まず自己紹介といこうか。俺の名前はクギ・スプリングフィールド。姉ちゃんは？」

「うう、初めて私を見れる人が……ぐすつ。わ、私の名前は相坂さよ、っていいます、ぐすつ。それで、あなたはなんですか？」

ま、だろうな。原作でもそういう立ち位置って言われれば彼女くらいだし。

しかし、「あなたはなんですか？」か。すでに人間を前提に聞いてきていないところに驚嘆する。聞くとしたら「あなたは何者ですか？」とかだろうしな。……霊体だからこそ分かること、いやどちらかと言えば だから、か。結構嚴重に神つてことを隠してるんだがな。いや、これは無意識の中での判断だろう。

「俺は魔法使いだ、って言ったら信じるか、さよさん？」

「はい、私を見ることが出来たから……じゃ駄目ですか？」

「それだけで十分。まず信じてくれるのならそれでオッケーなんだけどな。じゃあ、もう一度言う。この世界には魔法つてのがあって、俺はその魔法を使う魔法使いだ。他にもこの学園内には魔法を知っている人って多くてな。それに魔術って言うのもあってだな。

……いや、これはちよい脱線しているな。取りあえずはその認識だけでいい。それで、その中には肉体を作る技もある」

「ほ、本当ですか!？」

「ああ、そうだ。だがその前に、さよさん、あんたに言わないといけないことがある」

「えっ、なんですか？」

「うん、いや実に簡単なことだ。だけど結構重要なことで、これはさよさんが納得、というか知っていなくちゃいけないことだ」

言葉を区切る。息を吸う。そして、言い放つ。

「さよさん、あんたは今、人間から逸脱した存在になっている。別に地縛霊とかそういうのじゃない。人間の使う言葉では通称、神だ」



幽霊？探しただけど何か？（後書き）

ヤッチマツタケド後悔ダケハシナイオ！？　って動揺たつぷりだ  
ったり。

今回も評価タツプリでどうも有り難うございます。

感想の方は遅れていてすみません。色々あつて時間がなくて……。

でも絶対返信はします。すみません。

今回はここまでですが、評価・感想を頂くと、命をおお、燃やせ  
えええ！！！！　の状態になります。どうかよろしくお願いします。

サービス回だけど何か？（前書き）

どうも、金です。

ということ、人生初のサービス回を書いてみたり。

……いや、意外と難しいものなんですなorz。

ま、この反応で分かった人もいると思いますが、結構残念な仕上がりです。……ほかの文もなんです。

では、さよう。

サービス回だけど何か？

「というわけで、爺。さよさん連れてきたぞ。んで、ここからが本題なんだがな、さよさん神様になっちゃってたぞ」

「ほっ？」

そうだよなー、突然そんなこと言われても驚きだよなー、とか思っている、爺が慌て始めた。

「ちょ、ちょっと待ってくれんかのう？ 神様になっただって、どういふことじゃ？」

「いやー、見つけるの結構大変だったんだぜ？ 霊体の時はめっちゃ目をこらしても見れないもんでさ、結構頑張ってたらやっと見れてな。見つけたら声をかけて、作った体に憑れて、そして連れてきたってわけだ」

「もうお主、何でも有りじゃな」

うーん、実際そんな感じの存在だしな、俺って。

「そんじゃ、説明でもしようかな」

「まず現在の魔術界、いわば魔術相互協会での神様の定義から教えるとするかな。取りあえず質問は説明終わった後に全部聞くから」

目の前にはほうじ茶が注がれ、湯気が立っている茶器がある。それを手に取り、一口啜る。

「ありとあらゆる存在が一定量以上の信仰を受け、人間の上位の存在になったもの、だ。ま、これで分かる通り神様ってのは元はどうってことのないものだったりする。だが、それがあらゆる謎を解決するために作り上げられた人格、つまりは神が生まれ、その謎を解決する神話が生まれ、その存在を信じ、恐れ、敬い、愛し、憎しみ、そうしてそんな元が人間の妄想やら空想の存在がありとあらゆる種類の信仰によつて現れた、ちゃんと存在する神になるってわけだ。」

つまりは信仰って、いろんな感情から変質しやすいんだよね、結構。だから、普通に暮らしている人でも信仰は受けているわけで、そんなんだから英雄とか有名な將軍とかつてのも神になったりする、有名人とかもただけだな。

というわけで、さよさんは生前から死後まで未永く信仰されてたつてわけですよ、はい」

「「ええっ!？」」

いや、言っちゃえば信仰していたのはほぼ1人なだけだな。…  
…爺だよ爺。なにあいつ1人で一般人1人を末席の末席とはいえ神様にするなんて。狂信者でも到底無理っすよ?

はつきり言おう。あの爺はある意味ヤンデレだ。……誰得?

「ごほん、気を取り直して、」

「はい、じゃあお待ちかねの質問タイムな〜」

「えつと、じゃあ私から。私、幽霊じゃないんですか？」

「おい、お前俺の話聞いてたか、ああ？」

「ひいつ、なんか随分ドスの利いた声で怒られたっ!? だっ、だつて私ドジですよ？ 足がないのに転んじゃうし、ラップ音出すし、ポルターガイストとか起こすし！ そんな信仰されるような人じゃないんですよ？ だから神つて言うのは何かの間違いで、本当は幽霊なんじゃないんですか？」

「いや、それだけで十分神つて証明できるぞ、おい」

「「???」」

「いいか、幽霊つてのは基本足がない。もしあつたとしてもそれは飾り、もしくは足に関することで死んだもんぐらいだ。あれ、ちょっと地面から浮いてるからな。」

でも、神つてのは肢体が揃ってるんだよ。いや千手観音とか、手とか足とか有り得ないほどあるのはいっぱいいるけど、無い奴がない。

分かるか？ 地面から浮いているはずなのに、転げるんだぞ？ つまりはだな、ただ足がないように見えて、実は足があるってことなんだよな、おい。

ラップ音だとか、ポルターガイストってのは自分が幽霊だ、って信じ込んでいたから、幽霊の存在を突き詰めた、いわば究極の幽霊神になったっていう訳だ、Congratulations!」

「じゃ、じゃが神や幽霊のといった存在は儂らでも知覚できるぞ？  
なんで彼女は出来なかつたんじゃ？」

「言ったたる、究極の幽霊神だつて。彼女は信じ込んでいたんだよ、私は幽霊。誰からも知られない存在だ”って具合に。だから誰も分からなかつたんだよ」

原作じゃネギが分かつていたと思うんだが、あれは幼い故に備えられた高い霊感性と、人よりも神に近い存在である悪魔と出会ったことがある故に高められた霊感性が相乗！　って感じになつたからなんじゃないか？

幼い頃が霊感性のピークなんだよな。ほら、よく小さいときに妖精を見たことがある、っていう話を聞いたことがあると思うんだ。  
その他にも取り替え子とか、赤子の肝は妖怪を強くするとか、子供とオカルトってのは結構密接に繋がっていたりする。

#### 閑話休題。

「神様ってのはなぜ信仰されていたのかっていうので何の神かっるのが決まるんだが、そういうのが決まっていない神、まあさよさんみたいなタイプはな、自分自身が一番最初にイメージされた存在に近いものになる。さよさんは幽霊って思ったから幽霊の神になつたわけだ。しかも某蛇さん以上の隠密性を持った、ある意味最強の神に。その分戦闘には向いていないんだけどな」

んだから他の転成者なんかは見れないんだよなあ。だって大人ばっかだし、そういうのが見れるほどの眼があるとは考えられないし。もしかしたら見れた奴もいたかもしれないけどな、神様ってのは気づいていないんだろうな、それか魔術、特に神道方面の知識が無い奴。

「んでな、ここからが本題なんだけど、まずさよさんを1回禊ぎした方がいい。こんなに汚れてると、神の大半はここら一帯を廃墟にするくらい暴れてもおかしくないしな」

「ええっ！ 私そんなことしませんよ？ とうか汚れてるってどういうことですか!？」

「さよさんが驚いた声をあげるが……ま、しょうがないんじゃないかな。魔術なんてことを知らないんだし。」

「いや、禊ぎってあれだよ、風呂で体洗うのと大分似てる。神についてても、やっぱり体、というよりは魂が汚れるんだ。だから禊ぎやら祈りでその汚れを落として、健全な状態にするんだが、さよさんのこと誰も分からなかったから禊ぎなんてしない。だからはつきり言っちゃえば体洗わないでいるんだよな」

「えっ」

「というわけで爺、2-A、いわば彼女の本殿で禊ぎするからあの辺りの人払いよろしく。終わったら速攻でさよさんそっちに送るから待ってるよ」

「ちよ、ま」

時間が惜しいんです、いや割りと言真面目に。

「はらいたまい、清めたまう」

「んっ」

しゃりん、しゃりん、と左手に持つ神楽鈴を振るうと、厳かに、だが美しく音を奏でる。

目の前にはもじもじしている、和服を着た（というよりは着させた）さよさんがいる。

「はらいたまい、清めたまう」

「うんんっ。……はあ、はあ」

次は右手に持つ玉串を振るい、塩をまく。

教室内には即興ながら境内を作り、入り口近くには小さな鳥居のフィギュアを置いた。……結構代用しているけど、大丈夫だろう。

さよさんかというと、体を腕で寄せて、顔を赤くしている。よく見れば汗も浮き出ているのが分かる。

「はらいたまい、清めたまう」



「これの繰り返しを何度も何度も行っ。……以外と疲れるんだよね、これが。」

「あ、あのひゃっ！……まだ、ですか？」

「あとちょっと」

そう答えると作業に戻る。本当にあとちょっとで終わるしね。

……あと3回、……2回、……ラスト、……終わり。

「終わったぞ、さよさん」

「はあ、はあ、やっと、ですか。すっごく疲れるし、なんかこう、くすぐったいんですね、この……楔ぎって」

「そうだな、俺も疲れる。それにこれって体を洗うようなもんだからくすぐったいのも何となく分かる気がするな。でも6月にはもつと長い大被えがあるから慣れといた方がいいぞ」

「えっ。あ、あれより長いんですか！ む、無理無理！ 死んじゃう！ 絶対死んじゃう！」

顔を赤く染め、首をぶんぶんと横に振る。……え、なにこれ？ 小動物？

「ちょっと癒されながら、口を開く。」

「いや、死なないから。大被えで死ぬって本末転倒だぞ。……取りあえず、爺んところに行くか」

「はい……分かりました……」

しゅん、となったさよさんを連れて、学園長室へと足を向けた。

## サービス回だけど何か？（後書き）

……やめて、そんな冷たい目で見ないで……。

と、絶賛鬱状態なのですが、迷いなく投下。

……やっぱり金には無理だつて。あの妄想内の可愛らしさが全く表現されていない！ あの夢の中じゃ和服が乱れていたり、捲れていたり、もつとエロかったじゃん！ とか叫んだり。

んん、ではちょっと更新について報告が。

金、実はもうすぐテストです。なんでもう1回出来れば2回を今週、もしくは来週に投下して、テストが終わるまで停止しようと思えます。

あ、でもあれです。テスト終了日には投稿します。なんでご安心を。

という事で今回はここまで。

評価・感想を頂けると、興奮で脳内麻薬でジャンキーになります。「ヒヤッハー、我が世の春がきたあ！」って具合に。御大將くらいに。宜しく願います。

襲撃されたりするんだけど何か？ (アンケートもあるよ！) (前書き)

どうも、金です。

後書きに超重要アンケートがあるので答えていただけると嬉しいです。

しかし、とともの。が次回作で終わりとは……すごく残念です。

それとなんでGジエネの最新作が3DSのみで販売？ せめてPSPでも発売してよおお！！！！

と愚痴もここら辺にしておいて。

では、どうも。

襲撃されたりするんだけど何か？（アンケートもあるよ！）

とまあ連れていき、現在俺の隣にある扉の中、学園長室には爺とさよさんだけがおり、色々話をしている、と思う。

というのは、やっぱりこういう話は第三者が聞くようなもんじゃないからな。さすがにそこら辺はちゃんと弁えています、はい。

しかし、話がちゃんと出来ているのか、そこら辺がとても心配だ。なぜなら、彼女は生前の記憶を失っているから、だ。

神というのは生まれたとき、人格は形成されていても記憶というものはない。いわば信仰によって構成された神は、空想上のものなのだ。人々が思い描いた人格はあっても、そこに記憶は無い。そういった記憶といったものは、神話や伝説といったものを信じた人々の信仰によつて補われる。まあ、俺みたいなのは例外、というよりは特殊なのだが。

ならば信仰され、神になった元・人も同じ。人格はあっても記憶は史実やゴシップ、伝説を元にして記憶を形成される、のだがここには穴があったりする。

1つは、作られた記憶による人格の歪曲。

本当は心優しい青年だったとしても、多くの人々に信じられた史実やゴシップからできた記憶から冷虐非道の青年になったりするのだ。……まあ、理論上の話な訳で、実際そうだった神は見かけない

んだが。

もう1つが彼女に当てはまるのだが、神になったとしても、いわゆる作られた記憶がなければ記憶喪失の状態になってしまうという点だ。

少々彼女と会話をすると、そのようなことを思わせるところがいくつもあった。

例えば体を作つて爺のところ連れていくときのことだが服を作つて着て貰おうとしたら、「服つて着ているところはいい見たけど、初めて着るからよく分からない……」とか呟いていたところだ。

いくら史実や伝説といったものでも、それを行うのに必要な記憶や知識は付随してくるのだ。例えば剣術とか。ということは学校での出来事なのでもちろん服を着る記憶は付随してくる、筈なのだが、それが無い。ということは爺とさよさん、いつも裸で行動していたの？ ということになってしまっわけであり、そんなこととは有り得ない。だから記憶がない、と推測できたのだ。

うーん、お兄さんとっても心配、なんて考えていると、唐突に扉が開いた。

出てきたのは少々頬を赤らめながらも、ニコニコと笑っているさよさんだ。

「近右衛門さんが呼んでいますよ、クギ君」

……あれ、近右衛門さん？　なんか仲よさげじゃね？　え、でも

記憶無いんじゃないの？ え、え、どうということなの？

「ほっほっほ、クギ君、本当にありがとう。おかげで僕もさよさん見れたし話せたしこのう、約束通り何か1つ、願い事を叶えるところかの。もちろん僕ができる範囲内でのお願いじゃぞ？」

爺も超ニコニコしている……。……。なんだ、この胸の奥からわき出る、炎に似た粘っこい感情は。取りあえず壁を叩きたい。全力で叩きたい。ああクソ、リア充いね！ どう見てもこのカップリング犯罪じゃねえか！？ いや、実は犯罪じゃないけどね！ なんにも知らない人がこれ見たら速攻警察に通報するぞ、おい！ ……ん？  
なんで俺こんなこといったんだ？ ……なんで？

「大丈夫かの、クギ君？」

その声をかけられて、自分がちゃんと意識が戻ってくるのを感じる。でもまだなんか腹が立つというか、なんというか。

「あ、ああ。ちよつと飛行機での疲れが残ってるっぽいから、明日話す。……大丈夫か？」

「ほっほっほ、大丈夫じゃよ。学園長って実はあんまり仕事無いしこのう。どちらかというクギ君がいつ大丈夫か、なんじゃよ」

給料を聞いたことは無いが、言わせて貰おう。この給料泥棒め。働け、いろいろと。

「んじゃ、しずな先生宅に行くとするか」

よっころせ、と荷物を纏めたバックを持ち、学園長室の扉を開け

た。

分かれるときには既にしずな先生の家の場所は聞いたので、そこに一直線で行けばいいわけなんだが……

ま、そりゃ初対面で、しかも9歳のガキに喧嘩をふっかけられたんだ。そりゃキレルよね。実際内心ビクビクしてたけどな！

というわけで、さきほど学園長室で見かけた『裏』の関係者ほとんどが転成者なんだが　　が5、6人集まって俺を囲んでいるというわけだ。正直言っちゃえば、めっちゃビびってます。中にはすでに杖を抜いている人、得物に手をかけている人なんていう、それはそれは素晴らしいほどに物騒な人もいるし。牛乳飲めよ牛乳。それがカルシウム。イライラ収まるよ？　短気ダメ、良くない。

「クギ・スプリングフィールド君。君、ちょっと調子に乗りすぎだよ？　こういうこともあるとか、考えなかったのかい？」

「いやー、考えてたけどさ。まさかここまで短気な馬鹿だとは思っていなかったからな。……あ、ヤベ」

まずった。思ったことをそのまま口にしちゃったよ、おい。いやー、まだまだガキだなあ、俺も。

と現実逃避をしていると、既に手の中には各自の得物が持たれているわけで。体の周りには既に気が纏わっていたり、違うパターン



としては魔力が纏われていたり、中にはそういったものとは違うものを纏っていたり。

ま、ぶつちやけ戦闘態勢完了と言った辺りだろうか。はは、参ったな。……いや、マジでヤバいんじゃないのかな、現状況。

「……ぶつ殺す」

その一言と同時に、囲んでいた奴らは動いた。

おいおい、得物も持たせないつもりかよ。9歳相手に大人げなさ過ぎなんじゃないか、おい。

と心の中で呟きながらも、放たれる攻撃の隙間を潜り、全て避ける。

確かに、猛攻だ。隙がないほど放たれる攻撃を避けるにはそれこそ射程外に逃げるほかあるまい。

「くそ、さつさと当たれよ」

だが、こいつらには弱点がある。

連携プレーの無さだ。

隙がない攻撃を全員が行えば、味方からの攻撃と相殺しあい、穴

が出来る。そこに、この小さな体を捻り込ませれば避けることは出来る。

とはいうものの、その攻撃は一瞬も止められないほどの連撃なので動き続けなければならず、『死メント・モリの舞踏』を取り出す暇などもちろん無い。

そして相手は、所詮チートを追い求めたチート野郎共 見た感じ男しかいなかったのだ。

その魔力はネギより、数倍多いといったものだろうか、少なくとも見積もってもこの連撃を7時間続けることは、こいつらにとってはたやすいことだろう。中には魔力を毎秒1割回復するものもいる。

だから魔力切れを待つなんてのは、無駄といった辺りだろうか。全く、面倒だ。

とはいっても、こちらから攻撃するのも少々躊躇ってしまう。この中に、もしくはこちらを伺っている奴にどんなものでもコピーする能力、見稽古なんかを持っている奴がいれば、そいつは今後の計画上、少々面倒な存在になってしまう。

「ははは！ どうした？ さっきまで大口叩いていたくせに大したこと無いんだな！ 僕の魔力はネギの数倍はある。魔力切れを待たって無駄だよ！」

うるさい、そんなことは分かっている。つーか勝手に人の妹を名前前で読んでんじゃねえ、この気違い系厨2病患者め、まずはその力ワイソ成分タップリのオッドアイと銀髪とイケメソ（笑）フェイスをどうにかしてから一昨日きやがれ！」

あ、またやつちまった。と思ったらもう遅く、厨2君（今命名）の形相は歪み、顔は真っ赤になっている。

「絶対に殺す！」

「それがキにいう言葉じゃねえよ!？」

2振りの剣を両手で持ち、こちらに突っ込んできた。

「ちょ、お前ら待え、ぐりゆう!？」

……ま、そうだよな。弾幕の中へなにも考えずに突っ込んできたら、そりゃ当たるわな。

と侮蔑と哀れみの視線を送りながらも、動き、避け続ける。つまりは攻撃の雨は未だ続いているわけで。

「……お前ら、仲間倒れているのに攻撃続けるか？」

「いや、そいつのこと誰も仲間と思ったことはねえし。どちらかと言え、敵？ まあ、G並の耐久力はあるから別にいいか」

なんという奴らなのだろう。血も涙もない奴の集まりのようだ。

「だってそいつ、いろんな女子、特に2-Aにナンパして、嫌がっ

てんのに恥ずかしがってるって勘違いしたりして、何回か補導されてるし。主に高畑先生に」

ふむふむ。

「前は木乃香ちゃん、学園長の孫にセクハラ紛いのことをして、1回西と全面戦争になりかけたりしたしな」

……ふむふむ。たしかにそう思われてもおかしくはないな。

「つーか、なんで追放とか要監視とか、そういうことしないの？ あー、なんか腹立ってきたわ。ってよく考えたら、これってメガロに宣戦布告？ ……こんの、くそったれーっ！」

男はそういう。すると、弾幕が薄くなり、厨2君が倒れている辺りの弾幕が濃くなっていく。

「ぼ、僕も」「……自分も」「おい、お前ら！ そいういこと言っ  
なよ！ 俺もそう思っちまったじゃねえか！」

とまあ、こんな具合で俺への弾幕は一切なくなり、男の方へ集中砲火されている。

「え、えーと、俺もう行ってもいいか？」

「ああ、なんかすまなかつたな。徹底的にこいつ、ぶちのめすわ」

……こいつら、何がしたかったのだろうか。

そう思いつつ、気を取り直してしずな先生宅へ、改めて足向け

た。

**襲撃されたりするんだけど何か？** (アンケートもあるよ！) (後書き)

ということでもアンケートです。

ちょっとネタバレに近いかも？

今後の展開なんですが、

？原作のげの字も出ないオリジナル展開

？原作に従事した原作展開

と、オリジナル展開の時期は秘密にさせていただきます。

締め切りは10月1日 00時00分とさせていただきます。

アンケートに回答していただく際、一言感想・評価して頂けると嬉しいです。

ぜひ参加してください。

あの二人の関係だけど何か？（前書き）

にじファンよ、私は帰って来たー！

ヒヤッハー、金ですヒヤッハー！

ええ、はい。調子乗りました、はい。すみません。

ふはは、しかしあの強敵、テストに倒された金に、もう残っているものは何もない！（誤字に非ず）

後書きにはアンケートの結果を書いてあります。

では、どじぞ。

あの二人の関係だけど何か？

ウィルことウィリアム・パーシヴァルとアーニヤことアンナ・コロナウアは5年ほど前から付き合っている。アーニヤ本人に聞くと、当時の彼女は俺のことを好いていたという。俺も人並みには人の感情を察することが出来るから、気が付いてはいたんだが、まあ、なんだ。少々兄に懐きすぎている妹がいたため、両方動きづらかった。俺の近くには四六時中いたし、アーニヤはアーニヤで恋慕が気づかれたのか、妹、ネギからマークされていたりしたわけだ。

その頃はアーニヤとネギの関係が、なんだ、酷く擦れていたことを記憶している。

ネギから見れば自分の支えである兄を他人に取られたくない、アーニヤから見れば自分が好きな人の近くにいて喧しい、といったところだろうか。トゲトゲしてその間にいた俺が胃腸薬を常備していたのは、歳に合わないことをしたと振り返ってそう思う。ただ、持っていなかったら、さらに酷かったのだろう、とも考えている。

なぜかといえば、そんな生活が続いていたせいかな、ある日授業中に俺が倒れてしまった。医者話によると、過度なストレスのせいでも胃に穴が開きかけているとのことだった。これは一種の、転生による弊害ともいえるだろう。体に精神が引っ張られているせいで中途半端にそういうことに機敏になってしまう。普通の4歳児はこんなことになるのは極めて珍しいことだろう。さらに原因としては、その頃は人の目を盗んで世界各国に飛び回っていたり、偉い人たちと話したりしたしな。精神的、肉体的な疲れも半端なかった。



そんなことがあり、幼いなりに考えたであろうアーニヤは、まあ、俺たちから段々と離れていった。

自分が悪かった、自分がいなければこんなことには、などと成長過程で起こる精神的に不安定な時期と重なってしまったこともあり、酷い自己嫌悪に陥ったアーニヤは段々と顔が糞れ、目の下の隈が深くなり、痩せ細っていき、ついには引きこもりになってしまった。彼女の両親は村が襲われたこともあって魔法世界へ出稼ぎに行っており、すぐには帰れなかった。ネカネ姉ちゃんは修行で、確か紛争地域での戦争孤児の保護に行っており、彼女もまたすぐには帰れなかった。教師たちも今までこんなことがなかったためか、どう対応すればいいのか、何をすればいいのか迷っていた。俺が行こうとしたものの、その後すぐにロンドンの病院へ連れて行かれ、多くの検査やカウンセラーなどといった、馬鹿げたことに付き合わされていたらため動けなかった。まず、カウンセラーが出来るのであれば、俺よりもアーニヤの方へ行け、などと考えたのだがすぐに原因が思い当たった。

### 英雄の子。

ただ、それだけのために自分よりも危うい少女を見捨てるのか、そう内心憤っていたものだ。また、自分自身を責めてもいた。

退院後、すぐにアーニヤの元へ向かったら、なんと以前のアーニヤへ戻っているではないか。そう驚いていると、まあ、あいつが現れるわけだ。

学生時代、『遅れ咲き<sup>マイペース</sup>』と生徒間、教員間で呼ばれていた、ウィリアム・パーシヴァルがいた。

当時から二年ほど前の彼はあまり社交的ではない性格と魔法の才能の乏しさ、そしてその肥満体型から虐められており、教員の間では裏口入学ではないか、などと揶揄されていたほどだった。確かに、魔法を使っているところを見ているとよく入学できたな、と思ってしまうような実力だったのは否めないし、保有している魔力量も多いというより、寧ろ平均よりも少ないくらいだった。

しかし、なぜ入学できたかは納得できた。

面接及び試験監督者が爺ちゃんだったこと。そしてその魔力に含まれている魔素の密度である。

魔力は魔素によって構成されているが、魔力＝魔素、ということではない。

錬りケシを考えてほしい。ケシカス、つまりは魔素を集めて、こねることによって初めて錬りケシ、魔力ができるのだ。この錬りケシを投げるといった行動が魔法、魔術といわれるものだ。

これが最も単純な例えだろう。

所々が違うので補足させてもらうと、まず魔素では魔法を使うことが出来ない、魔素を保有する器官と魔力を保有する器官が別々にある、魔法を行使する過程では留め変質させる場所と放出する道がある、といったものだろうか。

特に一番最後はタカミチがいい例だろう。彼は魔力を放出することとは出来る。現に感卦法の使い手として世界的に有名だ。だが、魔力を留め変質させる場所が無いため、魔法を行使することが出来ないのだ。

## 閑話休題。

と、ウィルについては特に二番目のことなのだ。彼の魔力の保有量は平均よりも少ないのだが、魔素の保有量は半端でないほど多いのだ。

大半の人はどちらも同じ程度の量もしくは極僅かな差なのだが、彼の場合はそれを大きく逸脱していた。

また、魔力の量と魔素の量は比例している。それは人それぞれによつて異なるのだがこれも1：1の割合がほとんどだ。しかし彼は1：10ほどの差であった。常人の1の魔力と彼の1の魔力では、彼の方が強い。

当然そうなると通常の魔法の行使方法では魔力が逆に濃すぎて、奔流して上手く発動することが出来ない。

まあ、見かねた俺は彼にアドバイスを少々すると、みるみるとその実力を高めていった。自信をつけた彼は積極的になり、最終的には痩せて、美丈夫となったわけだ。

これには勿論訳がある。同級生からだけでなく、学校全体から虐められていた彼は、同じクラスメイトだったアーニヤが庇ってくれたことがある。そう話していた。確かにアーニヤはそういう事柄は嫌いな気質のため、納得できる。

とまあ、そんな彼女を見て、惚れた、とか。

彼はその惚れたアーニヤが引きこもった、と聞いたら居ても立つ



「んー、18禁の本がないか探しているの。あつたらネカネ姉さんから速攻燃やせて言われているし。私ももしそういう本があつたら燃やして、兄さんと『O H A N A S I』をしないとイケないし」

いつからお前は白い悪魔式オハナシ術を……っ!? そういう風に育てた記憶はないぞっ。

「んー、無かった。よかった、『O H A N A S I』しなくて

そりゃ、持っていないのが当たり前だろ。

「この前は本棚の3番目の魔術書を置いてあるところの右から3番目の『完全なる存在とは』のカバーを掛けたそういう本があつたから、もしかしたら違うのを持ってきたんじゃないかな、って思ったんだけどなあ」

え、なんで知ってんの? というか、カバーだけあって、肝心の中身がない! とこの前必死に探していたんだけど? そのとき笑ってたのって、こういうことだったの?

「当たり前でしょ。兄さん」

なにそれ怖い。とりあえず言い訳をさせていただくと、もう爺のくせにそういう本をベットの下のいかにも青少年がおいてありそうなところに置いていた好色爺ちゃんが全て悪いんです。そう、全部あいつの、あいつのせいなんです。俺、ワルクナイ、ジイちゃん、ワルイ。

「取り合えず、お爺ちゃんにはそのことを連絡しておくから」



あの二人の関係だけど何か？（後書き）

ということ、結果発表！

？一票

？二票（足して二で、という意見）

と、アンケートの回答も少ないことは横にずらして。

こうなったので、？にします！（分からない人は前回の感想を見て下さい。注意書き等もありますので）

感想返しも始めます。

と、ということ、今回はこちらでお開きとさせていただきます。

感想・評価は勿論待っています！一言でも頂けると三回転土下座を決めて涙します。

番外編 雑談だけど何か？ 2！（前書き）

祝50万PVの番外編です。皆様ありがとうございます！



番外編 雑談だけど何か? 2!

金「特別企画!」

釘「クギと!」

金「金の!」

金・釘「雑談だけど何か? 2! はっじまっるよー!」

金「ではでは、全く好評でないこの企画、今回は50万PV記念にやらせていただきまーす!」

釘「好評じゃないんだったらやるなよ(ボソツ)。……んで、今回も50万PVぴったし所か、23万くらい多いぞ」

金「細かいことは気にしないっ 基本的にこの企画はぴったしで投稿するつもりは毛頭ありませんしね。それにいろんな人に見ていただいてるってことじゃないですか、嬉しいですねえ」

釘「まあ、色々あつたもんな。なんか2章に入るとき大幅にキンクリされていたり、蠅の登場回数増えないし、全く伏線張れてないし、文章も所々変だし、今回のテストも赤点ばっかだと返される前から分かっているし。……本当に大丈夫なのか?」

金「細カイト八気ニシナイツ」

釘「素晴らしいほど現実逃避に向いている言葉だな、それ」

金「おおっと、もうそろそろゲストの方がログインする時間です」

釘「ログインって言うてるけど、実際は部屋に入っているだけなんだけどな」

鉄様が ログイン しました。

鉄「どうも、お久しぶりです。ターモル・レ・ミントンです」

釘「おお、今回のゲストはターモルか。しかし、登場するのって中々久しぶりじゃないのか？」

鉄「ええ、そうです。『教えて、ターモル先生！』だけど何か？

から一切合切登場してませんし、名前は一度しか出てませんよ……」

金「金は悪くない。どちらかと言えばテメエの扱い難さに非がある」

鉄「ええっ！ まさかのその返しは想像できなかった！ というかなんで私の扱いがこんなにも酷いんですか！？ 前回の蠅さんもまだ拍手を送られていたのに!？」

釘「だって、ねえ」

金「ですよねー」

鉄「うわぁーん！」

金・釘「大の大人が泣くんじゃねえ、気持ち悪い」

鉄「……お二人、なんか非道というか、外道な香りがプンプンなんです」

金「そりゃ、『境ホラ』が悪い」

鉄「こらっ！ ほかの作品名出しちゃ駄目でしょ!？」

釘「俺も読んでるぞ、『境ホラ』」

鉄「うがーっ！」

金「(……鉄いじるの、楽しいですね)」

釘「(そうだな)」

鉄「今回のツッコミが一人だけって、辛すぎるんです！ 前回はい感じに分かれていたのに、なんで!？」

金「そんなことは置いといて、取り合えずプロフィールの公開だけでも」

鉄「うええ!！」

ピロリロリーン

鉄様の プロフィールが 公開されます。

名前：ターモル・レ・ミントン

性別：男

年齢：56歳

身長：196cm

体重：87kg

好きなもの：日本文化、鍛錬、煙草、酒

嫌いなもの：欲にまみれた人間、怠惰な人間など

釘「……うわあ、何の面白味もねえ」

金「これに補足させて貰うと、ワン・フィンリッシャー一撃の鉄甲士 なんていう二つ名もありません。……うん、改めてみると何の面白味もねえ」

鉄「これ考えたのあなたですよ！？ それ言っちゃ駄目でしょ！？」

釘「しかし、結構身長高いんだよなあ。年の割にはウェイトも引き締まっているし。伊達に先の大戦では英雄と言われていただけのことはあるな」

鉄「ま、まあ自分にはこれくらいしか取り柄はありませんから」

金「照れてんじゃねえよ、登場回数減らすぞ」

鉄「怖っ！」

釘「しっかしなあ、今更なんだが、この企画って出番が少ない奴をだそうっていう魂胆なのか？ 前は蠅で、今回は鉄と来たら、も

う分かつちゃう」

金「……」

鉄「……作者」

金「だからお前がああ！！！！」

鉄「なんでえええ！？　なんでこの状況で逆ギレできんの！？　馬鹿なの？　死ぬの？」

金「出番、減らすぞ」

鉄「さーせんしたー！！！」

釘「……何という暴虐っぷり。そしてこのメタ発言の数々。この作品を根底から揺るがす企画と見た」

金「というか、今回なんだか釘さんテンション低いんですが、どうしたんですか？」

鉄「おお、そう言われればそうですね」

釘「いや、なんだ。ぶっちゃけるとさ」

金「はいはい」

釘「この企画、いらなくね？」

金「」

鉄「」

釘「いやまだ二回だけだけど、これより外伝とか番外編の方がいいと思うんだよね」

金「まさか登場人物に諭されるとは思っても寄りませんでした」

金「ということでこの企画は中止！ 解散とさせていただきます！」

鉄「ええ！ わ、私登場したのはいいんですが、全く演出してないですよ!?!」

金「異論は認めない！」

釘「おうふ、早急すぎて驚きだぜ」

金「ということで、以降この企画に代わり、外伝とか番外編と言ったものを投稿していこうと思います」

鉄「ええ、まじかよ……」

釘「全く、駄作者ぶりをすごい感じで発揮しているな」

金「はい、ということで今から業務連絡タイム。次回から遂に原作始動です！ 基本は本編を進めて、100万PV到達したら外伝を投稿、というような感じで進めていきたいと思えます。執筆速度は今までと余り変わらずマイペースに進めていくので、よければ是非読んでいって貰いたい所存であります」

釘「んじゃ、締め挨拶といこうか」

金・釘・鉄「『今後も『ネギの兄を始めよう！』をどうかよろしくお願いします』」

（終）

金「あ、そういえば全員金の字が名前の中に入ってますね」

鉄「あ、本当だ」

金「テメエに言ってねえよ」

鉄「ひどっ！」

番外編 雑談だけど何か？ 2！（後書き）

ということで、次回から原作を開始します。

勿論感想・評価をお待ちしております！ あれです。感想・評価を頂くと指が弾幕張りに高速で動き始めます。



原作開始だけど何か？（前書き）

どうも、金です。

遂に原作開始です！

ではどうぞ！

原作開始だけど何か？

朝だ。

先日は胸焼けのしそうな甘すぎるラブラブ具合を目の前で見せつけられ、俺と爺共々仲良くネカネ姉ちゃんに怒られ、ベルには遠回しに怒られ、散々だったが、明日は必ず来る。

とは言っても特別憂鬱なわけでもない。別に普通の一日の始まりというわけでもないんだが。

俺は今、スーツを着ている。

先ほど着たこのスーツは少々大きいながらも、別段動作の邪魔になるというわけでもなくその性能を発揮している。

まあ、なんだ。これが今日からの制服、否、戦闘服である。

つまり何が言いたいかというと、

「月曜日、麻帆良学園女子校中等部初出勤……」

既にネギ、アーニヤ、ウィルも起床しており、それぞれが制服を身に纏っている。皆、1度は試着しているとはいえ今日からの、出勤初登校での気概も、そこから感じる初めての感覚もあるのだから、それぞれの姿が初めて見るように思える。

「さて、どうせ全員早めに学校に行かなくちゃいけないんだから、

出発しようか」

「自分だけ違いますけどね」

そう言ったのは、小さな苦笑を浮かばせて少し寂しそうにしているウイルだ。確かに、そうなのだ。俺、ネギ、アーニヤは女子校中等部なのだが、彼は男子校中等部のはずだ。まあ、この全体的な校風、結界があることだしイジメやらなんやらといったものはないだろう。逆に「オマエSUGEEEE！」ってなるだろうな、たぶん。ああ、今後のことを考えると胃が痛くなってきた。

「ぶう、クギが女子校に行くんだから、別にウイルも女子校でいいじゃないの。それに一人になって寂しいに決まってるでしょ……」

そう言っているのは昨夜からぶつ腐れているアーニヤだった。先日から爺にそのことで猛抗議をしていたんだが、やっぱり駄目だったようだ。それを言われて、先日の異様な甘さに気付く。いや、いつもあんなに甘い訳じゃないよ？　ただ離れ離れになるからあそこまで甘くなつたのだろう。……え、ということは今日からこれぐらいの甘さがノーマルに……っ!？

「大丈夫です、アーニヤ。君はいつも僕の心にいるのだから悲しくなんかありませんよ。勿論、君が僕の側にいるのに越したことはありませんが」

「ウイル……」

「アーニヤ……」

……砂糖吐きそうだ。というか、まじで気持ち悪くなってきた。

なにこのラブラブカップル。小学4年生が醸し出すものじゃないでしょ。っーか普通にキスしてんじゃないよ。俺らがいるってこと忘れてんの？ おーい、聞こえてますかー？

なんて考えていると、服の端を引っ張られる感触を確かに感じる。そちらの方を向くと、

「……いや、ネギ。何目を瞑って期待してんの？ 唇を突き出すな。大体俺らって血の繋がった兄弟でせうよ？」

いや、マジでこの子何に期待しているの？ 近親相姦の禁止はイギリスの法律にもありますよ？ だからいい加減にしろよ、なあ。

「……キスは近親相姦にならないもん。ちよつとしたコミュニケーションションだもん」

「前にそう言っただ舌を捻り込ませようとしたのはどこのどいつだ！ その後少し経って一緒に寝ようって言われてマジこの歳で色々なものを失いそうになっただけだな！ どこで覚えたんだよ、そんなこと！ ホッペタ膨らませんな、涙目になるな、上目遣い禁止！ ……チクショウ、可愛いじゃねえか！」

そう、本当に可愛いから困る。ま、あらゆる誘惑には鉄の理性で完璧ガードしたけどな！（実は一瞬負けそうになったのは秘密）

「……取りあえず、仕入れたのは兄さんの持っているそういう本だよ？」

まさかの自業自得！？

「あらあら、朝から4人ともお熱いわね」

ヒューヒューと口笛を吹いてはやし立てるしずな先生。全く、感情豊かなホームンクルスだ。……実は人間ってオチはないよな？

「俺らは違います！ つーか3人とも照れてんじゃねえよ！」

朝の女性教員寮に、俺の声が響きわたった。

「あー、余計な時間食っちゃまった！ 遅刻じゃないけど、遅刻に近いだろ、おい！」

「むー、結局朝のキスできなかった……。ね、アーニヤ。なんかこう、コツとかない？」

「そうねえ、ウィルはそういうのって拒まないから分からないけど、寝ているときにコソツ、とするとか」

「物騒なこと言ってるんじゃない！ ……いや、マジ勘弁してくださいよ？ お願いだから」

そう話しながらも、走る足は止めず、速度は落としていない。

あれから直ぐに寮を出た俺らはすぐさま近くの駅へと走り、現在は電車から降り、ウィルと別れてそれぞれの目的地へと駆けているところだ。

「……！？ ワンツ！」

前方から、犬の鳴き声を真似た、女子の声が聞こえた。……いやいや、きつと空耳だろうな。

「……あれって」

「……うん、そうね」

「ん、何がだ？」

「……ほら」

そうネギが指を指した先には、赤い髪をツインテールに纏めた少女がいる。少女と言っても、中等部ほどで、しかもかなり足が速い。陸上部にでも所属しているのだろうか。

……なんか、見たような気がする。が、今はその話をしていきではない。

ネギがなぜ彼女を指さしたのか、そのわけが分かったからだ。

「あー、成る程」

その少女からは、かなりドキッとした失恋の相が出ている。まあ、しかるべき対処をすればどうってことはないんだが、初対面でいきなり「失恋の相が出ている」なんて忠告するのは、日本人では結構失礼に値する。

「ここは一つ、相手を落ち着かせて言った方がいいだろう。」

「あの ……あなた、失恋の相が出ていますよ。」

ネギさん、なんてことを。

「な し、しつ……って。」

「でも、ちゃんとした対処方をすればその分チャンスですよ？」

「へ？」

「ちよつとしたことなんですけど、ネギにその姉さん方、立ち止ま  
つてないで走らないと間に合わないんじゃないかねえの？」

「「「あ」「」」

「つーことでお先ー」

「ああ、待つてよ兄さん!？」

「……あ、ちよつ、ちよつと待ちなさいよー! その対処方を教え  
なさい!」

うん、取りあえず学校に着いてからな。分かったかい？

「……神楽坂 明日菜」

とギリギリ間に合った俺らは、なぜか彼女からシャイニングフィ  
ンガーを決められていた。

「さあ、いち早く教えなさいガキ共、ハリーハリーハリー！」

「ぐおおおお、お前なんなんだよ！ ドオンか！？ それともア  
ードか！？」

「ぴぎゃー！ ととと取りあえず落ち着いてえええ！」

痛いです。これ絶対人間の出せる握力じゃない。まず俺らが九歳  
とはいえ、それを中学一年が片手で、しかも手だけを使って持ち上  
げられるか？ 大の大人でも出来ない人の方が圧倒的に多いぞ、お  
い。

「落ち着いていられるもんですか！？ いきなり失礼なことを言っ  
て、でもチャンスだ！ とか言われたら居ても立ってもいられない  
わよ！ 十代女子を舐めんじやないわよお！」

「ごめんなさい！ 舐めていましたああ！」

「ごめんなさい！ 許して痛い痛い痛い！」

「ははは、そこら辺で許してくれるかな、アスナ君？」

職員室の窓から手を振っている男性が居る。顎には無精髭を生や  
し眼鏡をかけている。俺らの知り合いの中で、そんな特徴を持って  
いる人物は一人だけだ。



「た、高畑先生っ!?!」

高畑・T・タカミチ。『紅き翼』、つまり父の仲間であった一人  
で、現在は各地の紛争に介入している『一悠久の風(AAA)』に  
所属している。その格付けはAA+。そんな強くて立派な人物なん  
だが……

「おい、タカミチ。お前部屋が汚くてヤニ臭いって理由で俺らの下  
宿先の候補から外れたぞ」

「は、ははは、それは悪かったよ。クギ君」

「げ、知り合い……!?!」

「こら、兄さん! ……ごほん、お久しぶりです、高畑『先生』」

「うん、おはよう。ネギ『先生』」

「え……せ、先生?」

「あ、はい。そうです」

コホン、と一つ咳をつく。

「この度、この学校で英語の教師をやることになりました、ネギ・  
スプリングフィールドです」

これが、始まりの合図だ。

そのことを、俺たち以外は知らない。

ある者は剣を研ぎ終えた。ある者は計画を想った。ある者は召還された。ある者はこれに忌避感を覚えた。ある者は瞑想から覚めた。

出席者は揃った。道<sup>コース</sup>筋も決めた。後はその腕を存分に振るってくれ。

全員が狩人で、全員が獲物の大狩猟が。

「ちっ」

小さく呟く。確かな始まりを感じて。その始まりに歓喜して。

「……狩りを始めようか」

原作開始だけど何か？（後書き）

最後ちよつとくどかつたかなー、と思いつつ更新。

さて、さてさて、遂に原作開始です！ いや、長かった。

大戦の辺りを書いていないのにここまで長くなるとは……。

感想・評価も宜しくお願いします。

初授業だけと何か？（前書き）

どうも、金です。

ひゃっはー、久しぶりの連投う！

ではどうぞ。……マジでねみい。

初授業だけど何か？

目の前には、横にスライドされる扉がある。その上部には2 - Aと書かれている。

……いやしかし、初授業は結構緊張するな。幾ら後ろで前任の先生がいても、いや逆に緊張するか。

すでに数人は顔見知りな訳だが、いやあれって俺じゃなかったもんなあ。というか、あれって確実に黒歴史だよなあ。恥ずかしい、恥ずかしいよ。どんな顔を向けてあいつらと話せばいいの！？

はっ！ いけない、いけない。マイナス思考スパイラルに入るところだった……。

しかし、もうそろそろだよな。気合い入れようか。

なんて考えているうちに、チャイムが鳴った。

よし、いこうか！

そう、勢い良く扉を開いた。が……。

「バビュッ!？」

突然頭上から落ちてくる落下物に対処できずに、間抜けな声を出してしまう。

「ぐおお、目があああ……」

あれだ、障壁張っていなかったからもろにチョークの粉が目に入ったんだよ、うん。

しかしトテトテと僅かに前への歩みを止めないが、それが悪かった。

「ドボツ！ ベフツ！？ ビブルチツ！？」

縄に躓き、水入りバケツが落ちてきて被ってしまい、矢（鏝の部分）がゴムのやつ（）が突き刺さり、教卓にぶつかる。

……会ってもいないのに嫌われているんですか？ 泣いても良いですか？ 帰っても良いですか？ ぶっちゃけ、着替えたいです、水でビショビショです。

教室からは笑い声上がる。成る程、てめえらが犯人ってわけか。でもその前に、

「お、お、お、頭が割れるう、尻が割れるう、取りあえず着替えたい」

泣き言言わせてください。さすがに言わんと耐えられない。

そう言っている間、教室中の笑い声が静まる。そして、

「ま、また子供おおッ！？」「」

取りあえず、何度も言うが着替えたいです。

「あー、今日から今学期一杯だが、お前らの数学担当になったクギ・スプリングフィールドだ。当初の予定より三倍ほど厳しくしていくつもりだから、よろしく頼むぞ」

「「「な、なんだってーっ!?!?!」」」

うん、お前らはネラーか、それともビップか？ いいから静かにしろ。

「ん、ちょっと待って」

二本のアホ毛、というか触手が頭から生えている女子生徒が突然その流れを止める。……あれだ、Gだ。黒光りのGだよ、きつと。そんな面影が見える。

「スプリングフィールド、ってネギちゃんと同じ名字じゃない？」

「はっ、そ、そう言われればそうだ！ ハルナには良く気が付いたねー」

「何よそれ、ヒドい!?!? ん、ちょい待ち。ていうことは……: 兄妹!?!?」

「そつだ、双子だ。んで、なんか文句あるか？」

生徒たちの視線は、さもありえん、というものだった。失礼な、  
真正銘双子だぞ、たぶん。

「ええー、なんか可愛気がないって言うか……」

「なんか不良チック？　みたいなの……」

「面影ナツシングっていうか……」

「全然似てないにゃー」

「なん……だと……っ!？」

「いや、先生も中々のネラーじゃん」

これは前世の記憶であって、今世の俺はネラーじゃねえもん！  
ビップだけだな。

「取りあえず、好き勝手に良いらしいので、初っぱなからテスト  
やりまーす」

「」「絶対さっきの腹いせでしょ!」「」

「面白い！　最初からテストをする予定だったんだ！　まあ、問題  
数増やしたりちよつと難しくはしたが。ごほん、んで合格点70点  
以上を取らなかつた者に関しては特別課題を出すのでそのつもりで  
まあ、授業をちゃんと受けていたなら余裕でそんな程度の点数は取  
れる問題だから、安心しろ。だがまあ、このテストで流石に50点  
未満の場合は補習にしようかな。ま、いないとは思っけどな！　俺  
に余計な手間を掛けさせないよう、ちゃんと全員70点以上取れよ



な！」

「……だつたら最初からすんな！」

尤もな意見だったが、無視してテストを配り始めた。

クギの授業後、クラス内ではため息を吐く生徒が多数いた。

「ふー、初授業でいきなりテストって、どういうことよ」

「まあ本当に簡単だったからいいじゃん、別に」

「まあねえ」

そういつて会話をしている彼女たちだったが、そういえば、と言葉を紡いだ。

「最近、なんか外から来る人多くない？ ほら、前に潰れた服屋があつたじゃん。あそこについてこの前新しい喫茶店が出来てさあ」

「ああ、知ってる。なんだか評判の所でしょ？ すごく紅茶がおいしいって噂の。……でも、そういわれればそうね。先生の数もなんか増えた気がするし。なんだかお店も増えていつてるわよね。基本装飾品とか喫茶店ぐらいだけだ」

彼女たちが言っていることは正しい。この麻帆良学園は最近人工

が増え続けていつている。職員然り、店舗も然り、はたまた清掃員の数も増えていつているのだ。

急激に増え続けていつている人工だが、特に麻帆良学園に悪影響は出ていない。麻帆良学園には、だが。

その生徒たちは違う。増え続けていつている人工に、恐怖を覚えているのだ。それに中々気が付いていないのだが、無意識の内にそのことに忌避感を覚えている。若者の直感と言っものだろうか、それはその異常に危険を感じとつているのだろう。

「うーん、なんだか最近変だにゃー！」

「まあ、あんたがそう言っんなら、大体間違いはないわよねえ」

柿崎 美砂と椎名 桜子の行間休みはそんな話で幕を閉じてゆく。

「なんと言っことでしょう……っ！？」

あの授業後、テストの丸付けをしていたのだがどういっことが、70点未満の生徒が7名、しかもその内の2名が50点未満という結果だつた。無惨なり。

しかし、このテストで70点未満の点数を出す生徒は結構酷かつたりする。普通の高校に受験した場合、他の科目が断トツに良くなければ入学できないくらいに。まあ、中学一年の後半だから、まだ

挽回の仕様が付く。

しかし、本当に中学一年なのだろうか。どう見ても高校生くらいの身長、というかプロモーションというか、中学生のそれとは断然違う。絶対違うだろう、あいつら。年齢偽ってるだろう、どう考えても。

体つきがエロいじゃん。中学生じゃないよ。厨2君がしつこく誘ったって聞いた時は変態野郎、って思ってたけど、しょうがないじゃん。たぶん他の奴らも誘いたかったんだろうな、きっと。……ん？ どういうこと？

まあいい。それは隅に置いとくとして、帰りのホームルームに課題を渡してくれるようにネギに頼むか。あと、補習の該当者も。

……着た瞬間に忙しくなるなあ、ここ。

はあ、とため息を付いてパソコンを起動させた。

「あ、いたいた！ おーい、クギセンサー！」

「んあ？」

授業も終わり、帰宅しようとしていた時に、後方から呼びかけられる声を聞き取ったので、後ろを見る。

するとそこには2・Aの生徒が二人、こちらに手を振ってきてい

る。

「あー、えーと、明石 裕奈と佐々木 まき絵、だっけ？ それで当たってるか？」

「うん、当たってるよー」

「そんで先生、この後歓迎会をするから三時半頃にネギちゃんとかーニヤちゃん達と一緒に来てね！ 場所は2-Aだから！ じゃ、そう言うことで！」

「またねー！」

「お、おう……」

何という中学生パワー。その秘めたる力は壮絶なものであった……なんて感じだろうか。うん、凄いつすね。

「……あ、ネギ達どこにいんだろ」

探すのかあ、めんどくさいなあ。ま、魔力を探ればすぐだからいいか。

「……あいつらは、どつだ」

女子校中等部の近くにある、森の中で、いくつかの影が蠢いてい

た。

明らかに、その目には敵意と悪意、そして殺気を秘めていた。こんなところでそんな目をする人間は限られてくるだろう。

くぐもった声で他の影に問う言に対し、他の声が返答した。

「まだ、転生者とは断定出来ん。イレギュラーの可能性が否定出来ん状況だ。彼女らの仕掛けたトラップにみすみすはまっていたしな。彼の行動には、どうも原作知識が無いように見える」

「それがブラフという可能性もある。あいつ、学園長室で他の奴らに大判震いをしていただろ。それに、プロフェッサー教授」なんていう二つ名もあり、魔術を使用する。あの馬鹿共の攻撃も全て避けていたしな。これだけ揃えば、転成者の線が強いだろ」

別の声の反論に、大勢の影が同意する。先の影も、それには同意していた。

「後は、ネギとの関係だな。兄と言うところまでは分かったが、アンチ派か、それとも擁護派か、まだ分からない。魔術を使用している点では、アンチ派の線が強いというのが我らの団体の意見だ」

「だが、学園長室での会話を思い出して見る。擁護派の可能性が高いだろう」

「まあ、上げるだけ上げて、最後に一気に落とす、なんてことを考えていた強者がいるんだ。案外、それかもしれないよ？」

「現状では、転成者の可能性大、というところしか分かっていない。

よって、今後の行動を見て、どのように接触するかを会議する。

全てはアンチ・ネギのために」

「「「全てはアンチ・ネギのために」」」

影が、四方八方に飛び散る。そんな中、一つの影が残っていた。

「……このかけ声、なんか馬鹿っぽく聞こえるんだが」

彼の真つ当な意見を聞く者は、森の木以外に誰もいなかった。

「ふむ、この辺りの筈なんだが」

僧衣に身を包んだ日本人の男は、そう口にする。

肩辺りまで切り揃えられた黒髪に、独特な声の持ち主である彼は、キャリーを転がし、地図を見ながら進んでいた。行き先は教会。確かに、この辺りにあるはずの教会だ。

「うう、迷ってしまいました。困りましたねえ」

そう聞こえた右方を見れば、また僧衣を来た白人の男が現れる。

腰辺りに纏められた金髪を揺らし、眼鏡を掛けた男はキョロキョロと辺りを見渡し、彼と目が合う。

「ああ、貴方も教会に行くんですか？」

「ええ、そうです」

両者ともに微笑みを浮かべる。自分だけではなかった、そういう感情があるのだろうか。

「ん、キャリアを持っていると言うことは……ああ、今日いらつしやる神父でしたか。いやはや、これは挨拶が遅れて申し訳ございません」

ペコリと会釈をする、金髪の彼。そうして、自己紹介を始めた。

「初めまして、 ヴアレリア・トリファと申します」

「こちらこそ初めまして、 ことみね 言峰 きれい 綺 礼と言います」

歪んだ神父達の、普通で捻れた邂逅である。

初授業だけと何か？（後書き）

徹夜で書き上げたにしては良い出来だと自負している今回。……  
徹夜にしては……ですよ？

感想・評価をお待ちしています。



歓迎会だけと何か？（前書き）

どうも、金です。

連続で投稿です。

ではどうも。

歓迎会だけど何か？

さて、魔力を辿ってネギを探していたのはいいが、その途中で少々危ない光景を目にしまった。

「あれは確か……宮崎 のどか、だっけ？」

何冊も積み上げられた本を持って階段を下りているのはあまりにも危ない様だ。ちよつと手伝った方がいいよなあ、あれ。

「おーい、宮崎 のどか！」

「え……あ、クギ先生」

「ちよつとお前危ないから、何冊か持つよ。ちよつと待っていてくれ」

「は、はい。ありがとうございます」

うん、これで転倒の心配はないな。……しかし、これって原作ではなんかのイベントだったのか？ そこら中に転成者がいるぞ？ しかも、俺に殺気とも言える感じの視線を向けているし。全く、イベント一つ潰されたくらいでそう殺気立つなよ、おい。

「んじゃ、6、7冊くらいは持てる。どこまで運べばいいんだ？」

「え、ええと、図書館までです……」

「そうか、んじゃあさつさと運ぶか」

こうして、図書館まで一緒に運ぶこととなった。

「ちっ、なんだよあいつ。やっぱり転成者じゃねえのか」

あの森の中の影の一人、かいせん界戦 げつこう月光 は舌打ちを一つ打つた。

彼は男子校高等部の常任教師であり、また転成者でもある。彼の目標はネギのアンチとハーレム化であったが、その夢は既に砕かれているのと同然であった。

まず、女子校中等部の教師を志願した月光であったが、現在の勤め先に選ばれてしまった。これはもう、ハーレム化が出来ない状況を作り出されてしまったのだ。

そんなことより、大前提としてはこの麻帆良には現在多くの転成者がいる。そのほとんどの願いの中にハーレム化があるのだから、難しい。

それに、ネギのアンチ。男子ならまだ出来たであろうが、現実女子であった。しかもあの厨<sup>2</sup>がしゃしゃり出てこちらが現在睨んでいる奴に、軽々と論破されてしまったのだ。

「くそっ、あの野郎。いつか殺す」

ぎりつ、と齒軋りの音が聞こえる。いつしか、彼の姿はそこにもう無かった。

「くそつ、さらに離れる羽目になっちまった……」

そう愚痴をこぼしても、距離は縮まらない。そう心に言い聞かせながらネギの魔力がある方向へと、足を向けた。

図書館に本を返した宮崎と俺は、歓迎会までの時間が迫っている殊に気付き、少々挨拶を交わして別れることにした。

とはいっても、俺はネギを探さなくてはいけないから面倒なんだけどな。

「この方角は……校舎側か。一石二鳥じゃん、ラッキー」

鼻歌を歌いながら歩むが、どうやら周りがおかしい。

「……結界か？ 種類は人払い。かなり強力な奴、魔術師でも入れないくらいに。それをこちら一帯を覆っているな。ドーム状だから、空からも警戒している、と。」

……くくつ、成る程成る程。この空間すら歪ませる禍禍しい魔力、この濃厚で粘着質な殺気を孕んだ視線、この草々木々が泣き叫び命を乞う存在感。

Good! いい、いいぞ。お前は、争いを望むか、闘争を望むか、戦争を望むか!？」

「違うな、餓鬼。その何れでもない」

響くように聞こえる、幼童の声。だが、そこには傲慢と嘲りがあった。

「では、何を望むんだ? 吸血鬼、ドール・マスター闇の福音

(ダーク・エヴァンジェリン)」、「人形遣い、

『不死の魔法使い』。奴隷か、生命か、娯楽か!」

「頸血だよ、英雄の子、プロフェッサー教授、エンジェル・リンカー天使喚起者

、シロモン『魔術王』。貴様と、貴様の妹が流す、その忌々しくも慾火に駆られる、真っ赤な血だ。その血、地上に散らせて、睨らせて貰うぞ」

空気は一変して、コロシアイのものへと変わり行く。

「と思っただが、生憎夜でもなく満月でもない。いくら私でも勝てない戦いには赴くほど暇ではなくてな。残念ながら、今回は宣戦布告で止まらせて貰おう、教授」

「はあ、残念だ、闇の福音。是非とも普通の授業だけでなく、こっちの授業も受けて欲しかったんだけどなあ」

「ふん、ほざけ。教えられるどころか、教えて貰う立場だということをお忘れなよ」

結界は解け、彼女の気配も消える。全く、血の気の多い怖い奴だ。

「怖い怖い、身が竦みそうだ」

いや、結構マジで。

あのあと特に何もなかったので、校舎に行っている途中ネギと偶然出会い、そのまま2-Aへ行った。すると、

「「「ようこそ、ネギ先生ー、クギ君ー、アーニヤちゃん!」」」

「あ、おいちょっと待て! なんでネギには先生付けて、俺には付けない!?!」

「えー、何か先生って言うよりは、友達みたいな? 子供みたいな?」

「ネギ先生よりなんか子供っぽいしねえ」

「ええい、どういことだ!?!」

何てこつたい!?! 信用というか、2-Aで俺への何か失われ  
ていつている!

「ま、別にいいんだけどなー」

オレンジジュースを片手に、ポテチを口へ運ぶ。……うん、美味しい。これだよ、これ。オレンジジュースとポテチのコンボは最高であって、至上だ。これ以外はファ タオレンジのみ認め、その他は認めん。

「全く、いつつもポテチにはコーラだって言っているのに……」

何か言ったかね、アーニヤ君？ そのコンボのカロリーはハンパないよ、極上に。

「うわー、いきなり馴染んでるよねクギ先生とアーニヤちゃん。ネギちゃんなんか余所の家の猫みたいになってんのに」

「適応能力が高くなきゃ、人生損するぞ。まず美味しいもんを放っておくなんて論外だ論外」

「人生経験積んでる人みたいなこと言うね、クギ君は。でもなんか子供っぽいよねー。なんでだろ？」

「たまーに爺臭いことも言うのよ、こいつ」

まあ、中はもう二十代突入していて、精神が体に引っ張られていくからな。そんなアンバランスな精神状態なんだから、何を言ってもしょうがないんじゃないのかなあ、うん。

「あ、兄さん……」

「ん、どうしたネギ？」

「ちょっと後で話があるんだけど……」

ネギが何やら怯えているように見えるが、どうしたのだろうか？  
こういつのつて結構珍しいんだよなあ。結構肝っ玉大きい方だし。

そんな、楽観的に考えていたのが間違いだったと気付かされるとは、思いも寄らなかった。

「そういえばヴァレリア神父、この教会には何人の神父と修道女がいるのですか？」

「ええ、神父があと2人います。修道女の数は3名に、見習いが1名。そして私の合計7名です。それに本日から綺礼神父、あなたがいらっしやっただので8名ですね。全員とても優しく、面白い人たちです。」

前は人がいなかったもので、ずいぶん広く感じていたのですが、最近はとても狭く感じてきましたよ」

だが、その顔には全く不快なものを感じさせる表情はなく、朗らかに、柔らかな笑みを浮かべ喜んでいるようにも見える。それに言峰は微笑む。

「そうですね、それは楽しみですね」



カラカラとキャリアが音を立てて、動いていく。

しばらく話していると、教会が見えてくる。その玄関には、一人の神父が玄関を掃除していた。

「ああ、やっと来ましたか、ヴァレリア神父。どこに行っていたのですか？」

心配、というよりはあきれた声色でヴァレリアに聞いたのだした。

「申し訳ございません、迷ってしまっていたものですから」

「私よりも前に来ているのですから、覚えていただかないと……こちらには？」

「ああ、彼は本日、この教会に来る予定だった神父です」

「初めまして、言峰 綺礼といいます」

言峰の眼前には、一人の神父がいる。それはあまりにも神職とはかけ離れている顔である。

類には無精髭と、一つの太刀傷。ヴァレリアと同じく眼鏡を掛けている、がヴァレリアの人柄のいい顔とは対照的に彼の顔は恐ろしいものだ。

「初めまして、言峰神父。私はアンデルセン、アレクサンド・アンデルセンです」

ガチャリ、とアンデルセンの後ろにある教会の扉が開いた。

「アンデルセン神父、教会内の掃除が終わりました。ん？」

現れたのは、180cmの長躯の白人男子だ。

赤く染めあげた髪に、目の下のバーコードの入れ墨は神職者とは思えない。

「丁度いい。こちらは言峰 綺礼神父だ。挨拶しなさい」

「初めまして、言峰だ」

言峰が差し出した手を、この少年が握り返す。

「初めまして、言峰神父。僕はステイル・マグヌスです」

「この世で、最も混沌な教会が、麻帆良の地で出来上がった瞬間である。」

歓迎会だけど何か？（後書き）

教会をカオスにしちゃった

別にヘルシングを見たから、ってわけじゃないですよ？……本当ですよ？

感想・評価をお願いします。



説得するんだけど何か？

「なに！ 魔法がバレただとう！？」

今現在、歓迎会が終わった後、ネギの口から述べられたことは、魔法バレについてだった。

「な、なんで！？ どうして!？」

しかも相手は明日菜とのこと。いやはや、嫌なところは原作遵守のこの世界が腹立たしい。というか、本当に何でバレたの？

「あの、そのう」

「お兄ちゃん怒ってないから素直に言いなさい」

まあ、怒ってはおらんよ。人のこと言えないし。例えばさつきエヴァンジェリンとガチで戦いそうになったし。絶対このことネギには言えない。殺されるくらい怒られて泣かれるもん。

「う、うん。」

あれは数時間前のことだった……」

ナレーション風やめい。

「成る程な。掻い摘んで説明すると、女の子が男子生徒に絡まれていたからその仲裁に入った。んでその時バレないように魔法を使ったのはいいんだけど、その外にいた明日菜にはバレた、と」

「うん……ごめんなさい……」

「まあ、いいんじゃないのかなあ。しょうがないことだったんだし、別に悪いことをした訳じゃないんだろ？」

こんな軽く言っているけど、結構重大なことだったりする。

基本的に魔法バレがあった場合、その対処は大きく2パターンに分けられる。

共通点は、まず魔法について説明するところだ。

なぜかと言えば、最近とはいっても4、5年前だが魔法バレの対処についての法律が変わったのだ。

何故なら、忘却魔法の弱点というか、欠点が見つかった。それは、脳への障害が出来る、というものだった。忘却魔法は、絶対的に記憶から消す目標に関しての情報は一切無くなり、後に思い出すことは無い。一見、とても使い勝手の良い魔法なのだが、実際のところそれはつまり脳へ直接魔力を当てるというものなのだ。これに似たものが、俗に言う摩導書、特に読者を狂気に駆らせる禁忌指定のものに似ている。

まだ魔法への耐性があればいいのだが、それが無い一般人は脳に

障害が出来てしまうのだ。その症状はまちまちなのだが、絶対にある。

……ぶっちゃけ、明日菜が馬鹿なのもそれが原因だったりする。授業の際は一切合切容赦はしないけどな！

閑話休題。

説明後、彼らには二つの道が与えられる。

一つが魔法を忘れ、無関係の道を歩むこと。

正確には催眠術だ。催眠術と忘却魔法の違いは脳に働きかけて忘れさせるか、ダイレクトに忘れさせるかの違いだ。忘却魔法は問答無用で忘れさせるのに対して、催眠術は被催眠者が忘れたという思いがなければ無効化されてしまうという面倒極まり無いものだが、従来の忘却魔法に打って変わるものが、これしかなかったのだ。

そしてもう一つが、魔法を身につける道である。

魔法を身につける理由が、外からの攻撃から守る術を得させるためだ。魔法を知っていると、何故かどうしてもそういふものに巻き込まれてしまうことが統計上多いことが判明した。なのでそんなものから身を守らなくてはならない。のだが四十六時間、常に近くにいるわけでもない。なので自身の身を守るためにも魔法を取得させるのだ。勿論、その間の魔法のコーチは近くの魔法学校に行かなくてはならないのだが。『裏』関係の教会でもそういうのは教えているので、どうしてもと言う場合はその教会に行けばいい。

……まあ、才能が無くても防壁を張るぐらいのことは可能だからな。

そして後者の場合は教会に連絡しなくてはならないと言うのもあるな。……めんど、しかもなんか嫌な予感しかしないのは何故だろうか。気のせいであって欲しい。

閑話休題。

とまあ、そのご本人が目の前にいるので、ちゃちゃっと説明して聞くことにした。

「んで、どうする。危険を捨てて忘れるか、それとも危険と共に魔法を得るか。まあお前は才能あるから結構出来ると思うぞ、魔法」

「え、と……もっと簡単に説明プリーズ」

「ぶつちやけ、魔法は超危ない。これに尽きる。魔法を使うにも制約が多いし得るまでがダルい。免許もいるしな。しかも魔法を使っていると魔術を使う奴が、なにやっとなんじゃボケェ！ って具合に襲ってくることもしばしば。例外はいるけど」

うん、忘れる方を選んでくれ、まじで。

「それってつまり、コツ掴んだら、勝ち組って訳ね！ 魔法習うわ、私！」

「俺の話聞いてたか、馬鹿！？」



「と言うわけで、明日菜に魔法がバレちゃった　ゴメンね、悪気はナッシング」

と、オフザケ半分でタカミチに謝ったら、俺めがけて居合い拳使われた。こんな謝り方したら、当たり前前っちゃあ、当たり前なのか？ というより、何で俺？ ……いや、本当に悪かったです、はい。だから感卦法使おうとしないで。

「……まあ、聞くところによるとしようがなかった様だから良いとして。明日菜君、本当にこっち側に入り込むつもりかい？」

コンクリートが剥き出しで設計された生徒指導室の中、タカミチが明日菜に最終警告を行っていた。

タカミチは新しく取り出した煙草を口にして、ライターで火をつける。ふう、と息を吐いて、明日菜と正面から向き合った。

「こつちの世界は、君が思っているほど甘くはないよ。文字通り今日の味方が明日の敵、なんてこともざらにある。さらには、結構色々な組織が複雑に絡み合っているんだ。魔法団体に魔術協会、旧リック派プロテスタントと改派カトに分けられた十字教会や、各国家機関、亜人集団、秘密結社、数えていったら切りがない。それにこれらにはさらに無数の組織や派閥、連合なんかもあるんだ。……それに、全部がそれぞれで醜い争いをしている。もし君が希有な魔法の才能を持っているとしたら、そういう奴らに利用されることが目に透いて見える。中学生程度の力なんて、たかが知れているしね」

タカミチがフツ、とどこか憂いているようにも感じられるため息を吐く。……それもそうだろうな、後悔しながら彼女の記憶を消して、必死に今までこのことを隠してきたんだ。こうならない方がどうかしている。

明日菜も明日菜で、やはり憧れの先生からそんなことを言われたからだろうか、言葉を詰まらせている。こんなこと言われたら、誰でもこうなるな。

まあ、この空気なら彼女も素直に魔法を諦めてくれるだろう。これで諦めなかったら、ただの馬鹿か、好奇心の塊だろう。彼女はそ  
のどちらにも当てはまらない様な人間だからな。

「……」

「……」

生徒指導室内で沈黙が続き、そして彼女は決断した。

「私、やります」

「……何でだい、明日菜君？」

「だってわたしは中学生ですけど、ネギ達はそんなわたしより幼い」

それは、道理が通っていない。

すかさず俺がそう反論しようとする、タカミチが手を翳して止めた。……お前は、彼女をこちら側に帰させたくないんじゃないのか？

「だったら、誰かが手伝わなくちゃいけないじゃないですか」

「でもそれだったら、僕ら教員、魔法先生でも十分事足りるよ」

タカミチが反論する。

「先生達は、大変じゃないですか。タカミチ先生だってそのことを前に愚痴していましたよ」

口実を与えてしまったタカミチがおつ、と驚く。まさか何気なく言った愚痴が口実になるだろうとは思っても寄らなかつたのだろう。

「でも、生徒は違うと思います。先生達より時間はあるし、なにより歳も近いから話し相手としてはこっちの方が適しています」

すらすらと、明日菜の口から反論が出る。まだ、続く。

「それにネギから夢があるって聞きました。……それを手伝うくらいは、いいんじゃないんですか？」

明日菜の視線がタカミチに刺さる。タカミチは彼女の言に目を見開いて、先ほどとは違う驚きを見せている。それは、虚を突かれたものに近い。

「……とても、厳しいものになるよ」

「覚悟の上です」

「……壁に突き当たるかも知れない」

「そんな壁、壊します」

「……勉強と両立できるのかい？」

「うっ……が、頑張ります！」

「ふふっ、そうかい」

ガタツ、と椅子から立ち上がる。明日菜の頭へ手を伸ばして、ワシヤワシヤと撫でた。

「それじゃあ、頑張るんだよ。……ネギ君にクギ君もよろしく頼むよ。僕は魔法が使えないから」

「私がバラしちゃったからね、当たり前だよ」

「明日菜、その言葉、確かに聞いたぞ？ ま、授業の3倍くらい厳しく行くからな、覚悟しておけよ？」

「ちょっとくらい容赦してくれてもいいじゃない!？」

「ハハハッ、それじゃあ僕は退散させてもらっつよ」

そう言って、タカミチは生徒指導室から出ていった。

屋上。そこにはだいぶ前に部屋から出ていったタカミチと先ほど出た俺がいた。

「……ふう、そうか。夢を叶える手伝いをしたい、か」

煙がモクモクと上へ、空に向かって上っていく様を見ながら、そう呟いた。

「なあ、タカミチ。なんで明日菜を止めなかったんだ？ お前は、あいつに魔法とは無縁の生活をさせたかったんじゃないのか？」

「まあ、そうだったんだけどね。気が変わっちゃって。もしあの娘が望むんだったら、好きにさせてもいいかな、って思っちゃったんだよね」

ははは、と力無く笑うタカミチの顔には少々の後悔と、多々の満足感。

息を吐くのと共に、白い煙がタカミチの口から出る。

「……師匠、これでよかったですよね」

彼が小さく呟いたそれは、俺の耳に嫌に付いた。

説得するんだけど何か？（後書き）

はい、明日菜はこっちに来させました。そうじゃないと話進められないし。……オリ設定のところとか結構無理矢理感が否めませんが、これでいいかな？ ぶっちゃんけネギ君（原作）なんで魔法バレた後記憶を消そうとしないのかな？ なんて書いてて思いました。……まじでなんでだろ。

そんな思いを消さんとこのオリ設定です。

それよりとモノ。F a n a i オモシロすぎる。今回もいい感じにやり込めそうです。……いや、やってたから遅れたわけじゃありませんよ？（汗）

感想・評価の方も宜しくお願いします。真面目な話、頂けるととても嬉しいし、やる気・モチベも上がります。こういうのに左右されないよう頑張らなければ、とは分かっているんですが、どうしても左右されてしまいます。

グダってすみません。今後も宜しくお願いします。

明日菜が強行突破するようだけど何か？（前書き）

ぎゃー、昨日の金はなんてことを!？

……忘れてください、ええ忘れてください。きっとたいちよウガ  
ワルカッタカライケナインダ。キットソウニキマツテイル。

という事で謝罪の念も込めて、どうぞ。

明日菜が強行突破するようだけど何か？

その頃、ネギと明日菜の二人は学園長室へと行っていた。

「学園長、ネギとクギ、私の部屋で一緒に暮らすことにしようと思  
うんですが、いいですか？」

「ほっ？」

学園長が、目を見開いてそういった。無理もない、何故なら近衛  
近右衛門は神楽坂 明日菜が子供が嫌いということを知っており、  
なおかつそのことを覚えていたからだ。

さらには、当初それを予定していたが多くの魔法先生・生徒らか  
らそのことについて反対され、その妥協案として自身の秘書である  
ホームクルス 人造人間、しずなに彼らの世話をさせることにしたのだ。今更その  
妥協案を反故することは、トップとしての威厳が損なわれることを  
意味している。故に、この提案は受け入れることが出来ないものだ  
った。

（うーむ、こういう類の人間は取引を強引にしてしまうからのう。  
あんまり期待出来んのお）

一度肩を落として落胆したが、目の前の少女に視線を向けた。こ  
ちらに向けてくる視線が輝いて見える。

「で、明日菜君。その提案をするということは、こちらのことは？」

「ええ、知っています。さっきクギとタカミチ先生から教えてもら



いました」

「ほっ！？ ……タカミチ君も？」

「ええ」

まさか、タカミチが許可したとは思わず、彼を呼んで説得しようという考えが効力を失った。最も効果のある説得方法だとは思ったのだが、それが無くなったとしたら更に見込みが無くなる。まさに窮地に立たされた気分であった。

「木乃香はどうじゃった？」

「許可はもらいました」

「部屋が狭くなるのう」

「元々3人部屋だから大丈夫です」

また案が潰される。思考を巡らすが、良い案が思い浮かばない。物分かりの良い人ならまだ説得できるのだが、彼女のよう人間は交渉の余地がないことを経験上知っている。さっさと諦める方がいいの、と考えるのを辞めた。

「……はあ、分かった。では許可しよう。じゃが、クギ君は駄目じや」

「えっ、何ですか!？」

バンツ、と机を叩きつけてその声を上げたのは明日菜ではなく、

ネギだった。彼女はクギに対して家族に向ける愛情ではなく、どちらかといえば異性に向ける愛情を持っている。そうなれば愛するものとは別れたくないのは、当然のことだ。勿論、学校では会えるが。

「クギ君は男の子だから、さすがにマズいし、彼自身も拒否するじゃろう」

彼自身の心情など知らないが、年頃の男子だ。そう思うだろうと適当に判断する。正直なところネギ自身も入れると危ういのには、さらには性別では男であるクギも一緒に入れてしまつと逃げ場が無くなってしまふ。ここまで拗らせたのだから精精利用させてもらおう、そういふ魂胆であった。

「……日本の憲法では、十歳未満の子供は性別は混合されると聞きました。兄さんはまだ9歳です」

「……ほう、良く知っておるの」

まさか知っているとは思ひも寄らなかつた彼は、賞賛の言葉を口にする事しかできなかつた。

「それに兄さんはどちらかというど、口では拒否するけど内心喜ぶんじゃ……」

「どづいづいことかの？」

「いや、兄さんちょっと増せているんで」

「……それって、尚更駄目じゃない？」

「あ」

明日菜のツッコミで自身のミスに気付く。結局自分で墓穴を掘ってしまったネギであった。

「うう、残念です。兄さんと一緒じゃないなんて」

「ま、まあ残念だったわね」

最終的にネギのみが移動することとなった。実のところアーニヤとウィルも共に移動することになった。彼女は綾瀬 夕映、早乙女 ハルナ、宮崎 のどかの寮室へ入寮、彼は男子寮の3人部屋で空いているところがあったのでそこに、ということだ。

閑話休題。

移動しない、という手もあったのだが明日菜に魔法を教えなくてはならず、最も手つとり早いのが部屋で魔法を教えるといった案である。

「でも、部屋の中で魔法を教えるもいいの？ 誰かにバレるんじゃない……」

「そのことに関しては大丈夫です！ ふっふっふー、こんなこともあるつかと……」

ゴソゴソと自分の荷物を探り、何やら何枚かの紙を取り出した。

「じゃんじゃじゃーん！ 私特製認識障害結界符ーっ！ 私が兄さんから魔術を習い始めてから、ずっと研究してきた努力の賜物が、この符なんですっ。これなら大半の人は騙しきれますよ。なんせ兄さんを14秒間騙せられたんですから！」

「たった14秒じゃない？ どこがスゴいの？」

そう疑問に感じるのは、至極当然のことである。なんせ14秒とは一瞬とは言わないものあまりにも短い時間だ。そう驚くほどのものではなかった。

「普通魔法を知っている人は認識障害結界の効力は減るものなんです、しかも時間が経つにつれて。そしてその中、世界でトップレベルの魔法抵抗力レジストを持ち、常にそういう類のものをシャットする結果を身の回りに張っている兄さんが、14秒騙し通せるのは魔法大学の教授やら魔法国家の研究員でも不可能に近いことですよ？」

そうなのだ。これは事実であり、彼自身も自分の口内に舌を入れられ14秒経ってやっと正気に戻ることが出来たのだ。そんな代物が魔法抵抗力を鍛えていない人に使われたら、むしろ違和感に気付くという方が難しい。訂正させてもらえば、鍛えていても難しい。

「ただ、準備に時間が掛かっちゃうのが欠点ですね。制作に5ヶ月下準備に10時間、発動に20分必要なのに対して、14秒しか効かないのは割に合いません。……普通の人は一生効きますが」

逆に、たったそれだけの時間で彼を14秒騙すことが出来るのは奇跡に近いのだが、どうやら彼女が必要とする時間はそれだけでは

足りないらしい。

「ふーん、まだワタシは詳しくないからよく分からないけど、スゴいってことは分かったわ」

そういつて、明日菜は符に触れた。すると、

「……あれ？ 魔力が通らなくなった……？」

さあつ、とネギの顔が青くなる。バツ、と眼前に近づけ、必死に力を込める。そして、魔力が通らなくなったことを改めて確認した。

「な、なんで？ お小遣い全部使ってこの前作り終わったばっかなのに!？」

「え、えーと。ごめん？」

明日菜は、取りあえず謝っておくことにした。

「……どうやら、ネギ・スプリングフィールドがアスナ姫の寮室を共にすることになったらしい」

影が、また集った。

「ふむ、あのクギ・スプリングフィールドはどうなった？」

「彼はしずな宅に続けて泊まることにしたらしい」

「まあ、薬味が女だったことから、我々にもチャンスが出来たな」

「しかし木工道具がいるぞ。奴はどうする？」

自身の考えを述べていく。

「我々『AN/F2A』は様子見に1票だ。クギとやらが アンチネギ 同胞  
であることを願いたい」

「僕ら『ネギをぶつ殺し隊』改め『クギをぶつ殺し隊』はクギ暗殺に1票。どうやら彼、いろんなところから恨まれているらしいよ？  
まあ、大体が悪いことをしている奴らからだけだね。だからそいつらのせいにして、もしくは事故に見せかけて殺すつてもありだね。ふふ、協会には知り合いがないようだし、途中で邪魔されることはないと思うよ」

「自分達、『型月導光会・アンチネギ派』も暗殺に。自分達の同胞が一人殺られた」

「……やっぱりあいつ、転生者だな」

「しかし、殺られたのは誰だ？」

「……約6年前に殺された、『ゴールデンソード 金色の剣使い』だ」

影達がどよめいた。

「な！？ 奴は副英雄の一人だったたる！？ なぜ殺られた！？」

「分からない、だがあいつを監視していたデータには、確かにあいつが映っていた……！」

手を握りしめ、掠れた声を出している。

「くそ、許せねえ……。今すぐ殺すべきだ！」

「馬鹿者、準備をしないとイケないだろう。それに、誰が殺すのかも選ばねばな」

わーわーと、騒がしくなる中、1つの影が離れていく。

口からは犬歯が出ており、瞳は確かに紅かった。

明日菜が強行突破するようだけど何か？（後書き）

はい、アンチ・ネギ会は今日も馬鹿やってますね。馬鹿だなあ  
おい

……小悪党の頭脳を高くするなんて高等テクニク、金にはでき  
ません……！

小悪党が上手く書けないー、と言い残して今回はここまで。

感想・評価もお願いします。評価の方なんかはたくさんいただき  
て嬉しかったです！ 今後も宜しくお願いします！



ちょっと真面目に怒るんだけど何か？（前書き）

どうも、金です。風邪はまだ治らず。

しかし、ととモ。はやはり面白。

では、よい。

ちょっと真面目に怒るんだけど何か？

2時間目、2-1-Aの教室にいる。勿論、授業をするためだが、その前にやらなくてはいけないことがある。

「んじゃあ、前回の小テスト返しから始めるぞー。1番から順に取りにこーい」

1番は爺のところにいるんだけどね、と心の中で付け加えて返し始めた。

順に返していくが、少々心残りがある点数ばかりだな、うん。要注意クラスなことはある。

生徒全員にテストを返し終えたのを確認して、黒板にデカデカと平均点を書いた。

「ここに書かれている平均89、6点が2-Aのクラス平均だ」

おー、とか結構高いじゃん、といった声が聞こえるんだが、実際のところ。

「言わせてもらつとだな、俺が受け持っているクラスの中で、お前らのクラスが一番点数が低かったぞ」

「」「なん……だと……っ!?!」「」

あ、勿論相坂 さよを含めての計算だ。あの娘には学園長室で受

けてもらいました。点数は文句無しの100点でした。何十年間も授業を受け続けているだけのことはある。

「さらに言わせてもらうと、これって前回の定期テスト後にやった復習テストをちょっとだけイジっただけなんだが。全クラスやったと  
のことで、その時の結果も教えてもらった。他のクラスの伸び代は  
高いぞ、なんせこのクラス以外90点後半。それに比べて、90点  
にも行かないってのはどうということだ？」

ちよつと真面目に怒ることにしました。さすがに約10点差を付  
けられていることはある。点数が高い奴もいるんだが、連帯責任で  
一緒に怒られてもらう。それが学校つてもんでしょ。

「で、でも大学までエレベーターだし、「甘いぞ、その認識」え？」

その考えは甘い。社会つてのはスイーツみたいに甘くはない。

「確かに大学までエレベーターだけど、高校になつたらその辺りの  
制度が一気に厳しくなる。例を挙げるとしたら点数の低すぎる奴は  
補修に強制参加、それでも低かつたら退学・留学にさせられるぞ。  
大学も同じだしな。後は就職だ。就職先も馬鹿なんて欲しくないか  
ら、そういうのは真っ先に落とす。……それともなんだ。自衛隊に  
でも入隊するのか？ ニートとかフリーターになるか？ それだつ  
たら高卒でも簡単になれるな、ん？ 就職できたとしても、昇進試  
験で合格できなかったら一生ヒラだ。やっすい給料だぞ？ ……そ  
ういうのがいやだったら勉強しろ。勉強してから遊ぶ、分かったな」

「……はい……」

まあ、いまので分からない奴がいたら、真性の馬鹿だ。珍しさで

言えば国宝級だぞ。

「とうとうとで、当初予定していた3倍の3倍、つまり9倍の厳しいぞー」

「「「ギャーっ!?!」「」」

女子校・中等部の校舎中に、可憐な女子達の可憐とは言い難い叫び声が響いた。

(ほ、なんじゃか叫び声が聞こえたような……?)

耳を澄ますと、確かにそれが聞こえる。2-Aの方向だ。彼女たちの時間割を思い出してみると確か、クギ・スプリングフィールドだったことに気付く。

(彼じゃったか。噂によると、中々厳しいという評判だったのう)

実際それを知ったのは噂ではなく、彼女達から盗み聞きで知ったと言うことは、自分だけの秘密にしておくことにした。彼の耳と目は、この学園中には、無数に存在するのだ。

「それで近右衛門殿、私はどこで宿泊すればよろしいのでしょうか」

応接室の対になっているソファ、彼の前のソファに座っている女性がそう問いかけた。

「うーむ、そうじゃのう。おお、そういえば丁度教員寮の近くにあるアパートが空いていたのう。ボロじゃが、あそこは何かと便利じやし、どうかのう。ここでよいかの、ベル殿？」

ベル、という名の女性の正体を近右衛門は知っている。先日、ネギと明日菜が学園長室から出ていった後、クギが一昨日言っていた取引に関しての交渉にきたのだ。

「どんなことをいうのか、と身構えていたのだが彼が言ったことは差ほど難しいことではなかった。というよりは、許可が欲しかっただけらしい。その内容は『外にいる何人かをここに入らせて欲しい』というものだ。」

「なんじゃそんなことかのう、だったら別に問題はな」ここまで言つて、彼は気付いた。はたして、入ってくる彼らは人間なのだろうか、正確には何人言るのだろうか、と。クギの口がいやらしく歪んでいたことから、そうではないだろうと判断した。とはいっても、口約束とはいえ交わしてしまったのだからどのみちそれを守らなくてはいけない。

二重の重みを感じながら許可をした。そして早速来たこのベルという女性が約束の1人だという。

いや、1人というよりは一匹の方が正しいだろう。何せ、彼女は悪魔なのだ。

化粧気がなく、しかし美しい顔立ち。手にすら手袋で隠された露出が限りなくない服装だが、その少ない肌からは染み一つないことが確認できる。

綺麗な銀髪で、後頭部で一つに纏められた、俗に言うポニーテールの髪型。身に纏われている燕尾服は明らかに男性用のものだが、それすら彼女の美しさを引き立たせている。瞳は、まるで吸い込まれそうなほど深い黒。

美しいが、悪魔らしい特徴は見当たらない。尻尾や羽根、角といったものから魔力体特有の歪みなども見当たらないのだが、この何ともいえない寒気は悪魔のものだった。

これほど厄介なものを招き寄せるとは、そう胸の中でため息をつく。

「……お、ごほんクギ様の元では暮らせないのでですか？」

先ほどから、この問答が繰り返されている。彼女はどうしても彼の前で暮らしたいということが分かる。のだが、前にも言ったが、1人暮らし用の教員寮の部屋だ。大人が二人となり、その片っぽが教員でないとすると、流石にキツイ、2つの意味で。

「どうしたらいいものかのう……」

そう思い悩み、あることに気付く。

(……いや、普通にクギ君とベル殿と一緒に暮らせばいいだけじゃないのかのう)

ベルと名乗った女性は年齢が人間よりも遙かに重ねている悪魔なのだ、自分が言ったことは当てはまっている。名案ではないだろうか、そう思って彼女に聞いた。

「はい、今日の授業はここまで。明日からちゃんと予習してこいよ」

「はい……」

立たせた生徒にそう注意すると、素直に返答する。うん、いい心がけだ。そういや、忘れていたな。少々重要なことを思い出して、教卓に何枚かの数学のプリントを置く。

「ああ、そうそう。説教したから忘れてたけど、70点未満の生徒はこのプリントをやってくること。50点未満に関しては放課後職員室に来るように。部活がある奴はちゃんと休むよう顧問に言って来いよ」

「うわーん!?!」

2名がまたもや叫ぶ。まあ、残念だったな、うん。

教室から出て、職員室へと向かう。……結構遠いんだよな。

「クギ先生、授業の方はどうかな?」

「新田先生。いや、2・Aの授業の帰りなんですけどね」

「ああ、あそこのか。大変だろうが、頑張ってくれよ? 私も気合

いを入れておかないとな」

この後の授業は午後からだから、その間にプリントを作っておかないとなー、なんて考えていると新田先生と出会った。そういや、新田先生は次が2 - Aだっけ。

色々と世間話、というよりは受け持ちのクラスの情報を交換し合ったり、学食でお勧めのメニューの話をしたりしながら歩いていくと、教員室へようやく着く。

「じゃあ、私はこの後授業だから」

「頑張ってくださいね」

そう言って別れようとした。

「ああ、そう言えばクギ君、」

新田先生が、何か思い出したように声をかけてきた。

「どうやら、教師陣に限らず生徒陣にも君のことをあまり快く思わない人が結構いるようだ。気を付けておいた方がいいぞ。ここは確かにあまりイジメはないが、1つもないと言うわけではない」

まあ、いるだろうな。何だかんだで麻帆良在の転生者の方々にはどうやらアンチ派が多いようだし。

「し」忠告ありがとうございます。気を付けておきます」

……この時、この忠告をも少し真面目に聞いておけばよかった



と、後悔するとは思わなかった。

ちょっと真面目に怒るんだけど何か？（後書き）

はい、ちょっとフラグ的なのを残して終わりです、前回も似たようなものなんですがね。

感想・評価もお願いします！

修行以上にきつい指導だけと何か？（前書き）

どうも、金です。

眠いです。超眠いです。

どね、ぶひん。

修行以上にきつい指導だけど何か？

さて、家に帰ると玄関にはしずな先生でも、俺のでもない革靴がある。誰なのだろうか、と部屋に入っていくと見慣れた顔を見つけることが出来た。

執事として以前はよく連れていた、ベルだ。

彼女が俺を発見すると、立ち上がり、胸に手を当て、恭しく礼をした。

「お帰りなさいませ、王よ。すでに荷運びの準備は完了しております。今すぐにも運び出せます」

「いやいやいや、ちょっと状況を説明してもらえないか？」

思い返せば最近こんなのはつかだなー、と思ったのも無理はない。昨日も似たようなことあったし。

「ふむふむ、つまり家を移って学校近くのボロアパートで一緒に暮らせ、と爺が言ってたんだな」

「はい、そうでございます。あの妖怪めはそう言うておりました。ふん、あの翁め。王にボロ屋に住ませるなどよく言えたものだな…

…！」

「いや、お前がそうしたいって言ったんだろ？」

「いやはや、しかし中々この暮らしも良かったんだけどなー、特に風呂とか寝るときとか。しずな先生も一緒に入ったり、みんなで雑魚寝だったので、そんな状況で無防備だったからつい、はい、ごちそうさまです。役得役得(?)」。

「……王、年頃なのは分かりますが、人間の中年のような不潔なニヤケ顔はお止め下さい。王はそのような顔をしてはなりません」

「ニヤケ顔って基本全年齢不潔だぞ。中年に固定すんな。」

「でもまあ、お前が来たことだし別にモーマンタイだな」

「はい、全くです」

「……ちょっと待て。そういえば、」

「お前って、買い物できる？」

「そうだ。こいつには買い物とか、そう言ったこと常識的な社会のルールに抵触することをやらせたことがないことに気が付く。相手は悪魔だ。売り物を勝手に持っていくとか、人を殺すとか、簡単にやってのけそうなので取りあえず聞くことにした。」

「恐れながら王よ、あまり私を見くびらないで頂きたいものです」

「おお、なんかとっても頼りになることをいう。」

「じゃあ買物は何？」

「商人を殺して、売り物を剥ぎ取る」

……反面、途轍もなく不安だったわけだが。その不安が見事に命中してしまった。

しかし、ここまで酷いとは……。

「……取りあえずは、まず買物から教えないといけないのかなあ」

ある意味、社会の常識を教えるなんて授業なんかより大変である。

……執事としては、とても優秀なんだが。

「む、なぜ人を殺してはならないんですか？ 人が1人くらいいなくなっただって世界はどうも変わりません。まるでソロモン王のようなことを言うのですね。……あの頃の方がもう少し緩かったのですから、別に1人くらい」

「いやだから駄目なんだよ！ ああ畜生、こんな初歩的のところから教えないといけないのかよ！？ 餓鬼よか大変だな、おい！？」

「私は餓鬼と比べることが馬鹿らしいほどに知性があり、有用性があり、それに加えて強力です」

「だから、厄介なんだよ！」

「……お分かり？ Understand？」

「はい、王よ。しかし、やはりまだ理解できないところが……」

「なんだよ！？ 人は殺したら駄目、物盗んだら駄目、脅したら駄目、怪我させたら駄目、ゴミ漁ったら駄目、駄目駄目駄目！」

「……ケチ」

「ケチじゃねえ！」

「くそう、常識を教えるのに半日かかるとは夢にも思わなかった」

理解させるのにもう半日……以上はかかるであろう。仕事以上に辛い。

「あ、そついやこつちに来たら挨拶しようと思ってただけど、忘れてたな。まあ、あいつのことだからまだ起きているんだろうけど」

少々遠いが、せっかく思い出したんだし早速行くことにしよう。

「……改めて挨拶をさせてもらおうか、言峰 綺礼神父」

「噂は予予、アレクサンド・アンデルセン神父。して、何故このよ  
うな森林の中で挨拶など？」

僧衣を纏った2人の神父、アンデルセンと言峰は教会の近くにある、あのヴァレリアが現れた森であった。アンデルセンの顔にはあの柔らかな色は無く、言峰もまた、その色がなかった。その代わりに、刺々しい殺気によく似た緊張感に包まれている。

そんな中、眼鏡をぎらつかせながらアンデルセンは口を開いた。

「あの2人は間諜だ。ヴァレリアは野蛮な オソドックス 正派、ステイ  
ルは糞の プロテスタント 改派からだ」

「しかし、事前に13課から送られてきた情報にはそんなことは一切書かれていませんでしたが……それ以前に、関係者なのですか？  
ステイルとかいう少年はまだ分かりませんが、ヴァレリア神父からはそれらしき匂いはしませんでしたが」

アンデルセンがそれを聞くとフン、と鼻で笑う。口端を吊り上げ、一瞬見えた眼鏡の奥にある眼は、狂気に染まっていた。

「そんなわけが、そんなわけがあるものか。あれは関係者などと温  
い存在ではないぞ、言峰。化け物だ、化け物だ。人の形をしな  
フリークス



がらも、人ではない— 魂（中身）を包容している、真正の化け物だ。言峰。貴様は甘い、甘すぎる。本当に貴様は13課・第8係聖遺物会の虎の子、言峰 綺礼なのか？ あれが化け物ではないと言うならば、何が化け物だ！」

静閑な森の中で、怒声が響く。それと共に、木々に止まっていた鳥達が空へと羽ばたいていった。

先の言で息を荒くし、肩で息をするアンデルセンを、言峰は冷静に判断していた。

勿論—あの凶暴な13課に属し、その1つの係内外で虎の子と言われるほどの実力者である言峰が関係者かどうか、間諜かどうかなどのことは一瞬で見分けることが出来るし 何故間諜かどうかを見分けられたかと言えば、彼らの体の洗礼後の状態にある。普通のであれば見分けられないほどの違いではあるものの、例えば 旧派<sup>カトリ</sup>は洗礼後体から放出される魔素が魔法に適するものになるし、改派のそれはどちらかと言えば魔術や呪術といった特有のものになる。これは上位の中でもさらにその上の実力者及び魔力に敏感な者にしか分からないものである、化け物かどうかなど、出来ないわけがない。

「……申し訳ありません、少々試させていただきました」

何故、わざと分からない振りをしたのか。それは噂と資料の情報の確認の為でもあった。

彼は良くも悪くも旧派である。その両方から聞いたのは、端的に言えばそんな内容であった。異教徒と、特に化け物を嫌い、それらを殺し神に仕えることこそ彼の生き甲斐である、と聞いていたが成

る程。確かにその通りであった。

「……もし、本当に分からなかったら本気で怒るところだったぞ」

そして、同じ十字教旧派の信徒には厳しくも優しい神父である、それも加えなくてはならない。

「しかし、思えば何故そうと知って尚彼らを生かしておくのですか？」

唸るように、アンデルセンが言う。

「……確かに奴らは異教徒だ。しかし今は旧派に籍を置き、その教義を守っている。ならば殺すことは出来まい」

異端審問会に査問されてしまえば言い逃れは出来ないだろうが、そう捨て台詞を吐く。

「なぜ、間諜を送られたのかは分かるな？」

「ええ、勿論です。……やはり、あれでしような」

2人は同じ方角を向く。多くの木々に視界を遮られその巨体を隠されながらも、確かに見えるそれ。

『神木・蟠桃』である。

「未だ確実な確認は取れてませんが、各十字教団体の上層部はすでにあれを聖遺物と認識しています。処置も教会会議で決まるのも時間の問題かと」

「俺の前では、そういう言い方は止める。十字教とは旧派以外は無い。それ以外は全て異教だ」

ブルツ、と体を震わせるのはパフォーマンスや大袈裟な行動ではなく、自然に起こったことであろう。

「……そうでしたね、アンデルセン神父。異教とはいえ、あれは無視できないものです」

僅かに見える『神木・蟠桃』、ここでは世界樹などと呼ばれているが、その巨体を見れば納得できるであろう。それに向ける感情に、畏敬があることに言峰は気付く。

「あの『神木・蟠桃』こそ、『<sup>セフィロト</sup>生命の樹』の『<sup>セフィラー</sup>枝』の1つです」

振り返ると褐色肌の修道女がいた。資料にも載っていたその女性の名は確か、

「お会いできて光栄です、言峰神父。私はシャークティといいます」

「初めまして、シスターシャークティ。既にご存じのようだが、言峰 綺礼だ」

シスターシャークティ。麻帆良旧派教会の修道女見習いの教育係である彼女は、13課の次に苛烈な第3課ヨハネに属し、主に化物からの1区域の守護と討伐が命じられ、その間に何名かの見習いを取らされ、修行の師を命じられる。また化け物を討伐し、次の世代の担い手を作るため、一部は13課をも凌駕する人物があり、13課から最もスカウトされる量が多い。

「世界に10本ある神木。それら全てが世界の竜穴上にあり、そしてその全てが巨体です。それを隠すためと称して既に旧派が6本を確保済みですが、あれだけは確保できませんでした。……どうやら当時の交渉役が低脳だったようで、近衛 近右衛門から所有権が奪えなかったとか。脱線はここまでにしておきまして、実際アレを狙う組織が多いのは事実です。魔術協会も出張ってますし、異教徒共もこれの有用性は認めているようで、魔素の吸収装置としか見てないのは腹立たしいこの上ない。……ところで、言峰神父。あなたは今日初めていらっしやたようなので僭越ながら、学園都市内を案内しましょうか？」

「では、そうさせていただきますでしょうか」

修行以上にきつい指導だけど何か？（後書き）

感想・評価も宜しくお願いします。

……めっちゃ眠い。

旧友の再会と敵の始動だけと何か？（前書き）

どうも、金です。

さて、この話の後半にはある意味物語の始まりといっても過言ではないでしょうか……過言かな？

それはともかく、本格的に敵が動き出します。

では、ごきげん。

## 旧友の再会と敵の始動だけど何か？

「この辺りのはずなんだけどなあ」

既に日は沈み、月明かりが夜道を照らしている最中、俺はある程度整備されている林道を歩いていった。

「この家か？ ……中々ファンシーな家だな、おい。本当にあいつの趣味か、これ？ 和風じゃないとゆったり出来ないとか言ってたはずなんだけど……」

目の前には丸太で建てられている家。西洋風で森の中にあるその光景は、さながら童話の中に出てくる家であった。玄関についているベルを2、3回鳴らすと扉が開いた。

「どちら様でしょうか？      クギ先生、こんばんは。何のご用でしょうか？」

玄関を開けたのは、俺の受け持ちのクラス、2ーAの生徒である絡繰 茶々丸であった。ん、ということとは……。

「な、何で貴様がここにいる！？      クギ・スプリングフィールド！  
「なんでって……オメエもなんでここにいんだよ、ロリババア！」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが、そこにいた。そういや、こんな家に住んでいたな、こいつ。

「誰がロリババアだ、誰が！ ええい、今すぐ帰れ、帰れったら帰れ！」

「 エヴァ、僕が呼んだんですよ」

階段から下りてくる、厳潔な青年がいた。サラサラとしている綺麗な黒髪を肩まで伸ばし、人の良い顔で柔らかな笑みを浮かべていた。階段を下りきると、片手を軽く上げて、挨拶をしてきた。

「お久しぶりだね、クギ。調子はどうだい？ どうやら随分身長が伸びて、顔も男らしくなってきたようだけど」

「良好だ。しかし、お前は変わらないな、不知火 検校」

けんぎょう

……取りあえずは4年ぶりの友人との再会を、楽しむことにするか。

不知火 検校。

横溝 正史が書いた怪奇小説『髑體検校』に出てくる、吸血鬼だ。この作品は完璧なオリジナルではなく、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』の和風リメイク、といった作品である。まあ、実際に存在する訳なんだが。

能力はドラキュラ伯爵と似ているところが多く、いわば吸血鬼の最高位といった辺りであろうか。吸血鬼の 真祖 と対等に戦

ハイ・デイル・イトウォーカー



えるレベルの素質と実力を持ち合わせている、最強の領域に存在する者だ。……ま、こいつの生き様も、その分中々ハードだけだな。

「検校、どういうことだ！」

「ちよつとエヴァ、人形を投げないで！ 痛い、痛いから。勝手に呼んでゴメン、謝るからあ！」

と、その最強の領域に存在する者2人が目の前では俺のことで夫婦喧嘩をしている。結界が張られているから、化け物の能力も制限されてしまう。そのため現在の彼らのレベルは、人並み以上の身体能力は持つものの、人の域を越えることができないレベル、といった辺りだろうか。……成る程、中々面白いな。小説とかでもこういうのってなんで止めないのかが分かった気がする。……ぶっちゃけ一方的な攻撃だけだな。そんなことを思っていると、検校がこちらに潤んだ目を向けてきた。ふん、腑抜けめ。

「クギ、助けて！」

「やだ、面白いから」

一刀両断とはこのことであろう。中々非情だな。

「旦那様、お嬢様、ご夕食の準備ができましたよー、ってあれ？ クギ様じゃないですか、お久しぶりです」

和服の女性だ。体を見れば、女性とすぐに判断できる自己主張の強い持っており、顔を覆い尽くす紙には鈴、と達筆で書かれており、その紙が少々歪んでいるので、微笑んでいるのであろう。

「鈴さんお久しぶり。松さんにも挨拶しようと思っただけど、どこにいるんだ？」

「まっちゃんは買い物に行きましたよ。もうそろそろ帰ってくる頃だと思っんですが……」

ガチャリ、と扉が開いた。現れたのは鈴さんと同じく顔に紙が張られている和服の女性だ。違いといえば、書かれているのが鈴ではなく松と書かれているくらいであろうか。それと、あまり凹凸の無い体。

「ただいま帰りました。……クギ様、お久しぶりです」

「松さんも久しぶり」

「うわーん、クギの意地悪！ 鈴さん松さん茶々丸さん助けてー！」

「「「嫌です」「」」

うわ、即答だな。俺も人のこといえないけど。

「 大体！」

検校に馬乗りしながら、エヴァンジェリンがこちらを指さした。もの凄い形相だな、鬼だよ、あれ。部類的には鬼だったよ、こいつら。

「何で貴様が検校と知り合いなのだ！？ いつ知り合った！」

「いつって、うーん。5年前くらいじゃね？」

「うん、そうだね。その後1年間ぐらい一緒に遊んでいたけど、旧派と亡霊にバレちゃってね、その後ずっと逃げていて。……全く、この国の政府も政府だよ。昔は協力が欲しいがために、今は欲望のために必死に追い掛け回して、暇じゃないだろうに。昔が悪かったら、今も悪い」

「そう言うな、本人たちは真面目なんだから。……んで2年前、麻帆良に流れ着いた、というわけか」

うんそうだね、と検校は呟き、エヴァンジェリンに踏まれる。

「痛い痛い!」

「うんそうだね、じゃない!」

うわー、理不尽。そんな感想を残したまま、彼らの夕食になる予定だった食事に手を着けた。勿論美味しくいただきました。

……1つの、疑問を残したままに。

魔法世界、メガロメセンブリア、MM元老議院内。

「陛下、これを」

1組の男女が、広く長い廊下を雄々しく歩いている。所々には装

飾が施され、その1つ1つが芸術品と化している。一定間隔に掛けられている絵画は1つ1つが素晴らしいものだが、その男女は目も向けていなかった。目を向けているのは、今男が渡した紙である。

「何、情報局の特務機関が裏切っただと？」

男の前を歩いていた女が紙を読んでそんなことを呟く。額に皺を寄せ、不快感を露わにした。

「その通りです、殿下。先月のハッキングの事件、やはり奴らの仕業の様です。先ほど部隊を突入させたところ、特務本部は物の抜け殻でした。軍上層部は大慌てのようです。この事に関しての会議は2時間後開始です」

「前から言っているだろう。あの男を見たときから、いつか裏切ると考えていた。私はあまり驚きはない。あの老人共の目も腐ったな。貴様もそれは感じていただろう？」

「私はあくまで一介の軍人です。そのことに関しては控えさせていただきます」

「ふん、狸め。……あそこの首輪役のモウロ將軍はどうした？」

「すでに死体が発見されました。体中が穴だらけだったとのこと。……どうしましたか、殿下？」

女が、不意に足を止めた。

「クロトワ、私は殿下というよりは、閣下というのが適切であろう」

男の方は見ず、前方だけを見据えてそう言った。

「しかし……、そうでしたな。分かりました」

少年を連れて歩く男だ。眼鏡を掛けており、織りをはためかせ、顔には不敵な笑みを浮かばせている。

「お久しぶりです、クシャナ閣下。相も変わらずお元気そうです」

「オステイア総督就任おめでとう、クルト・ゲートルMM元老院議員。聞くところによると、最近掃除に熱心のようだが、塵でも溜まったか？」

「ええ、その辺りです。こまめに掃除をしないと、すぐに溜まってしまうものですから。そういえば、ゴミを集めていたら大きめな粗大ゴミが幾つか出てきてしまって、執務室が狭くなってしまいましたてねえ。先代が残した物なのでしょうか、随分と厄介なもので」

「そういったゴミは早めに掃除した方がいいぞ、後々害と為す可能性がある。特にネズミが集まるやもしれんぞ？ 疫病を運ぶ、害獣共が」

「それもそうですな。ご忠告、有り難うございます。では、部下にでも処理を頼むことにしましょう。それでは」

一礼して、離れていく。クシャナはその後ろ姿を見て、皮肉な笑みを浮かべた。

「……一日一夜で害獣が来るわけがないだろう。やはり、奴らに手を引くものがいたか。しかも、先代が関わっているか。そうなると、

かなり厄介なことになるぞ？」

なんせ、あいつも中々の貴様のような狐だったからな。そう心で付け加えると、クワトロが耳元に口を寄せた。

「……本国から緊急入電、吉報です。殿下、ペジテで件のものの必要数の量産が完了しました。後は配備のみとなります」

「どれくらいかかる？」

「数ヶ月、8月頃には完了するかと。開発班と輸送班の話によりまずと、大型輸送船、空母級の物ですらあれの重量には耐えられないとのことです」

まさか、それほどのものでできるとは。苦笑を浮かべ、クシヤナは、それらが活躍する様子を想像した。とても清々しく、戦闘とはいえない蹂躪が起こることが、たやすく想像できるほどのものだが、

「そうか、その頃には奴らも例のアレを完成させているところか」

完璧にこちらが優勢、というわけでもなかった。

左手の義手をさする。そしてあの、裏切った特務の男を思いだしていた。

(ふん、あまり我々をなめるなよ、特務の色眼鏡。情報局に間諜を送るのは、当然の判断だろう。……取りあえずは、量産の完了について絶対恐慄会議用の報告書を作らなくては)



旧友の再会と敵の始動だけと何か？（後書き）

ちよつと敵が分かり安すぎたかな？　と思つちやいますが……まあいいですかね？

というわけで、ジブリシリーズからクシャナ殿下にご参戦いただきました！　嬉しいですねー、美しいですねー、踏まれたい罵られた……今の無しで。

感想・評価お願いします。



番外編 ハロウィンだけど何か？ 上（前書き）

Trick or Treat!

Yaaaaa! Today is Crazy Halloween  
een!

All are enjoyed!

It is opening of a party!

## 番外編 ハロウィンだけど何か？ 上

クギ・スプリングフィールドたちが訪れる、1年前のことである。

『神木・蟠桃』の目の前の広場に集まっていた人ばかりは、お互いに顔を見合わせてざわざわと話をしていた。すでに広場は人払いの結界が張られ、一般人はそれこそ1人もおらず、『裏』の関係者のみが集まっていた。新任の魔法先生や新米の魔法生徒達は、何かと疑問を浮かべている。新任教師の佐藤 明<sup>あかり</sup>もその一人だ。

そんな中、数分すると静まり返る。奇妙な後頭部と和服姿の近衛 近右衛門学園長が現れたからだ。立ち止まり、集団に向けて顔を向ける。

「さて、今回集まってもらったのは他でもない、今年もあの厄日<sup>うらひ</sup>が近づいてきたからじゃ。すでに教会の神父方々の協力も頂くことになった。さらにはヴァチカンからも応援が来るとのことじゃ。前年よりは楽にはなると思うが、気を抜かず頑張っ<sup>て</sup>欲しい。以上、解散じゃ！」

日が浅く、麻帆良に関しての知識がない上に非常に短かい演説であつたが、非常に重要な案件だと分かる。メンタル面が強いとは言えない彼女はゴクリ、と喉を鳴らし冷や汗を流す。一体、どんなことなのか。そんな未知に対する恐怖感が頭が埋め尽くした。

「ハハハッ、そんなに緊張しなくてもいいよ」

ほん、と肩に手を置かれた。振り向けば、教師としても一魔法使

いとしても尊敬して止まない高畑・T・タカミチ、その人がいた。

「いや、でも凄く大変そうなことを言ってたじゃないですか……。教会の神父とか、ヴァチカンの応援とか、普通はあり得ませんよね、こんなこと」

タカミチは、彼女の体が少々震えているのを感じた。彼女がメンタル面は弱いとは聞いていたが、まさかこれほどとは、と素直な感想を心で呟いた。これほどメンタル面が弱かったら先の学園長の言葉足らずな演説では怖がってしまうだろう、とも。

「大丈夫だよ、そこまで大変じゃないんだけど……いや、大変か。人手が足らなくなっちゃうようなことだし」

「人手が足らなくなるっ!？」

恐がらせてしまった、失敗だな。そう反省する。

「ごめんごめん、言葉が足らなかったね。大変だけど、恐がるようなことではないよ。どちらかといえば面倒くさい、かな?」

「え、それってどういうことなんですか?」

「うーん、そうだねえ。ちょっと聞こえは悪いんだけど」

妖精討伐、だよ。

「妖精討伐、かあ」

帰路についた佐藤は、タカミチに聞いたことを思い出していた。

『10月31日、つまりハロウィンはケルト人が行っていた行事の1つで、その日はあっちの世界とこっちの世界を繋ぐ門が開かれると信じられていてね。そうすると悪い妖精も現れる。だからドルイドが祝福した火を暖炉に灯してそういうのから自分達を守ろうとしたんだって……これは僕の友人からの情報なんだけどね。』

それでここからの本題なんだけど、確かに門は開かれる。ただ、魔法世界との門が複数あるのと同じで、麻帆良にもあるんだよ。その門があつた神木・蟠桃だ。実際は霊気が漏れだして、人の感情を触媒に出現するのさ。でも、昔はそんなこと誰も信じていなかったし、ハロウィンのことを誰も知らなかった。だからそこまで被害はなかったらしいんだけど、こういう風にハロウィンを1つの行事とした結果が、妖精の出現だ。

まあ、妖精は人の感情を触媒にするから、悪意がなければ悪いことは起きないし、そこまでいっばいはいは出ない。決起があるからね。ここはそういう感情を持つ人が少ないから人傷沙汰はあまりないんだけど、驚かそうとか、イタズラしようとか、そんなことを考えている子達多くてね。地味な被害は結構あるんだ。それに、もしかしたら魔法バレの可能性も否認ないし、それこそ悪意を持っている妖精が出るかもしれない。最悪取り替え子チェンジリングが起こる可能性も否認ない。だから、討伐することになったんだよ。』

正論だ。非の打ち所のない正論。だから、自分の理性と感情とが矛盾していた。

タカミチの言っていることは正しいし、納得もできる。彼女とて、一般人には被害が出ないことを祈っているし、そういうことを忌避している。

しかしだ、ただ可能性があるからといって、そんな全ての芽を摘まなくてはいけないのかと感情が訴えているのも事実だ。罪ない妖精さえも討つことも彼女はまた、忌避していた。それ以前に、何かを殺す、消すといったものを嫌っていた。

(なんか、あんまり良いとは言えない心境だなあ)

センチしてるなー、と死語を恥ずかしもせず、小さく呟いた。

時は流れ、Xデーである。妖精はそこまで大量には出ない上に、人目に晒される場所にすぐ出るわけでもない。何せ魔に属する存在だ。どちらかと言えば暗がりに出現する。そのため教師陣及び生徒陣を素早く行動させるためにも、今日は休みになっている。休日名は『ハロウィン休み』である。良く誰にも非難されないな、とか明は常々思っていたりする。

セサミ トリートの新品の物から針で縫っている古い物まで、数多くの人形が溢れかえるファンシーな部屋の中、彼女の魔法媒体である折り畳み式の純銀教鞭も胸ポケットに入れた。服装も動きやすいようにスカートではなく、ジーンズだ。いつも持ち歩いているトートバックは本日は封印し、ポケットに財布やちり紙、携帯電話と

いったものを詰め込む。

彼女の担当時間は一番キツイといわれる17時から20時である。勿論彼女はこの時間帯を嫌がってはいたが、正々堂々、何のズルもないくじ引きの結果がこの時間帯であった。しかし、一番キツイ時間帯である。タカミチなどの強者も担当するため、そこまで戦々恐々とはいなかった。安心してもないが。

「よしっ、今日は頑張るぞーっ」

小さな声で気合いを入れて、出かけることにした。すると、ポケットが震えているのを感じる。

取り出すと、そこには『裏』関係での友人の名前が躍り出ている。

「もしもし、どうしたの？」

『明、ごめん！ ちょっと私のルーチンの時間帯に入ってくれない！?』

「え〜」

不満の声を上げる。当たり前だ。今日は仕事はあるが休日であった、昨日の晩から予定は幾らか立てていたからである。ただでさえ時間的にはキツイ職業なのだ。こういった休日は有効的に、そしてより多く使えるようにしなくては、精神的に参ってしまう。

『本当に申し訳ないんだけど……』

聞くところによると、どうやら『裏』関係者ではない彼氏がいて、

今日デートの予定を入れてしまったようだ。何度かこんなことを経験しているためか、彼女の声はいつものようなふざけた色はなく、本当に申し訳なさそうであった。

「……はあ、今度の日曜日『シャルロット』で昼食、デザート付きで手を打ってあげる。どうする？」

『う、その店はたか』どうする？「……はい、分かりました』

いつもの彼女らしくない強い押しに、とうとう折れたらしく、弱々しく渋々と条件を飲んだ。

『うう、今月はただでさえ厳しいのに……』

因みに『シャルロット』の料理は少々財布には痛い値段であったりする。しかしその分美味しい、チーズを中心とした料理のバリエーションも多く、店も綺麗で女性に人気で熱烈的ファンもあり、男性が入るには少々抵抗感がある店ではあるが男性客も少なくはない。さらに言つなれば、コック長は転生者であったりする。

「で、時間帯は？」

『13時から16時です……』

相当ショックだったらしく落ち込んではいるが、遠慮はしない予定だ。

「了解、じゃあね」

『宜しくね』

電話を切り、初めて自分が苛ついていることに気付く。いつもならあそこまで強気ではないし、遠慮の1つや2つはする。やはり、妖精を倒すことには未だ抵抗感があった。しかし、職務だ。ここで諦めるわけにもいかない。

「……………じゃ、行ってくるね。みんな」

返事は帰ってこないのは分かっているながらも、自分のお気に入りである人形に向けて年甲斐もなく出発の挨拶をするのが彼女の習慣であった。無意味ではあるがそうしなければ、両親を亡くしたときからの、この空虚感が拭えないから。

せめて退治する妖精が醜悪な様でありますように、と祈った。どうせ醜くても退治できないと心のどこか、深いところで知りながらも。



番外編 ハロウィンだけど何か？ 上（後書き）

ということ、前書き調子乗って申し訳ございません。

駄菓子菓子ッ、今宵、金は狂乱の信徒となりて、甘美の時を過ぐすべく、淡紅色の乙女を信仰せん！

タンカナリ

A m e n ！

ぶっちゃけ、由乃ですけどね。ヤンデレサイコー。

題通り、上です。予定では下の二構成です。あくまで、予定です。

更新は明日になると思います、申し訳ない。

感想・評価もお待ちしております。

番外編 ハロウィンだけど何か？ 中（前書き）

上下じゃ収まんないす……申し訳ございません、もう少しこの茶  
番が続くと思います。

では、ごうござい。

番外編 ハロウィンだけど何か？ 中

さて、友人の代わりに受け持った時間になる。既に昼食も取ったため、準備は万端であった。しかし、基本的に妖精を探すのはパトロールであるため、先ほどと変わらず歩いていく。その分、先ほど以上に辺りを見渡しながら、ではあるが。

やはり、休日である上に今日はハロウィンであった。老若男女を問わずに何かしら化け物の仮装をしている。見えるだけで吸血鬼に狼男、ジャック・オ・ランタンといったメジャーなものから、馬に大仏にロボットに、はたまたチュパブラ（？）などというものであるではないか。以前から知ってはいたが、ここの住人は祭り事が大好きのようである、他のところ以上に。

「これじゃ、妖精かどうかなんて分かったもんじゃないじゃない…」

笑いながら「見た感じで分かるよ」なんて言っていたあの眼鏡を殴りたくなる衝動に襲われる。この怒気、どこにぶつければよいのかと思案した拳げ句、押さえ込むことにした。

「はあ、なんか自分らしくないなあ」

彼女の呟きは大衆に埋もれ、消えていく。見回す限りに広がるリァリテイ溢れる怪物達の間を歩きながら、辺りを見回していた。衆目からすれば、この日にコスプレをしていない方が珍しく、すれ違う人々は彼女に目を移していた。そんな視線にこそばゆいものを感じながら、何かが体の中心で渦巻く感覚に陥った。

不思議と、恐怖はない。

何故か、厭悪を抱かない。

俄然と、懐かしく思った。

フラリ、フラリと、まるで夢遊病患者のように、しかし明確な目的地に向かって自然と歩み始める。足がまるで、まるつきり他人に操られているように動く。群衆をかき分ける手に、力が入る。足取りが速くなり、前へ前へとせわしなく動く。

そして、たどり着く。

先ほどの群衆から、少し離れた裏道。だが、そこまでの道は果てしなく続く万里の道にも感じた。遙か昔から、求めていた何かが、自分からすっかり削げ落ちた何かが、離れ離れになった何かが、そこにはあった。

息が荒れる。少し歩いただけなのに、肩で息をしている。

赤い、毛玉だ。目測で全長10cmほどの人形であった。だが、彼女は見慣れていた。昔、あの時に捨てた、燃やした、切り刻んだ、引き裂いた、可能な限り思い浮かべられる無数の方法で一消した（殺した）あの人形のような

「エル、モ……？」

つばらで、大きく無感情なアノ瞳が、自分に突き刺さった。



良いことをしたら褒める、悪いことをしたら叱る。名誉職だったからあまり実りは良くなく節制を義務づけられた。でも時々買いやえられるセサミ トリートの人形が、何よりの宝だった。

何時のことだっただろうか、あの崩壊の時が訪れたのは。

そんな両親が久しぶりの休日、ドライブに行こうと誘った。

それはとても嬉しくて、とてもとても興奮して、でもどこか不安だった。

でも、その悪感情は封殺し、お気に入りのエルモの人形を抱いて、ハシヤいで車に乗り込み、父が発車した。久しぶりの両親との道楽に夢見心地な気分だった。その帰り道はとても疲れて、思わず眠ってしまった。

そしてその時は訪れた。

何時のことだっただろうか、目標が変わったのは。

クシャリと前方から潰れた、父の愛車。

あの天の夕焼けのように炎上し燃え続ける、花々が美しかった草原。

額から血を流す、父と母。

そしてその惨劇を見て高笑いする、まるで天使の羽を持つ男。

暫く、激闘が続けた。しかし、遂には母が鮮血を噴出し崩れ落ちた。父が母の名を吼え、近寄る。

その僅かな隙をついた男が、父を己の羽で斬り殺した。

2人とも、赤く染まり、一切動かない。

男はさらに高笑いをした後、その場を離れた。

目の前で起こったことが信じられず、また認められず、抱いていた人形を、強く、強く、さらに力を入れて抱いた。

まさか、両親の血で塗れているとは思わずに。

「はっ」

一瞬で目が覚めた明は、先まで思い出していた悪夢を思い、吐き気を催した。しかし、喉で何とかせき止めて逆流を抑える。

「大丈夫？」

唐突に、横から幼く高い声が響く。その方向を見れば、

「僕、エルモ。君の名前は何？」

エルモが、話しかけてきた。

「うわあああ!?!」

思わず驚嘆の声を上げ、尻を付きながら退いてしまう。だが、瞬間こみ上げてくる感情はトラウマへの拒否感は不思議となく、どちらかと言えば親愛の情があった。

あの日から、彼女はエルモの人形を収集せず、すでに持っていたものは全て廃棄した。どうしても、父と母の死体を思い出し、あの時に強く抱いた人形の感触を思い出してしまうからである。確か、見ただけでも駄目であったのだが、どうやらこのエルモは大丈夫らしい。

「そんなに驚かなくてもいいじゃん……」

エルモは彼女の驚きように拗ねてしまったのか、地面を指でイジリだす。何だか随分と人間のような行動をとるものね、と素直な感想を小さく述べた。

「ご、ゴメンね。いきなりだったから驚いちゃって。私は佐藤 明。宜しくね?」

手を差し伸べると、エルモが握り返す。

「なんだか、ありきたりな名前だね。残念」

「余計なお世話だ」

真面目に返答してしまう。全く、先程述べたように、なんとも人間くさいものであった。



「あ、そういえば」

そう、彼女は思いだしてしまふ。自分は妖精討伐の途中であつたと。

「……」

目の前の、物体に目を向ける。判断するに、2通りある。九十九神の一種か、それとも妖精か。この時期のことだ、妖精である確率の方が高い。……だから、彼女は自分自身に嘘を吐いた。あれは妖精ではないと。

「ねえ、あなた。私と一緒に住まない？」

なぜだか、そう問いかけた。一緒にいてほしいと、心の底でそう何となく思っていた。

「　　いいよ」

そして、そう答えるのも何となく分かっていたから。

近くの店でエルモを入れるのに十分なバックを買い、その中にエルモを入れた。抱いて運んでも良かったのだが、抱くのは未だ駄目らしい。少し残念に思いながら、渋々とバックに入れるのであつた。

エルモを家に連れていくとはいえ、今は業務中であり、離れることには拒否感を覚える。運がいいことに彼女が倒れてから僅か20分ほどしか立っておらず、業務には差し支えはなかった。パトロールに戻っても、あまり群衆には変化はなく、まるで仮装パレードの様な光景であった。

『うわぁ、なんかいっぱいいるね!』

『うん、そうね。今日はハロウィンだからね』

バックから顔だけ出ているエルモがそう思った。

このエルモ、どうやら念話ができるらしく、明の指導の元に人の目の前では念話を使うように義務づけられた。とはいえ彼(?)自身もそのことには特に反論はせず、逆にそれに賛同してこのようなことになった。

『ハロウィンかぁ………そういえば明、君は何をしていたの?』

エルモにそう聞かれて、思わず返答に喉が詰まってしまった。どう言えばいいのか、と必死に思案した挙げ句、苦し紛れの言い訳をすることにした。

『わ、悪い妖精を退治しているの』

『ふうん、そうなんだ』

なんとか納得してくれたか、と内心冷や汗まみれなのだが、思いがけない発言にさらに吹き出すこととなった。

『西南大体200メートル辺りに、悪い妖精がいるよ』

「え……?」

思わず、口から疑問の声が出た。

エルモの言う通りに直行すると、妖精がいた。醜悪な容姿と姿形で、彼女を見るやいなや犬歯と殺意を露わにして襲いかかってきた。弱小な妖精だったので魔法の矢を1発2発打ち込んでやれば消滅した。しかし、敵を倒したという実感より、このエルモの直感への驚きが勝った。

「何で、分かったの?」

「うーん、これが僕的能力だから、かな? 言い方としてはそれぐらいしか思い浮かばないなあ。でも便利でしょ?」

ははは、と無邪気に笑うエルモが素直に羨ましかった。何せ、戦うのは自分だけなのだから。こんな子を相棒にしたら、多くの悪い妖精を倒すしかあるまい。彼女は確かにそういったことを忌避はしているが、職務は十全に果たすつもりだ。

「で、他はどこにいるの?」

「あっち」

「あっちじゃ分からないよ」

エルモが示した方向へ、歩みだした。

既に19時が回り、もうすぐ終わりの時間が迫ろうとしていた。その時間までに彼女が倒した妖精の数は30以上。両手両足を使おうとも数え切れないほどの数を討った。多分、同僚の中ではベストスコアであろう。

それも、背中に負ぶったバックの中にいる妖精のお陰である。それら全てを補足し、彼女に無償で教えたのは他でもない彼であった。

「もうそろそろ終わりだ。疲れたー」

「お疲れ、明。僕も疲れたよ。明が揺らしまくってたから、途中酔っただし」

「うるさい。というか酔うの？」

「酔っよ」

他愛のない会話をしていると、エルモが急に黙りこくった。

「……どうしたの、エルモ？」

「……すごく、悪い妖精がいる。さっきのなんか比じゃないくらい

に悪くて、強い奴が」

その言葉の中には、恐怖がうつすらと感じ取れる。先ほどまでバンバンと妖精を倒していた明だが、それらは全て雑魚中の雑魚。さすがに強いものと戦うほど、調子ずかない。

「……周りに人は？」

「いないけど、時間の問題かも。近くには誰もいないから、逆にすぐに町の方に来ちゃう」

エルモのその言を聞いた明は、震えていた。

己はまだ弱いと。そんな強い奴と戦うほど強くはないと。

しかし、こつとも考えていた。

小さな石でも、大きな人間を転ばせることはできる、と。

「……どこに、行けばいいの？」

「さっきのなんかより、ずっと強いよ？」

「……うん」

「もしかしたら死んじゃうかもしれないよ？」

「……うん」

「恐く、ないの？」

「……怖いよ。すごく怖い。恐くて恐くてしょうがないよ。でもね、ほかの人が傷つく方が、ずっと怖い。でもね、別に死なれるのが嫌とか、そういう偉い考えじゃないの。ただ、血塗れになって死んでいっちゃう人を見るのが、後でそのことを知る方がずっと怖い。だからね、私は行くの」

苦笑を浮かべて、今まで抱いてきた思いを吐露した。誰にも話したことのない真実だ。誰にも知られなかつた心内だ。それを先ほど拾った、この汚れた、しかしとても愛しい人形にだけには、語った。

父の形見である、折り畳み式の純銀教鞭を取り出す。母の形見である、指輪をそつと撫でた。

「行くよ、エルモ」

「任せて、ちゃんとナビゲートするから」

明は、天に跳んだ。

綺麗な、月に向かって。

**番外編 ハロウィンだけど何か？ 中（後書き）**

次こそ、次こそは終わらせる……！

実は明はお気に入りキャラだったり。

感想・評価もお願いします。頂けたら、踊ります。きっと夢の中で（え

番外編 ハロウィンだけど何か？ 下（前書き）

ハロウィンはもうとっくの昔ですよー、と友人に言われました…  
…申し訳ございません。

さてさて茶番も今回で終わりですのでどうか見て頂けたらと思います。

ではさようなら。



番外編 ハロウィンだけど何か？ 下

エルモにナビゲートされた明は、やっと目的地へと着く。

ここで見たのは、人型の黒い影。薄黒い灯火。鍛冶鎚とランプを両手に、ユラリユラリと幽鬼の如く歩く男。

寝れ、痩せ細く、無精髭の生えている外来人の中年男性。その瞳は欲深く、その奥にはぼうぼうとまるで燃えている様な 否、まさに燃え盛っていた。

「シネナイ。ジゴク、イヤダ。テンゴク、イク。デモ、シネナイ」

ぶつぶつと喋る日本語は単語のみの稚拙なもので、発音もそれであつた。しかし、それには深い思いと歪んだ想いがベツタリと粘り付いており、嫌悪感が湧き出る。

ペタリペタリと素足のままで地面を歩き、ペタリペタリと近寄つて来る。

「ニク、ホシイ。イキル、イキカエル。コレ、イヤダ。イキタイ」

カハア、と腐臭と共に口が開く。唇と唇には粘り気の強い唾液が伝い、歯は黄ばみ、歯茎の間には歯がすみが見て取れる。舌は白いカビが蔓延っており、近寄り難い雰囲気醸し出していた。

しかし、それが逆に悪鬼の類だと理解することができる。教鞭の形をした杖を持つ手に、自然と力が籠もる。冷や汗が頬を伝って、

地を湿らす。寒くもないのに震える体を、無理矢理押さえ込む。そして 行く。

「火の精霊10柱 集い来たりて敵を射て。『魔法の射手』！」

火が集い、男に向かって射られた。迫り迫って 鍛冶鎚に弾かれた。

「！」

「気を付けて！ さっきのなんかよりもずっと強いよ！」

エルモが後ろから忠告する。それを聞いて、自分が慢心していたのに気が付く。まさに今、彼女の心には油断があった。この相手と対峙する以前から何度も注意されていたというのに、自分は何を聞いていたのか。

心を入れ替えた時には、敵は目前にあった。勿論目を見張り、注視していたため驚きはない。故に、魔法を放つ。

「そおい！」

無詠唱による、『魔法の射手』5発。先ほどの攻撃は、鍛冶鎚によつて弾かれた。ならば懐に潜り込み得物を振るっても弾けないほどの近距離から攻撃すればどうだろうか。そして、その策は叶った。

全ての『魔法の射手』がその体を燃やし、貫通し、爆発する。吹き飛ばされた惨めな妖精は、ボロ雑巾のような有様であった。

彼女の見立て通り、敵には理性や知性といったものはなく、ただ

ただ人を襲う化け物だという考えは当たった。言葉は喋る。弾く程度の迎撃は可能。だが、敵の動きを見ずに行動したこれには、の理性は感じられなかった。単純に突進してきたこれには、知性は感じられることはできなかった。

このときまでは。

「ヒ、アクマ、クレタ。ランプ、イラナイ。カラダ、ナカ、アル」

不自然に、立ち上がる。

仰向けに倒れていた状況から、踝以下を立て、上半身をゆっくりと露わにした。

体は確かに貫いていた。なにせ、敵の体の中は、火で出来ていたのだから。

「オレ、ナマエ、ジャック。ノウフノ、ジャック」

ジャック・オ・ランタン。

イングランド東部地方のイースト・アングリアには鬼火が出るという。その鬼火の持ち主は、ジャックという名の農民であった。ジャックはずる賢く、悪魔を騙して地獄には行かないという契約をした。しかし生前の行いが悪かったため、ジャックは天国に入ることもし許されず、この世をさまよったという。その際に自らの場所を確認するため、蕪を切り抜いてランタンにしたという伝承があるはずなのだが……当然、魔術を知り得ない彼女には無縁の話であり、一切の疑問も持ち得なかった。そんなことより彼女は、

(体が火で出来ているって……もしかして不死身くさい!?)

明の属性は光と火。しかも光は彼女自身あまり得意ではなく、『魔法の射手』の威力は火に比べると格段劣る。つまりは、邪なる存在であるジャック・オ・ランタンに対して有効な手は持ち得ていない、ということである。

それが分かった瞬間、彼女は援軍に期待するしかなかった。全てに優劣なく均等にダメージを与える気を操り幾度の戦いを勝ち抜いてきたタカミチなら奴を倒せるであろうと判断した彼女は、来る前に一度した増援の要請をもう一度した。だが、届いたという手応えがない。

「明、あいつ魔力を燃やして念話が届かないようにしているよ!」

「はあ! 嘘よ、そんなのっていくら妖精でも出来ないでしょ!？」

魔力を封じる、なら極めて珍しいというわけでもないがその数は確かに少なく、さらにそこから魔力を殺す、というものになると旧世界でも、また魔法世界でも希少な部類に入る。魔法世界でも特定の血脈や土地、武器にしか宿らないその魔力殺しは、旧世界には灯してから一度も消えたことのないアテネの聖火、今はその姿を隠しトウエルク小人族の作るこれまたさらに少なくなつた細工物の数品、そして稀少な天性の素質である『イマジンブレイカー幻想殺し』などである。

故に、あの妖精がそんな能力を持っているとは思えなかった、否、思いたくなかった。しかし現実ではその思いを否定され、実際に存在し得たのだ。

「ああ、もう!」

懲りずに『魔法の射手』を放つが鍛冶鎚でいくつか弾き、残りのいくつかは体で受ける。しかし、やはり貫くだけでたいしたダメージにはなっていない。

「くっ」

明が呻く。敵が、ジャック・オ・ランタンが距離を積めてきたからだ。

勿論、ダメージは無いとしても相手も受けてばかりではないというわけだ。明に向かって鎚を振るう。空を切る轟音を立てながら、致死の威力を持つその一振りを身体能力を高めたその目で僅かに捉えて、後ろに跳ぶ。何とか避けるものの、風圧によって吹き飛ばされる。

追撃。ジャックは跳んで、膝から明に向かい、殺しにかかる。魔法障壁で僅かに防ぐものの、たやすく割られてしまう。だが、目的であった減速は成功させる。

思わぬ追い打ちに地を転んで何とか距離をとるものの、この力量の差では時間稼ぎすら怪しくなる。泥だらけの体からは、いつか引いた冷や汗が再び吹き出していた。

明確な負け、食われる自分、そして無惨な死体。そんなことはたやすくイメージできる。

たった1人で、死ぬのかと。たった1人で、逝くのかと。そんな感情が渦巻いていた。

「いや……だ」

弱い拒絶。

「いや、だ……！」

それが明確な拒絶となり、

「いやだ！」

恐怖へと変わる。

「大丈夫、僕がいるよ」

後ろから聞こえる、あの愛しい声。言葉が区切られ、紡がれる。

荒波よ 静まれ

Vu?lvase las olas enfadadas  
calladas

暴風よ 吹き止めよ

Pase una tormenta

難航船よ 進み行け

Adelanto un barco del viaje  
tormentoso y voy

我が祈りは 海風に乗りて 天へと上る

Mi oraci?n se lleva en brisa  
marina y escribela en el cielo

我らが乗る船の檣頭は 燃え上がり 航海を 見守らん  
El tope del barco que abor-  
mos las se?ales luminosas a y  
miramos un viaje

我を知る 君を知る 皆を知る  
Me conozco Lo conozco S? a t  
odos

知つて 知られて 全を知る  
El intelecto es conocido y  
abe todos

今灯すは 殉教者の魂なり  
Es ahora una alma de Eras-  
mus  
para encender

「灯せ! 『<sup>コルボサント</sup>聖者の魂は光なり』!」

頭上に小さな火が燃える。上り、昇り、天へと届く。

たどり着いたと思つた瞬間、小さな火が大輪へと変わる。余りにもそれは綺麗で、あの悪鬼すら大輪を眺めている。それほどまでに、見事なものであつた。

「凄い、綺麗」

しかし、そんな均衡状態が崩れるのも至極当然のことであった。ジャックが、先に動き始める。

単純でありながら、破壊力抜群の突撃が明へと襲う。すでに攻撃は無意味だと知った彼女は、攻撃への魔力を全て身体能力向上と魔法障壁へと変えることにしたため、躊躇いなく複数の障壁展開と回避行動へと移行する。

「ジャアアアマアア！」

初めての、叫び声。それはまさに深淵からの呪いの叫び。怒りの発散。ありとあらゆるものへの憎しみと、決して我慢強いとは思えない苛立ちの具現化であった。

障壁を己の獲物で叩き割り、時には握り拳で、時にはランタンで壊していく。

汗と唾液とをまき散らし、獲物に向かって襲う様は大変醜くも、強いと思わされるものであった。

一定の距離を保つために張られた障壁は壊されていき、遂にはその最後の1枚も壊してしまう。

何分たったであろうか、どれくらい足止めできたであろうか。このたった数分が、彼女には永久にも思えていた。

互いに肩で息をして、体中から汗を流し、敵を見合っている。

明の魔力も既に半分を切ろうとしている。スタミナも限界に近い。



対して、敵はどうかであろうか。スタミナが無くなっているのは互いに同じであるが、余力があるのは確かだ。得物の鍛冶鎚も物理的な凶器となる。

（あーもうだめ。限界に近いかも）

足が痛い。これほどまでに縦横無尽に駆けたのは久しぶりであった。

「グウア！」

懲りずに突撃を続ける。だが、その回避行動によってここまで彼女の体力は追いつめられたことを忘れてはいけない。

痛みが走る足を無理矢理動かして、避けようとした。が、

「あっ」

足に石が引っかかり、転ぶ。ごろごろと転がって、止まる。立ち上がるうとするが、うまく足に力が入らないため立ち上がれない。そんなことをしている内に、悪鬼が迫り来た。

目前まで来る。

そして、

轟音。破壊音。そして、何かが潰れる音だった。

明は迫り当たろうとした瞬間、目を閉じてしまった。そして様々な音が鳴り響く。

しかし、予測していた衝撃はいつまで経っても訪れない。

恐る恐る目を開けると、潰れたジャック・オ・ランタンと、

「……タカミチ先生！」

高畑・T・タカミチがいた。

両手をポケットに突っ込むその格好は、構えているようには見えないが、あれこそが彼の戦闘スタイルである。

「大丈夫かい、明君？ もうすぐ終わるから、心配しなくていいよ」

僅かにこちらを向いている顔は微笑んでいる。が、その気迫は戦人のそれであった。

「アアアアアア……！」

ゆっくりと立ち上がるようにするジャックを見て、2、3発続けて攻撃を放った。

轟音と共に完璧に動かなくなったジャックは未だなお火を灯している。

「シスター・シャークティー！」

タカミチのその呼び声と共に、巨大な十字架が突き刺さる。

煙を出して呻き苦しむジャック。十字架を離そうと満身の力を込めて持ち上げようとすもの、一寸も動かない。それどころか触れた手から煙が出て、火が収まっていく始末だ。

Our Father, who art in heaven,  
hallowed be thy name;  
Thy kingdom come;  
Thy will be done on earth as  
it is in heaven.  
Give us this day our daily bread;  
and forgive us our trespasses  
as we forgive those who trespass  
against us;  
and lead us not into temptation,  
but deliver us from evil.  
Before the following doxology  
an addition prayer is said  
here by the priest.  
For the kingdom, the power,  
and the glory are yours, now  
and forever.

その一言一言で消え続ける火は、遂にはその一片も残らずに消え去った。

「遅れてゴメン、明君。なにか奇妙なものを見なかったかい？ なにやらそれがこの辺りで出てね、それが何か分からなかったから救援が遅れちゃって」

「え、いや「僕のこと？」っ!？」

エルモのことだと悟った彼女は必死に隠そうとしたが、まさか本人から名乗りを上げるとは思わなかった。

「……君か。報告は僕からしておくよ、怒られたくないだろう？」

「うん、よろしくね」

自分には、理解できない会話を交わす2人。

なぜ、この2人は知り合いなのだろうか、というものだ。

「これからもよろしくね、明!」

エルモの笑みが、なにか謎と奇妙なものをはらんでいた。

「……ん、ああ。……そうか、やっぱり学園に行ってたか。まあそこまで惜しいものじゃないし、好きにさせといていいぞ。……うん……」

…うん、じゃあな」

暗闇で、電話に向かって会話をする黄金。受話器を下げると、すぐ側の椅子に座る。

「王よ、あれの在処はどこに？」

「学園だよ。訳有りな、学園だ」

クギ・スプリングフィールドは、そう呟いた。

「どうやら門が開いたせいで起動。んで門を潜り違うやつから出たら、学園だったんだと」

それはいい。もっと違う、疑問がある。

「ベル、最近妖精界に出現した悪魔を探せ。どうやら地獄の火を配った奴がいるらしい。俺は閻魔の所に行って事情を聞いてくる。…頼むぞ」

「分かりました、我らが王よ」

番外編 ハロウィンだけど何か？ 下（後書き）

うーん、区切りが悪いなあ、と感じていますので後々改変するか  
と思います。

感想・評価をお待ちしております。一言でも頂けたら感謝感激雨  
霰。是非ともよろしく願います。

日常だけど何か？（前書き）

やっとこさ本編入りですよー。

題通り珍しく日常パートです。

というか、イベント回収みたいな？ そんな感じですので、流し読みでも構いません。

では、どしどし。

日常だけど何か？

「ネギセンサー！」

とある日の昼休み、アンパンと牛乳という警察が張り込み時よく食べる組み合わせを食べながら仕事をしていると、職員室に女子生徒の声が響く。何かと声のする方を見れば2ーAの和泉 亜子と佐々木まき絵の2人だった。何やら傷だらけだが、何かあったのだろうか。

「しずな先生、何かあったんですか？」

取りあえずは、話を聞くしかないだろう。

「あら、クギ先生。どうやら校内で暴力を振るわれた、って言うってたわ。確かに彼女たちは傷だらけだったけど、本当かしらねえ？」

「ま、ネギが行ったんなら後で話しは聞けますからね」

しかし、校内暴力ねえ。はて、そんな出来事が原作であったであらうか？

「……取りあえず、仕事続けるか」



「それ、女子高生アタック！」

「うー!?」

高等部からの、メツチャダサイ技名だけど、バレーボールでアタックを打たれる。何とか弾くものの、強烈な一撃に怯んでしまう。

「フッフ、わかった？ あんたち中等部なんて、私たち高等部に比べたらお子ちゃまなのよ、お 子 ちや ま」

ウザい、大体比べたらって……正直、見ているこちら側が恥ずかしい。中等部と高等部を比べるって……当たり前じゃないのかな？

「うがー！ 駄目ですよー！ 暴力とか、そういうのって駄目なことですよー！」

突然、後方から幼い少女の声が聞こえた。ネギ先生だ。漫画とかだったら、プンスカってという擬音語が出るような剣幕で現れたネギ先生は、何というか、吼えている。とても可愛い。あれだ、一生懸命な子供を見ている感じ。和む。

まき絵たちがネギ先生を呼んでくれていたのはいいけど、ネギ先生が必死すぎて笑っちゃう。……本当はいけないんだけど。

「いじめはいけないんです、高校生にもなってそれが分からないんですか!? あなたたちからすればいじめじゃなくても、ほかの人たちから見ればこれは立派ないじめですよ！」

……内容がとても真面目だった、ごめんなさいネギ先生。今度からは善処します……たぶん。

「え、ちよ、おま」

高等部の先輩も、どうやら子供に説教されて困惑しているようだ。というよりは、正論を言われて、反論できないだけなのかもね。っていうか、なんでこんなにもネットスラングが流行っているのだろう。私のクラスは千雨ちゃんがいるからという理由で分かるけど、ここの学園中で流行っている理由がどうも分からない。……話がズレるのは、私の悪い癖だ。

「がー！ 聞いているんですか!？」

「え、す、すみません」

……あの高等部の先輩方が、ちゃんと話を聞いて反省している光景に私は、少々驚きつつもネギ先生に感謝をしていた。……私たちより幼いのに、随分シッカリしているなあ。

「……っていうことがあったの」

「ふーん、高等部とのイザコザねえ」

「そうなの、それでね、怖かったけど私ちゃんと怒ったんだよ。それだね、ちゃんと反省させたんだ」。偉い?」

「ああ、偉い偉い」

「にゅー」

(職員室でイチヤイチャしてんじゃねーぞ、この近親カップルが！)

荻原おぎわら 一郎は、いわゆる転生者だ。しかし、ネギまの原作を知らず、ただそういう漫画があるという程度の知識であった。のだが、

(つたく、なんなんだよこの世界は！ 魔法とか化け物とかは分かる、そういうのはまだ理解できる。俺は結構そう行うのに憧れていたしな！ ……厨2うるさい！ ……でもな、これだけは許せない絶対に許せない。なんで小学生程度の子供が教師やってるんだよ！ 普通誰もしないだろ、JK！ それに加えて、義理でもない兄妹がイチヤイチャイチャイチャ……どこのエロゲーだそれは！？ 当てつけか、前世でも今世でも年齢〃彼女いない歴が続いている俺への当てつけか！？ しかも主人公アンチ組多すぎるし！ 漫画でどんなことしかしたんだよ！ ダイの 冒険の最初の方の ップかよ！ 仲間を見捨てたのか？ そうなのか！？)

絶対に返答がこないと分かっているながらも、質問せざるおえなかった、精神的な問題で。空しい、途轍もなく空しいが、しょうがなかった。

(ちくしょー。でも俺には良き理解者がいる。俺同様に常識に育まれている理解者だ。千雨の奴もあいつらには絶対色々反感的感情は持っているだろうから、今度一緒に愚痴り合いでもしよ。……生徒と教師とはいえ、別に親戚だからいいよな？)

なんだかんだで、知らず知らずに原作キャラととても仲が良くな

っている、自分の幸運が分かっている残念な人であった。

昼休みの予鈴がなる。そういえば次の授業は2・Aか。ビシバシやっているおかげか、最近の小テストの出来は良くなっており、受け持ちのクラスでは平均点で上位に食い込む程度になってきた。

（まあ、毎回小テストのハードルを上げているからな。これでもし引っかかりでもしたら鬼みたいな量の宿題と、補習があるからな、嫌でも勉強しないと趣味に当てる時間がなくなるし、もはや血反吐を吐く感じなのかなあ）

神楽坂もネギが夜な夜な魔法の修行と一緒に勉強も教えているからなのか、偶に補習に引っかからない時がある。宿題には必ず引っかかるが。

「ネギ先生、体育の先生がいないものですから、自習の監督を  
して下さらないかしら？」

（ん、ありゃあ……）

声が聞こえた。後ろを振り向けば、そこにあつたのは高等部の制服だ。もしかしたら、先ほど話になっていた高校生なのだろうか。

「……いいですよ」

ネギが、機嫌が悪そうに返答する。先ほどまで機嫌が良かったの

に、なぜ悪くなったのだろうか、俺には良く分からなかった。まあ、この時間は授業がなかったから厄介だといった辺りだろうか。メン  
ドいもんな、自習の監督って。

「ま、俺も行きますか」

授業の荷物を持って、立ち上がった。予鈴が、学校中で響いた。

「よし、授業を始めるぞー。ってあれ？　なんで体育着に着替え  
てんだ？」

その通りだ。彼女たちは体育着に着替えており、教室から出よう  
としていた。……あれ、結構ギリギリだったんじゃない？

「え、というよりなんでクギ君が来てるの？　この時間は自習って  
朝報告されたから、屋上でバレーをすることにしたんだけど……」

「なーに言ってたんだ、5時間目は数学に変更だぞ。報告されてなか  
ったか？」

「「「うん」「」」

2・Aの生徒の半数が、そう返答した。……おかしいな、確かに  
そう報告するようネギに頼んでおいたんだけど。

「まあ、いいか。体育着の状態でもいいから、授業やるぞー。席に着

けー」

「……えええ!?」「」

……少々、罪悪感はある。俺も学生時代はこういう教師がいて、ウザいだの何だのと嫌っていたなあ、なんて懐かしい記憶に思いを馳せた。今となっては、その先生の気持ちがあったわけだが。

「何で俺が数学の担当になったか、知っているか？」

生徒たちが、首を横に振る。当たり前だ、誰にも話してないし。

「ぶっちゃけるとだな、本来のお前らの数学担当の教師が、今入院中だ。それは知ってるな? んで、そこに穴が空いているわけだ。という理由で、俺は数学の教育実習生になったんだ」

へー、とかほーとか生徒が感心した様子だが、ここからが本題なわけ。

「俺が来るまでの間、数学は自習になっていただろう? ……つまりは他のクラスより遅れてんだ」

あ、と口を開けて気付く。何故、自習の時間を使ってまで授業をするのかを。努力して、授業だけである程度進めることが出来たが、やはり限界があるわけで。

「つーことで、授業を始めることにするよーん。教科書にノートに筆記用具を出せー」

「……のおおおおおおん!?」「」

もう少しは乙女らしい叫び方をしろ。

その頃の中等部校舎の屋上。

「……来ないわね、中等部の2・A」

「……そうね」

高等部の2・Dの面々が、バレーボールを持って立ち尽くしていた。確かに授業変更ボードには自習と書かれていたため、あのクラスのことだから屋上に来るだろうと待機して、からかおうとした。そのためわざわざネギに自習監督を頼んだのに、あのクラスは来なかった。無駄足である。

「……もしかして、2・Aがここに来るのを考えてました？」

「……どつきーん!?!」

面倒な奴にバレた。2・D全員がそう思った瞬間に、怒声が響いた。

「全員整列ー!」

その後、終了のチャイムが鳴るまで中等部はひいひいペンを持った手を動かし、高等部はクタクタになるまで説教を受けていた。





日常だけど何か？（後書き）

うーん、日常パートは苦手です。上手く書けているかなー？

最近は何だか腕が落ちているというか、一切成長してない感じで自己嫌悪のスパイラルに……。

感想・評価・アドバイスに批評なんかがありましたら一切躊躇なしでよろしいので、是非ともお願いします。酷評でもよろしいです。どうかよろしくお願いします。

**修行課題だけど何か？（前書き）**

後書きに報告があります。

それと今回超短いです、すみません。

取りあえず、とじりぞ。

修行課題だけど何か？

「おお、丁度良かったわい。クギ君、これが君の課題じゃ」

何のだよ、と言おうとしたが、止めた。予測がついた。修行の最終課題だろう。いわば、ちゃんと職務を果たせたのかとか、真面目にやっていたかとか、そういうのを修行監督（俺たちの場合は爺）が吟味し十分だと思つた後、課題を出す。勿論、これを合格したら正式に魔法使いと認められる。戦時中は、若い奴から老いた奴まで使わなくてはいけなかったため、それらは免除されていた。……親父が課題をクリアーできるとは思えない。

3つに折り畳まれた紙を開ける。どうせ原作通りだろう。『2・Aの最下位脱出』だろ、どうせ。

……そんな軽い気持ちで開けたあの時の俺を、ぶん殴りたいと後々思うとは知らずに。

『全盛期のエヴァンジェリン・A・k・マクダウエルを魔術、呪術を使わずに魔法だけで倒すこと』

……っそーん。

この課題は、実は超絶に難しいすぎるのだ。俺の能力をフルで使えば余裕なんだが、やっぱり歯止めが利かないのでリミッターをつけていたりする、かなり。とはいっても、こっちのネギ＋程度の魔力はあるからいい。それはいいんだが……

俺に魔術縛りつて、鬼か貴様は。

俺の実力の大部分を占めているのが魔術、呪術である。これらは呪物が必要とし複雑だが、その分威力が絶大だし、拡大解釈も利用できてアレンジしやすかったり、新たに即興で作り出したりすることが出来る。何より、性に合っている。

だが、魔法となると変わっていく。すでに確約された魔法の魔法術式の改編やアレンジはかなり難しい。威力も魔法量に比しており、一定の威力しか求められない。酷く使い勝手が悪い、と思う。どうやら他の人たちは魔法の方が使いやすいらしいが。

とまあ、つまりは魔術・呪術禁止でエヴァンジェリンと戦ったらほぼ勝ち目なんか無い。ゼロに近い。むしろマイナス。勝ち目は那由他の彼方にすら無かった……

……爺は俺をどうやら魔法もかなりの使い手と思っているらしいが、無理。キツすぎる。ギブアップ。

「……あの後頭部、いつか切り離して殺る」

誤字にあらず、本心です。割と本気で。

一通り愚痴にしたものの、はてさてどうしたらいいものなのか。審判は誰がするかは知らないが、たいていの場合には相手に参ったと言わせれば勝ちだろう。敵の情報としては、圧倒的な実力を持ち、幾千万と戦いを勝ち残ってきた経験を持ち、唯我独尊といっても過言ではないプライドを持つエヴァンジェリン。……参ったって言わせられるのか？

(無理だろ、マジで)

額に手を当て、溜め息を吐く。どうやら、立派な魔法使い以上の実力を持ちながらも、俺は立派な魔法使いにはなれないらしい。

取りあえず、俺の持っている手札を確認することにする。まず、魔法のほとんどを網羅しており、アーティファクトは第五元素属性の魔法で構成することが可能。微妙なところに悪魔召還などの降霊術。これくらいだろうか。

ぶつちやけ、倒すの判定が分からない。相手は不死だし、先ほど言った通り歴戦の戦士以上の実力を持っている。多少のハンデはあってもいいとは思うんだが……しまった、そういえばこの前挑発しちゃったなあ。あれはこのことを言いたかったんですね、分かりません。

魔法の前世態はギリシャ魔術なわけだから、ギリシャ魔術を使ってもいいよな。その後、ケルトやら北欧やらを持ってきたわけだし、それも使っても……駄目ですか、そうですか。

「はああ、かなり辛い課題だな。これは」

思わず、弱音を吐いてしまう。詳しいルール説明は今日の放課後。決戦の日はテスト終了日。1週間程度の猶予はあるから、十分に対策が取れる。

……さて、気張りますか。

「ほっほっほ、では両者とも揃ったことじゃし、早速始めることにしようかの」

髭を撫でる爺相手に、幼女ことエヴァンジェリンと俺ことクギ・スプリングフィールドは十二分の殺気と怒気を含めた視線を送っていた。……とはいっても俺の方は内心諦め着いているのでそれらは虚勢であるが。

この視線を感じたであろう爺こと近右衛門はひらひらと手を振る。一切動じず、何ともない態度だ。全く、恐ろしい爺様なことで。

「いきなり怒らなくてもいいじゃろうて。呼び出したのは悪かったが、お主にもこれは欠かせんじやる？ エヴァや」

「ちっ、だから貴様は嫌いなんだよ、半妖」

「ほっほっほ、しかし引き受けてくれるじゃろう、怪物殿」

「どーでもいいからよー、さっさと始めようぜ」老体」

いきなり毒舌で牽制のし合いとは……俺もちゃっかり混じってるけど、恐ろしい。今何も言わなかったら、空気に流されるしかなかっただろう。

「では、ルール説明といこうかの。審判は主審は農こと近衛 近右衛門、副審にタカミチ君と明石君の3人じゃ。ルールは魔法以外の魔力操作。例外として気や究極技法は許可じゃ。時間制限は24時間。その時点で終了とする。その場合はクギ・スプリングフィールド君の勝利とする。後は殺害の禁止くらいじゃの。勝敗は4点。1つ、これは先ほど言った時間制限の点じゃの。2つ、ルール違反した者は強制的に負けじゃ。3つ、片方の魔力が8割以下になった場合強制終了。勿論8割以下になった者の負け。4つ、肢体の何れかが切断、及び重傷と判断したら終了。例えすぐに回復するとしても、じゃ。

さて、これくらいかの？ 質問はあるかの？」

すつ、と手を伸ばすのはエヴァであった。

いかにも不服といった表情を露わにし、爺と俺とをゆっくりと見て口を開く。

「勝利条件の3、4点目の変改を要求する。3つ目の方は8割から全て使いきったらに、4つ目は撤廃を、だ。特に4点目だな」

やはり、そう来たか。正直先ほどまでの条件だと対等ではあった。魔力量は圧倒的にエヴァの方が多いが、時間が経てば俺が勝利する。さらには回復の制限によって平等に対決することが出来る様にしていたのを、一気に崩してきたのだ。あの吸血鬼は。

「異議申し立てする。3点目の変更を8割から5割へ、4点目の撤廃は反対だ」

ここでこうとでも言わなければ、承認しかねない。爺なんか特に注意しようともしていなかったしな。……こりゃあ、試されてんのか、おい。

「ふむ、流石に4点目の撤廃は無理じゃの。諦めよ、エヴァ。じゃが、3点目は当事者で話し合い決めるが良い。儂は特に口は出さん時間もあるし、ゆるりと話し合つと良い」

そういつて、イスに座ってニヤニヤと見てくる。……後頭部、いつか落とす。

「ちっ、仕方がない。では話し合つとするか」

さてと、話し合つとしましょつか。



**修行課題だけど何か？（後書き）**

一身の都合ですが、暫らくの間更新を停止させていただきます。

期間は精々今月一杯が目処です。もしかしたら早くなるかも。

理由は書けませんが、どうしても約今月一杯はパソコンが触れられません。

本当に申し訳ありません。

交渉だけど何か？（前書き）

やっほー！ お元気ですかー！？ 金です、死の淵から舞い戻ってきた金です！

赤点ギリギリで進級に支障無し（らしい）です！ その他諸々（こっちの方が重要）もキツチリケリをつけましたから、安心。

ふはー、ということとで更新をさせていただきますよー。でも久々なので2、3話はリハビリも兼ねています。拙いですが。元々ですが。では、とつぞ。

交渉だけど何か？

「全てだ。全ての魔力の使用しなければ対等になれんぞ、クギ・スプリングフィールド。」

貴様は強い。魔力も多く、才能がある。頭も悪いわけではないし、多くの手を持っているだろう。

何故だ、クギ・スプリングフィールド。何故5割にまで引き上げた。それでは、貴様の方が窮地に陥るのではないかな？」

唐突にエヴァンジェリンが笑みを浮かべて問う。ゆつくりと、はつきりと、鈴のような綺麗な音色で、しかし蛇が這い寄るような不気味さを孕んで。

しかし、それは確かに心地よいものを感じていた。背筋が寒くなるような感覚を覚えたのに、一切それを感じないという矛盾。

頭の中に靄がかかり、思考を鈍らせ、停止させようとするナニカがある。それが分かっているのに、それをあまり疑問視できない。彼女の言っていることに対して、何もおかしくは思えない。問題は、全くない。故に肯定しても

「それは、お前がた有利になるだけ、だろ」

ようやくのことで言えた反論。そして、ナニカの正体がやっとの事で分かった。

催眠術である。

吸血鬼が持つ能力には催眠術がある。意識を操ったり、混乱させたり、失わせたりするその能力は非常に強いものであり、レジストするのも中々難しい。しかもその能力は備わっているもので、魔力を使わなくても使用できるのだ。厄介な能力のひとつだ。

とはいうものの、なんとかレジストすることが出来た。常にそういったものへの防御結界を張っているのに、それを貫通してくるとは、さすが吸血鬼の真祖である。

しかし、そういう能力への制限をかける結界が学園中に張られているはず何だけど……この部屋は例外らしい。まあ、爺半妖だしな外は辛いんだろ。

「つーか、魅了チャームも複合してかけんなよ。妹にバレたら殺される、たぶん」

「ふん、どうやって引き戻ってきた。ほとんど終了しかけていたというのに……そこから戻らずに引っかかっていれば良いものを」

表情を一転させ、不機嫌なものになる。……表情がコロコロと、よくもまあそんなに変わるものだ。

「魅了の類には十分注意を図っててな。深層域に達した場合、それに対して強制的に疑問を浮かばせるような魔術・魔法を掛けてんだよ。うちのペットの脳を使って、思考させるようにしててな。よもや妹以外で使うことになるとは思わなかったぞ」

以前ギリギリ（アウト）になったとき、悩みに悩んで思いついた

のがこの方法だ。クーの脳は人間のものと約同等程度。いつもは使  
用しない部分を使うため、あまり連続で使えないもののその程度の  
思考をする事は可能である。

「お前の妹は一体何なんだ……しかし、そんな事を言ってもいいの  
か？ それは高度な術だぞ？」

その通りだ。脳と脳の接続自体はそれほど難しくはない。例を挙  
げるのならば念話。あれは脳と脳に魔力線を繋げて会話をするもの  
だが、学校で習うものであり大半の生徒は苦もなく使用することが  
可能だ。

しかし、操作となると話は別な訳で。

魔力を制御する脳は、魔力に対して体以上に抗体が強い。それは  
対魔力が低い一般人・動物であつても非常に強固なものである。

何故なら、この世界は魔素で満ち溢れているからだ。

だから特別なことはせずに普通に生活するだけで魔素を回復する  
事は可能だし、『神木・蟠桃』などといった世界樹は竜穴では補え  
ない分の魔素を空气中から吸収して枯れないようにすることが出来  
る。

そして生物は、得た魔素が酸素と共に体を駆け巡り、脳に蓄積さ  
れる。

そうすれば、後は病気と同じで抗体が出来る、というわけだ。

大量の魔力を念話越しに流し込む事は可能である。ただ、多少の

違和感しか抱かないが。

脳を壊したり、操ったりすると、世界樹級の魔力が必要になるわけ。

視覚・嗅覚・聴覚・味覚・触覚。これらの感覚から、神経を麻痺させて脳の抗体を下げてから操るのが催眠術や魅了である。

「ま、他にも保険はあるからな。1つや2つは別に問題はない」

ちなみに、クーには直接脳に刻印を刻み込んで魔力を通しやすくしている。

「だろうな、とエヴァンジェリンはつまらなそうに呟いて、こちらを向く。」

「しかし、5割になればお前が不利になるというのは確か。わざわざ難しくする理由はあるまい。この試合、勝たなくてはならないんだろう?」

「まあ、そうなんだがなあ。つつても、5割だろうとなんだらうとお前が圧倒的なのも確かだ。ちょっとは引いてくれてもいいんじゃないか?」

別に頭がいいわけでもないし、ここは頼むことにする。……まあ、引いてくれるとは思わないけど。

「いやだ。私からすれば久々に全力で戦えるかもしれないんだぞ。それで手を抜けて言われたら、全力で否定するのは当たり前前だろうが」

デスヨネー。まあ困った、非常に困った。実のところは別に8割でも良いんだが、全部は困る。

「つか、全力つてダルい。だから嫌なわけだ。お前は久々かもしれないけど、俺からすれば久々でもないからさ、こう連チャンでやるのも気乗りしないっていうか」

「ふん、それはお前の勝手だろ。自分の都合を相手に強要するな」

……仕様がな。仕様がなから、切り札を切るしかあるまい。

「あ、そういえば検校の3年前の写真があつたなあ」

「（ピクッ）」

……釣れるかな？ 釣れるな、この反応。

「本を読んでいるのとか、寝顔とか」

「（ピクピクッ）」

今一緒に住んでるんだから撮ればいいものを……とかいっても無駄だろうけど。

「あと、入よ」私にどうしろというのだ、言え！」「じゃ、5割で承諾してね」

ふっ、計画通りえ。ここまで簡単だとは思いませんでした。

「いつ渡す？ 俺ぁいつでもいいけど」

「……き、今日……」

善は急げっていうしな。いや、微妙に違うか。欲は急げ、かこの場合は。

「じゃ、成立ってことで」

「ふふふ、……読書姿、寝顔、入浴、全裸……じゅるり」

……原作から随分とかけ離れているなあ、おい。

「クルト様！」

静かな執務室で、1つの悲鳴にも似た叫び声が響く。それにその部屋の主は気を悪くしたのか、口元に運んでいたカップを置いて静かな声で叱責する。

「静かにしなさい、今は休憩中だったというのに……で、休憩を妨げると言うことは、つまらない用件じゃありませんよね？」

とても理不尽ではあるが、無理もない。彼は各地へ送った間諜が、彼の求めている情報を一切持ち込まず、沈黙しているままなのだ。だがこれまでの経済を捜査していると、巧妙に隠された不正な金の流れが出るわ出るわと、彼を静かに怒らせていたのだ。



「タンタルスへ送っていた間諜が、これを」

震える手で、恐る恐ると渡される資料。手にとって開いてみれば、彼は顔を綻ばせた。

「ククツ、やっと尻尾を捕まえましたよ、前オスティア提督殿。成る程成る程、これならあれほどの人員を、何故あつという間に集められたのか。その理由がようやく分かりましたよ」

投げ捨てられた袋から飛び出したのは、無数の人間が写された写真。しかしその顔は全て同じなのだ。

「クローン、ですか。しかもこの顔は……いつかジャックが言っていた賞金首ですね。確か名前は……」

ジャンゴ・フェット。

「師よ、逃がしてもよろしかったので？ ドウークー伯爵へ先ほど連絡した際に思ったのですが」

「構わない、弟子よ。最近は些かつまらなかつたからな、ちょうど良い余興になることだろう。ところで、だ。我が最愛の弟子よ。例の奴らとの連絡は、どうした？」

「近々会合を開く、と蛇は言っていましたか……さて、何人集まる

「のやらさつぱりです」

マスクを被り、呼吸音が闇の中で響く。その隣には師と呼ばれた老人が、王座に座っている。その視線の先には、彼らがいる部屋以上に暗い、暗黒の空間が広がっている。

多くのシャトルが飛び交う光景には、圧倒される物を感じるが、彼らにとってはそんなものは些細なことなのだろうか、目もくれず、ただ一点のみを見つめている。

それは、“黒い星”であった。

「デス・スター。あれも完成間近だ。丁度良かった」

王座から立ち上がり、出口へ歩きだした。

「師よ、我が師よ、                  ダース・シディアスよ。どこへ行かれるのですか？」

「弟子よ、我が弟子よ、                  ダース・ベイダーよ。私を呼ぶフォースの元へ、だ」

交渉だけど何か？（後書き）

誰が主人公だけチートと言いましたか？（ドヤア

ということでは我が皇帝、ダース・シディアス、ベイダー卿の登場です。コエエツス。

敵はチートしかいません。いやマジで。

ということでは今回はここまで。

感想・評価の方も宜しくお願いします。舞います、踊ります、歌います。

ささやかな歓迎会だけ何か？（前書き）

ちわ、金です。

今回の話が中心は教会です。……とは言っても出る人数は限りなく少ないわけですが。

ではさよう。

ささやかな歓迎会だけど何か？

「つーことで、対吸血鬼用の魔法マジック・アイテム 道具を適当に見繕って、こつちに送ってちょーだい」

「……っ！？ ……！！」

「えー、いーじゃんケチ。大体会社作ったの、俺だし。中東に送られなかったただけ有り難いと思え。あつちはオッサンばっかで、むさ苦しいぞ、正直」

「……、……」

「シヨタ成分バッチシなんだから、文句言つな。ああ、勿論真祖にも効く奴だぞ。俺が相手取るのはなんせあの『不死の魔法使い』なんだから」

「……！！ ……、……？ ……！！」

「いや、いつたら完璧止められるからネギには言っていない。あとおまえの意見に同意。『魔法使いの夜』早く出る」

「……」

「ああ、じゃーなー」

ケータイの切りボタンを押し、ポケットに仕舞う。取りあえずは試験対策は出来たことだし、授業の準備に移ることにした。

「……そーいや、もうすぐテスト期間じゃん」

とはいっても、原作（非常に曖昧）の様にはならないだろう……多分。聞く話によるとあの神楽坂が頑張っているとネギから聞く。いやはや、良い心がけだ。最近は神楽坂もなんと補習に掛からず、偶に課題をやらずに済むまでになったのだ。あれだ、真剣ゼミの付録の漫画みたいな。やり始めたらいきなり成績良くなったっていう感じ。あれよりもっと急激に成績が上がっている。カンニングしてるんじゃない……、と思った先生を許してください。

ということ、いきなり「そうだ、魔法の本を探しに行こう！」なんて言い出しはしないだろうし、周りに流されて行く、という可能性は捨てきれないが、まあ稀だろう。

「テスト一週間前だしなあ、プリントやりまくる、でいいか」

前世の記憶から、これをやっていた先生の受け持ちクラスは非常に成績が良かったことを思い出す。ここで重要なのは生徒たちに話をさせない、ということ。ここ重要。

「プリントは適当に見繕って出すか。うわー、超メンドーだわ……」

愚痴りながらも、パソコンを睨みながら作業を始めた。

礼拝堂の中、言峰 綺礼は十字を首から掛けて祈りを捧げていた。

しかし、ただ祈りを捧げているのではない。いうなれば、一種の魔術にも似た、法術である。

いわば魔力のストックを作る術であり、今彼の分厚い僧衣をめくってみれば、右腕には蛇にも似た刻印が渦巻いているだろう。その数は30を超え、40に差し掛かる所であった。

とはいってもこの法術は非常に危険なものだ。コントロールを少しでも間違えてしまえば、その全ての刻印が暴発してしまい、彼の右腕は吹き飛び、周りにも被害を与える。さらにはそれを身に付けているだけでも危険で、その数が増えれば増えるほど危険性は高くなり、40となれば少なくともこの教会を全壊にするなどたやすい。

しかし魔力をストックできるといのは、魔力を使用する人物となればこれほどおいしい術は存在しない。すぐさま使用することが可能で、ただ魔力を上手く方向を向けてから暴発するだけでも威力は高い。また刻印は劣化せず、自身の魔力の貯蔵量は一切減らないのだ。言峰の魔力は一般人並であるが、この刻印にはほぼ均等に1/10ずつ込めているので、総合で一般人約5人分の魔力を持っているということになる。

このようにとても便利な術ではあるが、危険なことには変わりはないのでこれを使用する魔法使い、魔術師、神父はほとんど存在しない。しかし、言峰は敢えてこの術を使用している。彼からすれば自身の四肢は道具と認識しているため、未練が一切存在しないのだ。とはいっても無くなれば多少は不便になるであろう、程度には考えてはいるが。

ポタリ、ポタリと顎から汗が滴り落ち、彼の立っている下には水たまりが出来ていた。自身の腕はどうなってもいいが流石に周りに

被害は与えられないため、神経を尖らせて刻印を生成しているのだ。暫くすると生成が終わり、その場に膝から落ちた。まるで目の前のマリア像を仰ぎ見ているかのように。

聖母の顔を見ていると、礼拝堂のドアが開いた。後ろに振り向いてみるとシスターシャークティがお辞儀をする。

「言峰神父、アンナン・シーエイション聖母の懐妊は終わりましたか？」

言峰はこくりと頷く。喉がカラカラで、声が出ないのだ。その事に気づいたのか、シスターシャークティは飲み物を持ってきますね、と教会の奥の方へ行った。

1つため息をして腕捲りをすれば、右腕には刻印が計42個があった。新たに生成したのは4つ。通常なら1つで人の集中力は尽きるもので、この4つとは非常に危険極まりないものである。が、それを成功させる言峰も化け物と呼ばれてもおかしくはない存在だ。

そう思いながら、刻印を見つめていた。

「うわー、すげー、普通そんなにしてたら精神がいかれてもおかしくないッスよ」

突然のことに、思わず言峰は裏拳を放ってしまうが、感触はない。む、と呟いてノツソリと振り返ってみれば、ボーイッシュな涙目の修道女がいた。非常に怯えているようで、怖がっている、というよりはビビっていた。

「い、いきなりなにすんスカ!？ ちょー怖い、マジ怖い。クワバ



ラクワバラ」

「すまない、いきなり話しかけられてしまったものだから、つい」

「ついつて、ついつてどーゆーことツスカ!? お茶目? お茶目なんスカ!? その歳でドジっこキャラ目指すのはどうかと思えますよ!」

言峰からすれば何を話しているのかサツパリなのだが、怒っているということ位は分かる。今度はちゃんと頭を下げる。

「すまなかった」

「お……おお、いきなり頭下げられてもこっちの調子が狂うっていつか……まあいいツスよ。私怪我してないんで」

そう言われて頭を上げて、目の前の少女をじっくりと見る。

上半身は投擲が出来る程度の筋力しかなくてあまり鍛えられていないものの、下半身は力強さよりは俊敏さを重点的に鍛えられたしなやかな筋肉が付いている。13課である言峰の不意打ちの裏拳を避けるその俊敏さには、彼も感嘆してしまふ。上半身はその俊敏さを生かすために、程々に行っているのかもしれない。実際はただ面倒で鍛えていないだけだが。

「い、いきなりジロジロ見てくるのもどうかと思いますけど……」

「ふむ、非常に良い下半身だ。非常に言い素質を持っている。君の名前を教えてください」

「それって、セクハラッスか!? 訴えられてもおかしくないッスよ!」

「? いや、今は13課には入れないだろうが、将来を考えれば君の名前を覚えていて損はしないだろうと思ったただけだが?」

「ああ、そういう人種なんスね。言葉には気をつけた方がいいッスよ、きつといつかマジで訴えられる。私の名前は春日 美空ッス。気軽にミソランって言ってね」

「そうか、初めましてミソラン。私は言峰 綺礼だ」

いきなり地に伏して体を震わす美空に、言峰は首を傾げる。

「どうした、ミソラン?」

「み、み、ミソラン禁、止ッス……マジでいうかよこんチクシヨウ……腹が、腹筋が……プククツ……私の、腹筋返せッス……ブフウ!」

震えが多少収まるが、未だ小刻みに震える美空に体調でも悪いのだろうか、と言峰は思うが、まさか自分が悪いとは思えない。

「ああ、あなたが13課から来た言峰さんッスか。シスターシャーケティはあなたの大ファンで、来る前日にはなんか遠足前の幼稚園児並のはしゃぎっぷりでしたね。いやあれは好きな男の子とのデート前日の少女か……」

「大ファン? 特に私は何もしてないが」

後半は上手く聞き取れなかったものの、前半で聞こえた疑問を美空にぶつける。

「よく言いますね、嫌みツスか？ 違法魔術結社の壊滅作戦には計6回参加してその内2回は1人で壊滅させたり。もうないと思われていたロンギヌスの破片を新たに見つけたり。竜種の群とタイマン張って、撃退したり。結構有名ツスよ？」

「私はただ自分の職務を果たしているだけなのだが……」

「職務逸脱してるじゃないツスか……はあ、これだから生真面目はおっと失礼。ここらで退散させてもらうツス」

肩を竦ませて首を横に振っている、礼拝堂奥からシスターシャークテイが現れる。先ほどまでいた美空は既にいなかった。

「？ 言峰神父、どうしたんですか？ そんな狐に騙されたような顔をして」

「まあ、確かに騙されたのかもしれない」

どうぞ、と渡されたのは芳醇な匂いを包み込んだ黒紫色の液体を入れたワイングラス。

「……これを礼拝堂で飲むのはどうかと思うが」

「イエス・キリストはぶどう酒を自身の血と言いました。私たちはその弟子の弟子、遙か遠い弟子ですので別に構わないかと」

ワイングラスを言峰の方に差し向ける。

「それに、歓迎会はまだしてませんので」

「そうか、と頷いて言峰は言い、グラスをお互いに打ち合って、乾杯をした。」

ささやかな歓迎会だけど何か？（後書き）

冒頭がフックシーン、みたいな？

今回はやっとバトルです……誰とは言わないけど。

ではこちら辺でお開きとさせていただきます。

感想・評価もよろしく願います。感想なんかは一言でもいいです。金の心の励みともなります。本当にお願います。

夜の大運動会だけど何か？（前書き）

投稿遅れて申し訳ありません。金です。

前の話の『その頃』です。

つーか、数学300問を三日間で終わらせろって、クギ君でもや  
んないことを平然とやってのけたうちの担任って一体何者……？

とらじんとび、とらじんとび。

## 夜の大運動会だけど何か？

その頃、ベルは朝食の食材を買い忘れていたのを思いだして夜道を歩いてきた。治安はいいし、もしチンピラに襲われたとしても撃退する実力は殺りすぎ（オーバークル）級に持っているため、クギも許可を出した。

両手にスーパーのレジ袋を持ち、なるべく早く帰ろうと早歩きをしていた。しかし、幾ら歩いてもたどり着かない。

（困りましたね）

ベルは外見では冷静を保ち、内心では非常に焦っていた。そのせいか、歩みがだんだんと早くなっていく。

（結果、ですか。しかも教会製とは……全く面倒なものに目を付けられました）

歩みを止めないのは、止めた瞬間に襲いかかってくるだろうからだ。それは一番のチャンスであり、またピンチでもある。しかしタイミングの主導権は彼女が握っているのだ。ならば、存分に使わせてもらうだけ。彼女にとって最高のタイミングを見つけるために、彼女は歩みを止めない。

（とはいっても、そのタイミングが奴らにとっても最高である可能性は否定できませんが……いや、複数じゃない？ 独り、ですか。単に馬鹿なだけか、それとも）

瞬間、銀の一線がベルに襲う。それを前進することでもたやすく避け、その攻撃の角度から敵の居場所に大凡の場所を割り当てる。

（後ろを取られてますね。しかし、私からすれば非常に幼い　　っ  
！）

彼女から黒い霧が出てくる。否、霧ではない。背筋を凍らせる様な音が聞こえる。羽虫だ。大量の羽虫が、彼女の周りに漂っている。

「行きなさい、我が僕よ！」

その黒い群集から、高速で一部の羽虫が飛び出していく。銀の閃光は猛進する羽虫の悉くを喰い殺し、ベルに向かって進んでいく。だが、黒い群集に触れると、その閃光が消えていく。その中に入っていくのではなく、消えていくのである。

「私の罪は グラトニー 暴食。攻撃は無駄ですよ、エクシスト 悪魔被い　いや、13課」

闇夜の中で、月光に反射して眼鏡とその手に持つ バイヨネット 銃剣　がまず見える。次に狂気に染まった眼、そして狂喜に歪んだ口が開いた。

「我らは神の代理人、神罰の地上代行者。我らが使命は我が神に逆らう患者を、その肉の最後の一片までも絶滅すること　A m e n」

「全く、パロディン 聖堂騎士アンデルセンに狙われるなんて私も不幸ですね。まだ悪魔被いの方が話が出来る方でしたのに」

「良い月だな、化け物。こんな日には化け物の1匹2匹は出てくるだろうと歩いていたら、驚いた。まさか悪魔と、しかも特大級のヤ



ツと出会えるとは。私は運がいいなあ」

黒い群集と銀の銃剣は、こうしてこの宵の元で出会った。

まず動いたのはアンデルセン。計8本の銃剣を飛ばし、ベルへと放つ。軌道を残すほどの速度で迫り来る銃剣は、再び黒の霧にて消えていく。

それと入れ替わりに羽虫たちが彼を襲う。しかしアンデルセンは迎撃せず、それどころか両腕を交差し、盾の様に構えて前進する。しかも壮絶な笑みを浮かべて、だ。

羽虫の群と衝突すると、その群をかき分け、体に多少は羽虫を付けているも、そのまま抜け出す。体に付いた羽虫は抜け出してから数秒経つと火を上げて燃え上がる。

「……っ！ 僧衣にも祝福儀礼を施しましたか！」

「勿論だとも。ここはあまりにも化け物と異教徒が多すぎる。ならば手を打って損はあるまい。時に悪魔よ、貴様は動かなくてもいいのか？」

アンデルセンがいつの間にかベルのすぐ前に現れ、その銃剣を振り降ろされるが、彼女はそれに動じず、上体を捻って銃剣を避ける。さらにその一連の行動を使って彼の鳩尾に一撃を決めた。僧衣と拳が触れた瞬間、接触部分から肉が焼ける音がする。だが、彼女は構

わずに拳を振り切り、アンデルセンを殴り飛ばした。

その攻撃は貫いたり、内蔵を破壊するような類の攻撃ではない。あの男は自己再生能力と回復法術の使い手だ。傷つけたところで、どうせすぐ回復される。ならば壊さずに、蓄積する攻撃をすることで有利に付こうとしたのだ。

ベルが拳を見ると、焼け爛れている様子が見て取れた。音を聞き取り、正面を向く。何事もなかったかのように、あの神父は立っている。

「クツ、ククツ、クカカカカツ！」

狂ったように笑い出すアンデルセンに寒気を覚えながら、どうやってあの狂信者を退かせようか思案していた。

（全く、有名すぎるのも困ったものです。悪魔信者やら教盟友派教徒やらをつまぐ扇動できたこともあれば、今回のように執拗に狙われることもありますし……まあ、2000年前は居場所がほとんどありませんでしたけどね。

取りあえずは相打ち、痛み分けが妥当でしょう。私は本気は出せませんし……説得、という手もありますが）

「<sup>カトリック</sup>旧派は悪魔の存在を肯定していませんでしたか？ 私の記憶が正しければ、神の正当性を保つためにも悪魔の存在は必要であると第二バチカン公会議でも正式に発表されましたよね」

「そつだ、確かにそつだ。しかし、別に悪魔を狩ってはならない、とは誰も言っていないぞ？」

(やはり駄目でしたか、これだから狂信者は……いえ、言うなれば  
緘滅主義者、でしょうか?)

嫌々とは言っても、その顔は僅かに歪んでいる。目の前の神父と  
同じく。

チャキリ、と鋼がぶつかり合う音がする。神父が、悪魔のように  
嗤う。

ブンブン、と羽虫共が飛び交う音がする。悪魔が、聖母のように  
晒う。

両者はゆっくりと構え、そして

「神の名において、異形を殺戮する!」

「狩りを始めさせていただきます!」

両者が、交差する。

夜の大運動会だけど何か？（後書き）

ベルちゃんとアンデルセン君の、夜の大運動会です。エロく聞こえるけどエロくないです。怖いです。

感想・評価もよろしくお願いします。感想なんかは一言でもいいです。金の心の励みともなります。本当をお願いします。

夜の運動会だけど何か？ 下（前書き）

どうも、最近更新遅れ気味の金です。冬休み前なのに宿題が冬休み並みの日々が続いています。どうしてこうなった。

どうしようも、前回の続きです。

では、さようぞ。

## 夜の運動会だけ何か？ 下

動いたのはベル。元々個対多を得意とする彼女にとって、この男はあまり得意な部類ではない。さらにはこの都市に張り巡らされている結界により、大幅に弱体化している点もまた、彼女を先攻させる要因であった。しかし、別に彼女は急いでいる訳ではない。

何故なら、目の前の神父とは比べられないほどの戦いの経験を積んでいるベルにとつて、これくらいが丁度良いハズ、程度でしか考えていなかったからだ。いくら弱まっただけでも経験は無くならないし、このような状況下での戦闘も幾度か経験している。

だからこそ、一筋縄ではいかないことは分かる。この男、アレクサンド・アンデルセンは悪魔間でも恐れられている人物の一人だ。目を付けられた悪魔は還ることが出来ずにそのまま消滅してしまうという、悪魔からすればジंकクスじみている噂話がある。しかし、それは事実だ。

祝福儀礼を受けた銃剣と僧衣という、13課所属とは言え一神父に与えるには過ぎた装備を与えるということは、かなりの実力者であると推測できる。そしてそれに専用の道具さえあれば悪魔の消滅をする事は可能だ。だが、当てるには相当の実力と運を必要とするならば、この男の実力は人間の域を越える可能性もあり得る、非常に希有な存在だ。

ここで補足させて貰うとすれば、魔法という手も確かに存在する。しかしそれは、魔法で召還された悪魔という前提でなければならぬ。魔法での召還と魔術での召還では、魔術の方が生け贄コソトは掛かる

が、クオリティ悪魔は特上である。であれば、それに対抗しうる方法が3つ。倒しきれないがある程度の損傷を与える古代魔法、完全に消滅させる対霊体魔術、そして悪魔にのみ効果が出る対悪魔魔術具。彼の場合は一番最後の対悪魔魔術具である。

話を戻せば、故にベルは慢心を持たず、この敵対者と戦わなければならぬということである。

「喰らい尽くせ、我が血族　！！」

その言葉と共に、服と皮膚の間から大量の羽虫が奔出する。只でさえ大量に湧き出ていたというのにまだ出るのか、とアンデルセンは内心呆れながらも、面倒だが殺せる、と結論付けていた。

どうやらダメージを蓄積するタイプの打撃を与えようとしたらしいが、それは回復法術を極めた彼にとって、無意味であると言えた。

黒い波がこちらに押し寄せてくる。点ではなく、面での攻撃。目前で避けることはほぼ不可能な攻撃である。

しかし、その規模故に初速は鈍重。だから今が避けるには最もな好機。

裾から取り出した銃剣を指の股に挟み、左右合わせて8本の銃剣を手に持って、全力で前進する。その速度は先ほど以上のものだ。一歩一歩が地面に着く度に、コンクリートで出来た堅固な地面に足

跡が深く付く。

暗い空へ跳躍する。

空中から黒い壁を見る。比較的薄くて、そして目標に攻撃がたどり着く点を探り当てる。見つけたらすぐさま銃剣を放つ。

これが僅か1秒にも満たない。

しかし、ベルもこの攻撃に対して迎撃を始め、また神父に向けて、羽虫の壁から羽虫の塔を形成し、猛進する。

その塔を足場に、アンデルセンが駆ける。足が着いたところから火が出る。靴もまた、祝福儀礼が掛けられているのだ。

足場を強く踏む、蹴る。距離が、一気に縮まる。

悪魔は羽虫によって構築された剣を、壁という鞘から引き抜く。

銃剣と虫剣が、その刃を交える。

互いの剣が互いに浸食し合い、餐食し合い、吞食し合う。

両人とも剣を投げ捨て、放棄する。だがいつの間にか、その手には剣が握られている。

アンデルセンが、逆手に持った銃剣の刃先を向けて、右サイドステップに跳んでくる。

ベルは右半身を後ろに下げて、その攻撃を回避する。逆に、左手



に持った虫剣を逆手に振り降ろす。

右足を軸に後方に円を描き、左の銃剣で背を穿とうとする。

虫剣を振り降ろした力を利用し、そのまま前方に倒れ込んで銃剣の下に潜り込む。そのまま虫剣を地面に突き刺して柄を掴みながら、脹ら脛に蹴りを入れる。

その蹴りの力を利用し、爆転。着地の際、両手を降って、背に浅い傷を負わせる。

左足で地を蹴って立ち上がり、両手を振り降ろす。しかし、何も持っていない。何故なら、これは命令であったからだ。

「傾れ崩れよ、羽虫の壁！」

なだれ込み、あつと言う間に白い僧衣が黒い羽虫によって消える。傾れ崩れていない左右の壁にそれぞれ両手を突っ込み、長槍と大剣を取り出す。

これこそ、彼女本来の得物。

クレマシオン・ランス  
。 濁水の吞槍。

アンテルモン・エペ  
。 飢餓の喰剣。

結界の影響か、かなり能力が抑えられているが、その凶暴な外見には変わらない。

禍禍しい持ち手と、火が揺らめきのような刃、そしてその黒色の

深さ。それら全てが恐怖を沸き立たせる。

「飲み干せ、暴飲の渴槍」

羽虫の池に、槍を突いた。

(さて、生きていますかね)

槍を突き、確かな感触を得たベルは、黒い池に期待を込めて見下ろしていた。

倒したこと、ではなく生きていることを期待して、だが。

刺した感触に満足感よりも、何故か焦燥感が沸き立っている自身に疑問を抱き、そしてあの男が今も生きているのかと考えを巡らせていた。

(回復法術や自己再生能力では耐え切れませんから、消滅するはず)

ベルゼブブの七大罪は、暴食に該当する。

故に、常に物を喰らい、その終わりは見えない。だから幾ら回復しようとも、四方八方から喰らい続けていれば、回復が追いつけずに消滅するのだ。

さらに暴飲の渴槍の能力はその名の通り、刃に触れた物の所持す

る流体を吸収する能力である。本来の能力ならば、触れただけで魔力から体液まで、何でもかんでも吸う化け物であったが、前述にもあるように能力が抑えられ、現在は刺した物の血を吸うだけとなってしまうてはいる。が、

（血には大半の魔力は溶けていますし、まあ吸収率が大幅に激減した、といったところでしょうか）

大剣を肩から降ろし、狙いを付ける。少々残念に思いながら、一気に力を込めて突き刺そうとしたとき、

「っー！」

銀の閃光が、勢いよく2本池から飛び出てきた。この不意打ちに1本は避け切れたものの、

「くっ……っ！」

完璧に不意を突かれた。羽虫の鎧が最も希薄な所に突き立てられ、喰らい切れずに刺さる。

腹に刺さった銃剣を引き抜いて、地に投げ捨てる。傷口に虫が集まって止血代わりなるが、回復系統の魔法、魔術が使えない彼女にとっては重傷であった。思わず、手を傷口に当てている。

「ハアハア、一手報いたぞ、悪魔」

体を深く落として域を荒くしながらも、神父がそう吐き捨てるかのように言った。

体中に虫が集りて身を喰らっているというのに、神父は壮絶な笑みを浮かべている。

回復は何かに阻害されているかのように、非常にゆっくりとしたものになっているため、先までと同じ戦い方は出来ないだろうが、アドバンテージ上では回復することが可能なアンデルセンの方が有利だ。

それを埋めようと、羽虫を使って暴食の貪剣を手元まで持って来させる。しかし彼はそれを銃剣2本で阻み、責め立ててくる。

「くっ」

「どうしたあ！ 先ほどまでの勢いはどこへ行ったあ！」

連撃。隙間なく彼女を捕らえる剣戟を、追いかけるように槍で迎撃する。羽虫を使おうにも操作するほど余裕はなく、

(もう引つかからないでしょうね)

最高の好機を逃し、最悪の危機に陥った。

勿論、彼はこの好機を逃さないだろう。すでに彼の乗りに飲まれてしまった。抜け出すには、今しかない。

しかし、抜け出そうにも、あの心細くも感じる銃剣によって防がれ、閉じこめられる。それだけに止まらず、

「ゼアアッ！」

「っ！」

槍の先が、左手の銃剣によって大きく上に弾かれた。右手の銃剣を放棄し、裾から何かを取り出す。

アンデルセンの手には、六芒星の形をした柄を持つ、十字の形をした短剣。

「これは、マズい……っ!？」

「これで終わりだ、悪魔！」

突き立てられる。

六芒星は魔術、魔法といった西洋オカルトにおいて必要な因子ファクターとなっている。

その中でも最も結び付きが強いのが、召還系統である。

本来、霊体の召還の際に描かれる五芒星や六芒星といった古代文字のシンボルは、被召還体、門の先に存在する別世界の瘴気や、そういった人間の害になる物から自身を守る結界である。故に描くには、その円の中から描く。

つまり、包み込まなくてはならず、この柄のような小さいものだ

と意味はない。

それが、ただの結界であるならば、だ。

（封じ込めるタイプの結界ですか。しかも、魔力を通したら結界が張られる魔術具……いや、聖具ですね。取りあえず）

一介の神父に与えるには、過ぎた装備。教会はここで何かが起こると、そう判断している、いや分かっている。

冷静に、魔力障壁によって防がれた、もう数ミリで突き刺さるところであった短剣に視線を注ぎながら、そう考えた。

「まさか人の身でここまで私を追い詰めるとは、十分称賛に値します。ですが、お忘れないうちに。私は治癒する術は持っていませんが、人以上の魔力は持っていますよ」

大量の魔力で魔力妨害を起こさせ、結界の線をあやふやにして、消滅させる。

人間が行えば自殺行為であるが、大量の魔力で構成された霊体、悪魔ならば出来ることだ。

「ぐっ……!!」

「それと動かない方がよろしいかと。傷に触れます」

アンデルセンの腹には、1本の銃剣が刺さっていた。

「持ち手に祝福儀礼が掛かってなくて幸いでした。大量に祝福する

ため、刃にのみしていたのが不運でしたね、それと得物を放したことでしょうか。私の手は、大量にあります」

羽虫によって、突かれた銃剣。それは背にまで達し、背を貫いていた。

「帰りなさい、神父。我が主も人死には望んでいません」

「成る程。これでは、この装備では殺せない」

ゆらりと退いたアンデルセンは、そのまま闇夜に消えていく。

「また会おう、蠅の王。次会ったときは必ず殺す」

アンデルセンが消えた頃には、結界も消えていた。

一つ息を吐き、辺りを見渡せば、前衛的になった道路が見渡せる。処理は他の悪魔に頼もう。あくまで頼むのであって、決して脅迫はしない。うん、そのはず。

食材の無残な残骸が、中途半端に食べられた食材が、落ちているのが見える。

「……こっちは、どうにもなりませんね」

近くのコンビニでパンを買って、帰っていったベルであった。

勿論、コンビニ店員とクギを驚かせたのはいつまでもないことだ。

夜の運動会だけど何か？ 下（後書き）

と、いうことでヤンデレです（えっ

男もいいよね、男も……人、それを不審者<sup>ストーカー</sup>ともいう。

犯罪臭タップリで本日はここまで。

それと連絡です。

12/24〜12/31にかけて部活の合宿なので返信できません。その間は番外編を予約掲載でやろうと思います。

ではでは、今後も宜しくお願いします。

感想・評価も楽しみに待たせて頂きます。



京についてだけど何か？

「えー、諸君、いきなりだが質問させて貰おう　試験勉強はやってるかな？」

「「「イ、イエーイ！」「」」

「はつきり言えよ、おい」

「「「ひっ」「」」

思わず作ってしまった握り拳を納めて、肩を落とした。

いや、想像は出来たけどなあー。ここまでヒドいとはなー……。。

ヒドいとは言っても全国的には半分より上、といったところか。一部例外だが。

さて今俺が何をしてたかというと、自習の監督である。

自習前、ネギから渡された全科目の総括テストプリントを渡されて、これをやって欲しいと言われた。まあ、数学は全然オツケーだったので、プリントをやらせたわけだが

(いやあ、見ただけでアウトって言えるなあ、おい)

テスト時間は30分。総括とは言っても、問題数には少なかつたので、このくらいでもオツケーだった。丸付けも15分程度で終わ

る。で、現在は丸付けも終わって返却した、というところだ。

「数学は全体的に良くできていた、うん。でもな、それ以外はダメダメだな、おい」

科目数は主要の5科目。各20点ずつ配点されており、あまり深くなく、基本的なところを押さえたテストである。正直、満点とは言わずとも8割は取って欲しかった。そうじゃないとヤバイ。

「まあ、俺はあんまり深くは言わない。でもな、もうそろそろ勉強始めた方がいいと思うぞ」

はあい、と力の抜けた、というか疲労困憊した返事が返ってきたとき、丁度チャイムが鳴った。

放課後、桜咲 刹那は部活へ行くため、とぼとぼと歩いていた。

とぼとぼ、いつもはハキハキとしている彼女にはあまり似合わない状況だ。勿論、理由はある。

(……今回の小テスト、あまり良い成績じゃなかった)

生徒なら、一度は抱く悩みだ。

成績が悪いと、嫌なことばかりが起きる。親に怒られる、小遣いが減らされる、塾に行かせられる、補習に引っかけられる、将来が不安

になる e t c . e t c . . . . .

そして、彼女の場合は

(ああ、このちゃんにバレたらどうしよう……!)

幼なじみの、怒った顔が簡単に思い浮かぶ。否、笑っているから、なおたちが悪い。

毎回テストの成績が悪かったり宿題を忘れてたりすると、自分の主人、つまりは近衛 木乃香から罰が与えられる。実は刹那の剣術の師匠が彼女に頼んだことなのだが、最近喜氣としてやってくるからたまったものではない。

しかも今までの事例から推測すると、『電撃でビリ ビリ刑』だろう。烏族からすると、あれはくすぐったすぎて悶死しそう。最近羽根が抜けてきた。ハゲたらどうする、と言ったら2倍にされそうなので言わない。最近新しい呪術販売店を見つけたと喜んで話していたが、もしかしたらその実験台になるかも……!?

そう思うと、いても立ってももられない。頭を手で押さえて座り込んだ。

どうしようどうしようどうしよう! どうやってこのテストの点数を誤魔化す!? いや、それ以前に隠す、消去するという手もある! それなら「ごめんなさい、無くしちゃいました、テヘッ」で許されるかも……それだ!

ということとで早速テストを取り出して破ろうとしたところ、その後ろを木乃香が通りかかった。

「なあ、何してるん？」

「こ、このちゃん!？」

両手を後ろに回して、テストを隠してしまう。その反動を使い、回転しながら木乃香と対面する。その時間、僅か0.2秒。

しかし、手に力が入り、紙を強く掴んでしまう。グシャリ、音が響く。

「? 今、なんか潰れたような音が……?」

「な、なんでもありません! そう、なんでもありませんよ!？」

いけない、これでは怪しすぎる。

「それやったらいいんやけど……」

よかった、騙されてくれて。そう胸をなで下ろしたときに、

「あ、そうやった。せっちゃんテスト見せてみ」

右手を、出された。

マズい、マズすぎる。どのシチュエーションでもテストの点数がバれる。ここで逃げ出して、もしテストの点数がバレなかったとしても、悪いってことを知らせることとなる。回避不可能、か。

そう思ったとき、名案が思い浮かんだ。

近衛の後方に向けて指を指し、叫んだ。

「ああ、あそこにいるのは木乃人様では！」

「ええ、どこどこ、どこなん！？ 兄様どこなん！？」

おもいつきり後ろを振り向き、懸命に探し始める。正直騙して悪いと思うが、これもハゲないためです。翼の未来のためです。御免。

内心でそう謝りながらも、笑っているのが分かる。

首から服の中へ手を突っ込み、サラシの中にテストを突っ込む。

サラシで押さえられているので、動いても紙の音はしない。グツジヨブ、私。

「せつちゃん、兄様見あたらのやけど、どこなん？」

「申し訳有りません、どうやら見間違いのようです」

「はあ、なーんだ」

残念そうに、少々悲しそうに言う主人に、思うところがある。

(……あの人も、あれから会う機会というか、避けられるようになりましたからね)

脳裏をよぎるのは、悲鳴と泣き声と死体と血と

(流石に、不謹慎でした)

そう反省して、一礼する。

「では、今から部活ですので」

そう言って背を向けようとしたとき、肩を掴まれる。

「せつちゃん、部活行く前に、そのサラシの中に入れたテスト、渡そうなあ……？」

逃げきれなかった。

京都、関西呪術教会総本山では

「今しか有りませぬ！ 今蜂起せずにして、いつ蜂起するのですか！？ 我々を嫌悪する仏教連盟ですら現在は協力の姿勢なので、それを何故、どうして拒否するのですか!?!？」

長！

ドン、と床を強く踏み、立ち上がるのは小太りの中年男性である。顔を真っ赤を通り越し、黒く変色させながら長、近衛 詠春に向けてそう怒鳴り散らした。

手に持っている扇子が軋り音を立て、今にも折れそうだ。

大きく広がった床の間には、老若男女関係無しに何十人もの幹部がいた。

会議である。西への戦争に関しての、だ。

つい先日、真言宗、天台宗を中心とした仏教連盟から、申し出があった。

それは、『共に手を取り合い、日の国から魔法使いを追い出そう』といったものであった。

関西呪術教会と仏教連盟は、昔から仲は良くない。どちらかと言えば、敵対し合っているのだ。

神道と仏教は共に日本で代表的な宗教である。これは世界的に珍しいことだ。他国では土着信仰やキリスト教を中心とし、宗派は分かれても、基本的な点では同じであった。だからこそ、内輪もめという形で、お互い手加減できていたが、この小さな島国は違う。

それこそ、全力での戦争であった。年がら年中戦争を続けてきた、因縁の中であった。

そんな因縁の敵が、手を差し出してきたのだ。それこそ、最大の和解の時であり、忌々しい魔法使いを倒せる時であった。

だからこそ、信じられない。

己たちの長が、それを断る方針であることが。

「あまり疑うものではありませんが、もしそれが嘘だとしたら？」

私たちの主力がいなくなり、手薄になった本山を攻められたら、二度と好機が無くなってしまふ。

それに関東魔法協会会長は、血は繋がっていないとは言え親子です。親子での戦いは私も、向こうも、共に望んではいません。

さらには、今の関東魔法協会はいわゆる防波堤です。あれがなくなったら一気に、正義と謳って暴れる魔法使い、私利私欲の亡者である魔術師がわんさか乗り込んでくるでしょう。天皇陛下もそれが分かっているから討伐令を取り消されたのですよ。それに、攻めた瞬間に首都が制圧されてしまふでしょうしね。そうしたら、それこそ日本が本当の傀儡と化す」

詠春は逆に、冷静にそう返した。竄れて、頬骨が浮き出ている。体の線も、細くなっている。筋肉が落ちた証拠だ。

うんうんと頷く者がいれば、ぎろりと睨み付けてくる者もいる。

(あまり、良い気分ではありませんね)

詠春はよく戦闘系の人種だと思われがちだが、実際は違う。それどころか、司令と戦士の両方が出来る、何でも器用にこなすタイプの人間だ。

そうでなければ、長という最上地位に座せない。この席は、血縁だけで座れるわけではない。

血縁も確かに必要であるが、この全幹部による投票によって決定される。



彼の長が決まった投票の時、圧倒的な支持を得て長となった。が、最近の総理大臣のように、最近では支持率が下がってきており、支持、不支持、中立の割合が3：3：3くらいだ。違う点は、辞任できないことくらいだろう。

「ですが、彼らは本気だ！ 我々と同じく、魔法使いを倒そうとする志は本気です！ そんな時に仲間割れなんてしたら、それこそ魔法使いの介入を許すこととなる。それくらいは向こうも分かっていますぞ！

近右衛門殿は、確かに貴方と親子関係だ。しかし、古来から親子による闘争は絶えませんし、向こうには木乃香様があります。これでは人質が取られているのと一緒にです！

それと防波堤、と申しましたな？ よろしい、ならば新たな防波堤を、力を得ればいい！」

バツ、と懐から取り出したのは、数枚の紙。よく見ればそこには

「これは……妖怪組織の連判書！ なぜそんなものを!？」

「それだけではありません。仏教連盟は外国からの支援要請も出しており、その多くが要請に応答したのですぞ。すでに世界は、魔法使いを打ち倒す方向へ機転しているのです！

長、あなたは魔法使いの友人が大勢いたはず。それを、失うのが怖いからここまで反対されたのですかな？」

違つと、そう叫ぼうとしたが、ガヤガヤと騒ぎ始める。彼に向け

られたその視線の多くが、疑いの目。

気付いてしまった、すでに周りがそう認識してしまっているのだ  
ということ。信用を、失ってしまったのだ。もう誰も、彼の話  
に耳を傾けないだろう。

「では、長。よくお考えなされますようお願いいたします」

その締めの一言で、会議は終了した。

来訪者だけと何か？

「うーむ、どうしたもののかのう」

学園長室、この部屋の持ち主である近衛 近右衛門は長く伸ばした髭をなでながら、そう唸った。

机上には、2枚の紙。

1枚は、京の関西呪術協会から極秘に送られてきた、至極個人的な、しかし日本を揺るがすこととなる計画が書かれたもの。

もう1枚は、この学園において現在流行っている噂話の内容が書かれたものだ。ただの噂話ではなく、魔法魔術に関係するものである。

「あの、近右衛門君。どうかしましたか？」

書類を胸に抱いて運んでいる20代前半ほどの女性が、そう聞いてきた。彼女の頭上には、抱いているものの2、3倍の書類が浮かんでいる。

色白で、どこか儂げな女性。出るところはちゃんと出て、引っ込むところはちゃんと引っ込み、上手く形が整っており、ぴったりと体に合った服が、艶めかしいラインを描いている。

「いや、何でもないので、さよちゃん」

相坂 さよ、その人であった。いや人と言うよりは、神と言った方が正しい。

ただ、たった1人に信仰されているという、非常に珍しい神ではあるが。

(しかし、一気にエロくなったの)

とはいえ、彼女は当初14、5歳の体であったというのに、どうして一気に大人になったのかと言えば、彼女がそう願ひ、クギ・スプリングフィールドに頼んだからだ。

本人曰く、「ほかの女によそ見させたくない」という、独占欲の強い願ひであった。これを聞いて、クギが突然地面に向かって頭突きし始めたのは余談だ。

とはいえ艶めかしくなり、より一層惚れた。

(うむ、バストは勿論じゃが、ヒップも良いのう)

中々外せなかった視線を書類へ戻し、ため息を吐いた。

京からの書類もそうだが、噂話のものも十分頭を悩ませる内容だ。

バレるバレないだけではなく、自身の友人たちに関わるものであったからだ。

『満月の夜、女子中学生の寮の桜並木に吸血鬼が出る』

それだけではなく、

「怪異の目撃情報、か」

これら程度のことは、本来結界によって認識が改竄されるはずなのに、それが成されていない。最近巻き込まれた一般人がいるという報告もないし、噂話でも歪曲され、ついには事実無根のものとなる。

それなのに、

（噂話としてこの都市に流れており、すでに都市外にも流出してしまった、と。ネットならまだ工作して止められるがのう、電話で話されたら流石に止められぬ。

ふむ、これの原因と言ったら、結界、しかないのう）

不備があつたか、それとも、

（誰かが、意図的に結界に傷を付けている）

取りあえずは確認するしかあるまい。今度メンテナンスする旨を言うように、心に留める。

再び思考を入れ替える。

吸血鬼、そして怪異。

吸血鬼はこの都市に2人しかいないため、取りあえずは今度呼び出して話を聞くことにする。

怪異は、確かに最近出現数が高くなった。しかし人手は十分足りるので、それは良いとしておいて、随分と多くなった。例年の4倍ほど出現数が増加している。すでに原因究明のため、明石教授を中心としたチームを発足させたが、今だ手掛かりすら掴めていないのが現状だ。

去年までは平和だったなあ、と思いを馳せ、今年の方が幸せだが、とさよを見て付け加えた。

「その可愛いお嬢さん、実は私、この辺りに来るのは初めてで、美味しい喫茶店を知っていたら是非教えて欲しいんですが」

「おい、イクトミ、奥さんにチクっちゃうぞ」

「はっはー、止めんのかよコヨーテ！ 女房から逃げるためにここまで来たんだ、これから俺のハレーム建設の夢を壊すのかよ！？ やめてくれよ、俺ら親友だろ！」

「……超限られてるけどなー。この前大岩に潰されたとき、お前蜘蛛になって避けたじゃん」

ボソリと呟いたのは、コヨーテと呼ばれた、ウルフヘアアの、長身で痩躯の白人男性だ。黒いサングラスを掛け、ノースリーブのジヤケットとジーンズだけを着込んだ彼はその黒いレンズの奥、碧眼を半ば開いて睨み付ける。

その視線の先には、腰の辺りまで髪を伸ばした、これまた長身で瘦躯の、黄褐色の男だ。イクトミと呼ばれた男だ。彼はコヨーテとは真逆で、上下ともに白いスーツ姿だ。胸ポケットには赤いバラを刺しており、ホスト風の雰囲気醸し出している。

……イケメンなのに、残念な奴だ。

周りにいたほぼ全員が、そう思った。

イクトミに詰め寄られていた女性は、彼がコヨーテに向かって文句を言っている隙に逃げる。イクトミが気付いた頃にはすでに10メートルほど離れている。

「おお待ってくれ、私のバラよ……！」

「そんなトコで打ち拉がれていないで、さっさと大将んとこ行くぞ。今回ばかりは、悪ふざけは出来ねえ」

「……いや、確かにそうだけだよあ」

立ち上がり、先ほどの悪ふざけしている雰囲気から一転。彼らの瞳は真剣さに満ちている。

『魔法使い達への反乱、か。世の中は随分物騒になったなあ』

『そつだ兄弟<sup>アミーゴ</sup>。奴らはこの世界で大規模な戦争を起こすつもりだ』

1500語以上もある言語を切り離し、張り付けた、2人だけが分かる暗号での会話だ。

そして、その内容はあまりにも物騒であり、夢物語のようであり、しかし事実である。

歩を並ばせ、目的の建物へと足を進めた。

『そして我らが大将はそれを望んでない。兄弟、俺らの大将は、なんて甘い奴なんだろうか』

『でも兄弟、そんな大将だから俺らは着いていくんだよ』

『確かに、その通りだ』

『だからさ、あれも大将の意向に沿うと思うんだよねえ』

「？」

イクトミが指が指された方向には、6人ほどの男に囲まれた、4人の可憐な美少女。そして、彼らの目から見ても、少女達は嫌がっているようにしか見えない。

「ま、確かにそうだなあ。人助けは良いことだし、女子からのポイントもアップ」

バキッ、と拳を鳴らす。

「だろ？ 紳士やろうぜ、紳士」

ボキッ、と首を鳴らす。

「「「いっちょ、狩りを始めっか！」」」



小泉 亜子は大河内 アキラの後ろに隠れ、自分達を囲む男達をそろりと見た。

学ランで、髪型が随分と前衛的だ。色もこの街の住人でも引くぐらいだ、出たらよっぽどヤバいだろうな、と思いながら、この現状に泣きそうになっていた。

「なあ、これどうしてくれんの？ 学ランがビショビショじゃねえか。それだけじゃなくて、髪もよ。クリーニング代だけじゃ、足らねえよな？」

何故なら、自分が原因だからだ。

ようやくテストが終わり、気分が浮かれてよそ見をしている時に、この集団の纏め役のような男とぶつかってしまい、このように絡まれてしまったのだ。自分が悪いのに、他の明石とまき絵、そしてアキラが自分を庇ってくれている、それだけで泣きそうだ。

そう、自分が悪いのに、だ。

「ちょっとさ、付き合ってくんねえかな？ いいだろ、それでチャラになんだからよあ」

「下卑た笑い声上がる。そして、

「おら、ちよつと来いよ」

無理矢理腕を掴まれ、引っ張られる。

「離しな　さいよっ！」

明石が腕を振るって、拘束の手を撥ね除ける。しかし、その手1人の男の頬を掠り、

「テメエ、調子乗ってんじゃねえぞ　っ！」

拳が明石に向かって飛ぶ。だが、彼女は持ち前の動体視力でそれを軽く避け、しかし

「亜子!？」

その後ろの彼女へと向かう。今更男が止めるはずもなく、止められるはずもなく、彼女へ向かう。

目前まで来て、彼女は目を瞑った。

(自分のせいやったのに、何にもしなかった罰かなあ?)

何も無いはずがない。その程度のこと、分かっているのだ。この傷も、そうであったように。

諦めて、来るであろう衝撃に身を任せようと思った。

だが、衝撃は来ない。

恐る恐る目を開けてみると、目の前で拳が止まっていたのだ、己の眼前で。

「わっ」

驚いて、声を上げ、目を見開く。

そうして、見えた。

その拳を止めた、別の拳が。

「花には手を挙げるもんじゃねえよ」

そう言ったのは、自分と同じ色の髪を持つ男であった。

……あっ。

心がほっとして、緊張が解けて、でも鼓動が早くなつて。

「チックショー！ コヨーテ、お前いつつもいいとこ取るよなあ！」

地団太を踏むのは、どうにもチャラそうな男だ。とはいっても、服の上からでも分かる筋肉質な体に驚きを感じる。

「それはお前が手柄を取るのが下手だからだ 雑魚を相手取つて  
ろ」

「るせー！　いつかきつと、首級とつてやらあ！　取れたらいいなあ！」

ボコツ、という音と共に、そう弱気な発言をした男の前のヤンキ―が吹っ飛ぶ。比喻表現ではなく、事実として。

「て、てめえら、なんなんだよ！？　俺らじゃなくて、さきにやりやがったのは、あいつ等の方だぞ！」

「関係ねえよ」

発言したヤンキ―が、次は地面の上で転がった。

「そうだが、ヤンキ―君。俺らはあーいーのっ、狩人さっ」

ハイテンションな黄褐色の男に、白色の男は、

「勝手に名乗ってる、馬鹿。そんな歯が浮くようなもんじゃなくて、

最後の一人を殴り飛ばして、言った。

「女の味方だ」

格好良く、まるで吐き捨てるように。

小泉は自覚した。

カッコいいなあ……。惚れちゃいそう。

否、既に惚れていた。

「その心意気、素晴らしいである！」

唐突に、声がした。

お茶会と交渉だけど何か？（前書き）

お久しぶりです、金です。

最近全然筆が進みません。話は頭の中で練り広げられているのに  
デスヨ？

取りあえず一話放り投げます。

では、どござ。

お茶会と交渉だけど何か？

現れたのは、正に紳士であつた。

舞踏用の燕尾服に、蓄えた髭。細く長い体のラインは、芸術といえるものがあつた……男であるが。

「うむうむ、紳士してるのであるな！ 素晴らしい！ か弱きレディのために、己の拳を振るうとは、君実は紳士であるか！？ お茶会しないであるか！？」

とりあえずテンションが高い男だ。イクトミが片手でヒラヒラと振ると、

「いや、悪いけど俺たち急いであるから、遠慮させて貰うわ」

「勿論レディもであ「ハアイ！ 行きます行きますっ！ 勿論行くよな！？」「変わり身早すぎるだろ！？ さっきのでちよつと見直した俺が馬鹿だった！」行くのであるな。ではレディは？」

「え、じゃあ

「うん」

「……私もいいよ。亜子は？」

「ひゃ、ひゃい！？ 行きます！」

「うん、決定であるな。ささ、我が輩に付いてくるのであるよー」

「……このおっさん、キャラが濃すぎるだろ」

「お前もな」

そんな言葉のやり取りをしていると、コヨーテの肩がぼんぼんと叩かれた。後ろを振り向くと、先ほど助けた少女たちだ。満面の笑みを浮かべ、勢いよく頭を下げる。

「さつきはありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

元気がいい、2人の女子が大声を上げて礼を言う。後ろの2人の女子は、静かに

「ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます！」

これに気を良くしたのか、イクトミが片手で後頭部を掻きながら、

「いやあ、それほどでもお。ぐへへえ」

「彼女らが手目に引いてるぞ、ついでに俺も引いてる」

コヨーテが半眼で睨みつける。少し下を見れば、拳が握られており、音がする。しかし、



「あぁん、下心バリバリで助けたくせに何言っちゃってんの、こいつは」

「おいこら、来た瞬間からナンパした奴には言われたくねえよ」

お互いの胸ぐらをつかみ合い、にらみ合う。あわわわわ、と慌て始め、女子勢が怖がっているのを見て、コヨーテが

「心配すんな、いつつもこんな感じだから」

「誰かさんのせいだな」

ヤンノカコラ、と再び胸ぐらをつかみ合うと、前方から声がした。

「うん？ 君ら何をやっているであるかな？ 二二二であるよ、二二二」

そういつて入っていったのは、ここの住人ならほとんどが知っている店であった。

「うわ、『シャルロツテ』じゃん！」

「ホントだー！ ホントに奢って貰っていいのかなあ……？」

「ま、とりあえず入ろうぜ」

「そうだな」

そうして、入っていった。

夕焼けの広場、その中でも最も影が濃く、周りからあまり見られないところで、俺は待ち合わせをしていた。

今日、テストが終わった。どうやらテスト勉強イベントは起こらなかったようで、普通にテストがあった。とはいっても大丈夫だろう。ネギが超張り切ってたし、テスト終わった後もなんだかウキウキしていたし。

手首の時計で確認すると、もうすぐ待ち合わせの時間だ。長い髪が邪魔っぽくて、後ろに降ろすと、

「クギ君、元気だったかなー？」

ぬにゅん、と後頭部に柔らかい感触が当たり、押しつぶされる。

……バれて大変なのは俺なんだから、気を使えよ。

「ふっふー、私が無事なら別にいいや。取りあえずパシった分は痛めつけられればいいと思うよ」

最低だな、この武器商人は。

「んで、頼んでたモンはあるか、ココ・ヘクマティアル。もし無かったら消滅させて殺る」

「勿論あるよ、クギ・スプリングフィールド。私は武器商人だ、それなりのプライドは持ち合わせている」

ココ・ヘクマティアルはハイパーボリア人のロバート・T・スマイルズの姪である。ロバートの家系はどうやら好奇心旺盛な人が多いらしく、ココの父であるロバートの弟が、こちらの世界に居を構えることを望み、俺が作った会社、いわば武器制作及び販売を中心とする会社の研究員になった。

その娘であるココは、あまり制作の方に興味はないらしく、販売を生業としている。それが彼女の才能にちょうどはまったらしく、今では契約数ナンバーワンになっている。

で、彼女が幼い頃から俺はよく遊んでやっており、軽い口調でも大丈夫だというわけだ。

「そうかそうか。んで、魔法具名は？」

「ハイ、コレ」

ポント、渡されたのは銀のアタッシユケース。

開けてみれば、約25cm程の細い杭。その杭から、邪に近いものを感じる。

「『一魂啜る白樺の杭（ブラド＝ロブ）』。あのドラキユラ伯爵を殺した杭のレプリカだ。注文通り、殺さずに倒せる道具よ。」

吸血鬼を殺す、という概念を持ったオリジナルよりいい感じに劣化していて、刺さずとも、掠るだけで原動力である血を殺す道具。人間相手にはただの杭だけど、吸血鬼相手になると変わってくる」

饒舌に語り出すココ。その言に俺は耳を傾けた。

「血を吸う、つまりは『魂の元を奪う』行為をしなければ、老いも死も、それどころか現状の維持すら不可能である吸血鬼にとって、血の流出は免れなければならない失態。」

だからこそ魂の元、という血に宿された概念を殺すこの道具は、  
ヴァンパイア  
彼女ら にとっては絶対の弱点となる」

ニヤリ、と口端を大きく上げて、笑う。

「どうぞ神さま、ご注文通りに販売させていただきました。会計の方はたった1500万アメリカドル、お安い買い物でしょう?」

や、確かにこういう対高等魔法生物武器にしては安いんだがなあ

……

「クソ高い。1000万でいいだろ」

「安い、コレ買う時すごく苦労した、1500万」

「俺の会社だ、1100万」

「でもほとんど働いてない。1450万」

「ぜんぜん下げねえな、おい。1200万」

「今ドル安で大変、1400万」

「今度少年をそっちの新人社員として送る、1300万」

「……何人？」

「2人」

「はあ、しょうがないな。1350万」

「分かりました、っと」

150万しか下げられなかった……残念。しかも超微妙なんだけ  
ど。

「んじゃ、しばらくこっちで泊まったら、帰るね」

「すぐ帰れ、ボッタクリ」

「何ていう八つ当たり、ニート社長」

明らかに俺の負けです、はい。

「ああ、そっぴやだな」

「ん、何？」

「最近な……」

「「「「「ちそうさまでしたー！」「」「」

「うんうん、少女たちの笑みは素晴らしいであるな。君たちもそう思わんかね？」

「「……おい、おっさん。金がないんだつたら誘うな！」」

金持ちそうなのは身なりで、お茶会しようと豪語していた紳士に騙されたコヨーテ達は空いた腹を満たそうと、いっぱい食べた。それはもう、3日ぐらい食べなくてもいいんじゃないのかという勢いで食べてしまい、食べ終わると実は紳士は一切金を持っていないことが発覚し、最終的に女の子に払わせるのは……というイクトミの呟きによって、両人が払うこととなった。

お陰で財布からは小銭だけ、という状態になってしまい、トホホ、と2人揃って嘆いていると、

「あ、あの……」

声がかげられた。声をかけたのは、あの中でも特に色白の少女。名は確か、小泉 亜子であったか。

「ん、なんだ？」

見上げ、見下ろし、言葉を交わす。

「助けてくれて、ありがとございます。あの、お礼がしたいんですけど……」

一礼する彼女をみて、少々恥ずかしくなる。後頭部を掻きながら「ヨーテは、

「あー、別にいいってもんよ。当たり前のことをしたただけだしさ」

「でも、なんかお礼がしたくって」

おい、イクトミ。指で円を作って人差し指を入れるな、そう目で訴えながら、

「いいから、俺らの格好いいところを見させてくれよ」

掻いているのは逆の手で、ハラハラと手を振りながらそう言った。

「でも、やっぱりなんかしないと私の気持ちも収まらないというか……」

お礼目的でやったわけではないし、これからもそれを受け取ろうとは思わない。

だが……

(しっかし、可愛いもんだなあ)

そんな下心もあって、

「じゃあよ、暇なときでいいからさ。麻帆良、案内してくれ」  
意見を折った。

「ええ、是非そうさせていただきます！」

「んじゃ、イクトミ、帰ろつぜ」

「えー、まあいいけどよ」

ぶつぶつと文句を呟きながら、歩を並べた。

「じゃあな」

片手を軽く上げ、本来の目的地へと歩んだ。

「あ、そういえば」

何かを思い出したのか、コヨーテは歩みを止めて、後ろの少女たちへ注意した。

「最近な……」

吸血鬼が出るらしいから、気を付けろよ。



お茶会と交渉だけど何か？（後書き）

元ネタ分かる人いるかな？ あいや、ココの方です。

コヨーテとイクトミは完璧オリキャラ。

紳士は謎。

こんなところで今回はおしまい！

感想・評価の方も宜しく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2793u/>

---

ネギの兄を始めよう！

2012年1月6日16時50分発行